

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(21)

志布志リゾート開発事業に伴
う埋蔵文化財発掘調査報告書

夏井土光遺跡

1991. 12
夏井土光遺跡発掘調査会



夏井土光遺跡位置と志布志リゾート開発事業(ゴルフ場建設)計画区域

71

7



序 文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く、「縄文銀座」と称される通り、縄文時代の遺跡を中心に前川、安楽川沿いに約200ヶ所の周知の遺跡があります。

これらの遺跡は、農業基盤整備事業あるいは宅地開発等の開発行為により、確認調査が実施され、貴重な資料を提供するとともに遺跡の性格が解明されつつあります。

今回の発掘調査は、志布志町が観光レクリエーション拠点地区として位置づけしている夏井地区にゴルフ場を建設し、本町の活性化に寄与しようと計画された志布志リゾート開発事業の事業実施に先立ち、計画地区内に所在する夏井土光遺跡について、事業者である奈良不動産株式会社より発掘調査の委託を受けた志布志町教育委員会が夏井土光遺跡発掘調査会を組織し、調査会がこれを実施したものです。

ここに、その調査結果を報告書として刊行いたしますが、この報告書が広く文化財保護並びに学術研究の一助となれば幸いです。発刊にあたり発掘を担当された日本考古学会会員瀬戸口望氏に深く感謝申し上げるとともに、調査に協力いただいた土地所有者をはじめ作業員の皆様、並びに関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成3年12月

夏井土光遺跡発掘調査会

例 言

1. 本書は、志布志リゾート開発事業に伴う夏井土光遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、開発行為の実施者である奈良不動産株式会社の委託を受けて、志布志町教育委員会が夏井土光遺跡発掘調査会を組織し、調査会がこれにあたった。
3. 調査にあたっては、鹿児島県教育委員会及び発掘調査指導委員会の指導と助言を頂いた。
4. 発掘調査の実施、調査区の設定は、発掘調査担当者が行った。
5. 現地での実測作業やレベル測定は、担当者及び補助員によって行った。
6. 本書の執筆と編集は、担当者と補助員で実施した。
7. 本書に用いたレベル高は海拔絶対高である。
8. 挿図番号は通し番号とし、遺物の注記番号は区番号とした。
9. 本調査で出土した資料は、志布志町教育委員会が保管責任者となり、調査報告書と共に一般に公開展示し活用するものである。

本文目次

序文

例言

| | |
|-------------------------------|-----|
| 第1章 調査の経過 | 1 |
| 第1節. 調査に至るまでの経過 | 1 |
| 第2節. 調査の組織と体制 | 1 |
| 第3節. 調査の経過 | 2 |
| 第2章 遺跡の位置と環境 | 7 |
| 第1節. 位置と地形 | 7 |
| 第2節. 環境 | 8 |
| 第3章 調査の概要 グリッド設定 | 16 |
| 第1節. 調査の概要 | 16 |
| 第2節. グリッド設定 | 16 |
| 第4章 層位 | 17 |
| 第5章 遺構 | 22 |
| 第1節. 溝状遺構 | 22 |
| 第2節. 住居跡遺構 | 25 |
| 第3節. 配石遺構 | 34 |
| 第4節. 集石遺構 | 35 |
| 第6章 第Ⅲ層の出土遺物 | 46 |
| 第1節. 土器類 | 46 |
| 第2節. 石器類 | 64 |
| 小 結 | 88 |
| 第7章 第Ⅵ層の出土遺物 | 89 |
| 第1節. 土器類 | 89 |
| 第2節. 石器類 | 105 |
| 小 結 | 115 |
| 第8章 表面採集資料 | 117 |
| 第9章 まとめにかえて | 125 |
| 付 篇 プラント・オパール定量分析結果について | 126 |

挿 図 目 次

| | | | | | |
|------|----------------------|----|------|-----------|-----|
| 第1図 | 志布志町地図 | 5 | 第35図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 57 |
| 第2図 | 遺跡周辺地図 | 6 | 第36図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 58 |
| 第3図 | 志布志町模式断面図 | 7 | 第37図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 59 |
| 第4図 | 調査前の地形並にグリッド網 | 15 | 第38図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 60 |
| 第5図 | 模式土層柱状図 | 17 | 第39図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 67 |
| 第6図 | 土層断面図(1) | 18 | 第40図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 68 |
| 第7図 | 土層断面図(2) | 19 | 第41図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 69 |
| 第8図 | 第Ⅲ層の遺物出土状況図 | 20 | 第42図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 70 |
| 第9図 | 溝状遺構実測図(1) | 21 | 第43図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 71 |
| 第10図 | 溝状遺構(1)出土石器 | 23 | 第44図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 72 |
| 第11図 | 溝状遺構(1)出土土器 | 23 | 第45図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 73 |
| 第12図 | 溝状遺構実測図(2) | 24 | 第46図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 74 |
| 第13図 | 第Ⅵ層下位の地形及び遺構配置図 | 26 | 第47図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 75 |
| 第14図 | 1号住居跡実測図 | 27 | 第48図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 76 |
| 第15図 | 2号住居跡実測図 | 28 | 第49図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 77 |
| 第16図 | 3号住居跡実測図 | 29 | 第50図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 78 |
| 第17図 | 3号住居跡内出土遺物 | 31 | 第51図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 79 |
| 第18図 | 3号住居跡内出土遺物 | 32 | 第52図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 80 |
| 第19図 | 配石遺構実測図 | 34 | 第53図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 81 |
| 第20図 | 集石遺構実測図(1号~5号) | 39 | 第54図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 82 |
| 第21図 | 集石遺構実測図(6号~10号) | 40 | 第55図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 83 |
| 第22図 | 集石遺構実測図(11号~13号) | 41 | 第56図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 84 |
| 第23図 | 集石遺構実測図(14号~19号) | 42 | 第57図 | 第Ⅲ層出土の石器類 | 85 |
| 第24図 | 集石遺構実測図(21号~25号) | 43 | 第58図 | 第Ⅵ層出土の土器類 | 91 |
| 第25図 | 集石遺構実測図(20号,26号~28号) | 44 | 第59図 | 第Ⅵ層出土の土器類 | 92 |
| 第26図 | 集石を中心にした礫の散乱状態 | 45 | 第60図 | 第Ⅵ層出土の土器類 | 93 |
| 第27図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 48 | 第61図 | 第Ⅵ層出土の土器類 | 94 |
| 第28図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 49 | 第62図 | 第Ⅵ層出土の土器類 | 95 |
| 第29図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 50 | 第63図 | 第Ⅵ層出土の土器類 | 96 |
| 第30図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 51 | 第64図 | 第Ⅵ層出土の土器類 | 97 |
| 第31図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 52 | 第65図 | 第Ⅵ層出土の土器類 | 98 |
| 第32図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 53 | 第66図 | 第Ⅵ層出土の土器類 | 99 |
| 第33図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 55 | 第67図 | 第Ⅵ層出土の土器類 | 100 |
| 第34図 | 第Ⅲ層出土の土器類 | 56 | 第68図 | 第Ⅵ層出土の石器類 | 105 |

| | | | | | |
|------|-----------|-----|------|-------------|-----|
| 第69図 | 第Ⅵ層出土の石器類 | 106 | 第77図 | 第Ⅵ層の遺物出土状況図 | 116 |
| 第70図 | 第Ⅵ層出土の石器類 | 107 | 第78図 | 表面採集資料 | 117 |
| 第71図 | 第Ⅵ層出土の石器類 | 109 | 第79図 | 表面採集資料 | 118 |
| 第72図 | 第Ⅵ層出土の石器類 | 110 | 第80図 | 表面採集資料 | 119 |
| 第73図 | 第Ⅵ層出土の石器類 | 111 | 第81図 | 表面採集資料 | 120 |
| 第74図 | 第Ⅵ層出土の石器類 | 112 | 第82図 | 表面採集資料 | 121 |
| 第75図 | 第Ⅵ層出土の石器類 | 113 | 第83図 | 表面採集資料 | 122 |
| 第76図 | 第Ⅵ層出土の石器類 | 114 | | | |

表 目 次

| | | | | | |
|-----|------------------|----|------|---------------|-----|
| 第1表 | 志布志町内遺跡の一覧表 | 9 | 第7表 | 第Ⅲ層出土の石器類観察表 | 86 |
| 第2表 | 溝状遺構(1)内出土の遺物観察表 | 22 | 第8表 | 第Ⅵ層出土の石器類観察表 | 101 |
| 第3表 | 住居跡遺構観察表 | 30 | 第9表 | 第Ⅵ層出土の石器類観察表 | 123 |
| 第4表 | 3号住居跡内出土遺物観察表 | 33 | 第10表 | 表面採集資料観察表(石器) | 124 |
| 第5表 | 集石遺構観察表 | 38 | 第11表 | 表面採集資料観察表(石器) | 124 |
| 第6表 | 第Ⅲ層出土の土器類観察表 | 61 | | | |

図 版 目 次

| | | | | | |
|------|-------------------|-----|------|---------------|-----|
| 図版1 | 遺跡の遠景及び復元土器 | 134 | 図版13 | 土器及び磨石の出土状況 | 146 |
| 図版2 | 土層 | 135 | 図版14 | 配石遺構(1号, 2号) | 147 |
| 図版3 | 土層 | 136 | 図版15 | 遺物出土状況 | 148 |
| 図版4 | 土層 | 137 | 図版16 | 集石遺構(1号~8号) | 149 |
| 図版5 | 土層 | 138 | 図版17 | 集石遺構(9号=13号) | 150 |
| 図版6 | 土壌採集風景(プラント・オパール) | 139 | 図版18 | 集石遺構(14号~22号) | 151 |
| 図版7 | 住居跡遺構(1号, 2号) | 140 | 図版19 | 集石遺構(23号~28号) | 152 |
| 図版8 | 住居跡遺構(2号, 3号) | 141 | 図版20 | 発掘作業風景 | 153 |
| 図版9 | 3号住居跡遺構内の遺物の出土状況 | 142 | 図版21 | 出土遺物(1~17) | 154 |
| 図版10 | 溝状遺構(1) | 143 | 図版22 | 出土遺物(18~26) | 155 |
| 図版11 | 溝状遺構(2) | 144 | 図版23 | 出土遺物(27~55) | 156 |
| 図版12 | 土器の出土状況 | 145 | 図版24 | 出土遺物(56~89) | 157 |

| | | | | | |
|------|-------------------------|-----|------|-----------------------|-----|
| 図版25 | 出土遺物(90~100, 102~103) … | 158 | 図版34 | 出土遺物 (237~266) ……… | 167 |
| 図版26 | 出土遺物 (104~127) …………… | 159 | 図版35 | 出土遺物 (267~307) ……… | 168 |
| 図版27 | 出土遺物 (挾入片刃磨製石斧) … | 160 | 図版36 | 出土遺物 (309~329) ……… | 169 |
| 図版28 | 出土遺物 (129~146) …………… | 161 | 図版37 | 出土遺物 (336~357) ……… | 170 |
| 図版29 | 出土遺物 (147~165) …………… | 162 | 図版38 | 出土遺物 (358~370) ……… | 171 |
| 図版30 | 出土遺物 (166~184) …………… | 163 | 図版39 | 出土遺物 (371~374) ……… | 172 |
| 図版31 | 出土遺物 (185~199) …………… | 164 | 図版40 | 出土遺物 (375~391) ……… | 173 |
| 図版32 | 出土遺物 (200~210) …………… | 165 | 図版41 | 出土遺物(392~393,330~335) | 174 |
| 図版33 | 出土遺物 (212~236) …………… | 166 | 図版42 | 出土遺物 (101) …………… | 175 |

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

奈良不動産株式会社（横浜市、代表取締役奈良忠則）は志布志町夏井地区内にリゾート開発事業を計画実施するにあたり、昭和63年、志布志町教育委員会に対し当該地区内の埋蔵文化財の有無について問い合わせが行われた。

志布志町教育委員会においては早速鹿児島県教育委員会文化課に報告すると共に、同区域全般にわたっての分布調査を行い、周知の遺跡（打出ヶ浜土拡墓、上園遺跡）に加え、小字土光内に新に包蔵地の所在を確認した。

そこで志布志町教育委員会は、県教育委員会文化課並に会社側と協議を行い、昭和63年3月22日より同26日までの日程で遺跡地の性格を把握するための確認調査を実施した。調査の結果、遺跡は縄文時代の石坂式土器を包蔵し、その範囲は約3000㎡に及んでいることが判明した。

この確認調査の結果を踏えた志布志町教育委員会は、再度遺跡地の取扱いについて三者間で協議を重ねた結果、夏井土光遺跡の立地する地域一帯については計画変更が困難であるため、会社側の調査依頼に基づき、記録保存を目的にした本格調査（全面発掘調査）を行うことで合意した。

発掘調査については、志布志町教育委員会を主体にする夏井土光遺跡発掘調査会と、発掘調査指導委員会を組織し、調査期間は平成3年4月26日より同年末までを予定し実施するはこびとなった。なお、発掘調査後の報告書の作成は、発掘担当者によって行うこととした。

第2節 調査の組織と体制

夏井土光遺跡の発掘調査の組織と体制は次のとおりである。

調査主体者 夏井土光遺跡発掘調査会

調査責任者 志布志町教育委員会 教育長 徳重俊二

事務局長 同 上 社会教育課 課長 慶田泰輔

事務担当 同 上 課長補佐 井手富男

同 上 文化体育係長 下平晴行

同 上 主査 米元史郎

同 上 主事 中窪 徹

同 上 主事 荒平安次

同 上 主事補 小村美義

発掘調査担当者 日本考古学会会員 瀬戸口望

同 補助員 志布志町教育委員会 米元史郎

同 補助員 磯部 勉

同 補助員 山下さえ子

発掘調査指導委員会

鹿児島県文化財保護審議委員 河口貞徳

鹿児島県考古学会副会長 本蔵久三

鹿児島大学法文学部教授 上村俊雄

鹿児島県教育庁文化課

志布志町文化財保護審議会

なお、プラント・オパール分析を宮崎大学農学部教授藤原宏志氏に依頼し、土壌推積及び土層については鹿児島大学法文学部助教授森脇広氏の指導を得、鹿屋市教育委員会社会教育課の山口俊博氏には実測作業などの御協力を賜わった、記して謝意を表したい。

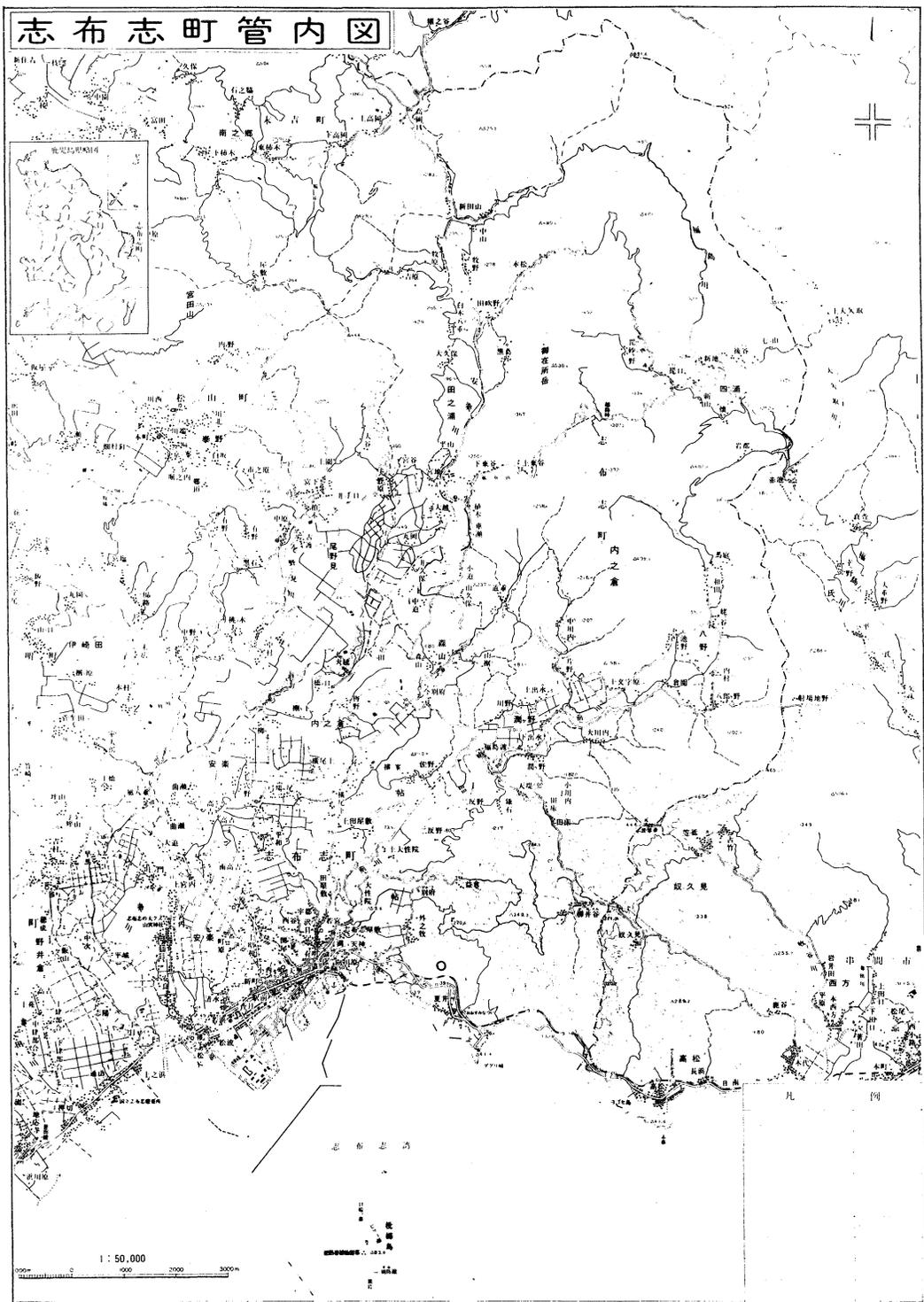
第3節 調査の経過

発掘調査は、平成3年4月26日より同年7月5日まで行った。調査面積は2650㎡、要した作業員数は延べ1233名である。この間の経過は調査日誌抄を整理して記したい。

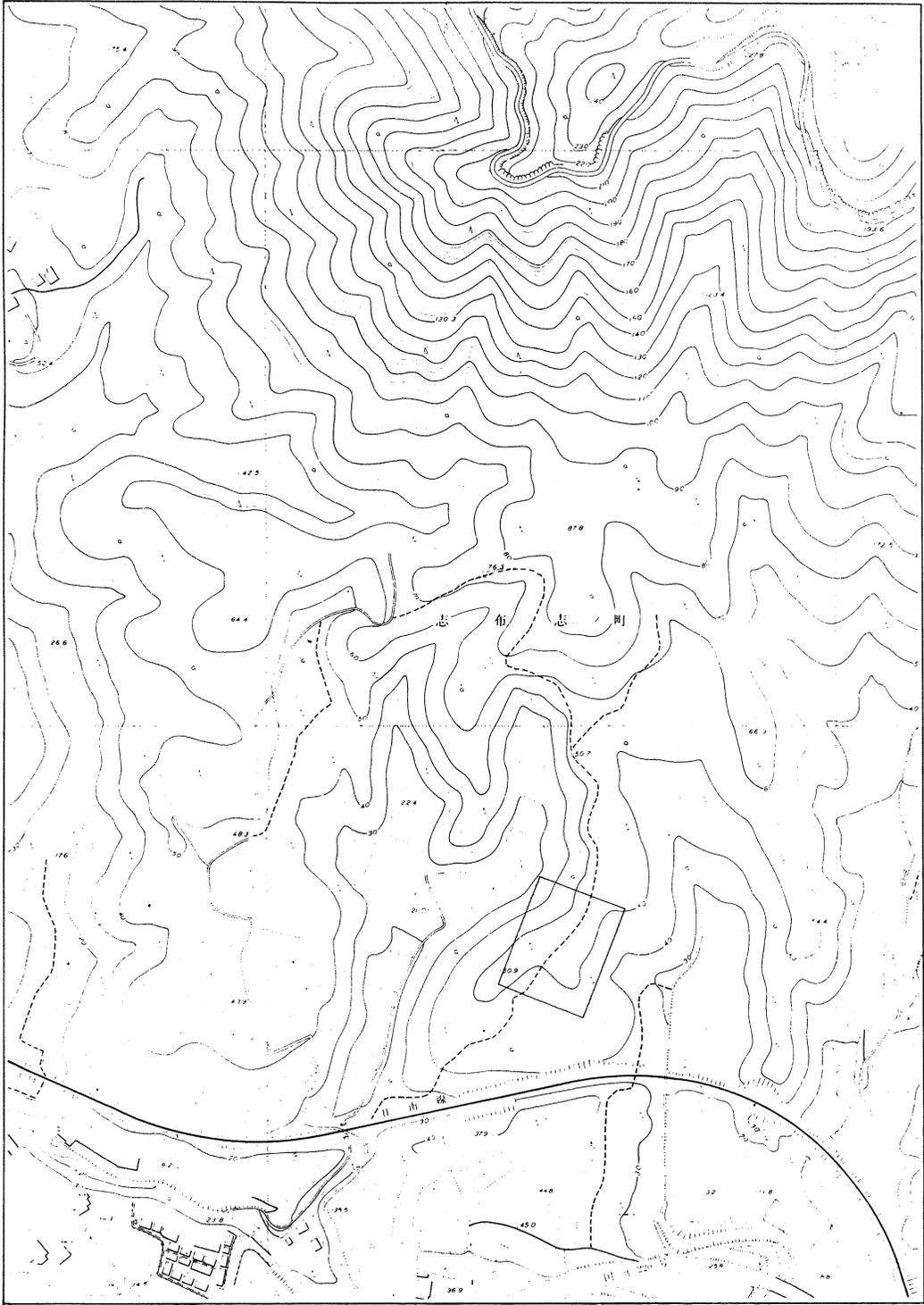
- 4月26日（金） 発掘調査の開始である。町教育委員会下平係長、米元主査のあいさつのあと、作業上の注意事項の説明。早速作業にとりかかる。先ず機材器具等のチェックと搬入を行い、グリッド設定やプレハブの設定場所の整地。この間すでに搬入していた重機によってE1、F1区の表面剥ぎと掘り下げ作業。
- 4月27日（土） F1、F1区の上層で10数点が出土。平板レベル測定後遺物取り上げ。V層（アカホヤ層）を重機で排土後掘り下げ。
- 4月29日（月） E1、F1区を終了。遺物は合せて数点。F2 C1、C2区のは共に上層部分の消失がめだち、出土遺物は数点、V層を重機で排土。
- 4月30日（火） 降雨が激しかったが作業を行う、本日よりコンベヤ使用。E2区の掘り下げ終了。C1、C2区の掘り下げ。
- 5月1日（水） 作業員が増しC1、C2区を終了、平板レベル測定等も終る。D3、D4区にとりかかる。遺物は数点。B1区北線ぞいに1.5m巾の確認トレンチを設定、遺物数点が出土。
- 5月2日（木） D3、D4区の上層を終りV層を重機で排土、下層部にとりかかる。トレンチの掘り下げは終了。
- 5月3日（金） これまでに終わった下層部や集石遺構を再整理し、平板レベル等も終える。プレハブの設定も終る。
- 5月4日（土） D3、D4区の下層部の掘り下げ。写真撮影のため各壁面の整理。
- 5月6日（月） 降雨のためたびたび作業を中断する。国道からの登坂路や周囲の樹草を整備する。C1区の下層部を掘り下げる。遺物は数点。
- 5月7日（火） D4区の下層部を整理する。P1のV層を重機で排土。降雨でたびたび作業を中断する。
- 5月8日（水） 国道からの登坂路を再整備。D1の下層部を掘り下げる。

- 5月9日(木) D1区の掘り下げは集石や礫の散乱が多く、出土遺物は数点。
- 5月10日(金) D1区を終了。D4区検出の集石を整理し写真撮影。各壁面の整理と実測を行う。河口会長の現場指導を受ける。
- 5月11日(土) D5区の掘り下げ、出土遺物は約70点。集石の実測。E5区の表層剥ぎ。
- 5月13日(月) D5区の掘り下げは出土遺物が約170点となり、平板レベル測定後取り上げる。G7、8区の西壁にそわせて巾2mの確認トレンチを設定掘り下げる。
- 5月14日(火) G7、8区のトレンチに数点の土器が出土した。E9区にも巾2mの確認トレンチを設定し掘り下げる。
- 5月16日(木) D9、E9区の北線にそわせ2m巾の確認トレンチを設定し掘り下げる。攪乱層に弥生土器数点が出土。集石の実測や写真撮影等。
- 5月17日(金) D5区の遺物取り上げ。遺物番号は220点をこえる。D7、8、9の全面をV層までユンボで排土。下層部掘り下げにとりかかる。
- 5月18日(土) D9区の掘り下げは終了。出土遺物は全く無かった。E9、D7、8区の掘り下げは、礫の散乱が数点検出されたのみ。
- 5月20日(月) 降雨が激しかったので作業を断念し、遺物の整理と台帳作成作業。
- 5月21日(火) D7区の下層部を終る。E9区の掘り下げ作業。石鏃一点以外出土遺物はなかった。G7区も遺物出土は全くなく終了。
- 5月22日(水) D7、8、E9区の遺物取り上げ。E-5区の掘り下げを終了。D5区の上層を終了。下層部の掘り下げに移る。集石の実測等
- 5月23日(木) D5区の下層部に遺構らしい個所を発見する。E8区の上層を掘り下げる。
- 5月24日(金) D5区の遺構は住居跡と断定されたので、更に入念な整理を行う。角筒土器の破片など出土。E8区の上層を終え、下層部に移る。D6区の掘り下げ。
- 5月25日(土) D6区の掘り下げと遺物取り上げ。出土遺物は約30点。E8区の下層も終了する。遺物の出土はなかった。
- 5月27日(月) D5区検出の住居跡の整理。輪郭をはっきりとらえることができない。E8区の下層部の掘り下げ。石片は多いが遺物は無い。E9の上層を掘り下げ。
- 5月28日(火) D5区の住居跡の整理。E8区の下層部は石片が散発的に見られ、土器片等が数点。壁面の実測等。
- 5月29日(水) E9区の下層部の掘り下げ。降雨が激しくたびたび作業を中断。県教委文化課の中村耕治主査来跡。
- 5月30日(木) E、F区の境界線を掘り下げる。約40点が出土。D2区検出の集石を実測BO、CO区を新たに設定し掘り下げる。出土遺物は数点。
- 5月31日(金) CO区の掘り下げを終了。出土遺物は9点。正午過ぎから降雨が強くなり、作業を中断する。
- 6月3日(月) DO区を設定し掘り下げる。出土遺物は10点。壁面の実測等。国道からの登坂路の手入れ。

- 6月4日(火) 集石の実測と壁面の実測。登坂路の整備。F7区の表土剥ぎ。
- 6月5日(水) E7区の掘り下げ。集石の実測。
- 6月6日(木) E7区の掘り下げで土器片約10点が出土、石片の散乱がめだつて多い。降雨の中、河口会長、次いで鹿大上村教授来跡、指導を受ける。
- 6月7日(金) E7区の掘り下げを終了する。集石が数ヶ所。町教委の教育長、社会教育課長、文化財審議委員等の現地指導。
- 6月8日(土) E7区の遺物取り上げ。F7区の掘り下げでは石片が散発的に出土する。
- 6月10日(月) F7区の掘り下げは石片が多く、遺物の出土は少ない。壁面の実測等。
- 6月11日(火) E6区の掘り下げにかかる。F7の遺物は約10点、平板レベル測定したあと取り上げる。写真撮影等。
- 6月12日(水) E6、F6区の掘り下げ。E6区に溝状遺構を検出する。集石の実測。終っている区の等高線の測量。
- 6月13日(木) E6、F6区の掘り下げは石片の出土が多い。B1区の上層部分を掘り下げ、溝状遺構の検出。
- 6月14日(金) E6、F6区の掘り下げ。E6区に小溝状遺構を検出。B1区検出の溝状遺構の整理、県教委の新東主査来跡。
- 6月15日(土) 早朝から降雨が激しかったので作業を断念した。しかしながら、鹿児島大学の上村、森脇両先生が来跡の予定であったので現地で待ち指導を受ける。
- 6月17日(月) 降雨のため作業を断念。事務用員と重機係のみで出土遺物の整理作業。
- 6月18日(火) E6、F6区の掘り下げと整理。B1区検出の遺構の上面を捉える。実測を行う。E6区の溝状遺構を実測する。E1、F1区の断面を再整理し、更に1m巾のトレンチを設定しⅩ層まで掘り下げる。
- 6月19日(水) B1区検出の溝状遺構の整理。E7、F7区の境界土手を整理する。E7、F6区の両境界線に合わせ下層部確認のためのトレンチ(1m)を設定する。
- 6月20日(木) B1区検出の溝状遺構の整理。集石と配石の実測。降雨のためたびたび作業を中断。宮崎大藤原教授外2名プラントオパール分析のための土壌採取。鹿屋市教委の山口主事加勢のため来跡。
- 6月23日(日) 鹿児島大森脇助教授再度の来跡、指導を受ける。
- 6月24日(月) 降雨のため作業は断念合い間に溝状遺構の実測作業。
- 6月25日(火) これまでに検出していた住居跡の再整理。溝状遺構の整理と実測。
- 6月26日(水) 住居跡の実測。集石の実測。末掘場所の再整理。
- 6月27日(木) D5区東脇の農道部分や末掘部分の再整理。各器具等の整理。
- 6月29日(土) 発掘調査にかかわるすべてを終了した。機材器具を荷作して返納する。出土遺物を奈良不動産株式会社の社宅(整理場所)まで搬出し、すべて完了。町教委教育長以下のあいさつ後、解散
- 7月1日～5日 未済の住居跡、集石、礫の散乱状態等の実測作業と埋め戻し作業。



第1図 志布志町地図(○部分夏井土光遺跡)



第2図 遺跡周辺地図(線内がグリッド部分)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地形

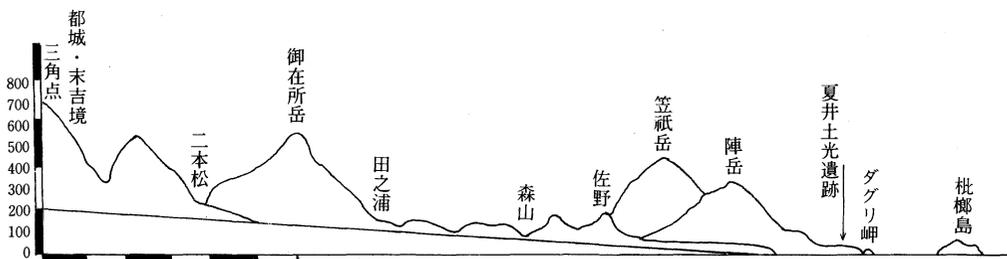
夏井土光遺跡は鹿児島県曾於郡志布志町大字夏井に位置している。

鹿児島県の最東部、曾於郡の東南部にある志布志町は、東から北東部を宮崎県串間市と接し県境となし、北西から西側は鹿児島県曾於郡末吉町、松山町、有明町と相い接し、南は太平洋に湾口を開く志布志湾に面し、その海岸線の延長は約8kmである。

志布志町の地勢は、東西の最大幅は10.2km、南北方向の最大長が23.9kmの縦長の釣鐘状の地形をなし、海岸線の略中央にあたる志布志港導灯で示す絶対位置は、北緯31度28分12秒、東経は131度6分41秒。極北の県境の三角点は31度38分0秒、131度11分30秒。総面積は138.9km²である。県境をなす北東部から東部一帯にかけて、日向山系の支脈である鱈塚山塊がはしっており、極北の県境をなす大八重の三角点(691.6m)を最高に、御在所岳(530.4m)、笠祇岳(444.2m)などを主峰にした山塊が北から南方向に延び、その最南端の陣岳(349.3m)を主峰にした山塊は海岸線近くまでせまっている。

これら山塊地帯を源泉にして流れる河川は、北部四浦地区をかすめ串間市方向に流れる福島川の上流大矢取川をはじめ、東側山陵の裾部を流れ志布志市街地の東側をかすめ志布志湾にそそぐ前川、主として北部山塊地帯に湧出し町の西側部分を縦流する安楽川など二級河川に加え、陣岳南麓から流れ出す小川も数条あって、これら河川の侵食は極めて活発な様相がうかがえられる。

これら山稜に続く台地の大部分は、南九州地方特有のシラス土壤に覆われて基盤となっており、その上位にはローム層、腐植土層、新期火山灰層などの堆積状況が見られ、各河川や小流によって大小様々の侵食低地や谷が、樹枝状に形成されている。したがって、農地の占める割合は他の地域にくらべ、極めて低いといえよう。



第3図 志布志町模式断面図(南北方向)

こうした地勢のなか、夏井土光遺跡の所在する所は、陣岳山塊から南方向に細長く延びる丘陵上である。山麓の基部辺りの標高は約70m、約1kmある最先端は直接海岸に接しており、その中程をJR日南線が貫通している。遺跡地は線路北側の比高差約20mの台地上一帯、標高は50m前後の所である。両側は比高差30m程の谷間によって隣り台地と分断され、遺跡地一帯の台地幅は広い所で100m程、狭く深い小谷も幾つか不規則に入り込むなど、複雑な側面を有している。遺跡地の北半部分（以下A地点とする）には開墾と造成の手が加えられており、南半部分（B地点）は線路方向及び東方向に傾斜する雑木林、いわゆる昼なお暗い森林で、環状の山道が回っていた。西に隣接する一段低い一帯は、造成後に植林された果実林（ビワ、ウメ）となっていたが、今は荒れ放題となっており、A地点を含め、雑木や竹林が走り足の踏み場もない状態となっていた。なお、両側には入り込んで深い小谷の中腹には、僅かに出水する湧水個所があって、今なおイノシシがここを中心に出没するなど、地勢の点では極めて悪い条件下にあった。

第2節 環境

志布志町内の埋蔵文化財に関する調査や資料は、伝統的に豊富で且つまた歴史も古い。安楽地区内に所在する山宮神社の大楠が立ち枯れした際、その根かぶ附近から石棺墓が発見され、棺内から鏡一面、太刀一口、土器類数点、小壺等が出土したのは、明治26年のことで、住民の手によって詳細な発見記録と資料が現在に伝えられている。この発見記録が志布志町における考古学的資料の第1ページとってよい。

以来、大正時代から昭和初期にかけては、瀬之口伝九郎氏（当時志布志中学校教諭）による水ヶ迫横穴墓の発見やその他の調査、嶋戸貞良氏（県内の各女子中学校長などを経て志布志小に奉職）による飯盛山古墳（ダグリ古墳）の発掘調査等、戦前戦後を通じ町内各小学校校長などをし、片野洞穴遺跡などを調査した海老原行秀氏、四浦宮前遺跡や小淵、野久尾遺跡などを手がけられた酒匂義明氏（現鹿児島高校教諭）などの考古学的功績は極めて多大であり、また、昭和30年代後半から永く志布志高校に奉職されていた諏訪昭千代氏や、幼少の一時期を志布志で過ごされた。鹿児島大学教授（考古学）上村俊雄氏の愛着をもった志布志町への貢献度は、計り知れないものがある。

これら諸先学の調査結果は、別表のように遺跡数を200ヶ所数えるまでにたった。しかしながら、その大半は安楽川、前川など大河川流域に限られており、夏井地区一帯はやや稀薄とされていた。今回の夏井土光遺跡の発見と発掘調査は、その空白部分に点を押したことになり、その意義は極めて大きいといえよう。

本遺跡に近い飯盛山古墳は昭和10年嶋戸氏によって発見された5世紀後半の前方後円墳である。同38年国民宿舎建設のため破壊されたことは惜しまれてならない。ちなみにその内容を記すると次のようである。古墳の全長約80m、前方部長43m、幅20m、高さ15m。後円部（主墳部）の長さ37m、幅30m、高さ4.5m、この部分に竪穴式石室があって、工事の際出土した遺物は、壺形埴輪、ガラス製勾玉、丸玉、小玉等である。

第1表 志布志町内の遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 編年(土器) | 遺物・遺構等 | 備考 |
|----|------|-----------|----------|-------------------|-------------|
| 1 | 牧原 | 田之浦牧原1321 | 縄文前期 | 縄式土器, 住居跡 | 昭和20年代の記録より |
| 2 | 内門 | 〃 内門 | 縄文時代 | | |
| 3 | 白木原 | 〃 白木原 | 縄文時代 | 押型文土器 | 昭和62年確認調査 |
| 4 | 大長野 | 〃 大長野 | 縄文時代 | 押型文土器 | 平成3年発掘調査 |
| 5 | 平山 | 〃 平山 | 弥生時代 | | 平成元年確認調査 |
| 6 | 宮谷口 | 〃 宮谷口 | 縄文時代 | | 同上 |
| 7 | 宮ヶ中 | 〃 宮ヶ中 | 弥生時代 | | |
| 8 | 本村 | 〃 本村 | 縄文時代 | | |
| 9 | 下原 | 〃 下原 | 弥生時代 | | |
| 10 | 小牧 | 〃 小牧 | 縄文時代 | | |
| 11 | 蔵園 | 〃 蔵園 | 縄文時代 | 住居跡 | 昭和60年確認調査 |
| 12 | 中迫 | 〃 中迫 | 縄文時代 | | 同上 |
| 13 | 東黒土田 | 内之倉東黒土田 | 縄文時代 | | |
| 14 | 土光A | 〃 土光 | 縄文時代 | | 昭和59年確認調査 |
| 15 | 土光B | 〃 土光 | 縄文時代 | | 同上 |
| 16 | 上原 | 〃 上原 | 縄文時代 | | |
| 17 | 中須 | 〃 中須 | 縄文時代 | | |
| 18 | 森山 | 〃 森山 | 弥生時代 | | |
| 19 | 西中畑 | 〃 西中畑 | 縄文時代 | | 昭和60年確認調査 |
| 20 | 平原A | 〃 平原西畑 | 弥生時代 | | 昭和61年確認調査 |
| 21 | 平原B | 〃 平原上原 | 弥生時代 | | 同上 |
| 22 | 上原 | 〃 上原 | 弥生時代 | | 同上 |
| 23 | 樽野 | 〃 樽野555 | 縄文後期 | 市来式土器・夜白系土器 | 同上 |
| | | | 弥生前期 | 石皿・黒曜石片 | |
| 24 | 下原A | 〃 下原 | 縄文時代 | | |
| 25 | 下原B | 〃 下原 | 弥生, 縄文時代 | | |
| 26 | 長尾 | 〃 長尾 | 縄文時代 | | |
| 27 | 横尾A | 〃 横尾 | 縄文時代 | | |
| 28 | 横尾B | 〃 横尾 | 縄文時代 | | |
| 29 | 札建 | 〃 札建 | 弥生時代 | | |
| 30 | 蓑輪 | 〃 蓑輪 | 弥生中, 縄文早 | 山之口式土器, 吉田式土器, 石鏃 | 昭和55年確認調査 |
| 31 | 柳 | 安楽人足, 柳 | 弥生中, 縄文早 | 山之口式土器, 吉田式土器, 石坂 | 昭和55年確認調査 |
| | | | | 式押型文土器, 住居跡 | |
| 32 | 上重 | 安楽上重 | 縄文時代 | | |

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 編年(土器) | 遺物・遺構等 | 備考 |
|----|------|----------|----------|-----------------|-----------|
| 33 | 四反田 | 安楽四反田 | 弥生時代 | | |
| 34 | 高牧 | 〃高牧 | 弥生時代 | | |
| 35 | 二重堀 | 〃二重堀 | 弥生時代 | | |
| 36 | 権現原 | 〃権現原 | 弥生時代 | | |
| 37 | 別府 | 〃別府 | 縄文前, 晩期 | 黒川系土器, 岩崎式 | 昭和52年確認調査 |
| | | | | 塞之神式土器, 石鏃, 石斧外 | 昭和53年発掘調査 |
| 38 | 水ヶ迫 | 〃水ヶ迫 | 弥生, 土師 | | |
| 39 | 大西 | 志布志大西 | 縄文時代 | | |
| 40 | 向川原 | 帖向川原 | 縄文時代 | | |
| 41 | 野首A | 〃内城, 野首 | 縄文, 弥生時代 | | |
| 42 | 野首B | 〃西中尾, 野首 | 縄文時代 | | |
| 43 | 西中尾 | 〃西中尾 | 縄文時代 | | |
| 44 | 油田 | 〃油田, 飛渡 | 縄文, 弥生時代 | | 昭和62年確認調査 |
| 45 | 堂迫 | 〃堂迫 | 縄文, 弥生時代 | | |
| 46 | 島廻 | 〃島廻 | 弥生時代 | | 昭和62年確認調査 |
| 47 | 下牧 | 〃下牧 | 縄文, 弥生時代 | | 昭和63年確認調査 |
| 48 | 白木牟田 | 〃白木牟田 | 縄文, 弥生時代 | | |
| 49 | 上牧 | 〃上牧 | 縄文時代 | | |
| 50 | 中原 | 〃中原 | 縄文時代 | | 昭和59年確認調査 |
| 51 | 井手元 | 〃井手元, 中原 | 縄文時代 | | |
| 52 | 土佐野原 | 〃上佐野原 | 弥生時代 | | |
| 53 | 出口A | 〃出ノ口 | 縄文時代 | | |
| 54 | 東原 | 〃東原 | 縄文時代 | | 昭和61年確認調査 |
| 55 | 堂ノ下 | 〃堂ノ下 | 縄文時代 | | |
| 56 | 家野 | 〃家野10767 | 縄文後期 | 市来式, 指宿式, 鐘ヶ崎式 | |
| | | 10290 | | 石皿, 敲石, 打製石斧外 | |
| 57 | 松崎 | 〃松崎 | 縄文後期 | 市来式, 指宿式 | |
| 58 | 西原 | 〃西原, 二反野 | 縄文時代 | | 平成2年確認調査 |
| 59 | 牧 | 〃牧 | 縄文, 弥生時代 | | |
| 60 | 川平 | 〃川平 | 縄文時代 | | |
| 61 | 下迫 | 〃下迫, 中迫 | 縄文時代 | | |
| 62 | 下佐野原 | 〃下佐野原 | 縄文時代 | | |
| 63 | 大二反野 | 〃大二反野 | 縄文, 弥生時代 | | |
| 64 | 下田 | 〃下田 | 縄文時代 | | |
| 65 | 八反田 | 〃八反田 | 縄文時代 | | |

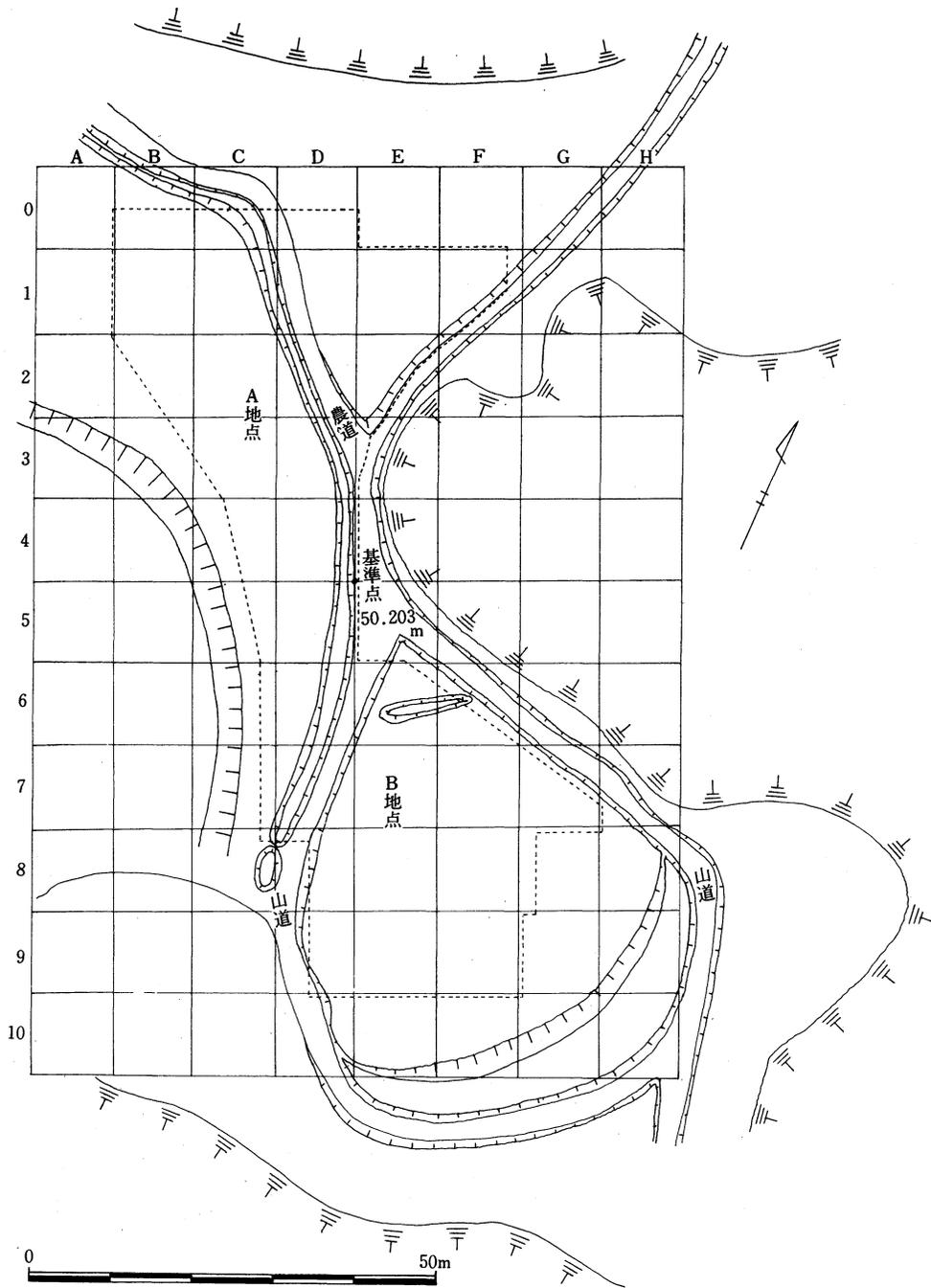
| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 編年(土器) | 遺物・遺構等 | 備考 |
|----|------|------------|------------|-------------------------------|-----------------------|
| 66 | 柳元 | 帖柳元 | 縄文時代 | | |
| 67 | 下原 | 〃下原 | 弥生時代 | | |
| 68 | 前谷 | 〃前谷 | 縄文時代 | | |
| 69 | 柳ノ下 | 〃柳ノ下 | 縄文時代 | | |
| 70 | 山下 | 〃山下 | 弥生時代 | | |
| 71 | 深迫 | 夏井深迫, 土光 | 縄文, 弥生時代 | | 平成3年確認調査 |
| 72 | 上門A | 安楽山角 | 縄文後期 | | |
| 73 | 上門B | 〃〃 | 縄文後期 | | 平成3年確認調査 |
| 74 | 上門C | 〃〃 | 縄文後期 | | |
| 75 | 上門D | 〃〃 | 縄文後期 | | |
| 76 | 大迫 | 〃大渡 | 縄文中, 後期 | 阿高式, 塞之神式 出水式土器, 石鏝, 石斧 | |
| 77 | 石踊 | 帖石踊 | 縄文中, 後期 | 押型文, 御領式土器 打製石斧, 石ヒ, 石器 | 昭和53年確認調査 |
| 78 | 野首 | 〃野首 | 縄文後期 | 市来式, 西平式土器, 打製石斧 | |
| 79 | 柳井谷 | 〃柳井谷 | 縄文中, 後期 | 出水式, 轟式, 押型文 御領式土器, 敲石, 石斧 | 昭和58年発掘調査 |
| 80 | 道重 | 内之倉弓場迫2280 | 縄文前, 中期 | 押型文, 阿高式 塞之神式土器, 敲石, 砥石 | 昭和63年確認調査 平成元年発掘調査 |
| 81 | | | | | |
| 82 | ミソレ谷 | 夏井ミソレ谷 | 縄文中期 | 完形土器 | |
| 83 | 下牧 | 帖下牧 | 縄文中, 後期 | 阿高式土器, 石斧, 石皿 | |
| 84 | ウドン上 | 〃ウドン上 | 縄文中期 | 阿高式土器 | |
| 85 | 吉原 | 田之浦吉原 | 縄文前期 | 轟式, 石斧 | |
| 86 | 牧野 | 〃牧野 | 縄文前, 中, 後期 | 押型文, 指宿式, 土偶 磨製石斧, 紡錘車, 凹石 | |
| 87 | 出口B | 内之倉出口 | 縄文前期 | 塞之神式, 轟式, 磨製石斧 | 昭和61年確認調査 |
| 88 | 立花迫 | 〃立花迫 | 縄文前期 | 南福寺式土器 | |
| 89 | 田床 | 〃田床 | 縄文中, 後期 | 阿高式, 南福寺式 御領式土器, 石斧, 注口土器 | |
| 90 | 大川内 | 〃大川内 | 縄文中, 後期 | 出水式, 指宿式, 有肩石斧 | |
| 91 | 天堤 | 〃松崎 | 縄文前, 中, 後期 | 押型文, 阿高式, 並木式 御領式土器, 石斧 | |
| 92 | 横峯 | 〃横峯 | 縄文中期 | 型式不明, 打製石斧, 敲石 砥石 | |

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 編年(土器) | 遺物・遺構等 | 備考 |
|-----|-------|-----------|------------------|---------------------------------|-----------------------------|
| 93 | 片野洞穴 | 内之倉片野2634 | 縄文早, 前, 中, 後期 | 片野式, 西平式, 骨角器 獣骨, 貝類外 | 昭和39年発掘調査 |
| 94 | 後谷 | 田之浦後谷 | 縄文中, 後期 | | |
| 95 | 山ノ上 | 帖別府8473 | 縄文早, 前期 | 石坂式, 塞之神式土器外 | 昭和42年発掘調査 |
| 96 | 小淵 | 〃小淵6423 | 縄文中, 後期 | 岩崎上, 下層式, 指宿式 市来式, 打製石斧, 石錘外 | 昭和42年発掘調査 |
| 97 | 倉野 | 田之浦吉原1171 | 縄文早, 前期 | 押型文, 吉田式, 塞之神式土器 | 鹿児島考古第8号に内容報告 |
| 98 | 板山 | 〃板山116 | 縄文早期 | 押型文土器 | 同上 |
| 99 | 白木八重 | 〃白木八重1039 | 縄文早期 | 押型文土器 | 同上 |
| 100 | 大越 | 〃宮地原 348 | 縄文早期 | 吉田式, 前平式土器, 石皿 | |
| 101 | 小牧 | 〃小牧 122 | 縄文中, 後期 | 岩崎上, 下層式 局部磨製石斧, 打製石斧外 | |
| 102 | 小迫 | 〃小迫 | 縄文後期 | 土器片, 磨製石斧 | 昭和60年確認調査 |
| 103 | 山久保B | 〃山久保 | 縄文後, 晩期 | 大石式土器, 磨製石斧 | 昭和60年確認調査 |
| 104 | 宮前 | 内之倉竹下6661 | 縄文中, 後期 | 岩崎上, 下層式, 指宿式土器 石皿, 石斧, 住居跡 | 昭和48年発掘調査 |
| 105 | 姥ヶ谷 | 〃姥ヶ谷5546 | 縄文前期 | 轟式, 条痕文土器, 石皿, 敲石 | |
| 106 | 東黒土田A | 〃東黒土田 | 縄文晩期 | 大石式土器 | |
| 107 | 東黒土田B | 〃東黒土田 | 縄文早, 前期 | 隆帯文, 平楯式, 塞之神式 轟式土器, 石組遺構外 | 昭和55年発掘調査 |
| 108 | 東黒土田C | 〃東黒土田 | 縄文後期 | 御領式土器 | |
| 109 | 井手平 | 〃井手平 | 縄文早期 | 吉田式, 前平式, 平楯式 塞之神式土器 | 昭和58年確認調査 |
| 110 | 池野 | 〃池野 | 縄文時代 | 型式不明, 黒曜石 | 昭和58年確認調査 |
| 111 | 倉園A | 〃倉園 | 縄文後期 | 指宿式, 鐘ヶ崎式土器 磨製石斧, 石皿外 | 鹿児島考古第10号に内容報告 昭和59年発掘調査 |
| 112 | 倉園B | 〃倉園 | 旧石器 縄文早期 | 吉田式, 前平式, 石坂式土器 細石器, 石鏃外 | 昭和57年発掘調査 |
| 113 | 十文字 | 〃十文字4081 | 縄文中, 後期 | 岩崎上, 下層, 指宿式土器 石鏃, 石皿, 磨石外 | 同上 |
| 114 | 浜場 | 〃片野 | 縄文早期 | 吉田式土器 | |
| 115 | 出水 | 〃前畑2928 | 縄文早期 | 押型文土器 | 鹿児島考古第8号に内容報告 |
| 116 | 平原 | 〃平原 | 縄文早期 | 石坂式土器 | |
| 117 | 山裾 | 〃山裾 | 縄文晩期 | 蔟痕土器 | |
| 118 | 今別府 | 〃今別府 | 縄文晩期 | 大石式, 黒川式, 蔟痕土器, 打製石斧 | |

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 編年(土器) | 遺物・遺構等 | 備考 |
|-----|-------|------------|---------------|-----------------------------|----------------------------------|
| 119 | 上樽野 | 内之倉樽野 | 縄文後期 | 指宿式土器 | |
| 120 | 橋之口 | 〃 橋之口466~7 | 縄文晩期 | 大石系土器 | 鹿児島考古第6号に内容報告 |
| 121 | 橋之口 | 〃 橋之口 | 縄文早,後期 | 吉田式,指宿式土器,打製 磨製石斧 | |
| 122 | 鎌石橋 | 帖11218 | 旧石器 縄文早,前期 | 細石刃,隆帯文,曾畑式土器 石斧,炉址外 | 鹿児島考古学会昭和56年発掘 鹿児島考古第16号に内容報告 |
| 123 | 鎌石 | 〃 鎌石 | 縄文早,晩期 | 吉田式,蓆痕土器,打製石斧 | 昭和63年確認調査 |
| 124 | 二反野 | 〃 二反野 | 縄文晩期 | 夜白系土器,敲石,黒曜石片 | 平成2年確認調査 |
| 125 | 坂之上 | 〃 坂之上 | 縄文早期 | 前平式土器,石鏃 | |
| 126 | 野首橋 | 〃 天神田8197 | 縄文早,前期 | 撚系文,轟式,曾畑,石鏃 石匙外 | 昭和53年発掘調査 |
| 127 | 夏井浜 | 夏井地藏下 | 縄文後期 | 西平式,三万田式,御領式土器 石斧,石錘,敲石外 | 鹿児島考古第7号に内容報告 |
| 128 | 上ノ園 | 〃 上園 | 縄文早期 | 塞之神B式土器 | |
| 129 | 曲瀬 | 安楽中原 | 縄文後期 | 市来式土器 | |
| 130 | 小瀬A | 〃 小瀬4684 | 縄文後期 | 市来式土器 | |
| 131 | 中原 | 〃 中原 | 縄文後期 | 指宿式,鐘ヶ崎式土器,磨石 黒曜石 | |
| 132 | 小瀬B | 〃 小瀬 | 縄文後期 | 指宿式,市来式土器 | |
| 133 | 百堂穴 | 〃 岩戸 | 縄文前期 | 轟B式土器,石鏃 | |
| 134 | 宮脇 | 〃 宮脇1106-1 | 縄文後期 | 市来式,鐘ヶ崎式土器,石錘,石皿 | |
| 135 | 安良 | 〃 安良 | 縄文後期 | 市来式土器,磨製石斧 | |
| 136 | 鳥井下 | 〃 鳥井下 | 縄文晩期 | 大石式土器 | |
| 137 | 船磯 | 〃 船磯 | 縄文前期 | 轟式土器 | |
| 138 | 前之段 | 帖下原 | 縄文晩期 | 網目文土器,敲石,磨石 | |
| 139 | 八郎ヶ野B | 内之倉八郎ヶ野 | 縄文,弥生時代 | | 昭和58年確認調査 |
| 140 | 毛穴野 | 安楽毛穴野 | 弥生時代 | | |
| 141 | 六月坂 | 志布志六月坂 | 弥生時代 | 須恵器,土師器 | |
| 142 | 宮馬場 | 安楽宮馬場 | 弥生時代 | | |
| 143 | 水ヶ迫 | 〃 水ヶ迫 | 弥生時代 | | |
| 144 | 道悦 | 〃 道悦 | 弥生時代 | | |
| 145 | 田吹野 | 田之浦田吹野 | 弥生時代 | | 昭和63年確認調査 |
| 146 | 夏井 | 夏井外牧 | 弥生時代 | | |
| 147 | 高吉 | 安楽高吉 | 弥生時代 | | |
| 148 | 佐野 | 帖佐野 | 弥生時代 | | |

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 編年(土器) | 遺物・遺構等 | 備考 |
|-----|--------|------------|--------|----------------------|------------|
| 149 | 上田屋敷 | 帖上田屋敷 | 弥生時代 | | 昭和63年確認調査 |
| 150 | 外ノ牧A | 〃外ノ牧 | 弥生時代 | | |
| 151 | 打出ヶ浜 | 夏井打出ヶ浜 | 弥生時代 | | |
| 152 | 平城 | 安楽平城 | 弥生時代 | 打製石斧 | |
| 153 | 一丁田 | 〃一丁田 | 古墳時代 | 須恵器, 土師器 | |
| 154 | 六月坂土壇 | 〃六月坂 | 古墳時代 | 横穴古墳, 須恵器 | |
| 155 | 山宮土壇 | 〃宮馬場 | 歴史時代 | 銅剣, 銅鏡, 壺 | |
| 156 | 夏井古墳 | 夏井掘之内 | 古墳時代 | | |
| 157 | 飯盛山古墳 | 〃ダグリ岬 | 古墳時代 | 壺形埴輪, ガラス製勾玉, 丸玉, 小玉 | 昭和38年国民宿 |
| | | | | 全長約80m, 最大幅約30m | 舎ダグリ荘建設 |
| | | | | 後円最高部4.5m, 葺石あり | により消滅 |
| 158 | 枇榔島 | 〃枇榔島 | 古墳時代 | 須恵器, 土師器 | |
| 159 | 桜山 | 安楽桜山 | 古墳時代 | 土師器 | |
| 160 | 市坂 | 帖市坂 | 歴史時代 | 須恵器 | |
| 161 | 顚娃郷 | 安楽顚娃郷 | 古墳時代 | 須恵器, 土師器 | |
| 162 | 小牧1号古墳 | 〃小牧5973-10 | 古墳時代 | 土師器, 須恵器, 軽石加工土品 | 一方向(南側)を僅か |
| | | | | 全長約40m, 最大幅約15m | に破損 |
| | | | | 高さ約2.5m, 葺石あり | |
| 163 | 外ノ牧B | 帖外ノ牧 | 古墳時代 | 土師器 | |
| 164 | 和田 | 内之倉和田 | 弥生時代 | | |
| 165 | 昆砂ヶ野 | 〃昆砂ヶ野 | 弥生時代 | | |
| 166 | 山宮神社 | 安楽宮馬場 | | | |
| 167 | 宝満寺址 | 帖向川原 | | | |
| 168 | 即心寺址 | 志布志上大黒 | | | |
| 169 | 松尾城跡 | 帖 | 中世 | 山城 | |
| 170 | 志布志城跡 | 帖 | 中世 | 山城 | |
| 171 | 安楽城跡 | 安楽 | 中世 | 山城 | |
| 172 | 高城跡 | 志布志高城 | 中世 | 山城 | |
| 173 | 大慈寺墓地 | 〃小西 | 中世 | | |
| 174 | 愛甲善春墓 | 〃小西 | 江戸時代 | | |
| 175 | 肝付兼継墓 | 〃小西 | 中世 | | |
| 176 | 山久保A | 田之浦山久保 | | | 昭和60年確認調査 |
| 177 | 八郎ヶ野A | 内之倉八郎ヶ野 | 縄文 | | 昭和58年確認調査 |

参考資料 志布志の埋蔵文化財, 倉園B遺跡



第4図 調査前の地形並にグリッド網(区切り線内が発掘した区域)

第3章 調査の概要 グリッド設定

第1節 調査の概要

遺跡の立地するところは、前述したように、線路北側の切り立った崖上であって、両側腹に深い小谷がはいり込んでいるなど、地形的悪条件下にあった。ここに通ずるには国道から分岐する巾2m弱の山道だけがあって、線路上約10mに架かる鉄橋は軽車両だけに限られ、台地上に登りつめるには急勾配の細道があって、軽四輪の駆動車を使用するしかなかった。また、重機（ユンボ）の搬入作業については、近所に線路を横断する場所が無いので、最小の重機を西から遠く迂回させ、線路下の小トンネル（2m強）は車体の一部を分解して通し、急斜面は自らの手で開削して登台させることにした。この様な諸制約から以下の機材器具の搬入も不便民かつ困難な作業を強いられた。

発掘調査は先ずこうした障害を乗り越えて着手しなければならなかったが、それに増して現場の状況はきびしかった。A地点一帯を覆っている雑草木の排除作業もさることながら、B地点に繁茂する巨木の伐採や積み出し作業等である。これら事前の準備作業は専門業者に委託して行ったが、それでも作業は20日間を要した。

発掘調査は表面を整理中、確認調査の時点では把握できなかった弥生土器や磨石、台石等が採集され、上層部分にも包含層の存在が推定できた。そこで表層の剥ぎ取りにもいっさい重機を使用せず、間隔をもたない程樹根が残存していても入念な掘り下げ作業を行い、樹根掘り出しも細心の注意を払うことにした。

遺跡の表面は外観で推察したとおり、すでに開墾や造成の手が加えられていた。特に遺跡の主部部と考えられたA地点の中央部分などは、第Ⅴ層（アカホヤ）にとどくまで上層部分が消失し、かろうじて縄文時代早期の文化層が残存しており、B地点でも一部においても同様がうかがえられた。したがって、発掘作業の進め方としては、先ず上層部分の調査を入念に終え、第Ⅴ層のアカホヤを重機で排土し、そして第Ⅵ層にとりかかるといふ、いわゆる3度掘りの方法で進めることにした。一般的に下層部の堆積は良好であったが、最下層部まで掘り終わった時点での地表面は、第13図のように、平坦面がなく、いずれの方向へも傾斜しているという、地形的特徴をここでも見る事ができた。

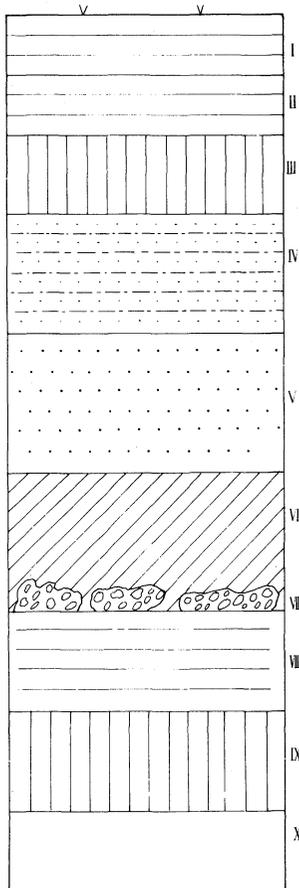
第2節 グリッド設定

グリッドの設定については、確認調査で判明した包蔵地と推定された全域に、10m×10mの区画をもったグリッド網をかぶせて調査することにした。発掘予定は約3000㎡あり、A地点とした北半部分は北向きのラップ状、B地点とした南半はやや軸をかえた形で東方向に張り出している。したがってグリッド網は巾広く長めにとらざるを得なかった。グリッドの当初の北限は、推定された包蔵地一帯より一区画分余裕をもたせた東西線を基準に、A～Hの8区画、南方向にはB地点の南限がかぶるように1～10区画とした。しかし、北方向に若干拡張せざるを得ない出土状況が見られたので、新たに0区通りを設定し、各区の呼称は、A-0区、B-2区、C-3区等とすることにした。

第4章 層位

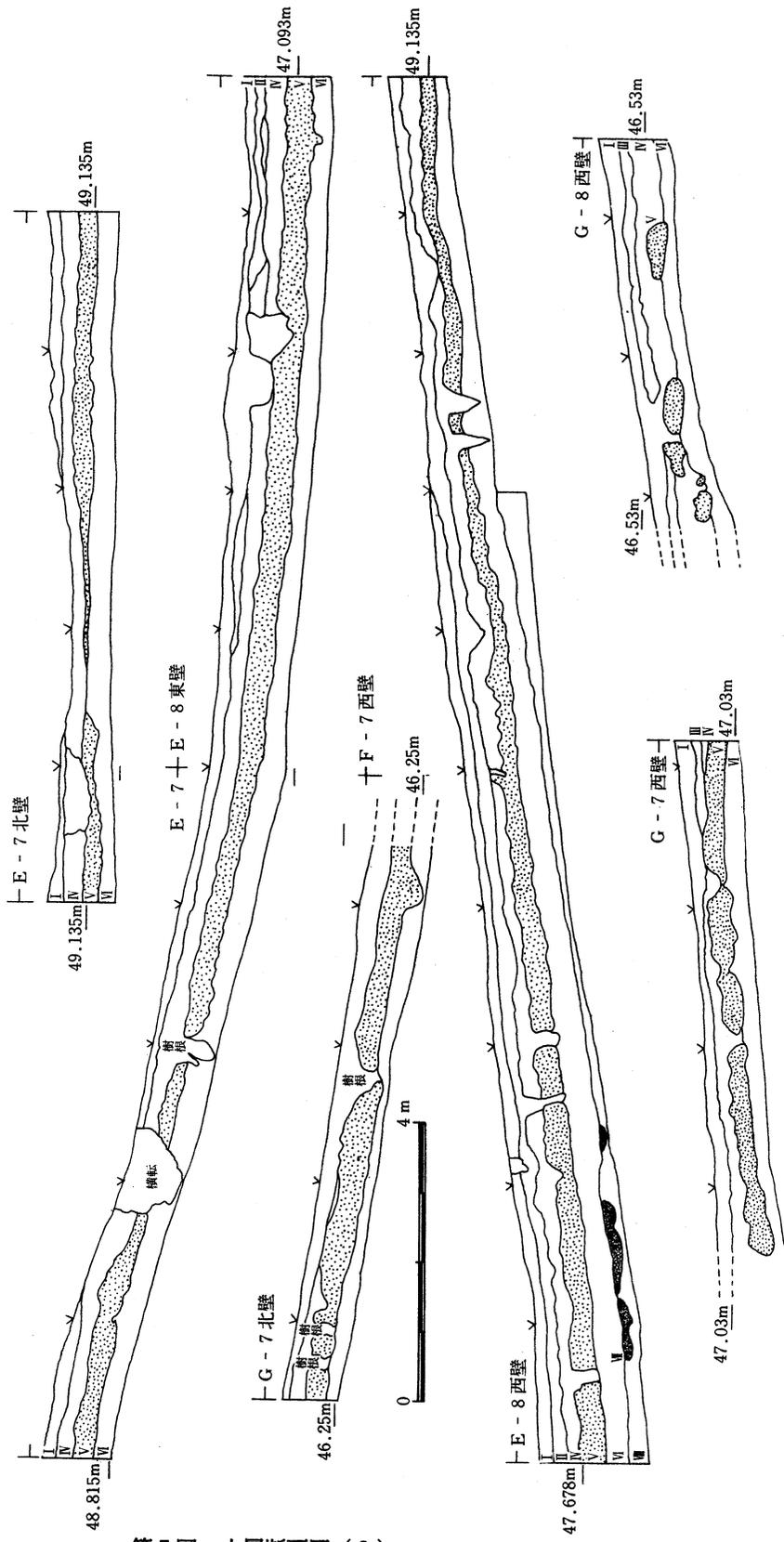
本遺跡の層位は、極く僅かな部分を除いておおかたが大きくゆがめられていた。特に遺跡の主体部と考えられたA地点一带と、全域が傾斜をなしていたB地点の北半部分に、その傾向が強かった。こうしたなか、F-1区の北壁東半に示標となりうる正常な堆積状況を見出すことができた。以下この層位を本遺跡の基本的層位となし、各層位ごとに説明を加えることにした。

- I層 表土層である。白色の砂粒を含み一般にザラザラした感じて粘質はない。ところによっては灰白色の砂粒のまとまりが見られた。一時期耕作されたと考えられる。
- II層 粘質のある黒褐色の腐植土層である。中位辺りが特に粘質が強く、いわゆるグロス状の黒色を呈し、30cm前後ある。この層からイモ穴と考えられる土拵が1か所検出された。一時この層の上位部分は耕作された可能性が高い。
- III層 濃茶黄色土層、上位及び下位は僅かに粒子が細かく粘質があるが、中位はやや粗めとなる。縄文時代晩期の土器及び弥生土器はこの層の最下位辺りから出土する。この層の残存は一部に限られていた。約30cmの堆積が見られた。

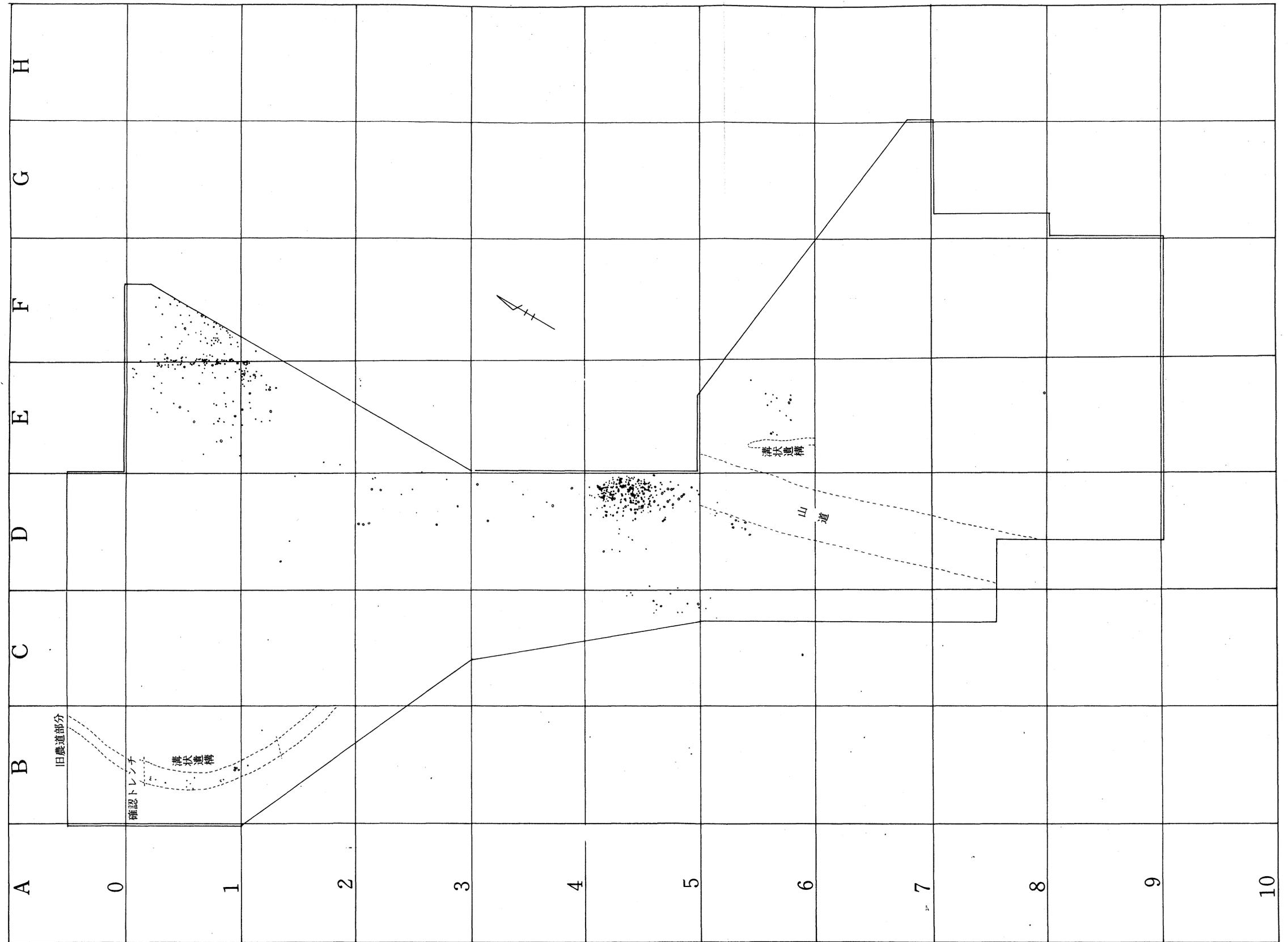


第5図 模式土層柱状図

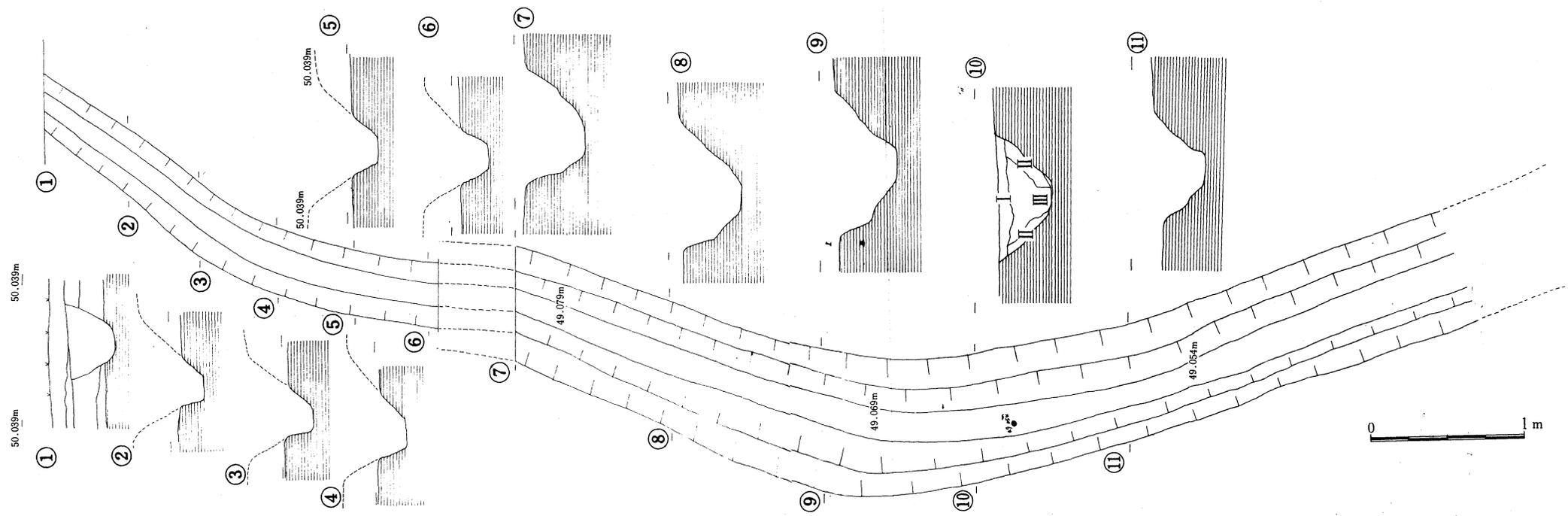
- IV層 黒色で粘質の強い腐植土層、僅かな色調や粘質の違いから三分できるようであるが一括した。40cm~60cmあり、無遺物層であった。
- V層 いわゆる「アカホヤ」と呼ばれる黄橙色の火山灰層である。30cm~40cmある。
- VI層 黒褐色粘質土層である。粘質が最も強い。全域共に正常な堆積状況が見られ、この層の中位に縄文時代早期の遺構遺物を検出した。約40cmある。
- VII層 淡い茶黄色土層である。一般的に桜島を起源とする火山噴出物層で、「薩摩」と呼ばれている。塊がブロック状に堆積する場合が多いが、ここではかすかに判別できる程度であった。約10cmある。
- VIII層 濃茶褐色土で粘質が強い。一般に旧石器時代の遺物を出土するが、本遺跡では無かった。30cm前後である。
- IX層 淡茶黄色土層である。一般にヌレシラスと呼ばれており、粒子が粗くザラザラしている。以下基盤をなすシラス層が続いていると考えられる。



第7図 土層断面図(2)



第8図 第三層の遺物出土状況図



第9图 沟状遺構実測図(1)

第5章 遺構

今回の調査で検出された遺構は、Ⅲ層において溝状遺構2ヶ所、Ⅵ層に到って住居跡遺構を3ヶ所、配石遺構2基、集石遺構28ヶ所を検出した。以下内容等については次のとおりである。

第1節 溝状遺構

溝状遺構は、A地点、B地点にそれぞれ1か所を検出した。A地点検出の溝状遺構(1)は遺跡のひろがりを知るためのトレンチ調査で発見した。周辺を拡張して調査したが、両延長部分がすでに消滅しており、その全体像を完全に捉えることはできていない。B地点検出の遺構(2)も底部部分と考えられる一部を僅かに確認したのみである。

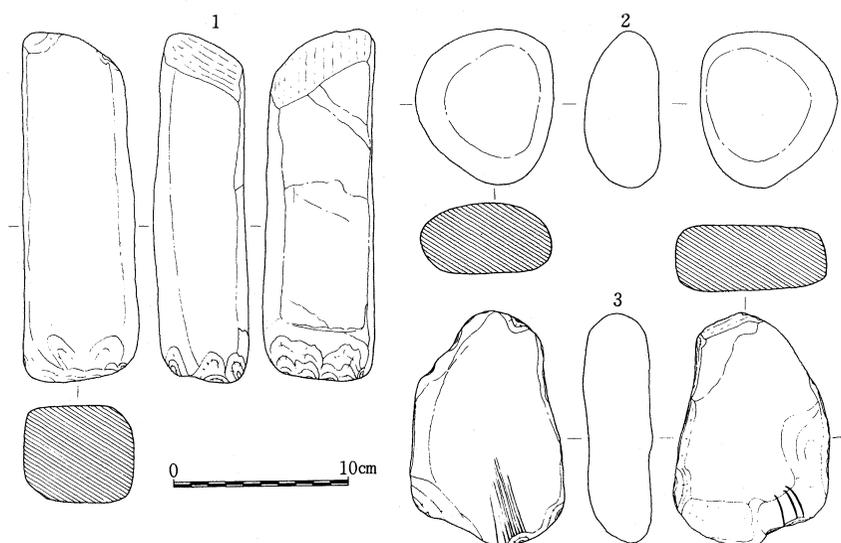
① A地点検出の溝状遺構(1) (第9図)

この遺構は、B-0区の東隅から、B-2区のほぼ中央部まで、湾曲状に長さ約20mを検出することができた。B-0区の北半部分は農道で消滅しており、同区南半部分は作業の不手際(巨木根の掘り起こし作業)から、表面の一部を剥取したため完全に検出ができなかった。B-1区及びB-2の北半部分については、Ⅲ層を剥いだ時点で上面を確認できたが、それより延長している部分もまた造成工事のためであろう、攪乱をうけ不完全になっていた。標高は底面を測った限り、北が高く南方向に緩傾斜していた。

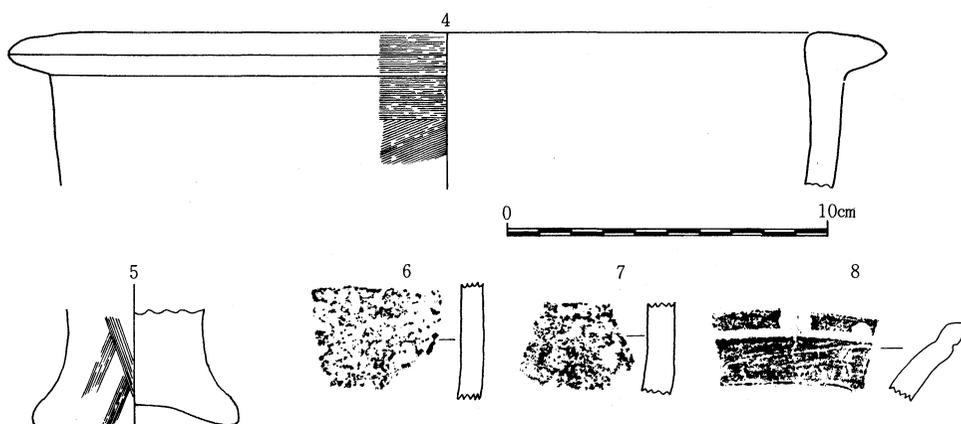
遺構の幅はカーブ部分がやや広めで約90cm、他の部分は80cm前後と安定し、断面形は半月形から底のつまったV字状、底面は砂粒が硬くかたまり、茶赤色に変色した部分も見られた。埋土の堆積は、上位部分に砂粒混りの黒褐色土がのり、両側部分には黒褐色土が、中央部分から底部にかけては粘質の強い黒色土(基本層位のⅡ層)がつまっていた。この埋土中からは、柱状の大形槌石、片面だけに磨痕を残す楕円形の磨石、粗割りされた扁平礫に川字状の刻線を有するもの、各1点。土器類は、研磨土器の口縁部、弥生土器の口縁部、底部破片の各1点と、胴部破片2点の計5点、その他石片数点が出土した。

第2表 溝状遺構(1)内出土の遺物観察表

| 石器類 | 番号 | 出土区番号 | 層位 | レベル | 類別 | 石質 | 最大長 | 最大径 | 最大厚 | 重さ | 挿図 |
|-----|-------|--------|---------------------|---------------------|------|-----|--------------------|-------------------|-------------------|--------------------|------|
| | 1 | B-1-3 | 遺構内 | 49.360 ^m | 柱状槌石 | 砂岩 | 20.0 ^{cm} | 6.6 ^{cm} | 4.9 ^{cm} | 1.260 ^g | 第10図 |
| | 2 | B-1-11 | " | 49.325 ^m | 磨石 | " | 8.8 ^{cm} | 7.8 ^{cm} | 4.0 ^{cm} | 460 ^g | " |
| | 3 | B-1-13 | " | 49.264 ^m | 礫 | " | 13.2 ^{cm} | 8.8 ^{cm} | 3.9 ^{cm} | 600 ^g | " |
| 土器類 | 番号 | 出土区番号 | 層位 | レベル | 部位 | 色調 | 特徴 | 焼成 | 挿図 | | |
| | 4 | B-1-1 | 遺構内 | 49.826 ^m | 口縁部 | 茶褐色 | | 良 | 第11図 | | |
| | 5 | B-1-15 | " | 49.271 ^m | 底部 | 茶橙色 | | " | " | | |
| | 6 | B-1-6 | " | 49.439 ^m | 胴部 | " | | " | " | | |
| | 7 | B-1-7 | " | 49.451 ^m | " | " | | " | " | | |
| 8 | B-1-8 | " | 49.166 ^m | 口縁部 | 灰茶色 | | " | " | | | |

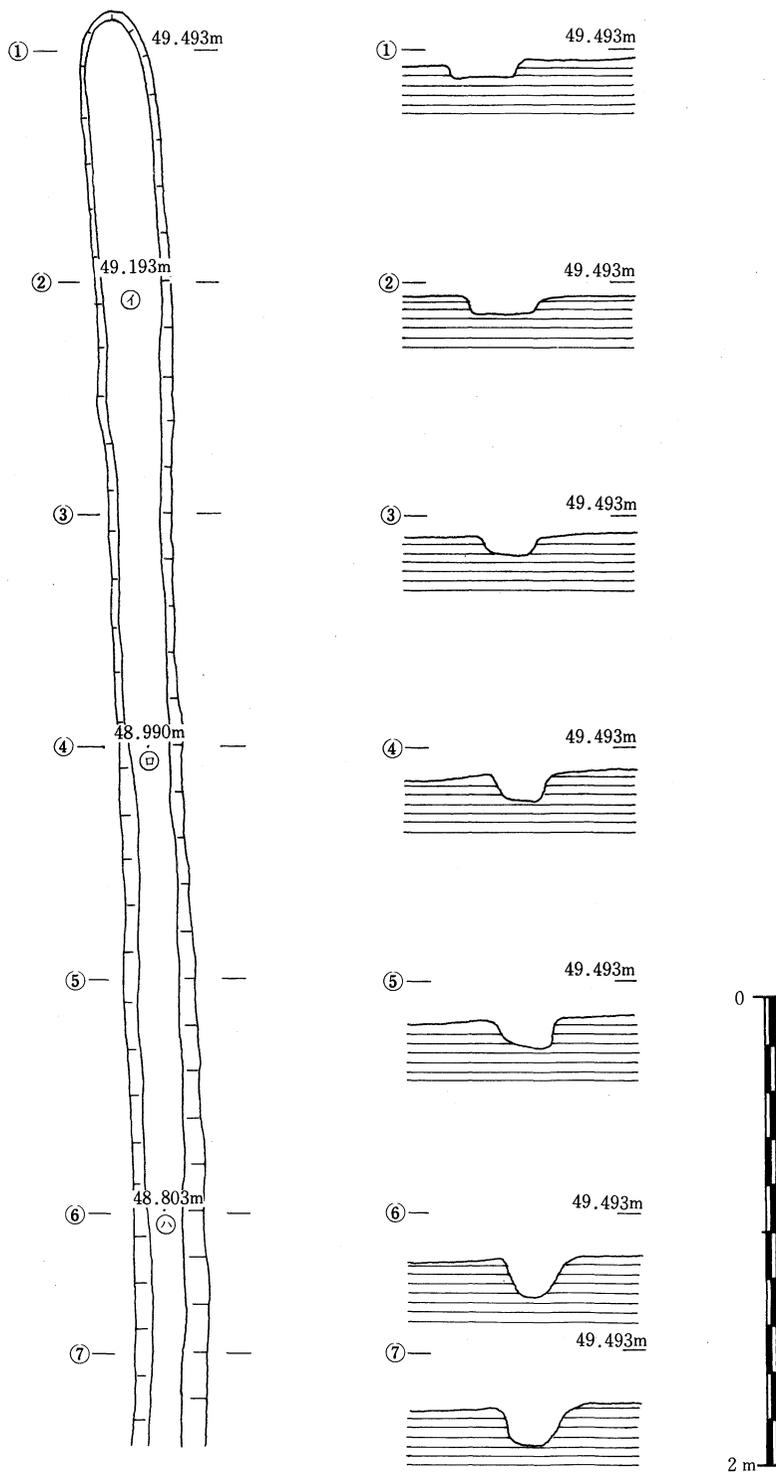


第10図 溝状遺構(1)出土石器



第11図 溝状遺構(1)出土土器

第10, 11図は遺構内出土の石器土器類である。1は柱状の大形槌石で、石質は砂岩である。一方部先端は一撃で割れた状態が見られ、一方部先端の縁辺に無数の打痕を残す。側面の一面に僅かな磨り痕も見られることから、敲打と時としては磨り作業にも使用したものであろう。2は、硬質砂岩の磨石である。片面のスベスベが特に強い。3は、やや軟らかい砂岩質の自然礫である。一面部の縁辺部分に、略川字状の刻線が、片面にもやや長めで浅い磨り痕が残っている。外観的にこの刻線は、意図的なものではなく、作業で付いた単なる刻線と考えられる。4は、整った突帯を有する口縁部破片、口唇部から頸部までが横位、以下斜位の浅い調整痕を残す。弥生時代前期の後半のものであろうか。5は、底面に僅かな中空をもつ上げ底の底部破片、10条前後の調整痕を、間隔をもって斜位に施している。6, 7は、胴部破片で特徴的なものはない。8は、器質器形等から黒川式土器と考えられる。



第12図 溝状遺構実測図(2)

② 溝状遺構（2）（第12図）

E-6区に検出した遺構である。この辺りは台地上に急勾配の山道を登りつめた付近で、更には南からの環状山道（山道は共に深さ約1m～2m、巾1.5m）が逆Y字状に合流するところである。したがって、両山道の開削と更には、V層下部までとどいた造成工事の削取によって、上面部分をはっきり捉えることができなかった。

検出できた遺構の規模は、ほぼ南北の方向で長さ6m20cm、幅は45cm前後と安定していた。掘り込みの断面形は、南側部分で半月状、北に向かって徐々に逆台形に変わり、最北端部分は自然に消滅していた。内部には砂混じりの黒褐色土が埋まり、石片が縁辺部辺りに数点あった外は遺物の出土はなかった。底面の標高は、①地点で49.193mを測り、⊕地点では約20cm下り、⊙地点はそれより19cm程下りと、平均した緩傾斜をなしていた。地形的に見ても北への延長は、深く入り込んだ谷方向、南への延長は環状山道方向に延びているものと考えられる。

第2節 住居跡遺構

本遺跡で検出された住居跡遺構は、掘り込みをもたない、いわゆる平地式（以下1号とする）1基と、竪穴式住居跡（以下2号、3号とする）2基の合せて3基が検出された。いずれも、Ⅵ層の下層部に到って上面を捉え、2号、3号の掘り込みはいわゆるヌレシラス層までとどいていた。3基共に柱穴跡と考えられる数多くのピットを有し、1号は内部中央部分に集石を伴い、2号は石片が散発的に、3号には集石2か所と石片の散乱、それに土器類も7点出土するなど一定しない内容を示していた。

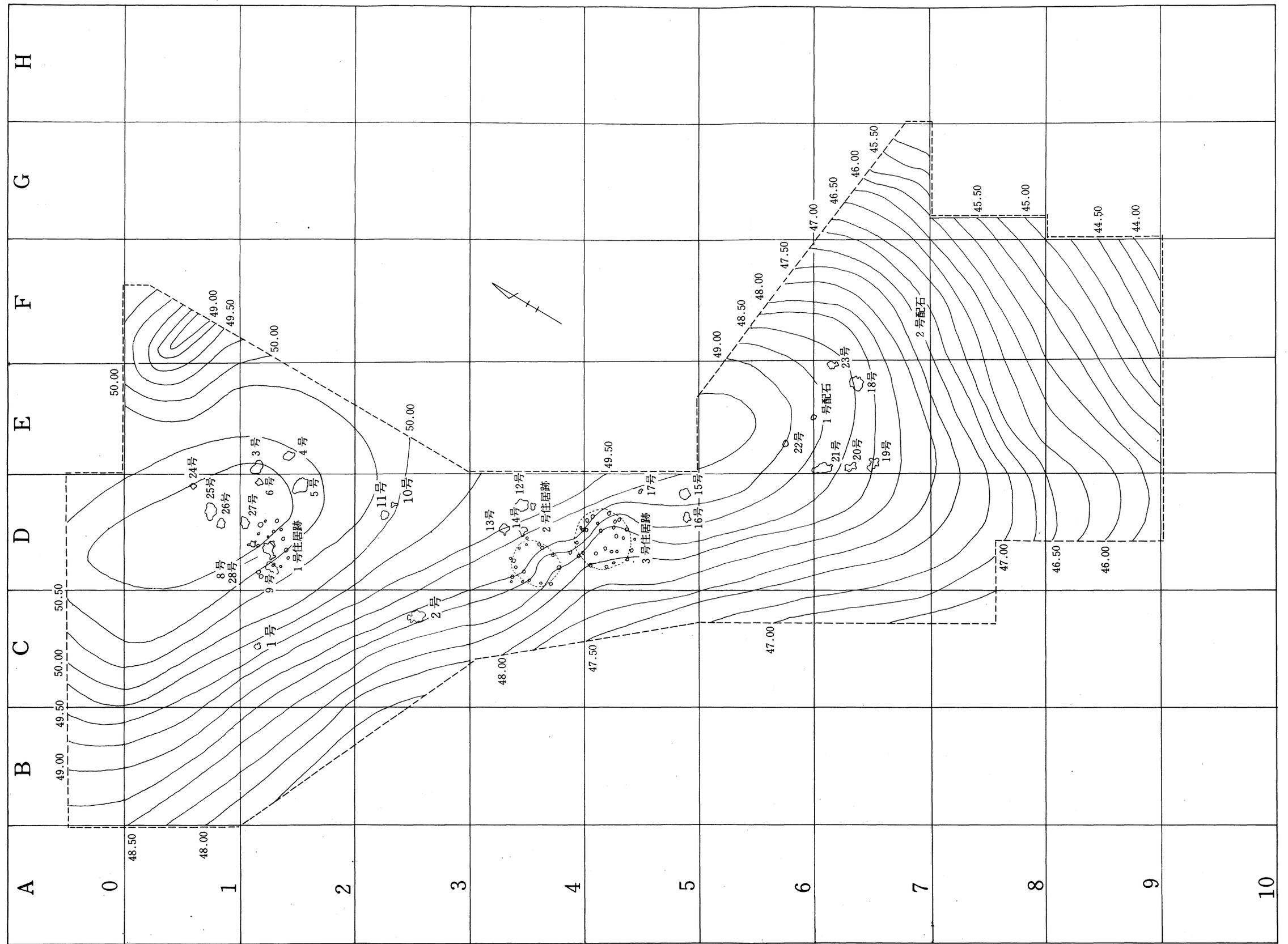
1号は、調査区域内で最も高位（Ⅶ層下位面）で比較的安定した地表面に、2号は、D-4区の傾斜面に、3号は、隣接したD-5区から同4区にかかる所に発見できた。

① 1号住居跡（第14図）

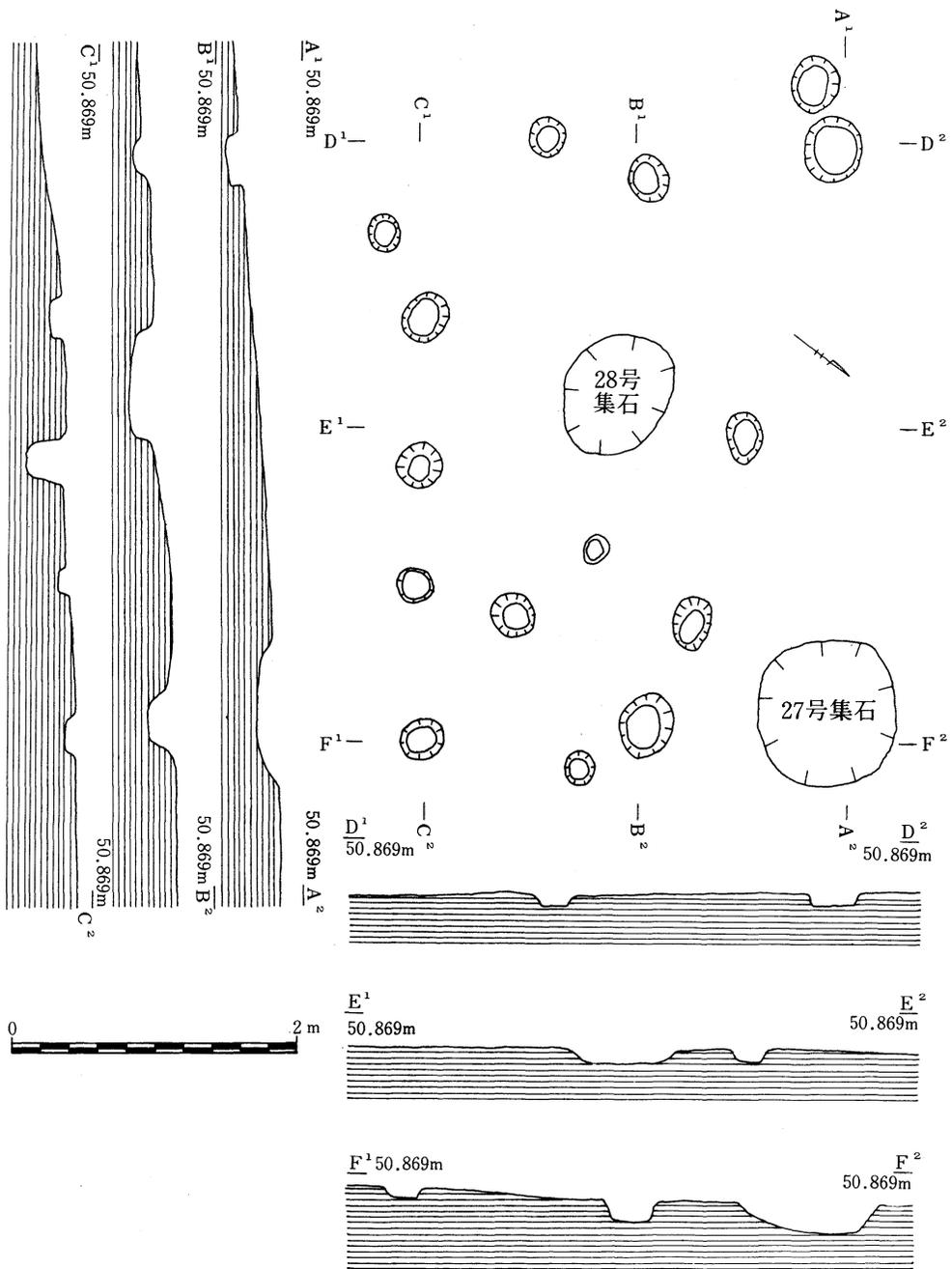
D-2区に検出された。柱穴の総数は15個。その配置状況からは確実に捉えられないが、楕円状プランで極く簡単に構築したものと考えられる。竪穴の掘り込みは全く無い。床面は東西方向に僅かな勾配が見られるものの、南方方向には全く傾斜は見られない。東西方向の主軸が約4m、短径は2.5m程度であろう。柱穴は径40cm大を最大に、20cm以下のもの数個があるなど、これも一定制がうかがえられない。また、掘り込みも最深が25cm程度のもの2個、おおかたは10cm～15cmと浅く、掘り込みの角度についても確実に捉えることはできなかった。

周辺には多くの集石遺構が検出された。（3号～9号、24～28号）。うち8号と28号が重なり合った形で住居跡中央に検出された。

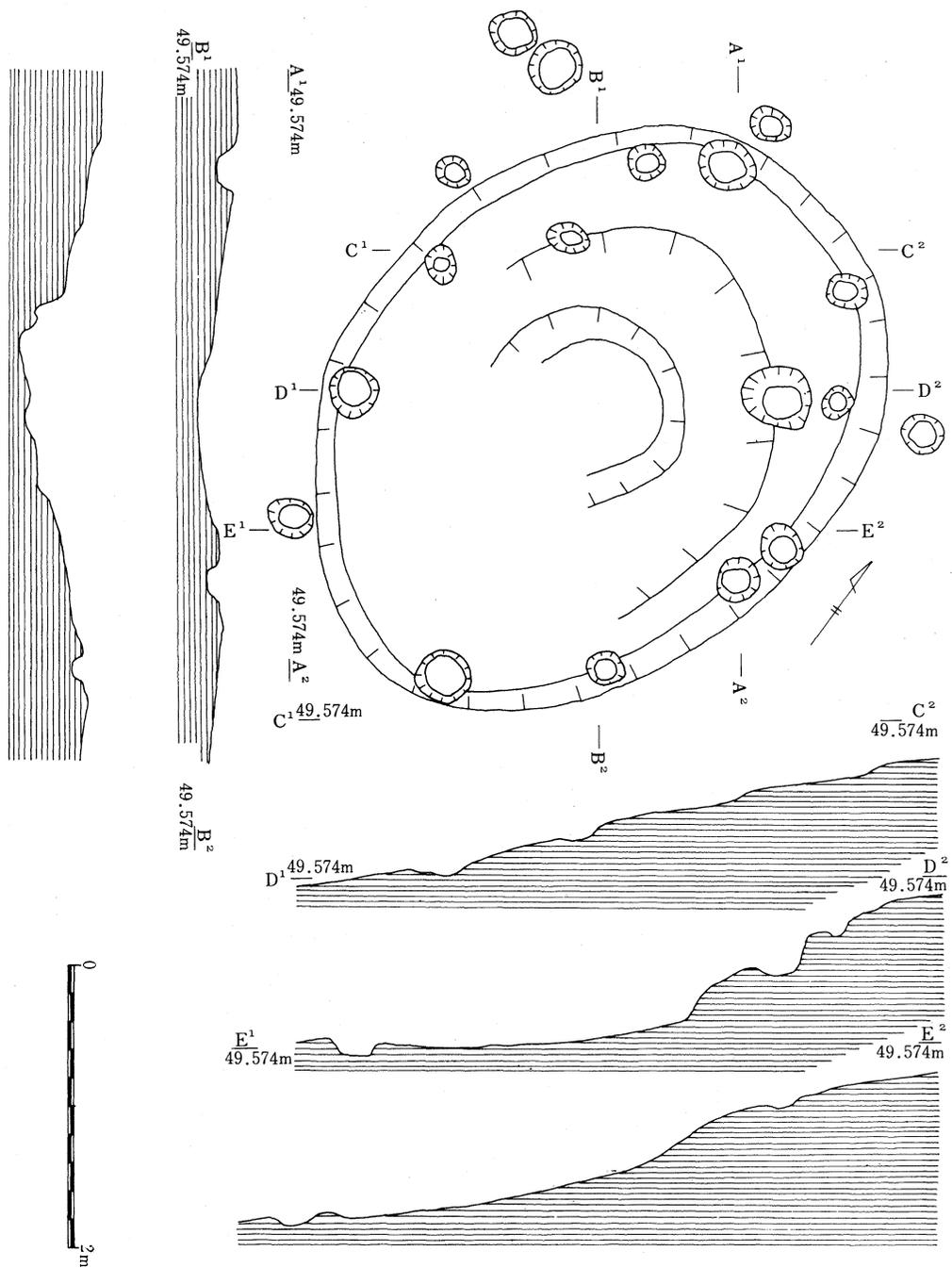
この2基は、元来は同一のものであったかもしれないが、8号は小片を含めて140個の集石28号はこれを取り上げた埋土の下に58個をもった集石である。8号はややまとまりに欠け範囲も広く、28号は大石は無いものこじんまりとまとまっていた。なお、28号は、8号を取り上げた時点で掘り込みを有する集石であることが判明した。直径90cm、円形プラン。湾曲状に約40cmと深く、底面には変色（灰色に淡いピンク色）した部分も認められた。



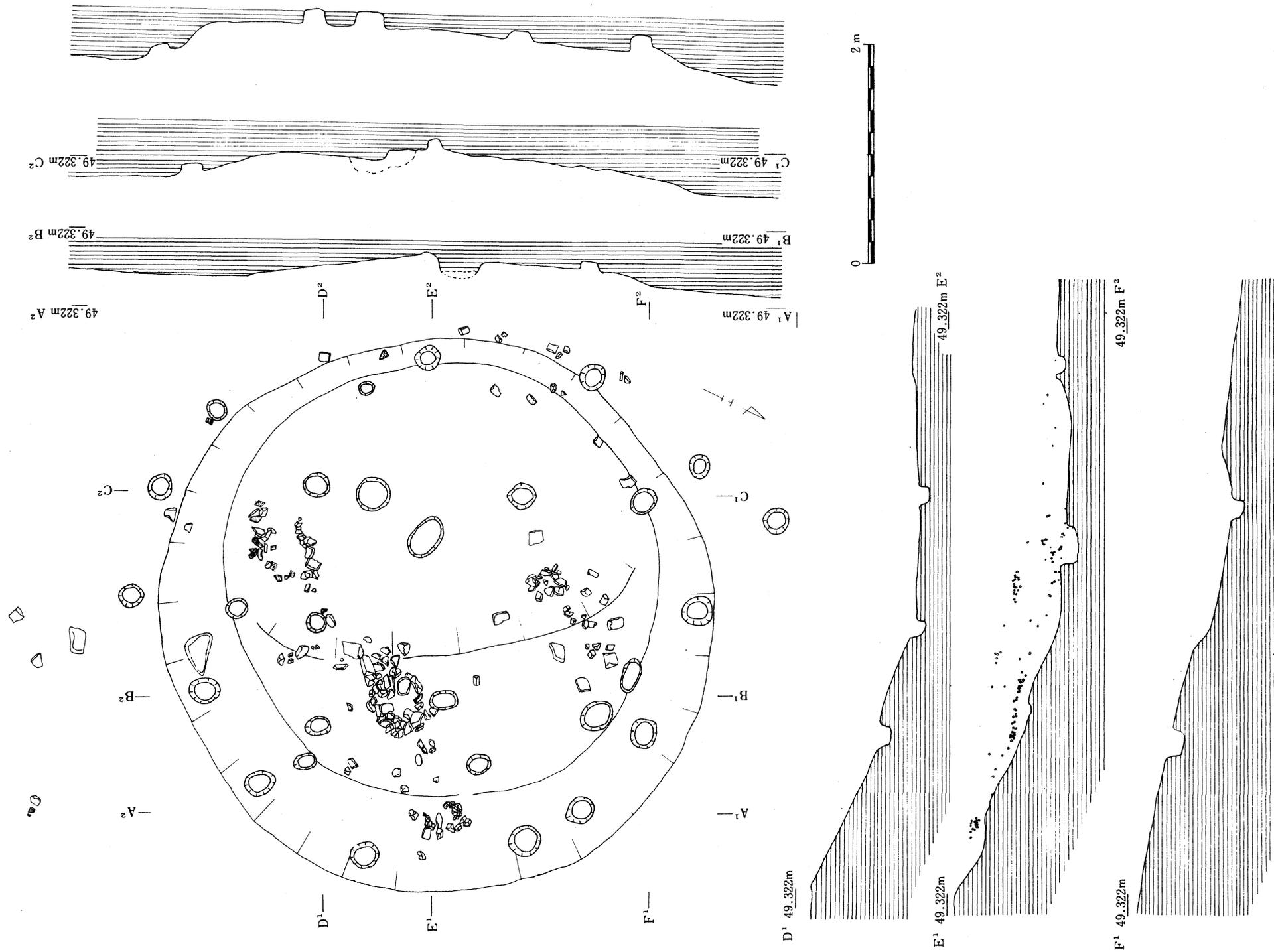
第13図 第Ⅵ層下位の地形及び遺構配置図（住居跡，集石，配石）



第14图 1号住居跡実测图



第15图 2号住居跡実測図



第16图 3号住居跡実测图 (●土器 ○石片等)

② 2号住居跡（第15図）

D-4区に検出した。主軸は略南北方向で4.5m、東西の最大径で3.5mの楕円状プランである。この検出した辺りは、東から深い谷がはいり込んだ谷縁から、10m程離れた所で、Ⅵ層を掘り終えた時点での地表面は第13図で見られるように、西南方向に傾斜面をもつ一帯である。

柱穴は総数18個あり、形状は円形、楕円形と一定制はなく、径が30cm程度から50cmと割と大型のものから、15cm程度も数個あるなど、これもまた不揃いであった。深さは一般的に浅めでももちろん掘り込み角度等についてもまったく不明のままとなった。このことは、上下の土質の類似から、遺構上面を捉えるのに手間がかかり、掘り下げ過ぎ、という不手際から生じたものであろう。したがって、遺構上面はやや上位に求めなければならない。特に遺構の立地が角度のある傾斜地ということから、下位部分（西側部分）の掘り込み過ぎ、という事実は否めない。

床面の状態は、偶然であろうか、巨木の樹根が根を張りのばし空洞部分もあるなど、不確実なものにしていた。この底面の土質は、本遺跡の基本層位のⅧ層であり、これもまた当然のことながら、上位に求めなければならない。遺構内には、焼けた状態が外観できる小石片が散発的に見ることが出来た以外、遺物等の出土はまったく無かった。

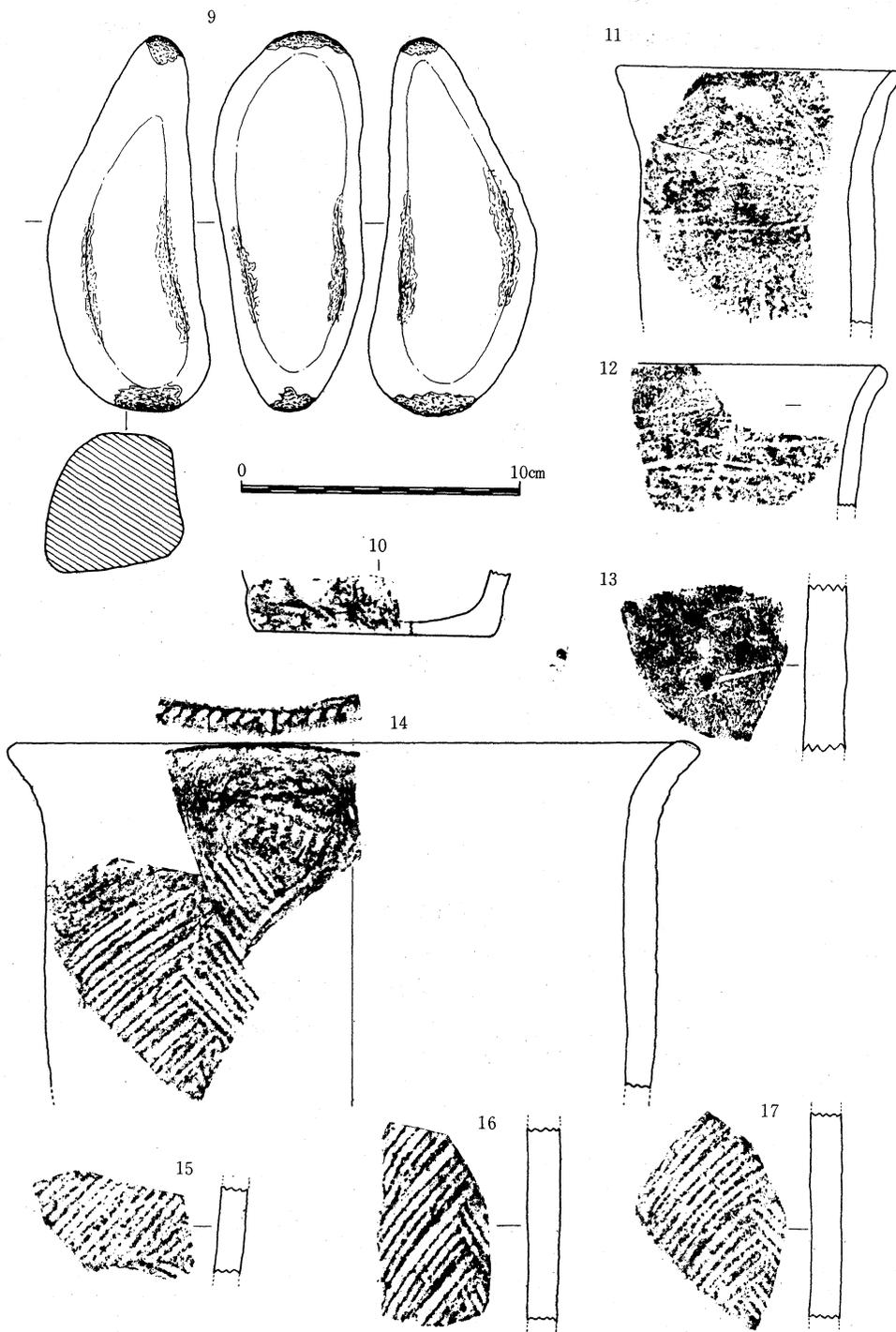
③ 3号住居跡（第16図）

D-5区から一部D-4区にかけ2号住居跡と約2mの間隔で、南隣して検出された。いずれの方向にも直径が5mある正円形プランの住居跡である。柱穴は大小合せて28個を数えることができる。ここも2号同様、上面を捉える作業にかなりの時間を要した遺構である。2号が終った段階であったので、ある程度の予測はしていたが、それにしても土質の識別が困難で、Ⅵ層を切り切った時点でやっと確実なものとした。いわゆるひと皮むきの繰り返しからの上面確認である。

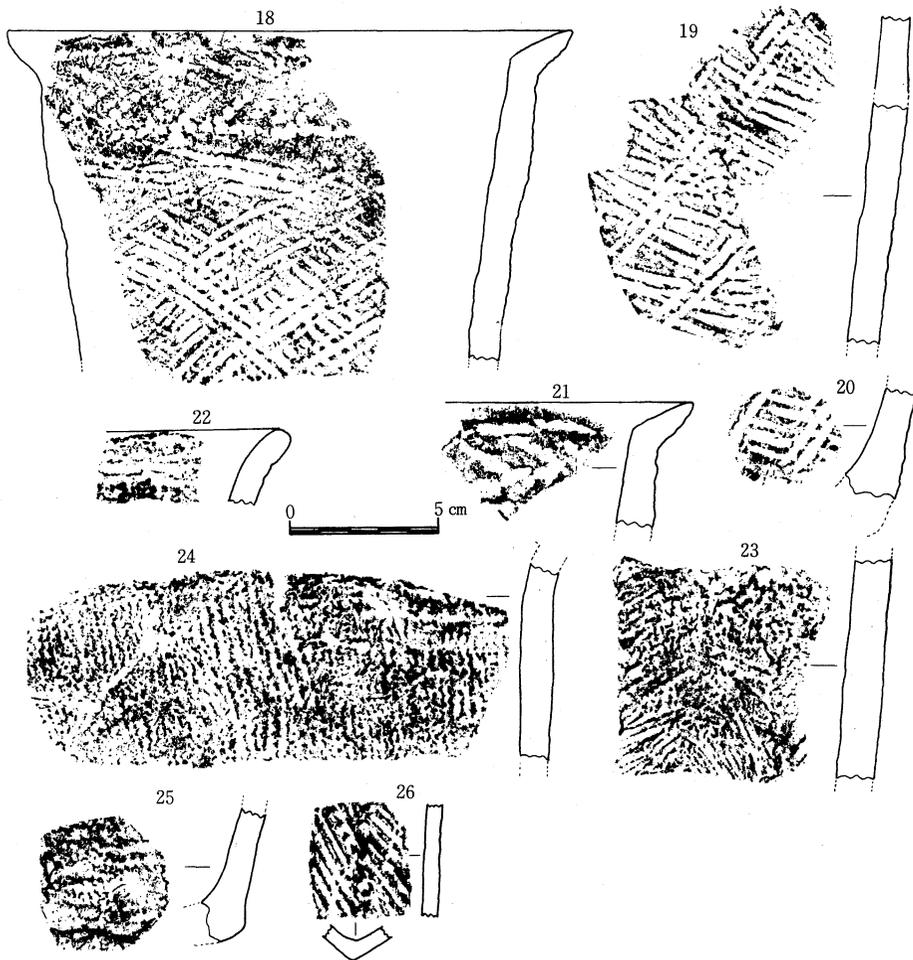
竪穴の側壁部分の掘り込みは、はっきり角度をもたず、緩やかな傾斜で掘り下げられている。この傾斜面をなす側壁ぞいにある柱穴は大小合せて11個、床面に11個、他は主として地表面の低い部分（西南部）にある。形状は円形を主とし楕円形状のものも幾つかあり一定していない。深さは20cm程度が主体を占めているが、掘り込み角度についてはここでも確認はできなかった。Ⅶ層までとどいていた床面は、ややしまり気味で、第16図のとおり内部には小じんまりとした集石を含めると4か所の集石遺構と、第17図に図示した遺物の出土が認められた。第16図の断面図E1-E2は内部から出土した石片、遺物の垂直出土状況である。石片群はやや浮いた状態であるが土器片は床面にそって出土している。

第3表 住居跡遺構観察表

| 番号 | 出土区 | 形状 | 形態 | 柱穴数 | 内部の出土状況 | 床面 | 周辺状況 |
|----|----------|-----------|-----------|-----|------------|-------|--------------|
| 1号 | D-2区 | 平地式楕円形プラン | 4.5m×2.5m | 15 | 掘り込み式の集石遺構 | 良 | 石片の散乱と集石遺構多し |
| 2号 | D-4区 | 竪穴式楕円形プラン | 4.5m×3.5m | 18 | 石片の散発状散乱 | やや不確実 | 石片の散乱と集石遺構3基 |
| 3号 | D-5-D-4区 | 竪穴式正円形プラン | 5m×5m | 28 | 集石4基、遺物多数 | 良 | 石片の散乱と集石遺構3基 |



第17图 3号住居迹内出土遗物



第18図 3号住居跡内出土遺物

3号住居跡内出土遺物（第17図 第18図）

遺構内に出土した遺物は、槌石1点、土器17点と図示できない小片15点である。9は遺構内出土唯一の石器である。最長13.5cm、最大径5.3cm、厚さ4.7cm、重さは450gの砂岩。扁平部分には使用痕は見られないが、両先端部分及び縁辺の角部にまんべんない小槌ち痕を残している。10は底部破片。整形は粗で、指頭痕と考えられる3か所の窪みが見られる。11の底部であろう。11は、口径10cmを測る小形の円筒形土器である。立ち上りは垂直状に延びており、僅かに外傾する口縁部となる。指頭状の圧痕が口縁部から頸部、胴部にもあり、文様としては、先端の尖っている細棒で、無造作に、ひっかき状を横位に施している。本遺跡の土器分類では第Ⅲ類土器である。12、器形施文等は11と全く同じであるが、口唇部の形状や器厚の点で全く別器体であ

る。同じく第Ⅲ類土器である。13は、この部分の円周だけで測ると、径が11cm前後ある小形円筒土器である。特に厚手の器体ではあるが、指頭押圧痕と横位のひっかき文様は前記2点と同類である。14は、整形施文等が整った口径25cmの円筒形土器である。口唇上面は丸味をもって形成され、それに斜位の浅い押圧が連続して回っている。口唇直下の器面には頸部まで先端が方形状をなす串状先端で横位の羽状文を施し、胴部は典型的な綾杉状文様でかざる。第Ⅰ^a類土器である。15~17は、14と同一の破片であるが接合できなかつた。18は、口唇直下と頸部間(約2cm)に横位の連続刺突文を施し、その間に同状施文具による横位の羽状文でかざっている。外傾する口縁部内面は丸味ではなく角度をもって折れ、平坦に整形されている。胴部は斜格子目文である。口径は19cmある。第Ⅰ^b類土器である。19~21は接合できなかつた同一器体のもの。22は、貝殻腹縁状の押圧を横位に施した口縁部破片。23は、器面の状態が整ってはいないが、極く細かな先端に尖りのあるハケ状器具で、綾杉状で器面調整したものである。特に厚手で、この部分で測った直径は11cmである。24は、横位の貝殻腹縁状の浅い押圧文と、同状文様を縦位に組み合せてある。頸部分から上位に欠き、この部分で10cmを測る。25は、24の底部の破片。26は、薄手の角筒土器。斜位の条痕文と反する方向からの押圧を施したものである。角部にも連続する押圧痕が施されている。器質は特に良好で硬い。

第4表 3号住居跡内出土遺物観察表

| 石器 | 番号 | 挿図 | 区番号 | 層位 | 類別 | 法 量 | | | 石 質 | レベル | 備 考 | |
|----|----|--------|--------|----|-----|--------------------|-------------------|---------------------|------------------|-----|---------------------|--|
| | | | | | | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | | | | |
| | 9 | 第17図 | D-5-66 | Ⅵ | 槌石 | 13.5 ^{cm} | 5.3 ^{cm} | 4.7 ^{cm} | 450 ^g | 砂岩 | 48.435 ^m | |
| 土器 | 番号 | 挿図 | 区番号 | 層位 | 部位 | 焼成 | 色調 | レベル | 形態・文様の特徴 | | | |
| | 10 | 第17図 | D-5-72 | Ⅵ | 底部 | 良 | 茶褐色 | 49.050 ^m | 指頭押圧痕を残す | | | |
| | 11 | " | D-5-63 | " | 胴部 | " | 茶黄色 | 48.350 | 外1点、引かき条痕 | | | |
| | 12 | " | D-5-61 | " | 口縁部 | " | " | 48.852 | 外1点、同上 | | | |
| | 13 | " | D-5-60 | " | 胴部 | " | " | 48.813 | 引かき条痕、厚手 | | | |
| | 14 | " | D-5-47 | " | 口縁部 | " | 茶褐色 | 48.173 | 外1点、石坂式 | | | |
| | 15 | " | D-5-45 | " | 胴部 | " | 茶橙色 | 48.325 | | | | |
| | 16 | " | D-5-49 | " | " | " | 茶褐色 | 48.218 | 綾杉文 | | | |
| | 17 | " | D-5-43 | " | " | " | 茶橙色 | 48.125 | 同上 | | | |
| | 18 | 第18図 | D-5-54 | " | 口縁部 | " | 茶褐色 | 48.275 | 石坂式 | | | |
| | 19 | " | D-5-51 | " | 胴銅部 | " | 茶橙色 | 48.284 | 外2点、石坂式 | | | |
| | 20 | " | D-5-54 | " | " | " | 茶褐色 | 48.275 | 石坂式 | | | |
| | 21 | " | D-5-58 | " | 口縁部 | " | " | 48.400 | 同上 | | | |
| | 22 | " | D-5-38 | " | " | " | " | 48.473 | 同上 | | | |
| | 23 | " | D-5-55 | " | 胴部 | " | " | 48.245 | 綾杉文 | | | |
| | 24 | " | D-5-56 | " | 口縁部 | " | 灰茶色 | 48.227 | 外4点、前平式 | | | |
| 25 | " | D-5-48 | " | 底部 | " | 茶橙色 | 48.130 | 前平式 | | | | |
| 26 | " | D-5-57 | " | " | " | 茶褐色 | 48.363 | 同上、角筒 | | | | |

第3節 配石遺構 (第19図)

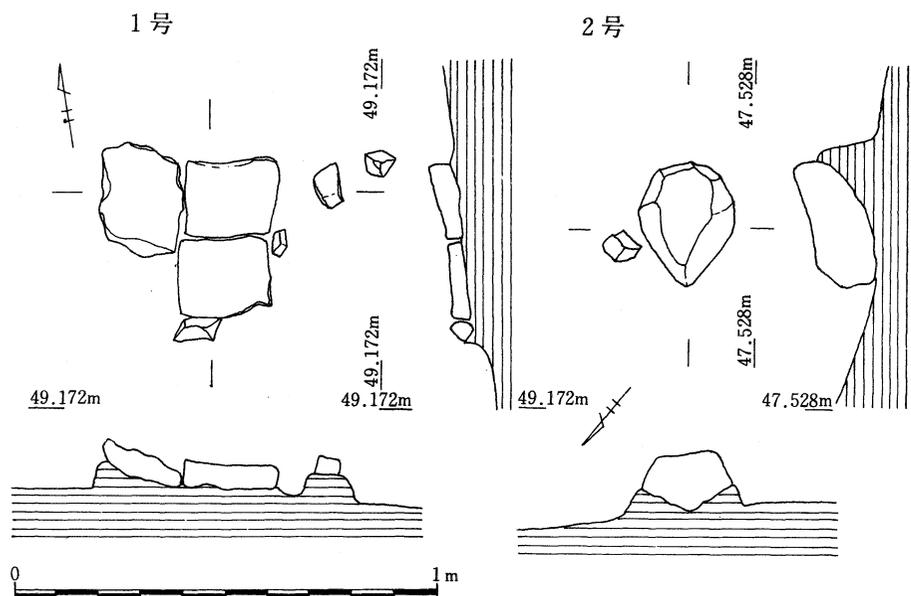
本遺跡での配石遺構の検出は僅かに2基だけにとどまった。この数字は住居跡の検出や集石の数、あるいは石片や礫の散乱状態からみると、極めて意外といわざるを得ない。以下内容は次のとおりである。

① 1号配石

E-6区とE-7区の境い目の第Ⅵ層に検出された。扁平面を有する大礫3個を中心に、小角礫4個をもって構成されていた。3石は共に長径20cm前後、短径15cm、厚さ5cm～8cm程度の方形状平石で、石質は砂岩である。周辺の石片は焼けた状態がうかがえられたが、この3石には全くなく、その配石状況からは意図的なものを強く感じとれた。なお、附近には18号～22号までの6基の集石遺構があって、ほぼその中心地点に位置していた。

② 2号配石

F-7区の西南隅部に、いわゆるぼつんとした状態で単独的に検出された。焼けた状態のない大礫と小角礫各1個をもって構成されている。一見、こうした状態では配石遺構とは言えないでもないが、この大礫の上面には明らかに研ぎ痕と判断できる窪みが、長軸方向に走っており、また、礫が僅かに先端方向と考えられる三角状の方に傾斜をもっていたため、あえて配石遺構としてとりあげた。すなわち、地中に両側部分が安定するため、角の部分を深く入れ込み、研ぎ痕のある上面部には、適度の傾斜をもたせており、その勾配から推定すると、研ぎ作業をかがんで安易にするため、意図的に配石された、と判断されたからである。この研ぎ石の実測は石器の項で図示することにした。



第19図 配石遺構実測図(1号・2号)

第4節 集石遺構 (第20図～第26図)

集石遺構の検出状況は、第V層(アカホヤ層)より上位には全く検出されず、第VI層に至ってからである。分布の状況は第13図でみられるように、縁辺部にはなく、わりと傾斜の少ない標高の高い附近に集中した傾向にあった。強いて分布を限定するとすれば、1号住居跡を中心とする一群と、2、3号住居跡附近にある一群と、1号配石遺構をとり巻く一群とに分けられるようである。

集石のタイプをおおまかに分類すると次のようである。

①. 1m以上に散乱状で、まとまりに欠けた集石。

2号, 3号, 5号, 8号, 9号, 16号, 18号, 19号, 20号, 23号。

②. 小石片が小じんまりまとまっている集石。

1号, 14号, 17号, 26号, 28号。

③. 小石片だけで構成されていた集石。

6号, 7号, 10号

④. 大石を中心によくまとまっている集石

4号, 11号, 12号, 13号, 15号, 22号, 24号, 27号

⑤. 特に多く広範囲に集められた集石。

21号, 25号

うち、遺構の底部に掘り込みを有するもの

12号, 13号, 15号, 21号, 25号, 27号, 28号

なお、文中集石使用の礫のことを具体的に石片と記したが、これは、すべての礫に焼けた状態と、且つ、割れていたからである。その比率は95%以上であろう。

各基の内容は次のとおりであった。

1号集石。

C-2区の北隅に検出された。径40cmの菱形状内に小片をもってよくまとまっていた。この周辺からは復元した楕円押型土器が出土した。

2号集石

C-3区の東寄り側に検出された。拳大の角礫数個が混じやや散乱状で、まとまりに欠けていた。周辺の遺物の出土は稀薄で石片の散乱も少なかった。

3号集石

E-2区の北面側の隅に検出された。径1mの範囲内に拳大の数個と、小片を混えて散乱状にあった。ここを東端に集石が12基存在している。やや高低差が見られた。

4号集石

3号に南隣していた。長径40cm, 短径30cm, 厚さ7cmの方形状平石を中心に、円形状によくまとまった一群と、とび出し状の10個の小片で構成されていた。焼けた状態は大石までとどいていた。炭が単発的に見られた。

5号集石

D-2区の東寄りに4号に西隣して検出された。径1m以上にまとまりに欠け散乱状であった。小石片だけで構成されている。

6号集石

D-2区の東寄りに3号に西隣して検出された。拳大の角石4個が中心で、他は小石片である。やや高低差が見られた。

7号集石

D-2区の住居跡に隣接して検出された。この集石も拳大の数個と小石片、それにやや離れた数個をもって成っていた。

8号集石

D-2区に検出した1号住居跡内部にあった。径1mの円形状と、やや離れた18点程をもって構成されている。その長径は1.6mと広範囲である。この集石を整理した後、住居跡の上面を整理したところ、この下部に50個以上で構成される別の集石(第28号とした)が検出された。両集石間にはそれ程の堆積は見られなかったため、あるいは同一の集石と考えられる。なお、28号の最底部には焼けたと考えられる変色部分が、3cm~5cm程度あった。

9号集石

1号住居跡内部の西寄りに検出された。拳大の10個程と小片が60個で成っていた。長径約1.5mの楕円形内に、ややまとまった2群に周辺は散乱状である。掘り下げた直下は住居跡の床面となる。

10号集石

D-3区の東寄り部分に検出された。わりと少ない個数をもって、小じんまりしていた。拳大のもの数個に他は小片の集まりである。

11号集石

10号に隣接して検出された。掘り込みはなかったが、大形の平石を略円形状に配置し、小片がその中にはまった状態にあり、やや空白部分もあった。炭も散発的に見られた。

12号集石

本遺跡の集石のうち最も規模が大きく整った集石である。長径は約1.8m、短径が1.3mの楕円状内に集まり、径1mの正円形の掘り込みは約25cm、略三日月状である。石片の数は504点と突出していた。上位の石を取り除いたところ、大形の扁平石が底部に敷きつめてあって、焼けた状態はここまでとどいていた。2号住居跡の東約4mに検出された。

13号集石

2号住居跡の東約2m、12号の北西約2m地点に検出された。大扁平石2個を中心に、僅かな掘り込みをもっていた。炭が単発的に見られた。

14号集石

2号住居跡に接したかたちで検出された。拳大の角石片が主体で小片は少ない。数個がやや離れてはいるが、まとまった状態である。

15号集石

D-5区の南隅に検出された。数個の扁平石を中心に径1mの範囲内によくまとまっている。掘り込みは約15cmと浅く、小片が多く混在していた。土器類が最も多く出土した一帯にある。

16号集石

15号に1mの間隔で西に隣接して検出された。径1mの円内に散乱状にあった。特徴的なものは全くなかった。

17号集石

3号住居跡に約2mの間隔で南隣して検出された。数は12点だけであったが、まとまっていた。土器類が多く出土した一帯である。

18号集石

E-7区の東寄りに検出された。やや大きめの石片がまとまっており、周辺にも散乱状にあり長径約1.5mの楕円形内にあった。平坦に置かれており石片が最も多く散乱する一帯にあった。

19号集石

E-7区の西側寄りに検出された。拳大以上の10数点を中心に長径1.5mの長楕円形内に、やや散乱状に置かれていた。やや高低差が見受けられる。

20号集石

E-7区の西側寄りの19号と約1mの間隔で北隣して検出された。やや散乱状で特徴的なものはなかった。周辺の石片の散乱は特に多かった。

21号集石

E-7区の北西の隅に検出された。長径約2mの長楕円形内にやや太めの石片を多く含み、底面は約15cmの掘り込みとなっていた。石片の数も特に多かったが確認をおこたった。

22号集石

E-6区の南側寄りに検出された。大扁平石2個を中心によくまとまっていた。

23号集石

E-7区の東側隅に検出された。拳大の数個と他は小片で、散乱状に置かれ特徴的なものはなかった。

24号集石

D-1区の東寄りに検出された。扁平な大石3個を中心にまとまった状態であった。周辺には石片の散乱が多かった。

25号集石

D-1区の24号に約2mの間隔で検出された。長径約1.5mの楕円形内に多くの大石を含んでおり、底面は掘り込んであった。石片の数は372個、炭が散発的に見られた。

26号集石

D-1区の25号に南隣して検出された。拳大状石片を中心に円形状によくまとまっていた。

27号集石

1号住居跡に隣接して検出された。径約1mの円形内によくまとまっていた。底部は約30cm掘り込まれ、12個の扁平面を有する平石を敷きつめ、数は200個を越えていた。炭が散発的に

見られ、焼けた状態が大石までとどいていた。典型的に集石遺構の形態が見られるもので、炉跡、として取り上げるべき集石であった。

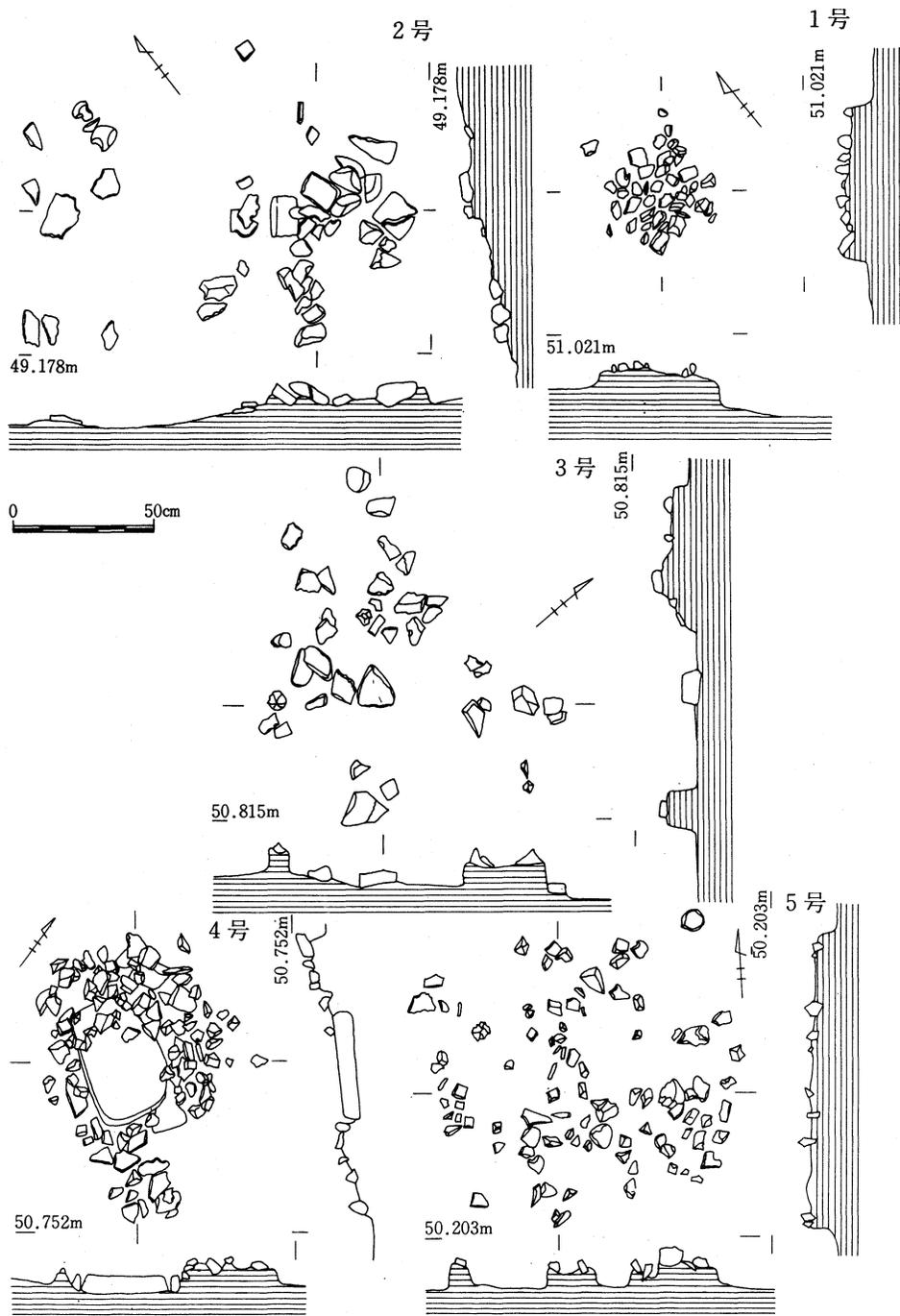
28号集石

1号住居跡内の8号集石を取り上げた時点で検出された。掘り込みの底部は焼けていた。同一の可能性が高い。上下合せると200個で構成されていたことになる。炭が散発的に見られた。

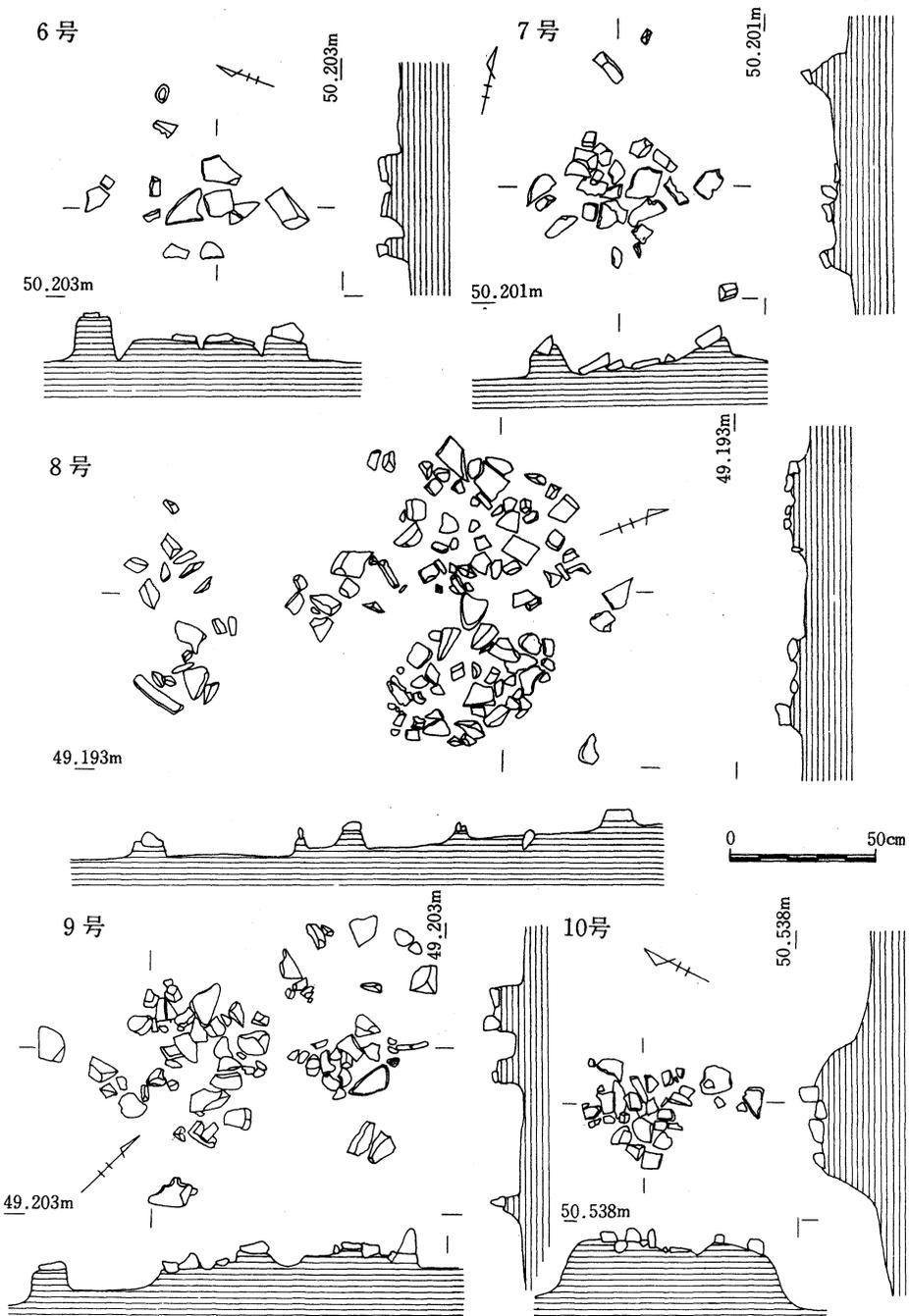
集石群(第26図)。石片の散乱が特に多いなか、図(D-1区)はその1例である。

第5表 集石遺構観察表

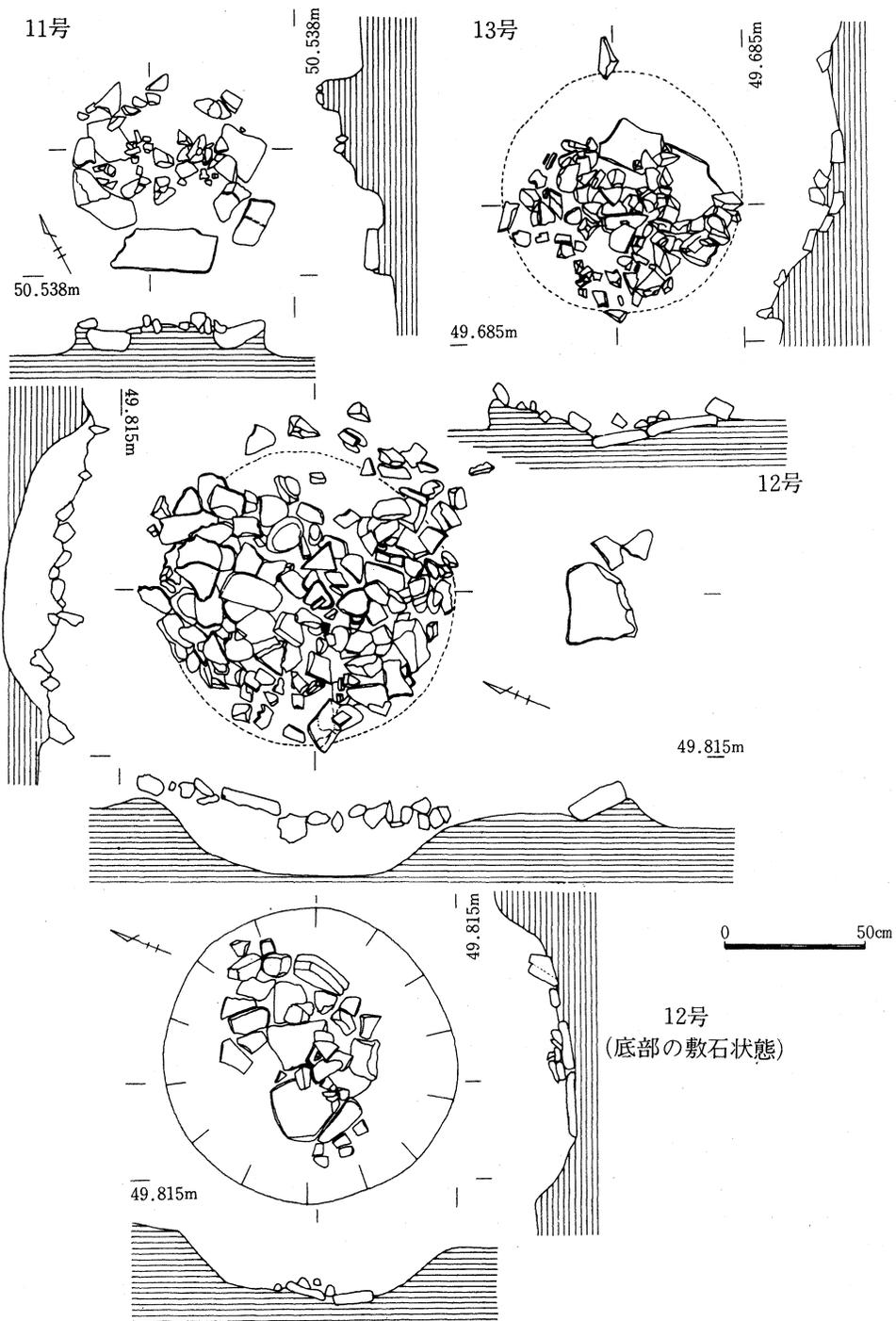
| 番号 | 図版 | 出土区 | 層位 | タイプ | 長径 | 短形 | 個数 | 底部 | 水系高 | 特 徴 |
|----|------|-----|----|-----|------|------|-----|------|----------|---------------|
| 1 | 第20図 | C-2 | V | B | 55cm | 50cm | | 平坦 | 51.021 m | |
| 2 | " | C-3 | " | A | 140" | 105" | | " | 49.178" | |
| 3 | " | E-2 | " | A | 120" | 110" | 40 | " | 50.815" | |
| 4 | " | E-2 | " | D | 100" | 90" | 158 | " | 50.752" | 単発的に炭が出土した。 |
| 5 | " | D-2 | " | A | 120" | 110" | 117 | " | 50.203" | |
| 6 | 第21図 | D-2 | " | C | 80" | 60" | 12 | " | 50.203" | |
| 7 | " | D-2 | " | C | 80" | 65" | 29 | " | 50.203" | |
| 8 | " | D-2 | " | A | 175" | 115" | 140 | " | 49.193" | 1号住居跡にあった。 |
| 9 | " | D-2 | " | A | 140" | 100" | 74 | " | 49.203" | 1号住居跡に床面と接する。 |
| 10 | " | D-3 | " | C | 55" | 38" | 34 | " | 50.538" | |
| 11 | 第22図 | D-3 | " | D | 75" | 70" | 55 | " | 50.538" | 炭が散発的にあった。 |
| 12 | " | D-4 | " | D | 180" | 130" | 54 | 掘り込み | 49.815" | |
| 13 | " | D-4 | " | D | 105" | 88" | | " | 49.685" | 炭が散発的にあった。 |
| 14 | 第23図 | D-4 | " | B | 75" | 75" | 32 | 平坦 | 48.565" | |
| 15 | " | D-5 | " | D | 98" | 95" | 119 | 掘り込み | 49.318" | |
| 16 | " | D-5 | " | A | 85" | 55" | 26 | 平坦 | 49.318" | |
| 17 | " | D-5 | " | B | 50" | 35" | 12 | " | 49.461" | |
| 18 | " | D-7 | " | A | 155" | 125" | 149 | " | 48.715" | |
| 19 | " | E-7 | " | A | 130" | 115" | 39 | " | 48.585" | |
| 20 | 第25図 | E-7 | " | A | 110" | 105" | 40 | " | 48.345" | |
| 21 | 第24図 | E-6 | " | E | 190" | 115" | | 掘り込み | 48.902" | |
| 22 | " | E-6 | " | D | 58" | 55" | 67 | 平坦 | 49.049" | |
| 23 | " | E-7 | " | A | 115" | 95" | 73 | " | 48.749" | |
| 24 | " | D-1 | " | D | 60" | 50" | 20 | " | 50.538" | |
| 25 | " | D-1 | " | E | 140" | 90" | 372 | 掘り込み | 50.383" | 炭が散発的にあった。 |
| 26 | 第25図 | D-1 | " | B | 70" | 60" | 64 | 平坦 | 50.838" | |
| 27 | " | D-1 | " | D | 110" | 105" | 217 | 掘り込み | 49.322" | 炭が散発的にあった。 |
| 28 | " | D-1 | " | B | 50" | 45" | 58 | " | 50.688" | |



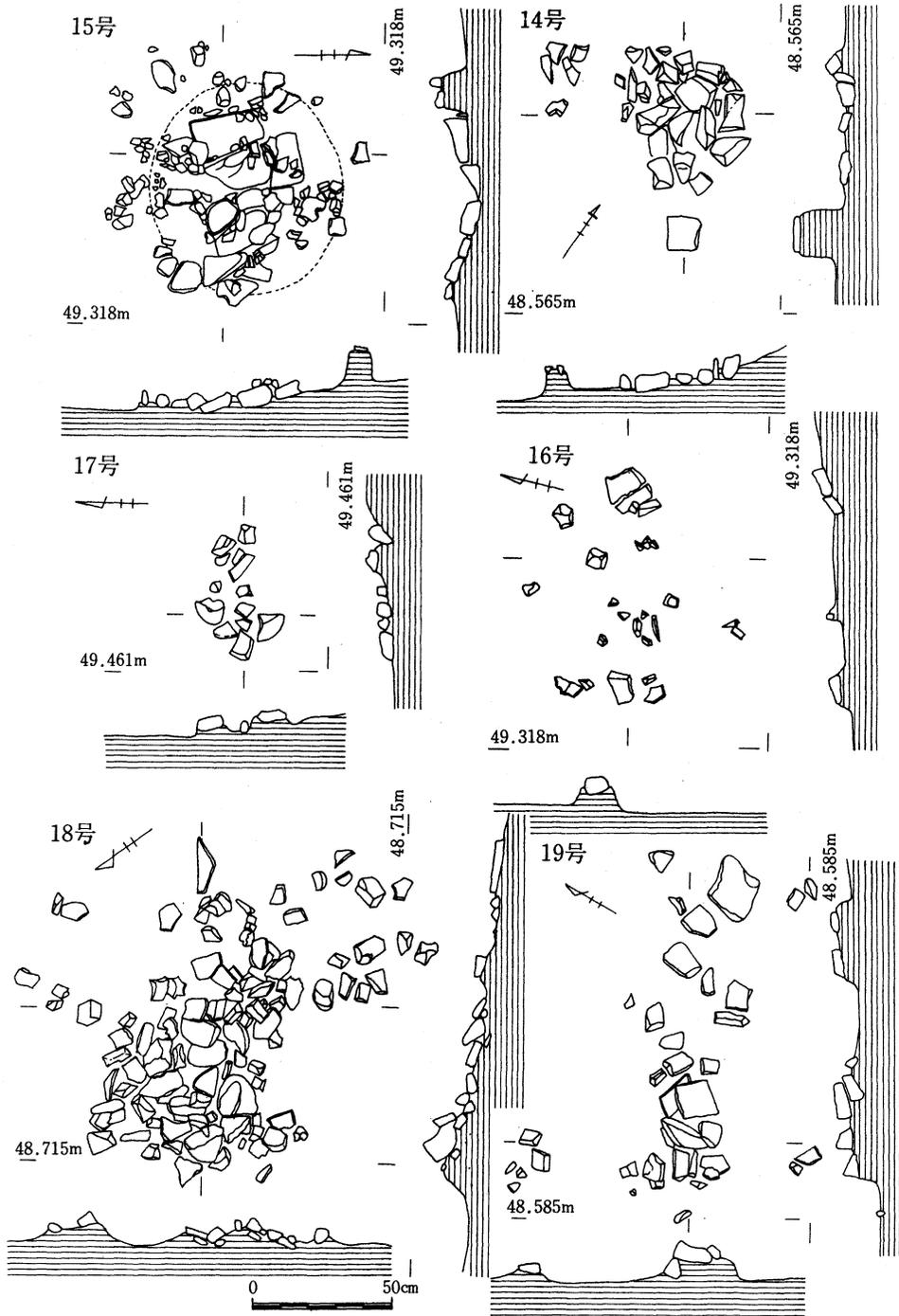
第20図 集石遺構実測図(1号~5号)



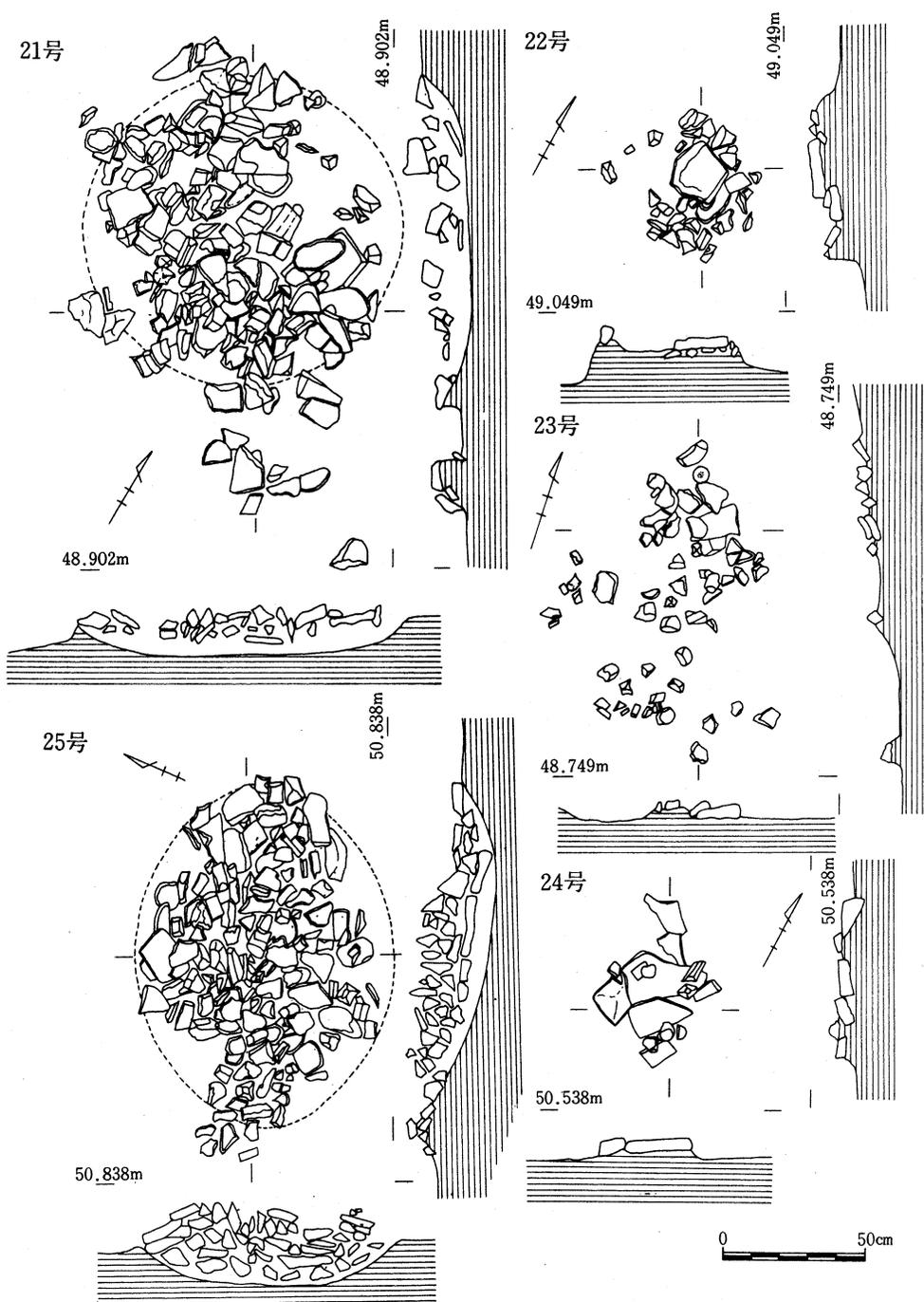
第21図 集石遺構実測図(6号~10号)



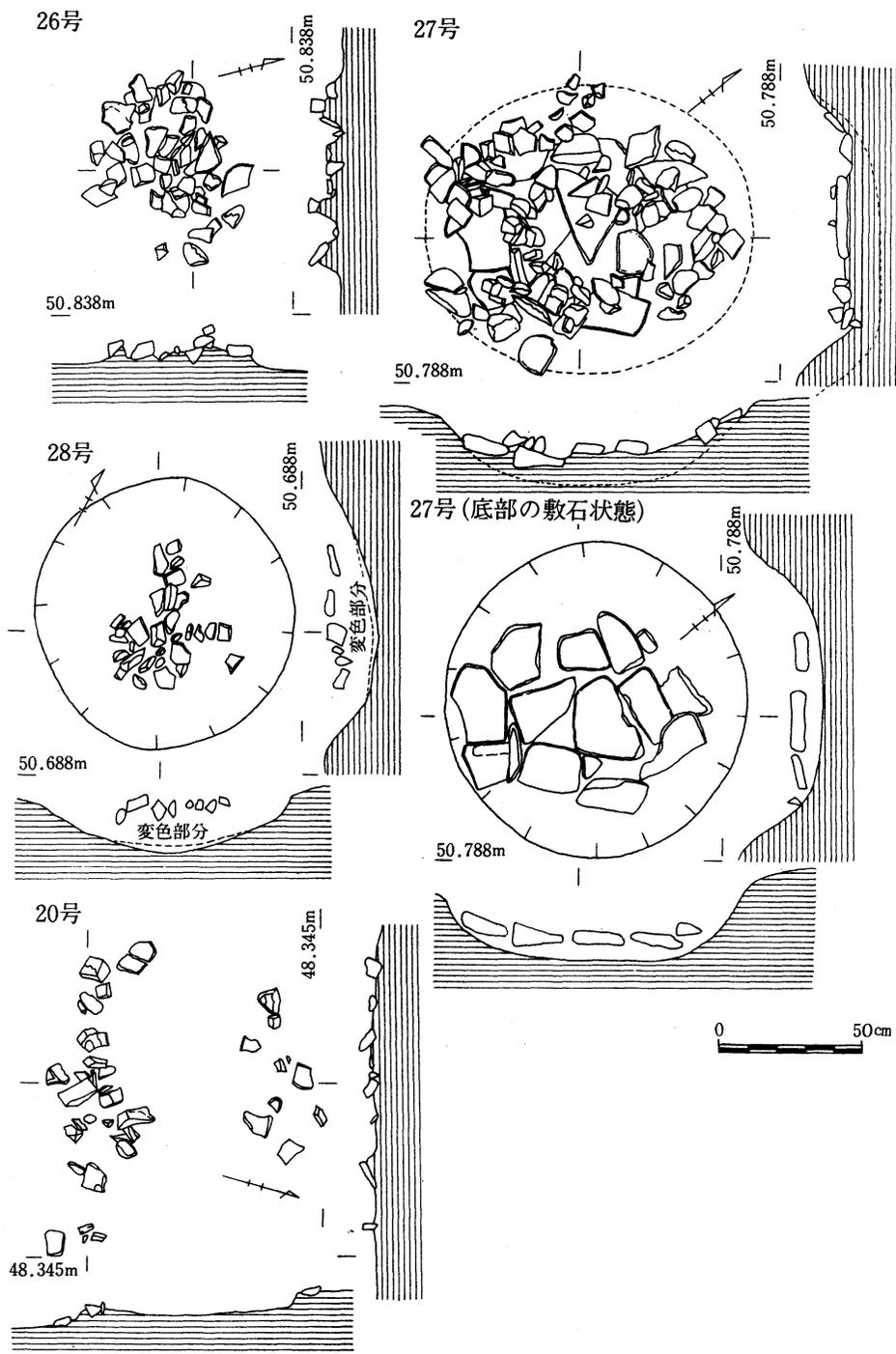
第22図 集石遺構実測図(11号~13号)



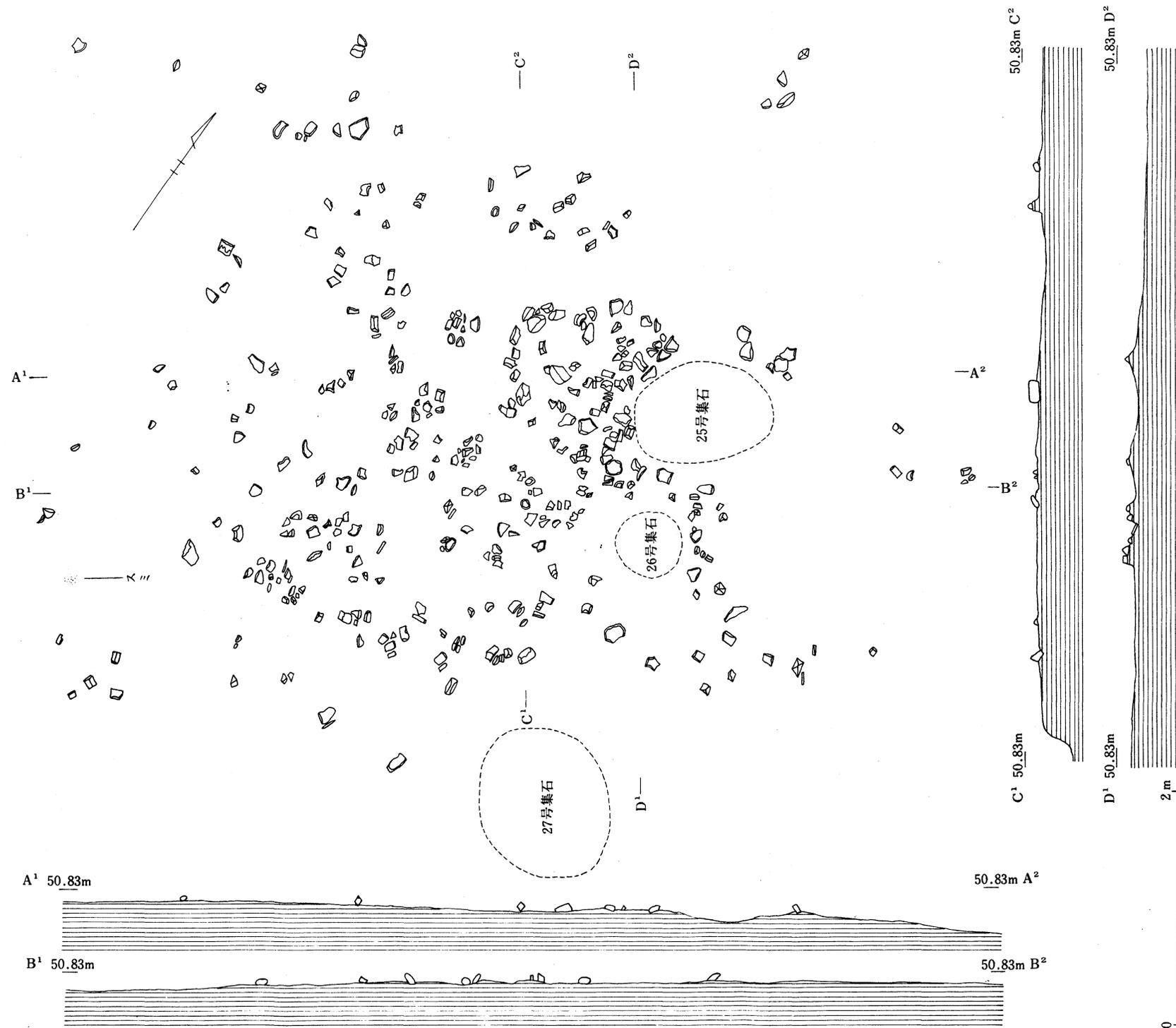
第23图 集石遺構実測図(14号~19号)



第24図 集石遺構実測図(21号~25号)



第25図 集石遺構実測図(20号、26号~28号)



第26図 集石を中心にした礫の散乱状態 (D-1区)

第6章 第Ⅲ層の出土遺物

前回行われた確認調査では、縄文時代早期だけの単独した文化層が認められており、上層部分、すなわちアカホヤ層より上位にはまったく出土遺物はなかった。しかし今回の調査では、事前に行った樹木の伐採やヤブ払い、グリット設定など準備段階において、土手や路傍などに弥生土器の小片や磨石、台石等を10数点採集したのである。そこで、上層部分にも別の文化層が存在する、いわゆる複合遺跡の可能性が十分に予測されたので、当然のことながら、表層を剥ぐ時点からこのことを念頭において、入念に掘り下げ作業を行うことにした。

結果的には、開墾や造成工事によって地表面が大きくゆがめられており、F-1、2区の一帯と、D-5、6区を中心にした区域に残存する層位があって、出土遺物は表採資料及び遺構内出土を含め総数は559点であった。量としては一般的に多く感じられる。しかしながら、出土状況が芳く残存していた。という状況下では、土器類については完形、あるいは復元可能なものは量が限られていた。ただ、縄文時代晩期に相当する土器類と多彩な石器類が検出され、更には、プラント・オパール分析定量結果を得るなど、予期以上の新たな事実と成果を得ることができた。

第1節 土器類

第Ⅲ層に出土した土器類は、その器形的特徴から次のように分類される。

- 第Ⅰ類 僅かに内傾する口縁部で、口縁部直下の器面から頸部にかけて、刻目を有する三角状突帯で方形の区画をもうけ、沈線3条を斜位と山形状、略同心円状に施したものの。
- 第Ⅱ^a類 口縁部に刻目突帯を2条並行したものの。
- 第Ⅱ^b類 口縁とやや間隔をおいて、各1条の刻目突帯を回したものの。
- 第Ⅱ^c類 口唇部に縦位の浅い刻みと、頸部には刻目突帯を回したものの。
- 第Ⅲ類 口縁部だけに刻目突帯を回らしたものの。
- 第Ⅳ^a類 口縁部とその下方に三角突帯を回らしたものの。
- 第Ⅳ^b類 口縁部だけに三角突帯を回らしたものの。
- 第Ⅴ^a類 口縁部に刻目突帯を有するものと、無いものがあり、器面に刺突連点を横縦位に施したものの。
- 第Ⅴ^b類 口縁部に突帯を回らし、その上面や頸部に連点を施したものの。
- 第Ⅵ類 僅かに内傾するもので、突帯は無く把手を有すと思われるもの。
- 第Ⅶ類 口縁部が外反し器面に突帯などのない無文の深鉢形土器。
- 第Ⅷ類 頸部がしまり口縁部が大きく外反する壺形土器。
- 第Ⅸ類 黒色の研磨土器。
- 第Ⅹ類 胴部が張り頸部がしまり気味と推定される小形壺形土器。

この外に、刻目のない2、3条の突帯が胴部を回っているものなども含まれてはいるが、これらは類別に分類しなかった。

第27図-27 (第Ⅰ類土器)

D-6区に出土した。同じ口縁部破片が3点出土し、うち2点が接合した。口径は18cmを測る。胴部に僅かなふくらみをもって口縁部は内傾気味。器面には方形状に区画されたと考えられる。低めの刻み目突帯がある。刻みは一般的には粗雑で、不規則といてよい区画内には三条を基本とした平行沈線が斜位と山形状に、二条をもって画かれた同心円状が見られる。やや薄手に属するが器質はしっかりしている。

第27図-28~31 (第Ⅱ^a類土器)

出土位置は、28がD-5区 29がE-1区、30がD-6区、31がF-2区と、それぞれが離れて出土している。28はやや狭いが口径は25cm内外を測る甕形土器の口縁部破片である。口縁部及びそれに並行する形の刻み目突帯が回っている。刻み目は一般的に浅く細かいもので、特に30、31の刻みは僅かに痕跡を残すのみのものである。また、共に不規則な配置といてよい。

第27図-32 (第Ⅱ^b類土器)

胴部が僅かに張り出し気味で口縁部は内傾している。E-2区に出土した。口径は18cm程度を測る。口縁部とやや間隔をもった胴部に刻み目突帯が、形よく回っている。刻み目施文はしっかりした菱形状となって、その配列も整った状態を外観できる。器面の調整も良く、器質もしっかりしている。

第28図-33 (第Ⅱ^c類土器)

D-5区に唯1点だけ出土した。立ち上がりのカーブは極めて良く、器質もしっかりしている。口縁部の上部は整った平坦面となり、僅かに張り気味の口唇には浅めのひっかき状の沈線を、やや間隔をもたせ一定の規則をもって施している。その直下の刻み目突帯も形状は良く、規則性が感じられる。いわゆる端麗な仕上がりといてよい。

第28図-34~38 (第Ⅲ類土器)

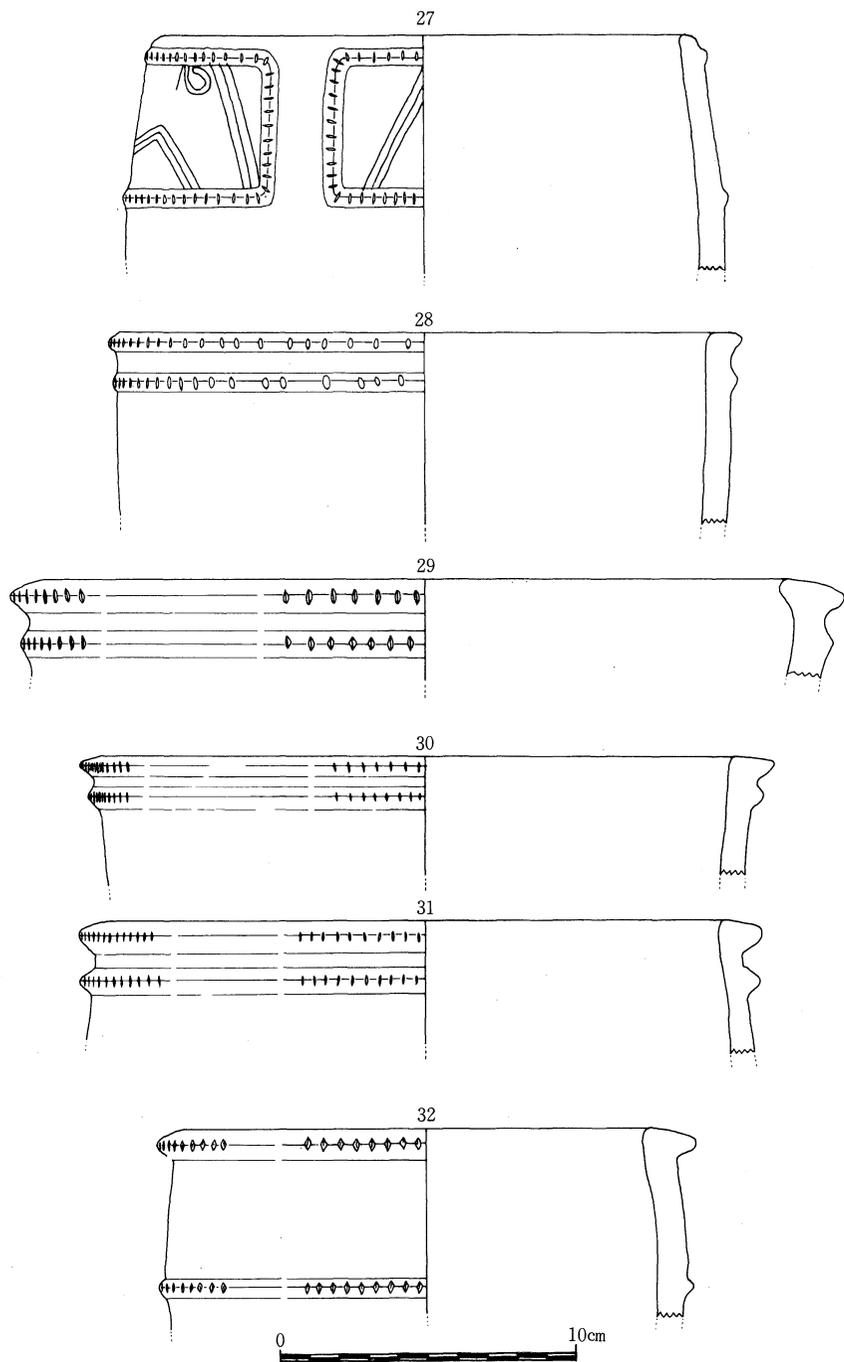
いずれも口縁部だけに刻み目に突帯を有するものである。突帯の状態は共に良く、刻みも浅く整った配列状況を呈している。器面の調整は、突帯の直下部分が横位に、それより下方は縦位、斜位、あるいは横斜位の組み合せ状である。口径は共に27cm内外におさまるようである。出土位置は、35がE-2区にやや離れてはいたが、他はD-5区とその周辺であった。

第29図-39、40

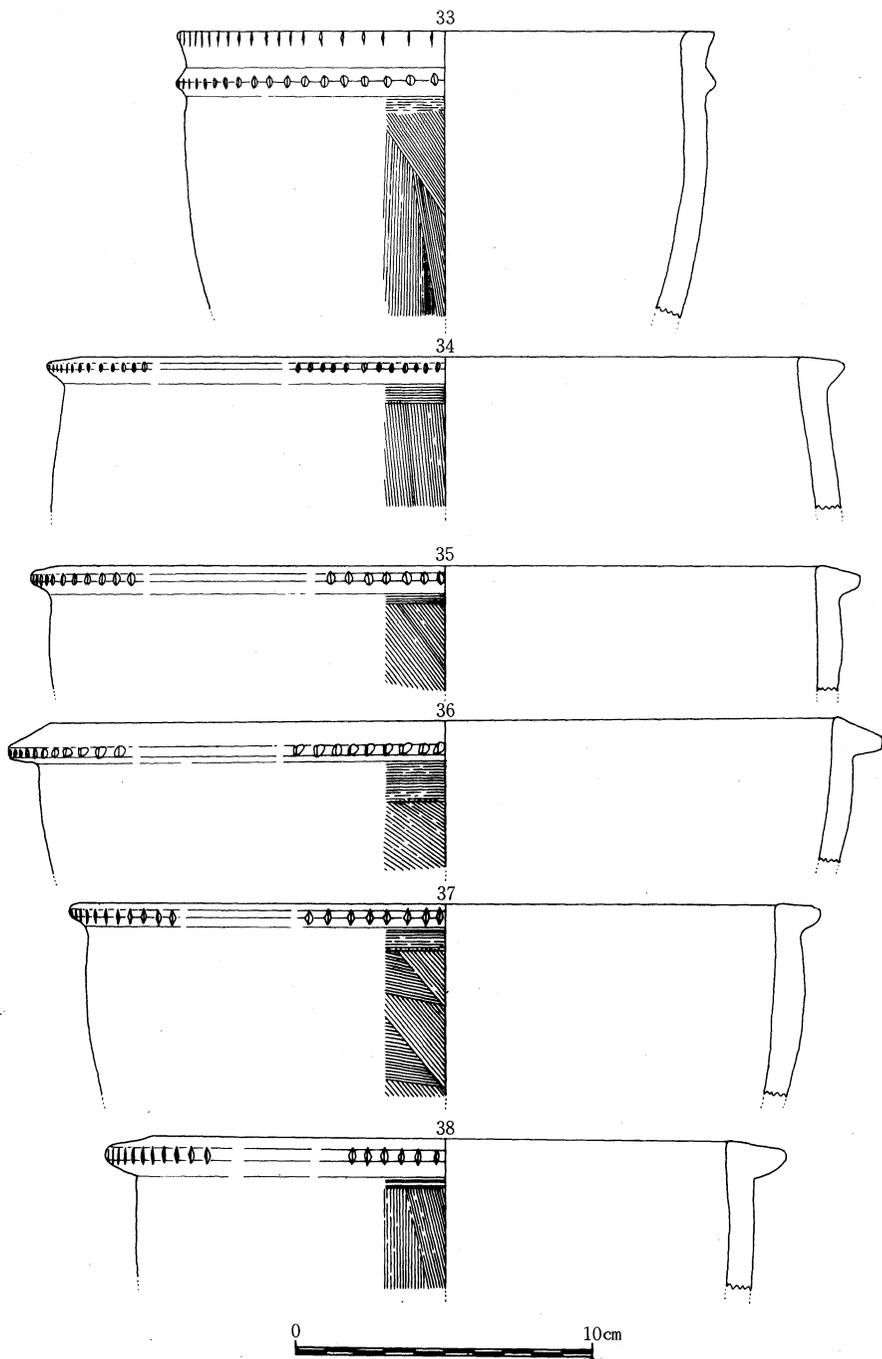
39はE-1区、40はD-5区と、やや離れて出土している。いずれもやや高めの突帯を有し刻み目も太目でやや深い。器質はしっかりしている。接合する破片がなかったので、一切不明である。

第29図- (41~46)

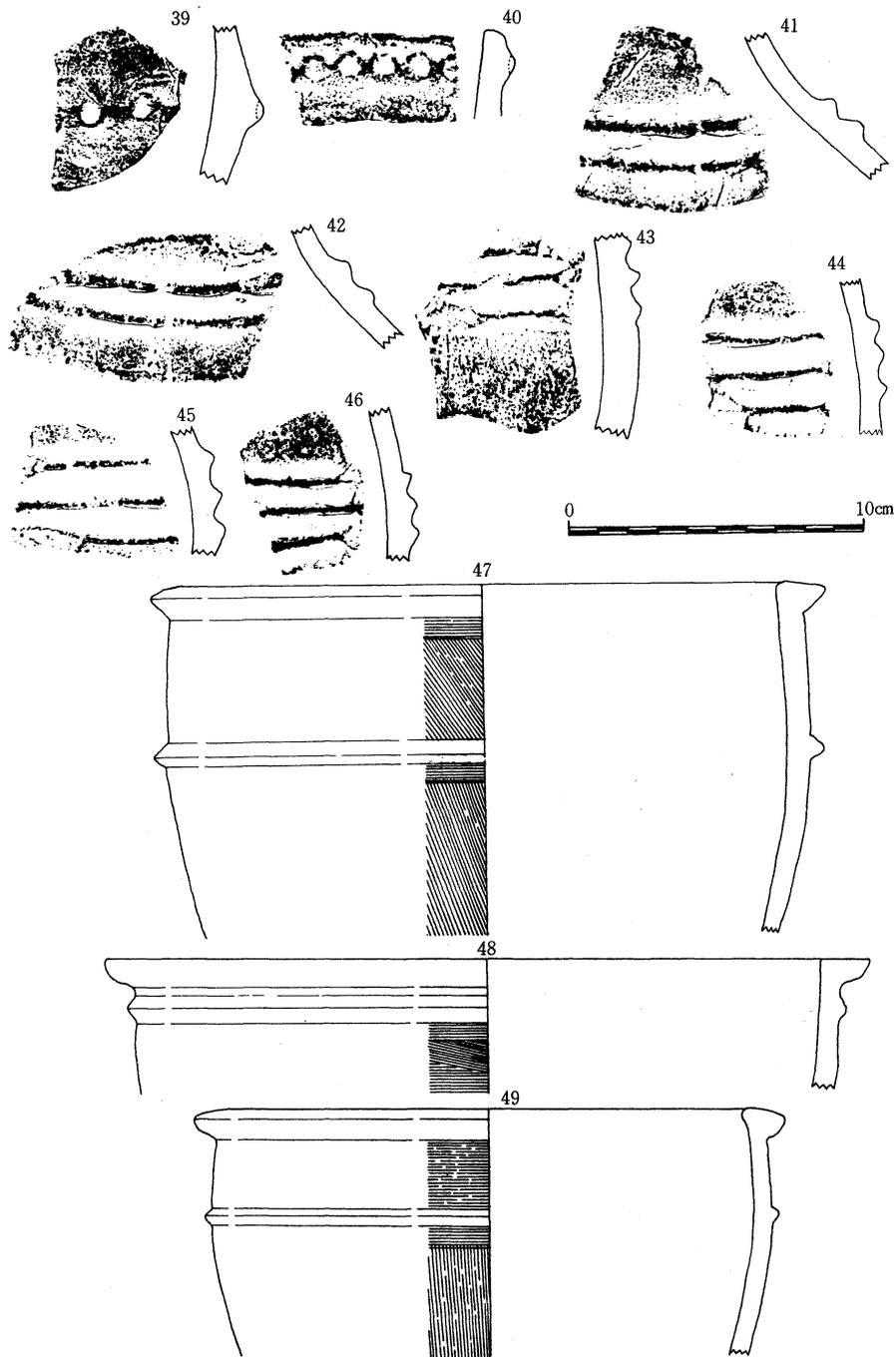
41、42は壺形土器の肩部破片で、他は甕形のものである。出土位置はF-1区とD-5区に別れている。突帯は共に良く整った三角状で、突帯間は指頭をもって押し引きして突帯の固定をはかったものであろう。器質は共に良い。接合する破片がなかったので全体像については不明である。



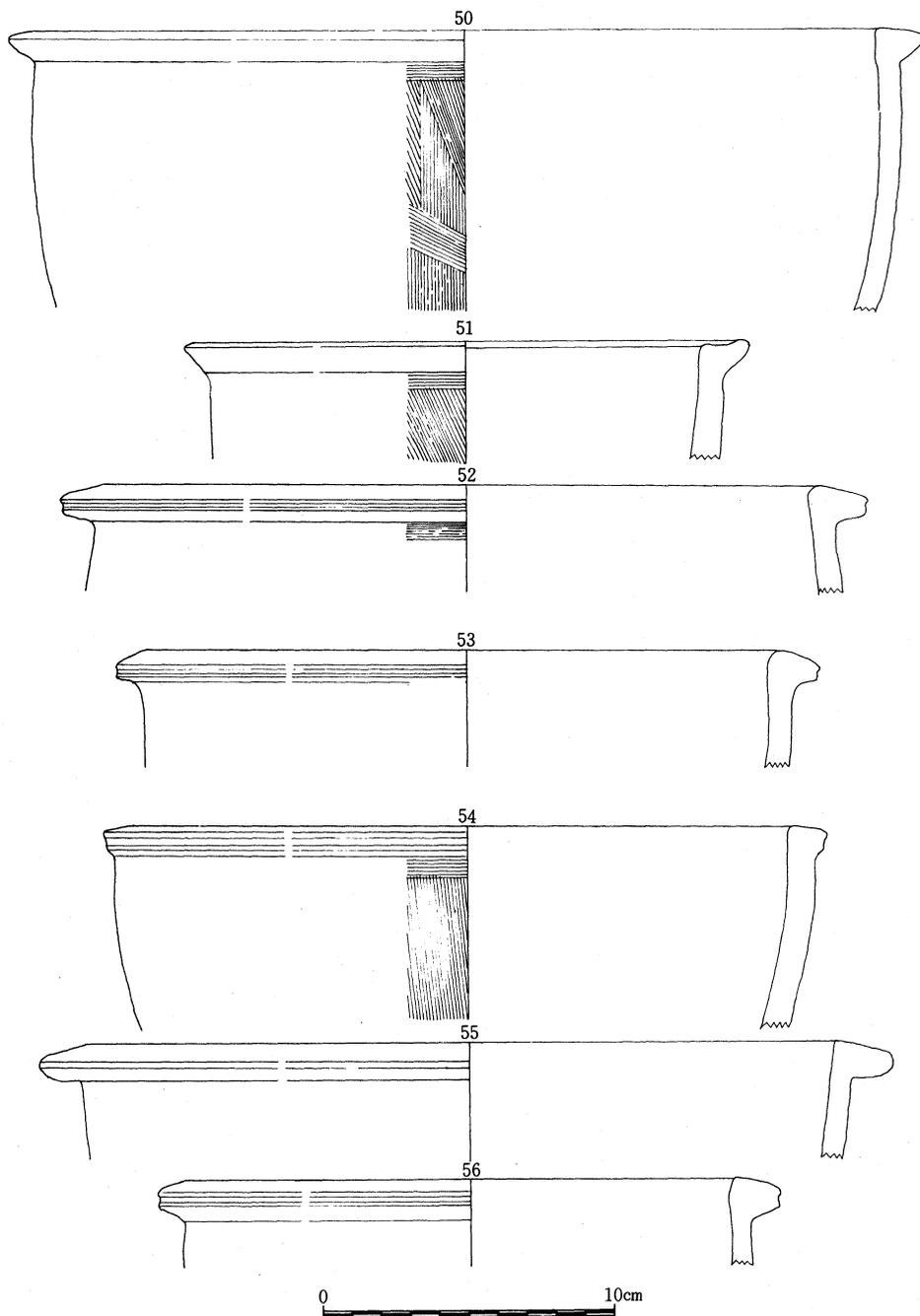
第27図 第Ⅲ層出土の土器類



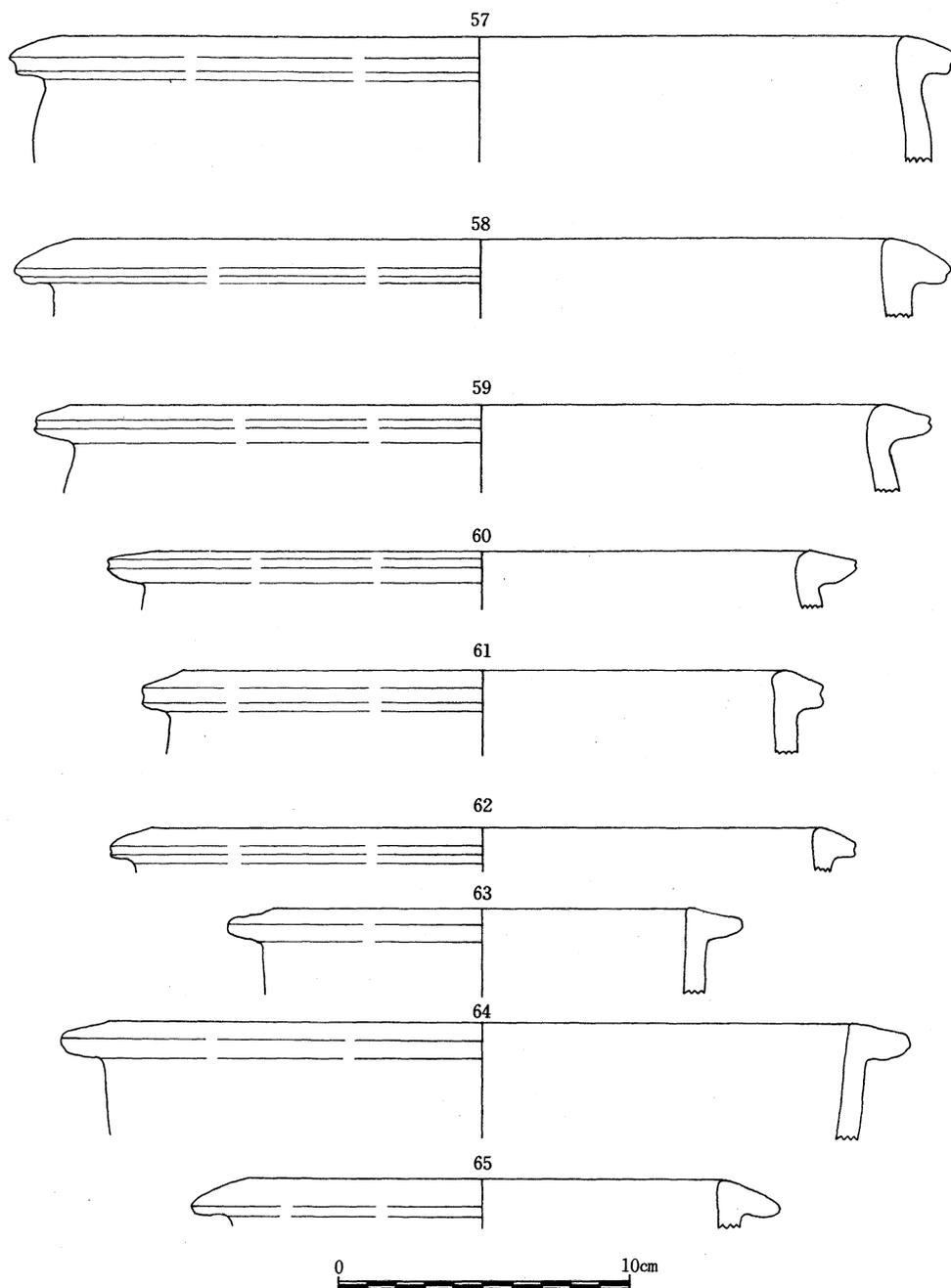
第28図 第三層出土の土器類



第29図 第三層出土の土器類



第30図 第Ⅲ層出土の土器類



第31図 第三層出土の土器類

第29図-47~49 (第IV^a類土器)

47はE-9区の表面に採集したものである。口縁部に突帯、そしてやや間隔を置いた胴部に刻みの無い突帯が回り、器質も極めて良い。48はD-5区に出土した。口縁部とその直下にも並行する形で突帯が回っており、47同様器質は良い。49は、口径が18cm程度とやや小形となるが器形器質共に47に類する。器面の調整は、上部に横位、下方部分には斜位が見られ、いわゆる端麗な仕上がりとなっている。

第30図-50~56 (第IV^b類土器)

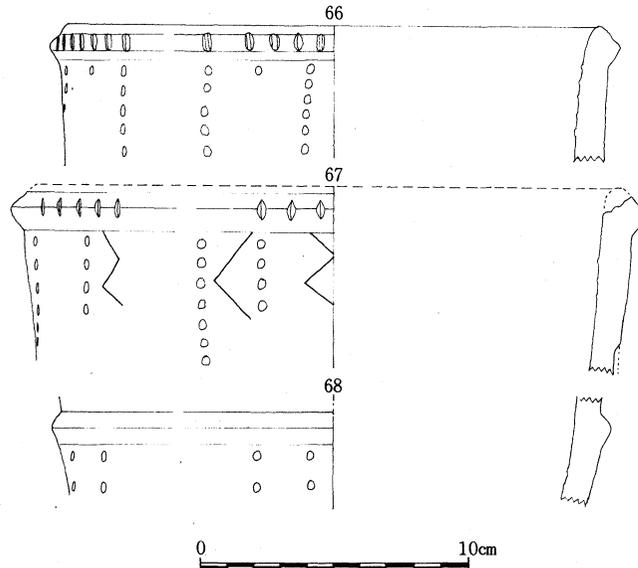
共に口縁部だけに突帯を回らすものである。54の突帯がやや低めで小さいが、他はすべて突き出しが大きめで、先端部には僅かな窪み部を形成している。50が口径約40cmと最も大きく、51が81cm内外と最小で、他は25cm前後である。器面の調整は、上位部分を横位に、下位は斜位、縦位と斜位の組み合わせで仕上げている。53などは調整痕など判別できない程良い仕上げになっている。52がF-1区に離れてあったが、他はD-5区を中心にした一帯に出土した。接合する破片がなく、胴部以下の器形等は不明である。

第31図-57~65 (第V^b類土器)

いずれも口縁部の小片である。口縁部の突帯は一般的にやや太めで突き出しも大きく、先端にわずかな窪みを施したものが多い。出土位置は、F-1区とD-5区を中心にした2地域に分かれて出土している。63、65がやや小形であるが、他はすべて25cm~30cmの口径を有するものである。この7点も接合する破片がないので、器形などについては不明である。

第32図-66~68 (第V^a類土器)

66はF-8区の下層部(V層)に出土した。この一帯には地層の横転現象が多く見られているので、あるいは上層からのはいり込みかもしれない。口縁部に一条の突帯が回っており、や



第32図 第Ⅲ層出土の土器類

やや太めの刻み目を施し、器面には径約0.3cmの円形状の刺突連点が、突帯にそう形で一条、それに縦列が間隔をおいて施してある。突き刺しは深めで、内面にふくらみを有する箇所も見受けられる。口径は20cm内外のものである。67は、口唇部先端を僅かに欠くが66と同様である。ただ、縦位の連点列の間に、山形状を基本とした浅い沈線を施している点が違っている。68は、上下部分を欠いで判然としないが、突帯が回り連点を施している点、前2点と同類のものであろう。

第33図—69～83 (第Ⅱ^b類, Ⅲ, V^a, Ⅵ類土器)

69～71は 第Ⅲ類土器である。出土位置は70がF-1区に、他の2片はD-5区の出土である。72は、E-6区の表採資料である。第32図の3点と同類と考えられる。73は、やや太めで上面に平坦面をもつ突帯上に深めの刺突の連点を施したものである。接合する破片が無いので以下不明である。74は、壺形土器の口縁部破片である。口唇部に低い2条の突起部をつくり出し、浅い刻みを施しているが、やや摩耗度が激しく判然としない。D-5区の出土である。75は、第Ⅱ^b類と同類であろう。ただ、胴部の突帯に刻みを施していない点がことなる。やや大形で口径は26cm前後を測る。D-5区の出土である。76は、胴部が僅かに張り気味で、口縁部が僅かに内傾するものである。突帯などは全く無いが、口縁から2.5cm下方の肩部に、巾1.7cm、長さ4cmの長楕円状の、把手が脱落したと考えられる部分がある。器面の調整は、最上位の口縁部分に横位、それより下方は僅かに傾斜するかすかな調整痕がある。D-5区出土で、第Ⅵ類に分類した。77～83は、刻み目を有す突帯を1～3条回らず胴部破片である。83がF-1区にあった外は、すべてD-5区に出土している。接合する破片が無いので、どの口縁部と接合するかなど、全く判別できない。

第34図—84～89 (第Ⅶ類, 第Ⅷ類土器)

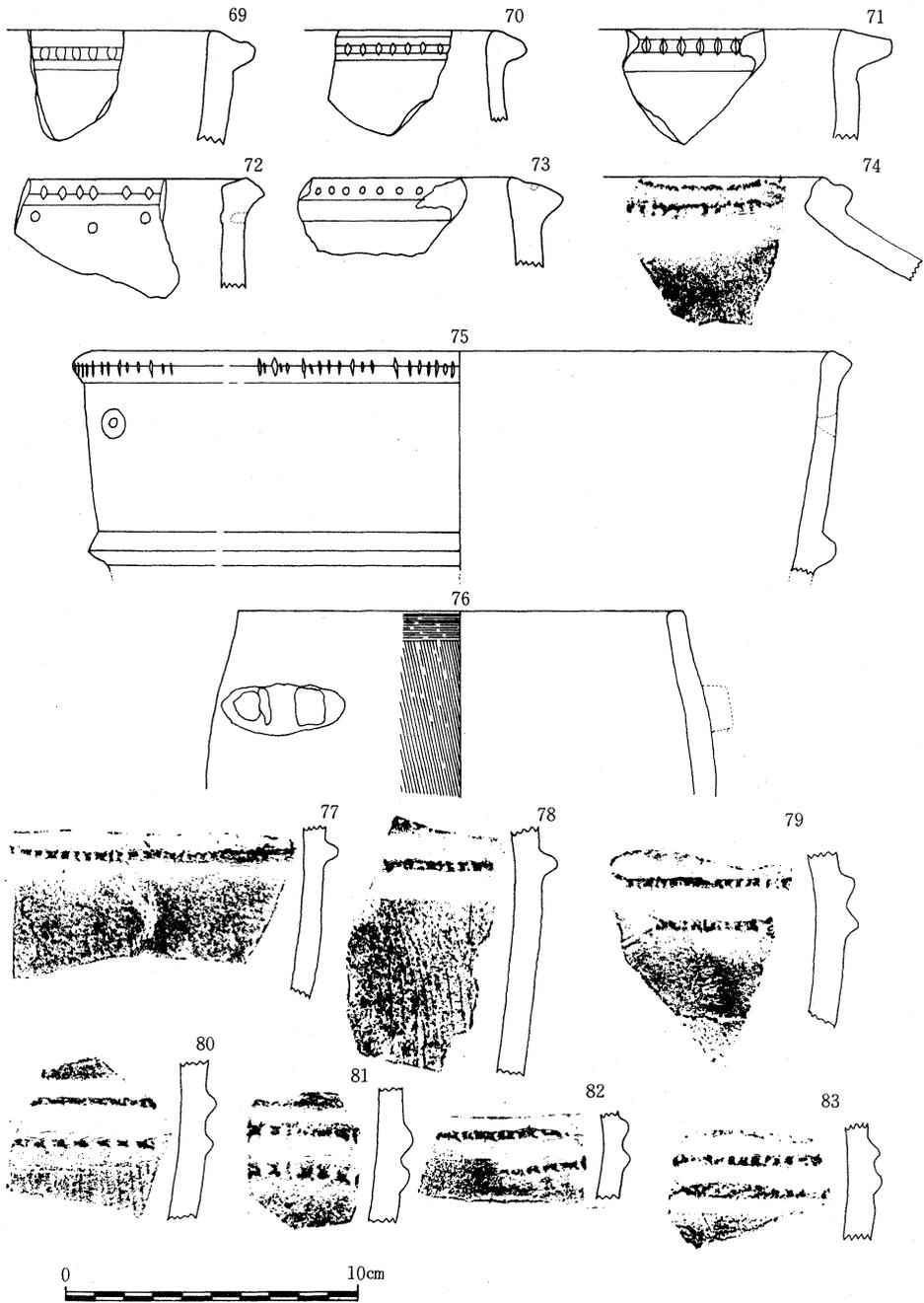
84は、胴部が僅かに張り気味で頸部がややしまり、口縁部が外反する深鉢形の無文の土器である。接合できる破片はなかった。口径は21cm内外、D-5区に出土した。85～89は、頸部がしまり口縁部が大きく外反する壺形土器のものである。口径はいずれも15cm前後のものである。89がやや離れたB-1区に表面採集されているが、他はD-5区を中心に出土した。一般的に器形器質は良い。接合する破片はなかった。

第35図—90～100 (第Ⅸ類 他)

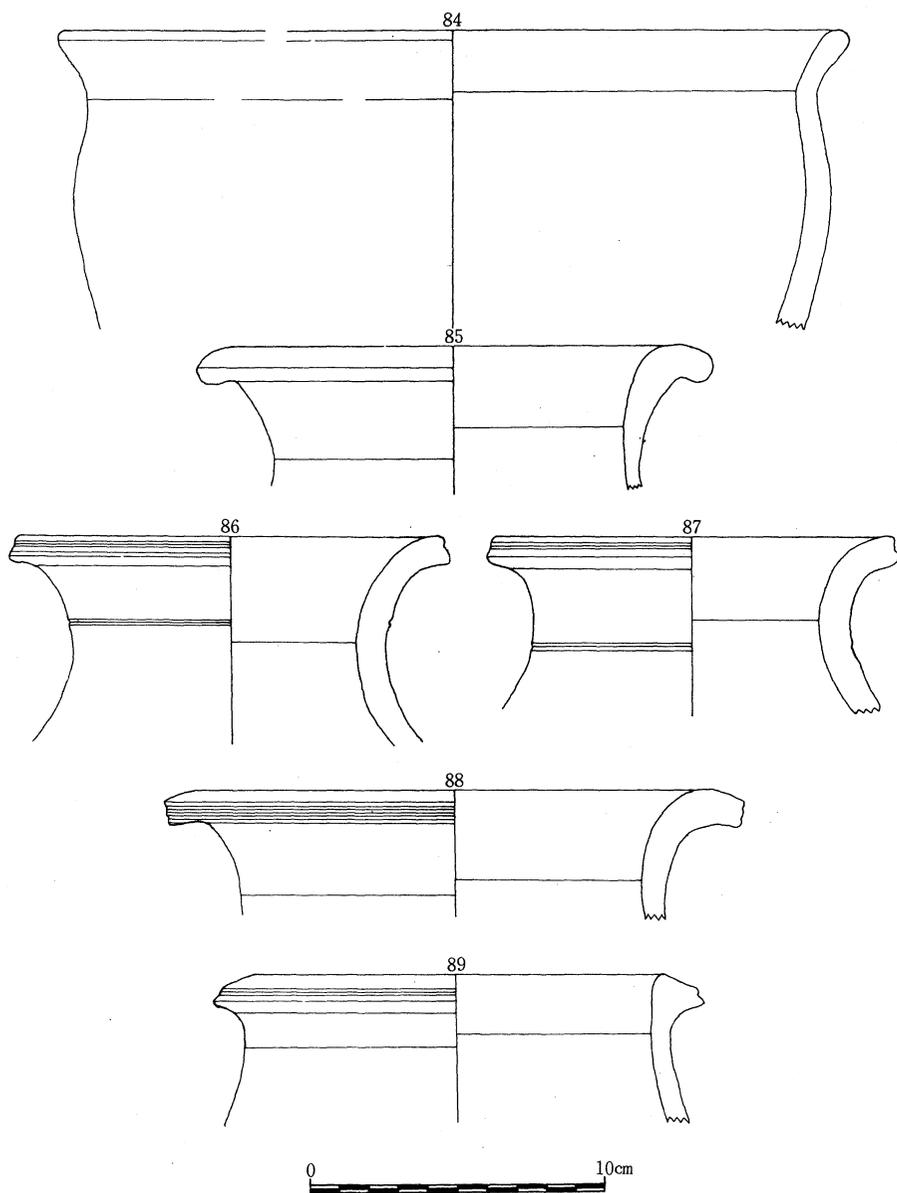
90～92は、浅く細かな沈線を1、2条有する肩部と考えられる破片である。91はD-5区、他はE-1区に出土した。器形や器質の点から、あるいは、第Ⅷ類とした壺形土器のものかもしれない。93～95は、突帯を胴部に一条有する破片である。94と95は同器体のものであるが接合しなかった。3点共にD-5区に出土した。96、97は、底部である。立ち上り部分を打ち欠いた形跡が見られる。あるいは、何んらかの目的のため、意識的に加工したものかもしれない。D-3、D-5区に出土した。98～100は、灰黒色の研磨土器の口縁部破片である。いずれもF-1区に出土した。破片が細かいため器形等については全く不明である。第Ⅸ類とした。

第36図—101～103 (第Ⅹ, Ⅳ^a類土器)

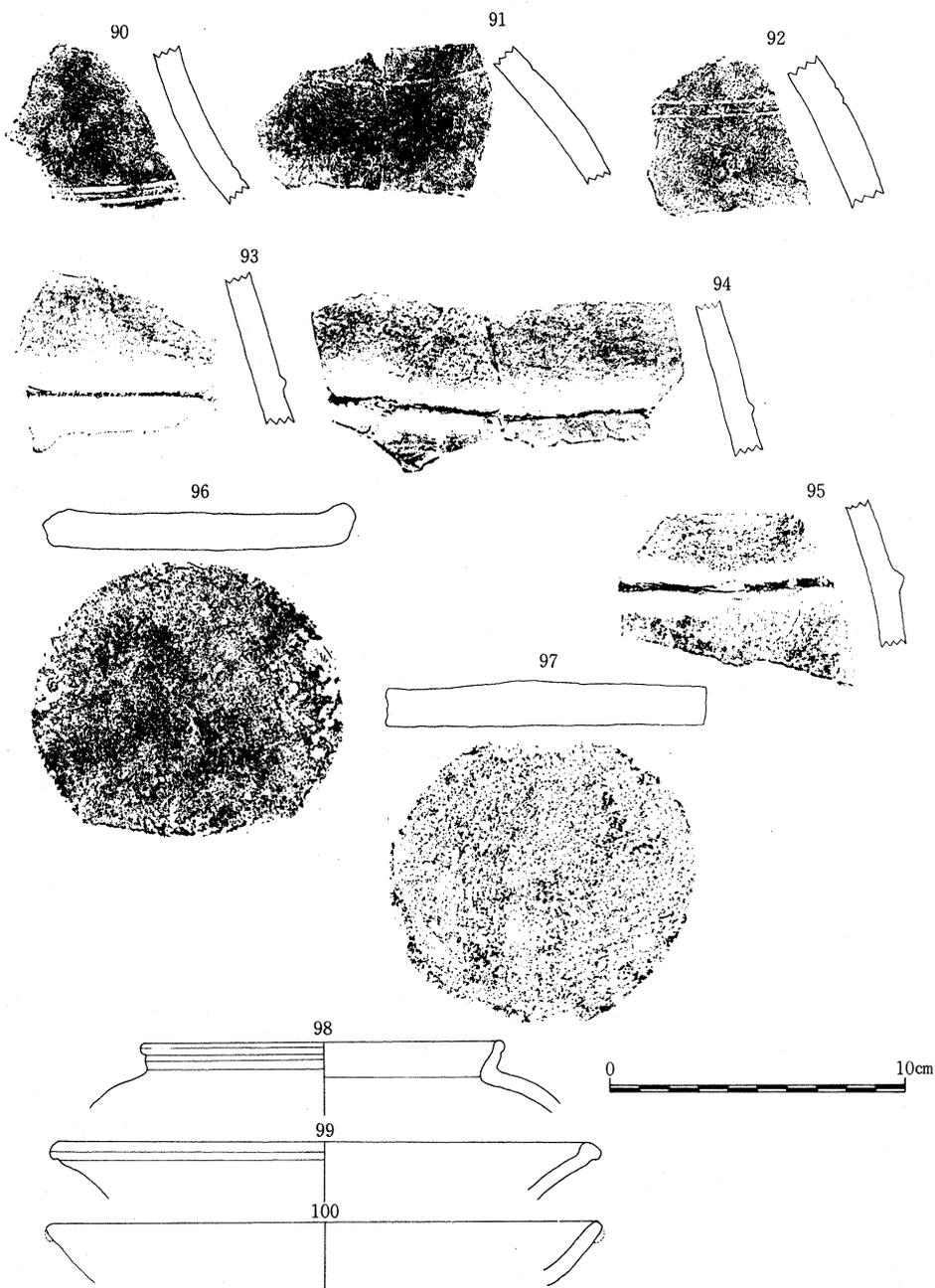
101は、第Ⅲ層出土の土器類のうち、唯一部分的に復元できたものである。D-5区にややま



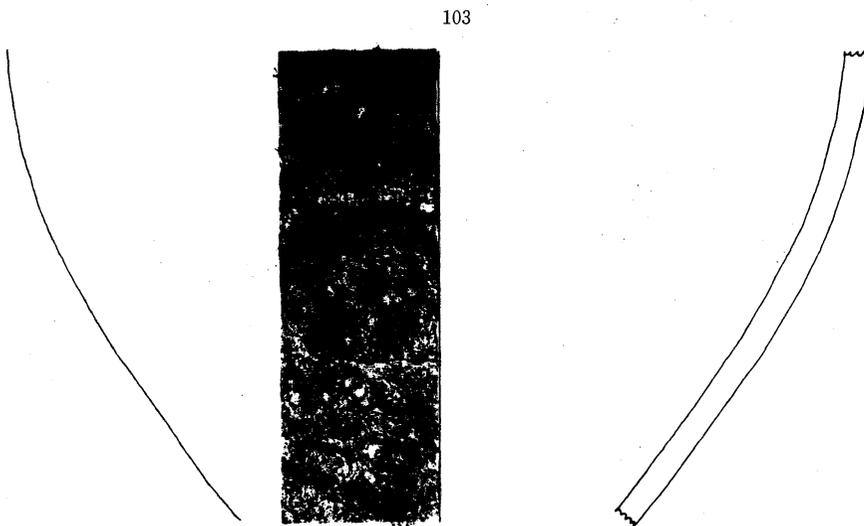
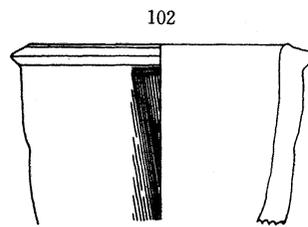
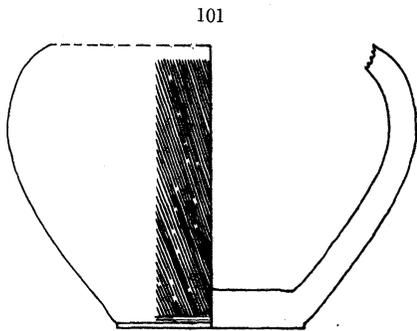
第33図 第三層出土の土器類



第34図 第Ⅲ層出土の土器類

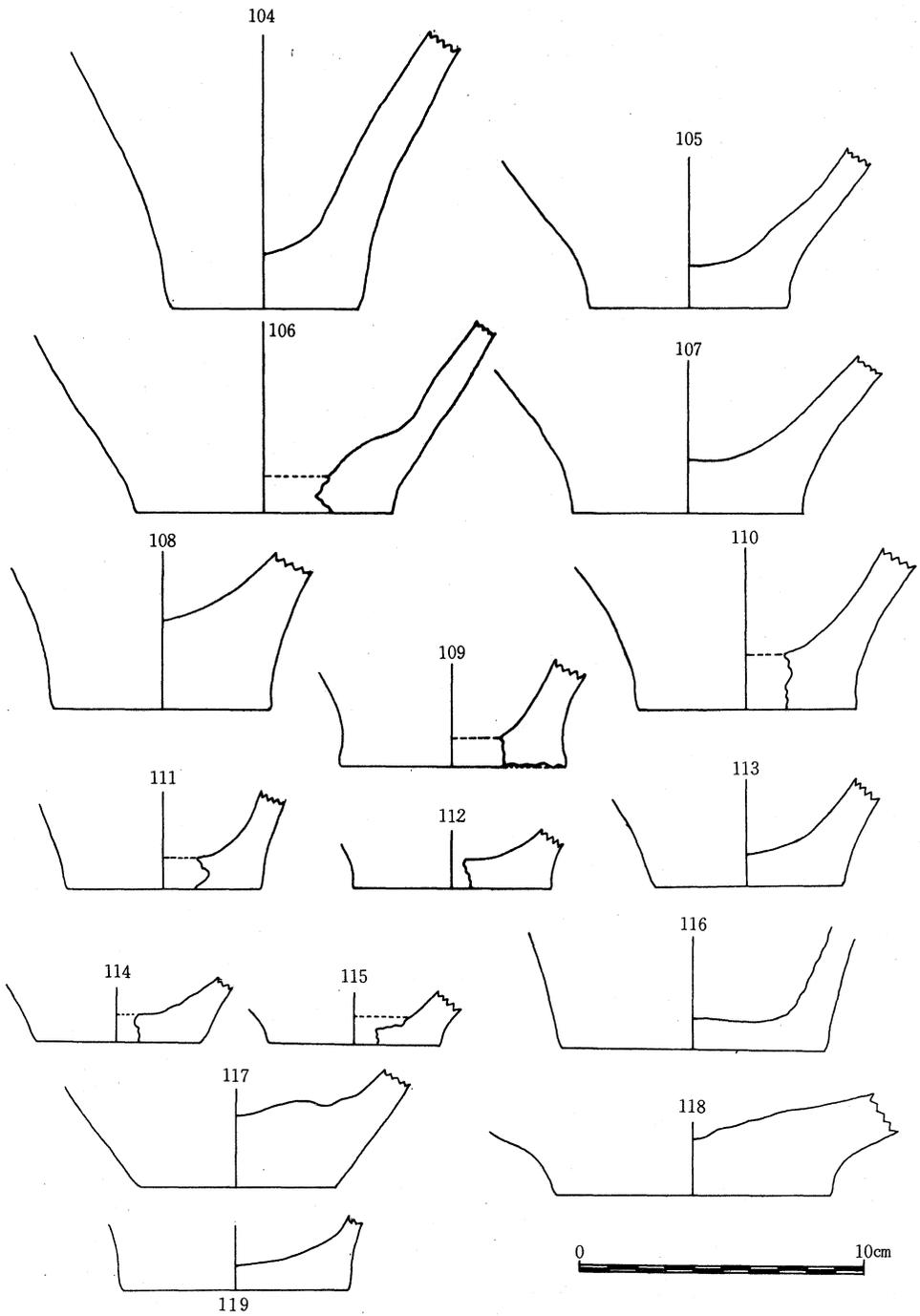


第35図 第Ⅲ層出土の土器類

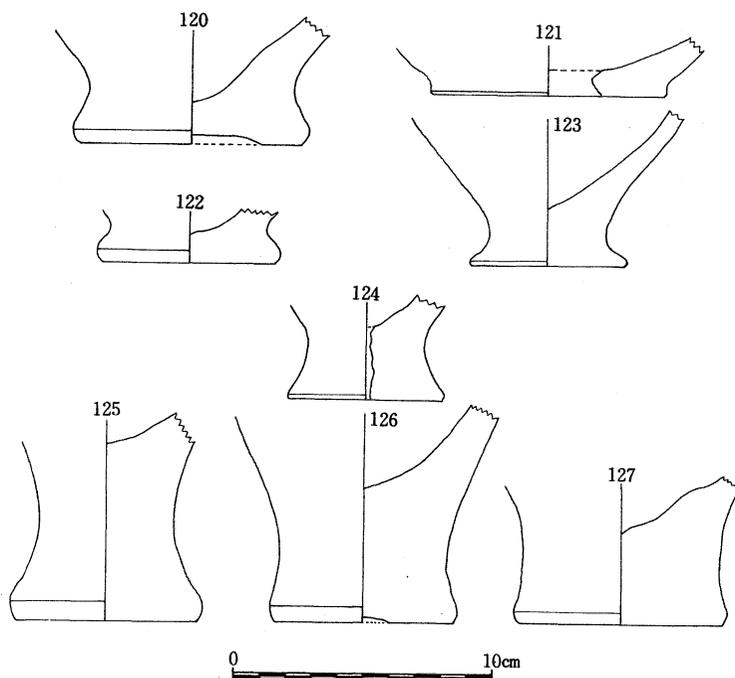


0 10cm

第36図 第三層出土の土器類



第37図 第三層出土の土器類



第38図 第Ⅲ層出土の土器類

とまって出土した。口縁部を欠損し全形復元まではいかなかったが、壺形であることだけは推定される。底部はやや楕円状で粗雑である。復元口径は6.4cmを測り、胴部の最大巾は13.8cm、現復元高は9.5cm、底部からの立ち上がりから胴部の張り、それから頸部に至る曲線はなめらかなカーブをもって形造られ、器面はかすかなハケ状による斜位の調整痕を残している。色調は茶褐色で焼成も良い。第X類とした。102は、口縁部に突帯を回らした小形の甕形土器である。D-5区に出土した。口径は10cm内外で、器面の調整は上位に横引きの細かな条痕があり、以下胴部部分は斜位で仕上げている。第Ⅳ^b類に分類できるようである。103は、ややまとまってF-2区に出土したが、底部部分と胴部から上の部分がないため、一部分のみの復元で終わった。かなり大型のものであろう。器巾は0.8cmとまとまっており、立ち上がりのカーブもなめらかである。器面もすべすべした感じに良く仕上がっている。現在高は約15cmであるから、おそらく30cm以上のものであろう。胴部の巾は24cmを測る。

第37図-104~119 (底部)

117を除き他のものはすべてD-5区を中心にした一帯に集中して出土している。いずれも小片で、上部分と接合するものは1点もなかった。底径は10cm程度のものを最大に、小で6cmを測る範囲内である。上げ底や中空のものは含まれていない。

第38図-120~127 (底部)

上げ底や上げ底気味のものである。出土位置はF-1区を中心にした一帯と、D-5区付近とに半々に出土している。120の底面部にやや中空部分が見られる。125~127の3点は、やや大形の甕形土器のものであろう。いずれも接合する破片は見あたらなかった。

第6表 第Ⅲ層出土の土器類観察表

| 番号 | 挿図 | 区番号 | 層位 | 部位 | 焼成 | 色調 | レベル | 形態, 分様の特徴 | 類別 |
|----|------|---------|----|-----|-----|------|--------|-----------------|------------------|
| 27 | 第27図 | D-6-4 | Ⅲ | 胴部 | 良 | 茶褐色 | 49.281 | 区画を持った刻目突帯 | I類 |
| 28 | " | D-5-109 | " | 口縁部 | " | " | 49.611 | 口縁部刻目突帯2条 | Ⅱ ^a 類 |
| 29 | " | E-1-31 | " | " | " | " | 50.855 | " " | " |
| 30 | " | D-6-10 | " | " | " | 灰茶色 | 48.810 | " " | " |
| 31 | " | E-2-21 | " | " | " | 茶褐色 | 50.435 | " " | " |
| 32 | " | E-2-32 | " | " | " | " | 49.244 | 口縁部及び胴部に各1条刻目突帯 | Ⅱ ^b 類 |
| 33 | 第28図 | D-5-224 | " | " | " | " | 49.533 | 口縁部刻みと刻目突帯1条 | Ⅱ ^c 類 |
| 34 | " | D-5 | 表 | " | " | " | | 口縁部刻み目突帯 | Ⅲ類 |
| 35 | " | E-2-23 | Ⅲ | " | " | 茶橙色 | 50.918 | " " | " |
| 36 | " | D-5-35 | " | " | " | 灰褐色 | 49.772 | " " | " |
| 37 | " | D-5-64 | " | " | " | 黒褐色 | 49.846 | " " | " |
| 38 | " | D-6-11 | " | " | " | 茶褐色 | 48.685 | " " | " |
| 39 | 第29図 | E-1-32 | " | 胴部 | " | 茶橙色 | 50.809 | 胴部破片, 刻目突帯 | |
| 40 | " | D-5-265 | " | 口縁部 | " | 茶褐色 | 48.226 | " " | |
| 41 | " | D-5-244 | " | 胴部 | やや粗 | 茶黄色 | 49.629 | 肩部突帯2条 | |
| 42 | " | D-5-180 | " | " | " | " | 49.796 | " 41と同器体 | |
| 43 | " | D-5-65 | " | " | 良 | 茶褐色 | 49.661 | 胴部破片, 突帯3条 | |
| 44 | " | F-1-12 | " | " | " | " | 51.240 | " " | |
| 45 | " | F-1-30 | " | " | " | 淡茶色 | 50.829 | " " | |
| 46 | " | B-1 | 表 | " | " | 茶褐色 | | " " | |
| 47 | " | E-9 | " | 口縁部 | " | " | | 口縁部及び胴部に各1条突帯 | Ⅳ ^a 類 |
| 48 | " | D-5-43 | Ⅲ | " | " | " | 49.687 | " " | " |
| 49 | " | D-5-99 | " | " | " | 灰褐色 | 49.700 | " " | " |
| 50 | 第30図 | D-5-69 | " | " | " | 茶褐色 | 49.796 | 口縁部三角突帯1条 | Ⅳ ^b 類 |
| 51 | " | D-4-5 | " | " | " | 茶黄色 | 50.106 | " " | " |
| 52 | " | F-1-29 | " | " | " | 淡茶色 | 50.865 | " " | " |
| 53 | " | D-6-3 | " | " | " | 茶褐色 | 48.963 | " " | " |
| 54 | " | E-6-12 | " | " | " | " | 49.777 | " " | " |
| 55 | " | D-5-50 | " | " | " | " | 49.887 | " " | " |
| 56 | " | F-1-63 | " | " | " | 淡茶色 | 51.070 | " " | " |
| 57 | 第31図 | E-6-11 | " | " | " | 茶褐色 | 49.601 | 口縁部突帯 | Ⅴ ^b 類 |
| 58 | " | E-2-15 | " | " | " | 茶橙色 | 50.762 | " | " |
| 59 | " | D-6-3 | " | " | " | 茶褐色 | 48.963 | " | " |
| 60 | " | F-1-14 | " | " | " | 淡茶褐色 | 50.800 | " | " |

| 番号 | 挿図 | 区番号 | 層位 | 部位 | 焼成 | 色調 | レベル | 形態・文様の特徴 | 類別 |
|----|------|---------|----|-----|-----|-----|--------|------------------|------------------|
| 61 | 第31図 | F-1-75 | Ⅲ | 口縁部 | 良 | 茶橙色 | 49.371 | 口縁部突帯 | v ^b 類 |
| 62 | " | E-1-17 | " | " | " | 茶褐色 | 50.501 | " | " |
| 63 | " | F-1-47 | " | " | " | " | 51.168 | " | " |
| 64 | " | D-5-148 | " | " | " | 茶黄色 | 49.809 | " | " |
| 65 | " | E-1-24 | " | " | " | 茶褐色 | 50.674 | " | " |
| 66 | 第32図 | F-8-2 | Ⅵ | " | " | " | 46.176 | 口縁部刻目突帯と刺突連点文の組合 | v ^a 類 |
| 67 | " | C-5-6 | " | 胴部 | " | " | 47.931 | " " | " |
| 68 | " | C-6-1 | Ⅲ | " | " | " | 48.137 | " " | " |
| 69 | 第33図 | D-5-125 | " | 口縁部 | " | " | 49.794 | 口縁部刻目突帯 | Ⅲ類 |
| 70 | " | F-1-24 | " | " | " | " | 50.953 | " " | " |
| 71 | " | D-5-160 | " | " | " | 茶黄色 | 49.602 | " " | " |
| 72 | " | E-6 | 表 | " | やや粗 | 灰茶色 | | 口縁部刻目突帯と刺突連点文の組合 | v ^a 類 |
| 73 | " | D-5-123 | Ⅲ | " | 良 | 茶褐色 | 49.760 | 口唇部刺突連点文 | v ^b 類 |
| 74 | " | D-5-47 | " | " | " | 灰茶色 | 49.764 | 壺形土器 | Ⅷ類 |
| 75 | " | D-5-29 | " | " | " | 黒褐色 | 49.739 | 口縁部刻目突帯, 胴部突帯各1条 | Ⅱ ^b 類 |
| 76 | " | D-5-91 | " | " | " | 茶褐色 | 49.775 | 把手付直口土器 | Ⅵ類 |
| 77 | " | D-5-146 | " | 胴部 | " | " | 49.867 | 刻目突帯1条 | |
| 78 | " | D-5-94 | " | " | " | " | 49.751 | " " | |
| 79 | " | D-5-182 | " | " | " | " | 49.813 | 刻目突帯2条 | |
| 80 | " | D-5-60 | " | " | " | " | 49.920 | " " | |
| 81 | " | D-5-23 | " | " | " | " | 49.760 | " " | |
| 82 | " | D-5-77 | " | " | やや粗 | 灰褐色 | 49.921 | " " | |
| 83 | " | E-1-37 | " | " | 良 | 灰茶色 | 50.941 | " " | |
| 84 | 第34図 | D-5-98 | " | 口縁部 | やや粗 | 茶橙色 | 49.719 | 深鉢形土器 | Ⅶ類 |
| 85 | " | E-6-9 | " | " | " | " | 49.795 | 壺形土器 | Ⅷ類 |
| 86 | " | D-5-121 | " | " | 良 | 茶褐色 | 49.601 | " | " |
| 87 | " | D-5-134 | " | " | " | 茶橙色 | 49.756 | " | " |
| 88 | " | D-5-7 | " | " | " | 茶黄色 | 49.864 | " | " |
| 89 | " | B-1 | 表 | " | " | 茶橙色 | | " | " |
| 90 | 第35図 | E-1-3 | Ⅲ | 胴部 | " | " | 50.733 | 肩部破片, 沈線2条 | |
| 91 | " | D-5-103 | " | " | " | 茶褐色 | 49.596 | " " | |
| 92 | " | E-1-22 | " | " | " | " | 50.909 | " " | |
| 93 | " | D-5-83 | " | " | " | 灰褐色 | 49.694 | 胴部突帯 | |
| 94 | " | D-5-218 | " | " | " | 茶褐色 | 49.651 | " | |
| 95 | " | D-5-61 | " | " | " | " | 49.889 | " | |

| 番号 | 挿図 | 区番号 | 層位 | 部位 | 焼成 | 色調 | レベル | 形態・文様の特徴 | 類別 |
|-----|------|---------|----|-----|-----|------|--------|----------|------------------|
| 96 | 第35図 | D-3-2 | Ⅵ | 底部 | 良 | 茶橙色 | 49.484 | 加工痕を有する | |
| 97 | " | D-5-187 | Ⅲ | " | " | " | 49.260 | " | |
| 98 | " | F-1-32 | " | 口縁部 | " | 灰色 | 50.916 | 黒色研磨土器 | Ⅸ類 |
| 99 | " | F-1-65 | " | " | " | 灰褐色 | 51.184 | " | " |
| 100 | " | F-1-28 | " | " | " | 灰色 | 50.958 | " | " |
| 101 | 第36図 | D-5-252 | " | 胴部 | " | 茶褐色 | 49.441 | 外2点、復元土器 | X類 |
| 102 | " | D-5-84 | " | 口縁部 | " | " | 49.827 | 口縁部突帯 | N ^b 類 |
| 103 | " | E-2-31 | " | 胴部 | " | " | 49.306 | 胴部破片 | |
| 104 | 第37図 | D-5-97 | " | 底部 | " | 茶橙色 | 49.731 | 外2点、平底 | |
| 105 | " | D-5-207 | " | " | " | " | 49.618 | 外1点 " | |
| 106 | " | D-5-40 | " | " | " | 茶黄色 | 49.503 | 平底 | |
| 107 | " | D-5-123 | " | " | " | 茶褐色 | 49.760 | 外1点、平底 | |
| 108 | " | D-5-100 | " | " | " | " | 49.731 | 平底 | |
| 109 | " | D-5-103 | " | " | " | " | 49.596 | " | |
| 110 | " | D-5-102 | " | " | " | " | 49.580 | " | |
| 111 | " | D-5-232 | " | " | " | 茶黄色 | 49.470 | " | |
| 112 | " | D-5 | 表 | " | " | 茶褐色 | | " | |
| 113 | " | D-5-67 | Ⅲ | " | " | " | 49.614 | 外1点、平底 | |
| 114 | " | D-5-59 | " | " | " | 茶橙色 | 49.879 | 平底 | |
| 115 | " | D-6-2 | " | " | " | 茶褐色 | 49.240 | " | |
| 116 | " | D-5-236 | " | " | やや粗 | " | 49.767 | 外3点、平底 | |
| 117 | " | E-2-13 | " | " | 良 | " | 50.706 | 平底 | |
| 118 | " | D-7 | 表 | " | " | 茶橙色 | | " | |
| 119 | " | D-5-178 | Ⅲ | " | " | 灰茶色 | 49.919 | " | |
| 120 | 第38図 | D-5-108 | " | " | やや粗 | " | 49.399 | 外1点、上げ底 | |
| 121 | " | D-5-18 | " | " | 良 | 茶褐色 | 50.089 | 上げ底 | |
| 122 | " | F-1-92 | " | " | " | 茶橙色 | 48.985 | " | |
| 123 | " | D-5-155 | " | " | " | 茶褐色 | 49.326 | 外1点、上げ底 | |
| 124 | " | D-5-13 | " | " | " | " | 49.693 | 上げ底 | |
| 125 | " | E-2-3 | " | " | " | 淡灰茶色 | 50.513 | " | |
| 126 | " | D-5-13 | " | " | " | 茶褐色 | 49.693 | " | |
| 127 | " | D-2-4 | " | " | やや粗 | " | 50.846 | " | |

第2節 石器類

本調査で出土した第Ⅲ層の石器類は、量が多く、また、特徴的な石器組成をもっていた。器種別にこれを大別すると、石斧類、槌石類、磨石類、それに台石、軽石、石鏃、剥片石器などである。以下個別に記していきたい。

1. 挟入片刃磨製石斧（第39図-128）

E-1区に出土した唯一のものである。典型的に良く整形され、全面を丁寧な研磨で仕上げられ、刃部の形状も極めて良い。最大長が12.9cmあり、重さ270g、石質は頁岩と推定される。

2. 磨製石斧（第39図-129）

D-5区に出土した。この石器も典型的な蛤刃の磨製石斧である。片面に割れ面を残しているが、他の部分は入念な研磨で仕上げられ、刃部の形成は特に良い。最大長8.2cm、最大巾が7.2cm、重さは310gと重量感もある。石材は硬質の砂岩であろう。

3. 打製石斧（第39図-130~133）

130, 131は、先端部分を欠損した柄部だけのものである。132, 133は両面部からの相互剥離で整形を行った完成品である。132の長さは118cm重さは150g、133は、230gある。石材は粘板岩である。

4. ノミ形状石器（第39図-134）

石質は砂岩であろう。D-5区に出土した。単に打ちかいて成形し、広めの先端だけに片刃を作り出している。僅かな使用痕だけがうかがえられる。

5. 小形棒状槌石（第40図-135~140）

断面形が楕円形から正円形状をなした小形の槌石である。135が最長で9cm、139が最小で5.4cmを測り、いずれもその範囲内にある。両先端部分に敲痕があるものと、片方だけにあるものとに分けられる。石材はすべて砂岩である。

6. リーマー（第40図-141, 142）

出土例が極めて稀な特殊な石器である。したがって適当な呼称名が見当たらない。そこで、その形状と使用痕などの点から、リーマー（和訳、穴ぐり器、穴を大きくするために使用する道具）と便宜的に仮称することにした。両石共に断面形は中央部分で正円形に近い円状で、先端では正円形となっている。先端の突部は使用によるものと考えられる平坦部（直径約0.5cm）があって、それより1cm程に回転使用のスリ痕がはっきり残り、更にかすかに見取ることのできる痕が0.5cm程続いている。この痕跡からすると、石材が砂岩ということも考えあわせ、孔を穿つものではなく、穴を広げるか、あるいは、穴を調整する道具と考えられそうである。

7. 小形楕円状槌石 (第40図-143~145)

143は、扁平な楕円形で、一方の先端部分だけに敲痕があり、144は、先端と側部、それに扁平面にある。145は、一方部を欠損しており、片方の先端に使用痕がある。いずれも石材は砂岩で敲きよりはむしろ小槌ち作業に使用した可能性が考えられる。

8. 軽石加工品 (第40図-146)

良く整った楕円形をなした軽石である。あるいは加工により成形したものかもしれない。一面部の一部に使用したと考えられる痕跡が残っている。E-2区に出土した。最大長は10.8cmで最大巾は55cmである。

9. 小形棒状槌石 (第41図-147~152)

150は、やや形態的には違いはあるが、機能の点で一応この類に一括した。石材はすべて砂岩で、片方の先端だけに敲痕があるもの、両先端にあるもの、それに側面部分や扁平面にあるもの、また、使用痕が多く残るもの、少ないもの等、各石共に一様ではない。D-5区を中心にした一帯と、F-1区の一帯に出土している。最大長は10cm前後に限定されている。

10. 小形楕円状槌石 (第41図-153)

D-4区に出土した。最大長11cmで扁平面をもち、敲痕は両先端は勿論のこと、全側面にまんべんない使用痕を残している。石材は砂岩である。

11. 角柱状槌石 (第42図-154~158、第43図-159.160)

159にやや形態的な点で違いはあるが、機能的な点から一括した。この1点だけを残し、他はすべて典型的な角柱状のものである。使用痕は、両先端部分にあるもの、片方だけにあるもの、また、多い少ないなどの点は各石とも相違が見受けられる。石材はすべて砂岩と考えられる。出土場所にはばらつきが見られた。

12. 磨石 (第43図-161~163)

3点共に半欠の磨石である。痕跡の点からいくと、敲きとの併用が考えられる。両扁平面あるいは片面に多用した磨り痕がある。特に162、163は板状になるまですりへっており、厚さは共に1.7cmとなっている。

13. 方形状大形石錘 (第44図-164)

D-5区に出土した。長さ23.6cm、最大巾10.1cm、最大厚3.6cm、重さは1.54gと重量感がある。石材は砂岩の自然礫である。各一辺の中央部分に窪みを成形し、いわゆる十字状にヒモ掛け出来るように成形されている。4か所の窪み部のうち短軸の2か所には、ヒモずれとも考えられるスベスベした部分が見受けられる。あるいは、多用したためであろう。

14. 石錘（第44図-165）

D-5区に出土した。本調査の第Ⅲ層ではただ一点だけのものである。楕円形の両先端部分は、相互剥離によるやや深い窪み部を成形している。このヒモ掛け部の長軸は7.6cm、最大巾は6.1cm、重さは220gである。扁平面の両面と側面部分に敲打痕と考えられる痕跡もある。

15. 敲石（第45図-166~172）

いずれもD-5区に出土した。石材は砂岩である。共に平面観は楕円形で、断面形も整ったものばかりである。これは磨りという機能を、長時間にわたり利用したためと考えられる。したがって、この類は敲きと磨りの併用と理解したい。最大長は10cm内外、重さは171の300gを最小に、最大は172の680gである。

16. 小形敲石（第45図-173, 174）

共にD-5区に出土した。173の平面観は楕円形状、174は隅丸方形形状となっている。両石共に扁平面には磨り痕と窪みが見受けられ、側面にも無数の敲打痕がある。石材は砂岩である。

17. 磨石（第46図~第52図-175~199）

この類にとりあげ図示したのは25点であるが、磨りと敲きという機能性から考えた場合、正確な分類はなかなか困難である。そこで、磨石という一般的な形態と、扁平面に残る摩耗度の多少を若干の目安に、便宜的に分類した。25点中には5点の半欠品や、極小の1点も含まれる。石材はすべて砂岩であり、出土場所もF-1区、D-5区を中心にはしているが、散在的といってよい。なお、表採資料も5点含まれる。前記したように、この類は敲きという機能をすべて残していることが特徴といえよう。重さは、190の1.83kgを最高に、1kg以上が9点、0.5kg以上が大半を占めている。

18. 大形楕円状磨石（第52図-200）

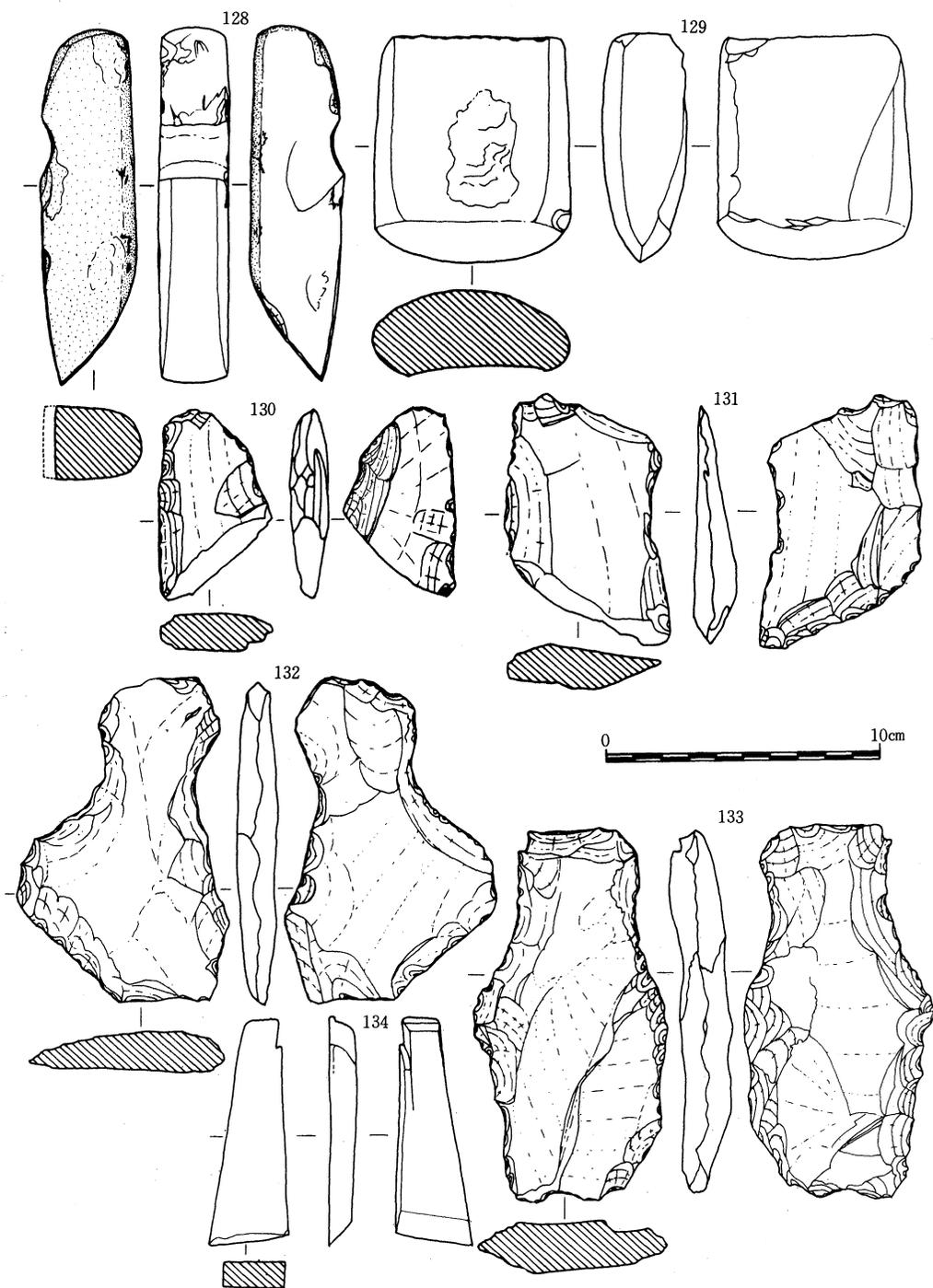
D-5区に出土した。石材は砂岩である。最大長20.7cm、最大巾10.4cm、最大厚5.4cm、重さは1.64kgある。扁平面には両面共に磨り痕があり、特に一方面にははっきり痕跡が残っている。また両先端には敲打痕が、一方の扁平面にはかすかにではあるが広い範囲に敲打痕が残されている。

19. 方形状磨石（第53図-201~203）

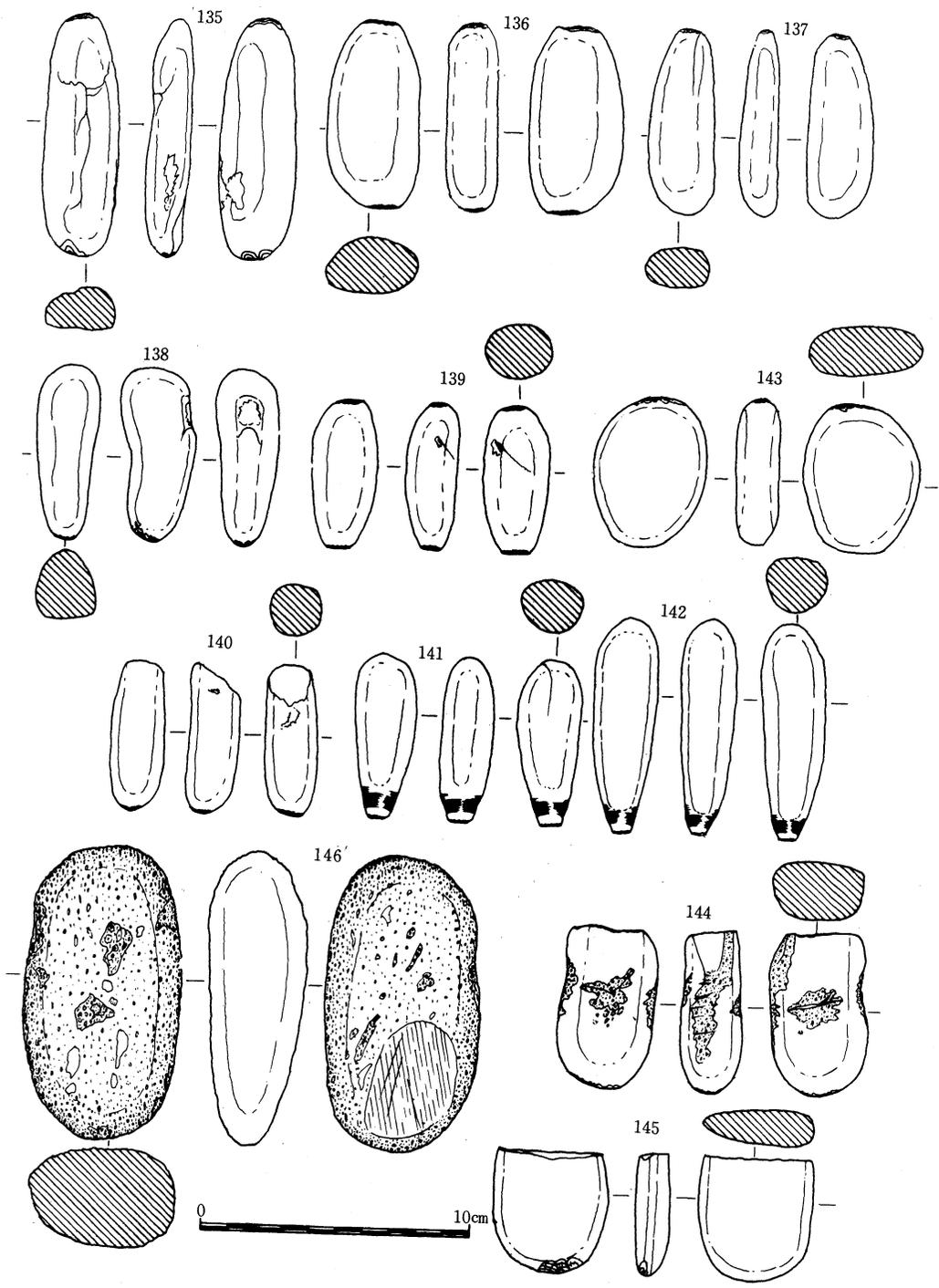
形態的に疑問が大きいだが、便宜的に分類することにした。いずれも石材は砂岩である。この類の側面には敲打痕は多く見られないが、磨りによって摩耗した扁平面には、敲打によると考えられる痕跡が、広い範囲に残されている。特に202は激しい窪みとなっている。

20. 敲台石（第54図-204, 205、第55図-206~208）

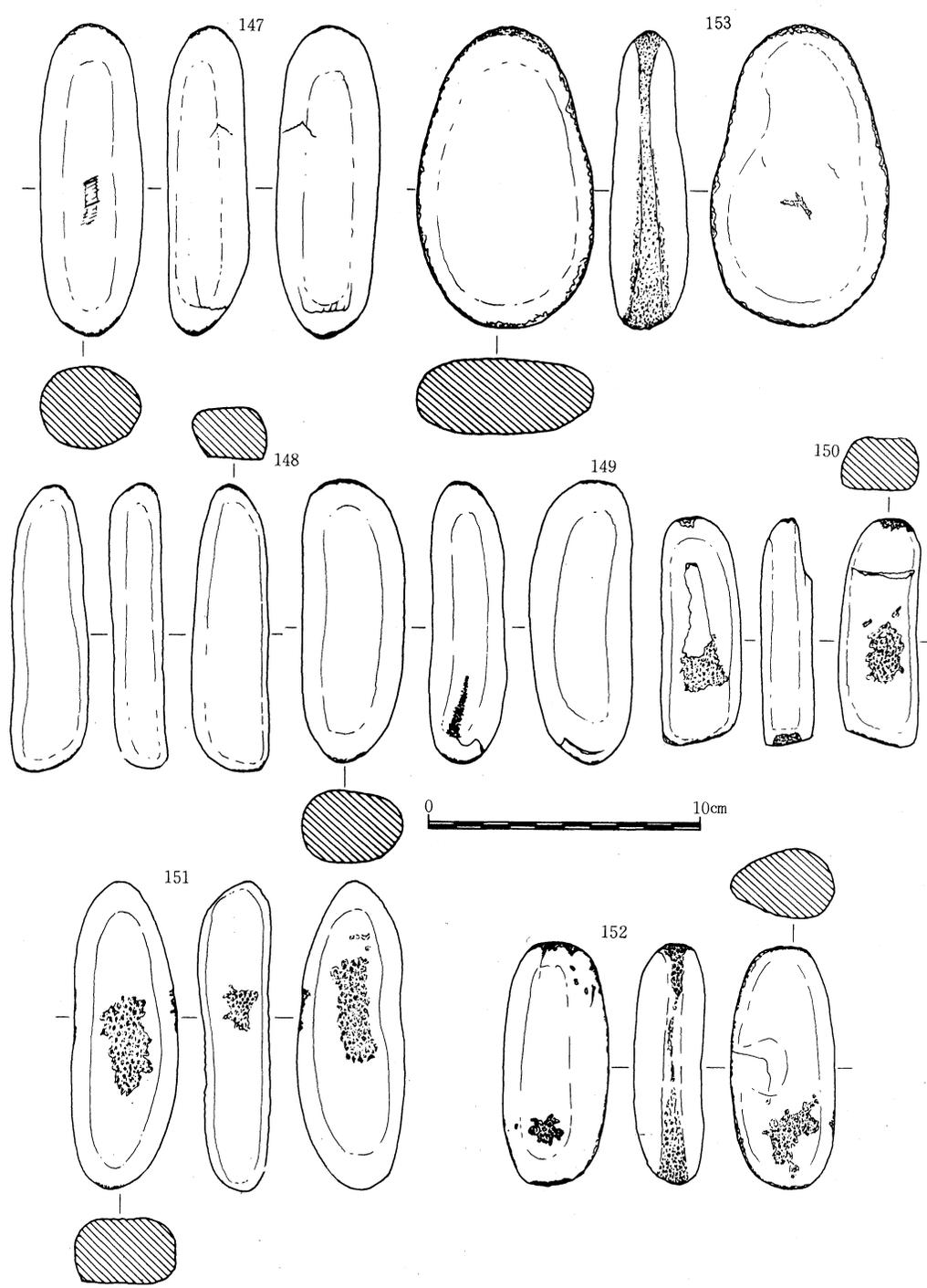
204, 205は共にD-5区に出土した。重さは1.51kg, 1.2kgと重量感のあるもので、敲きの



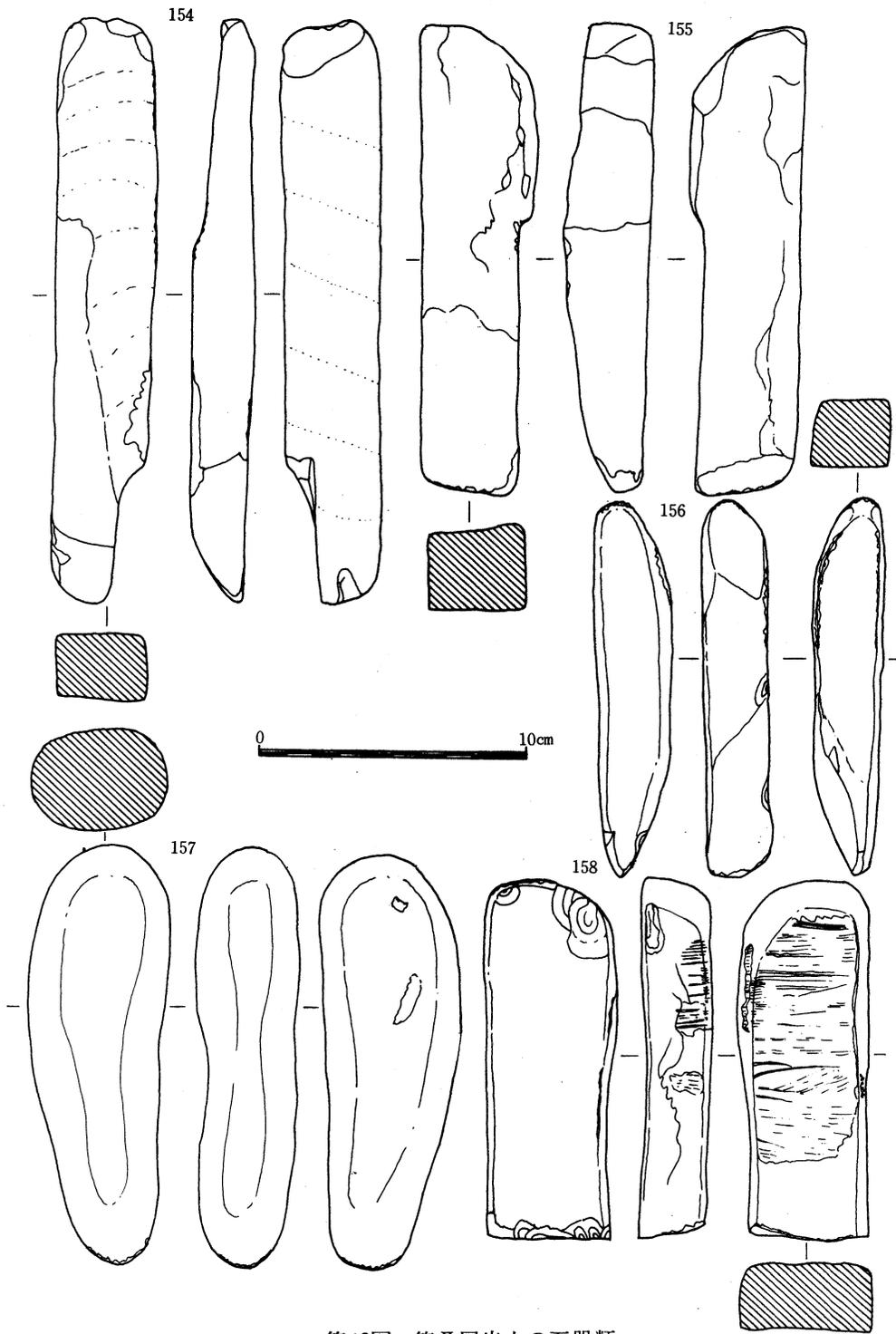
第39図 第三層出土の石器類



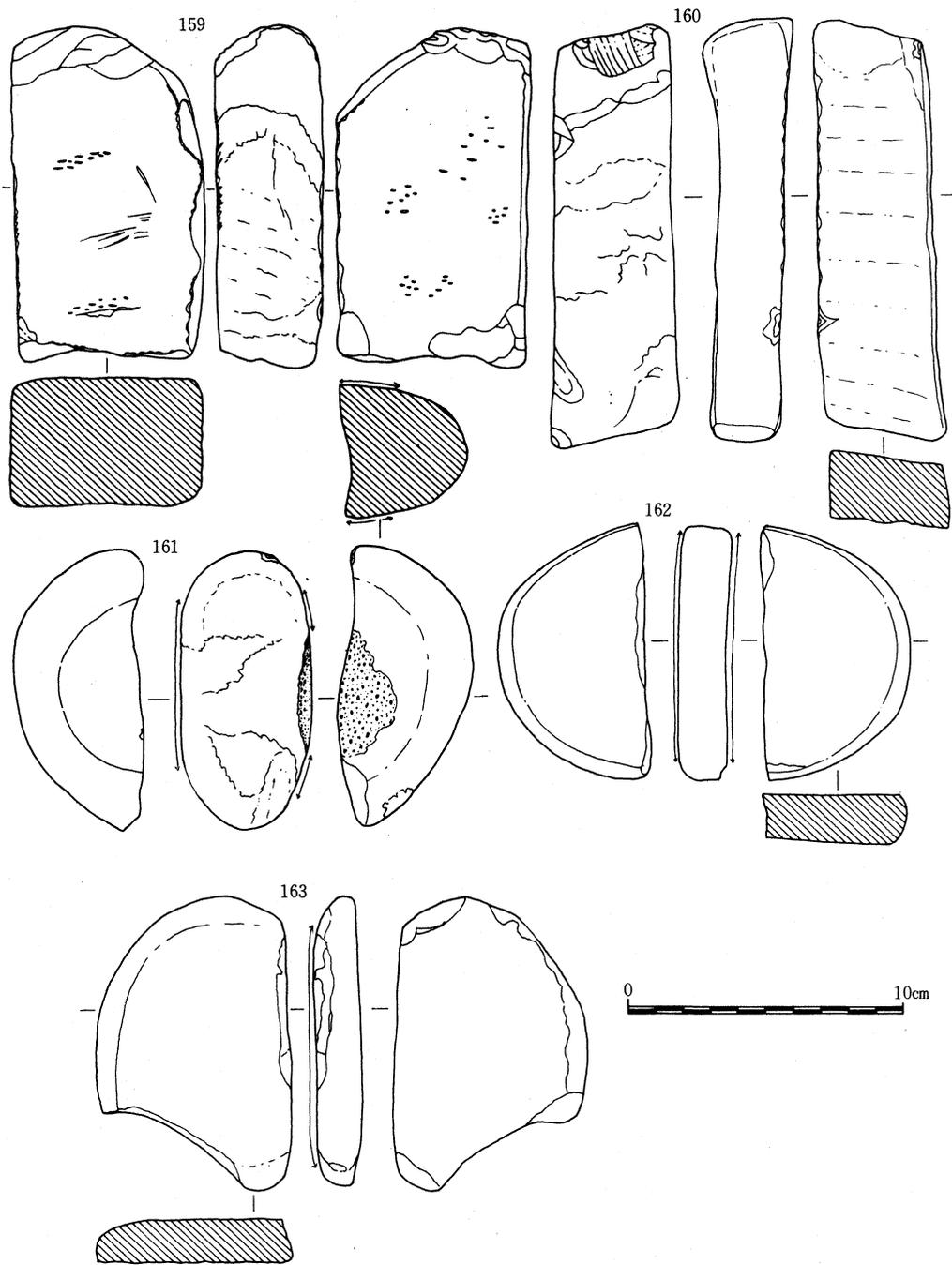
第40図 第三層出土の石器類



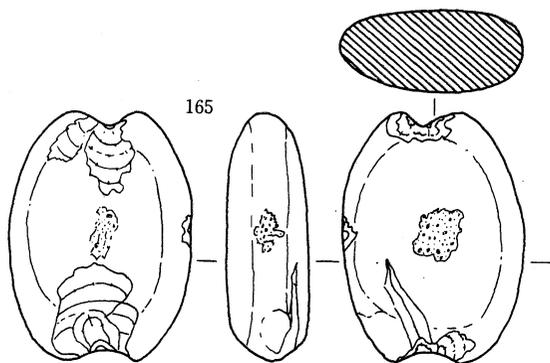
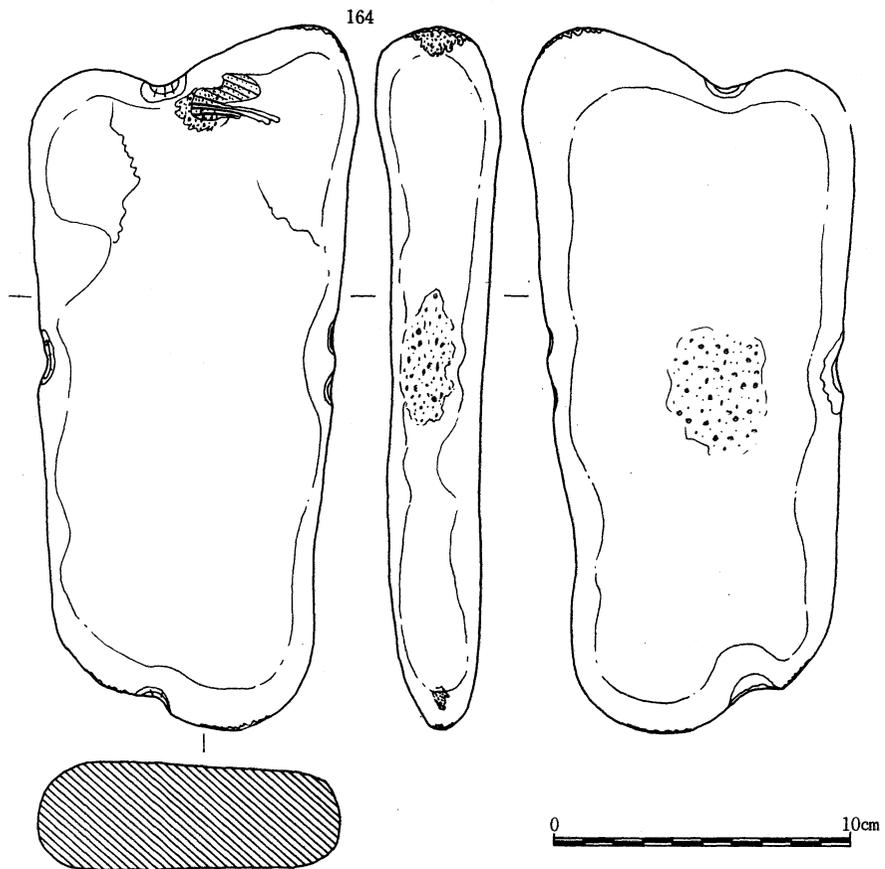
第41図 第三層出土の石器類



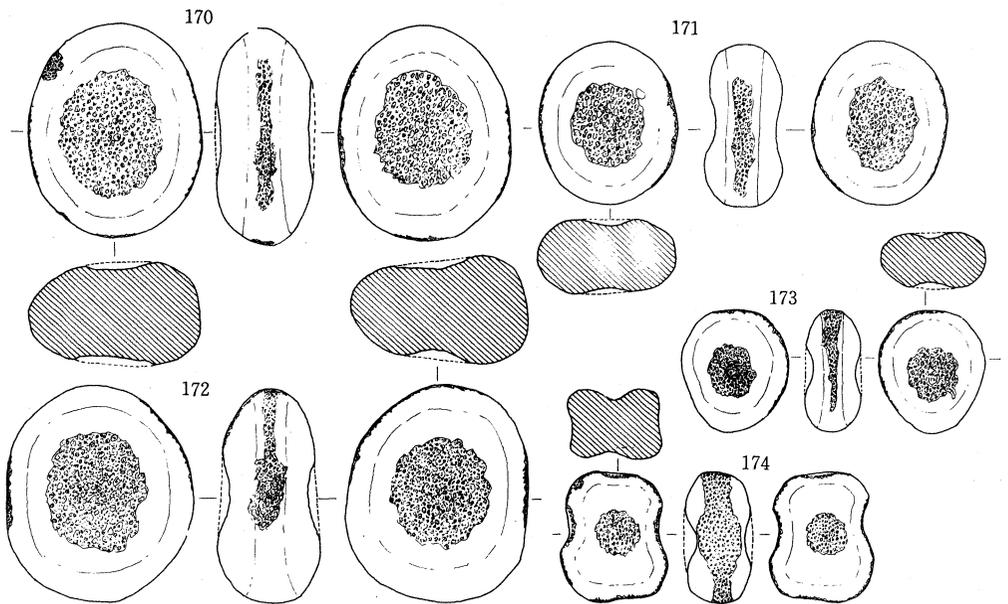
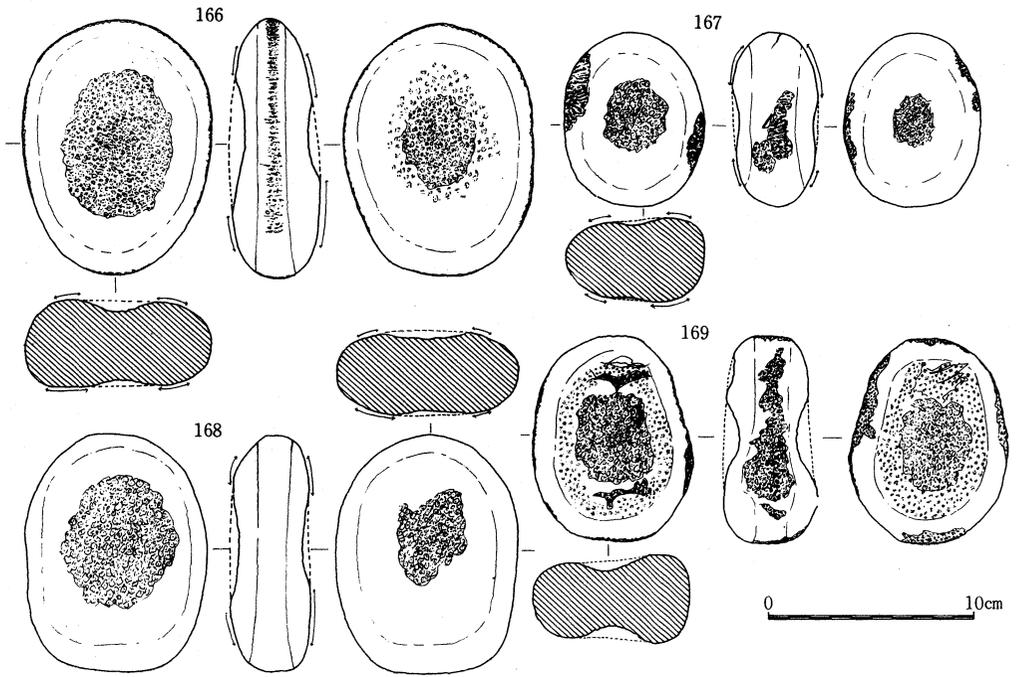
第42図 第Ⅱ層出土の石器類



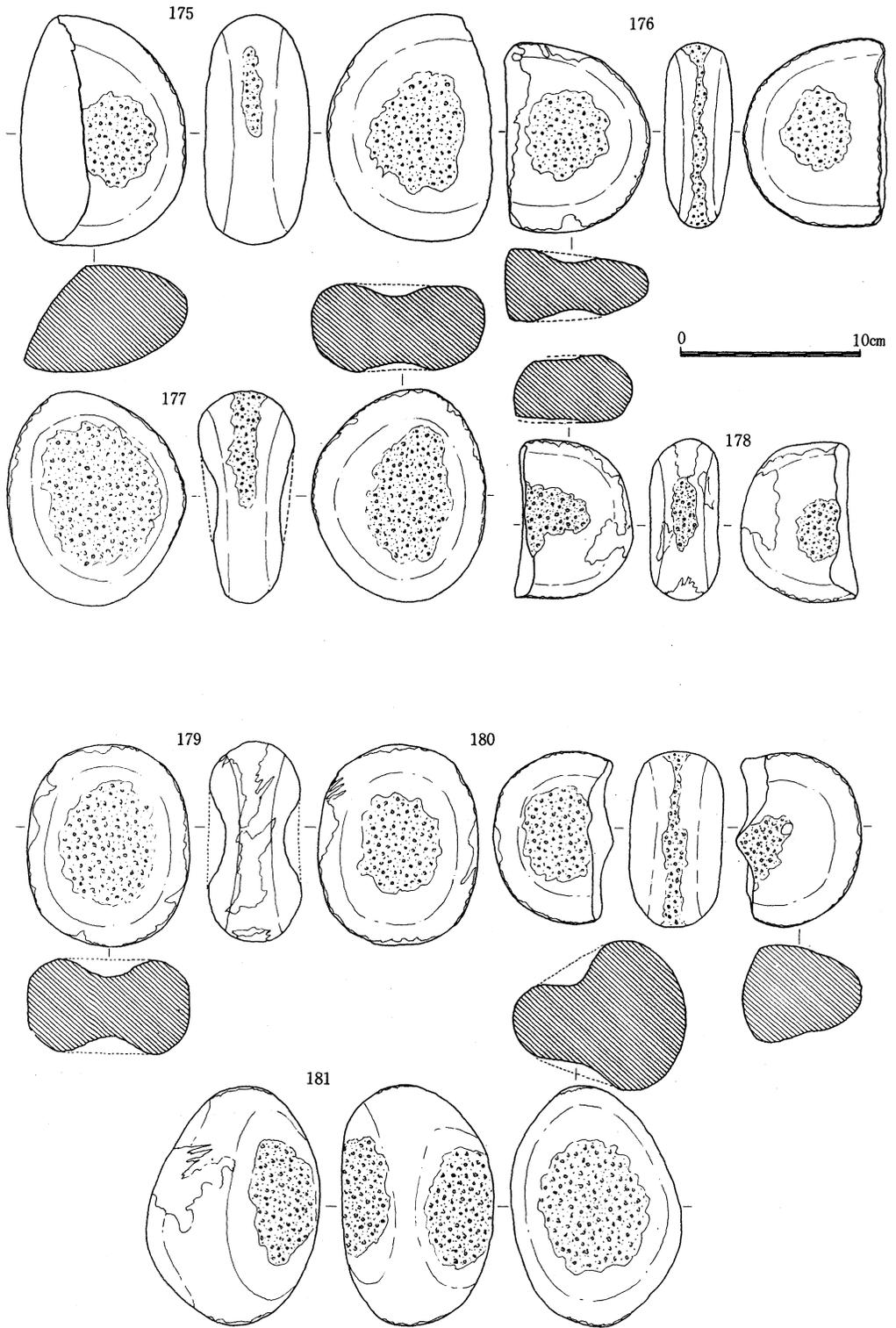
第43図 第Ⅲ層出土の石器類



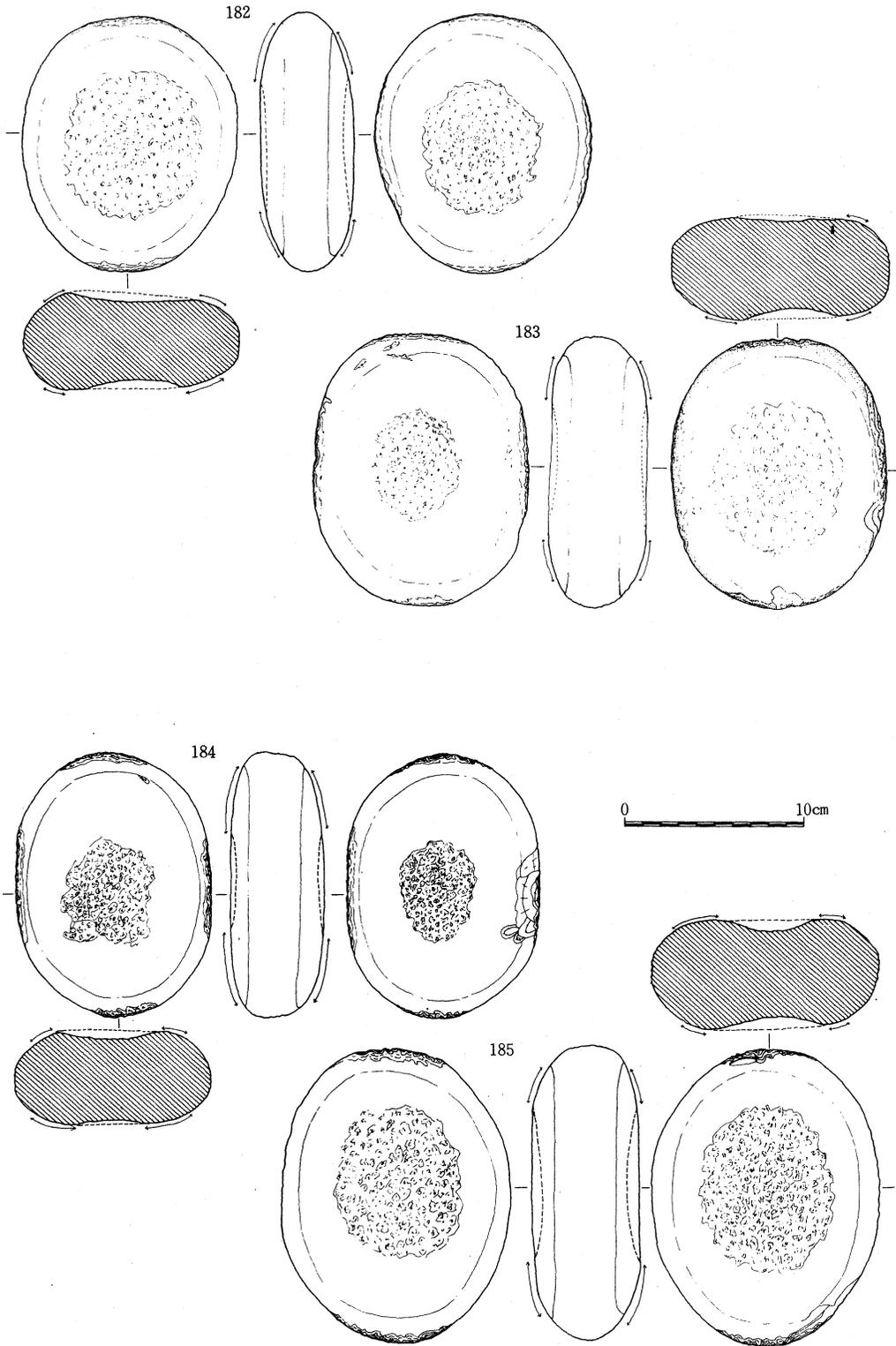
第44図 第三層出土の石器類



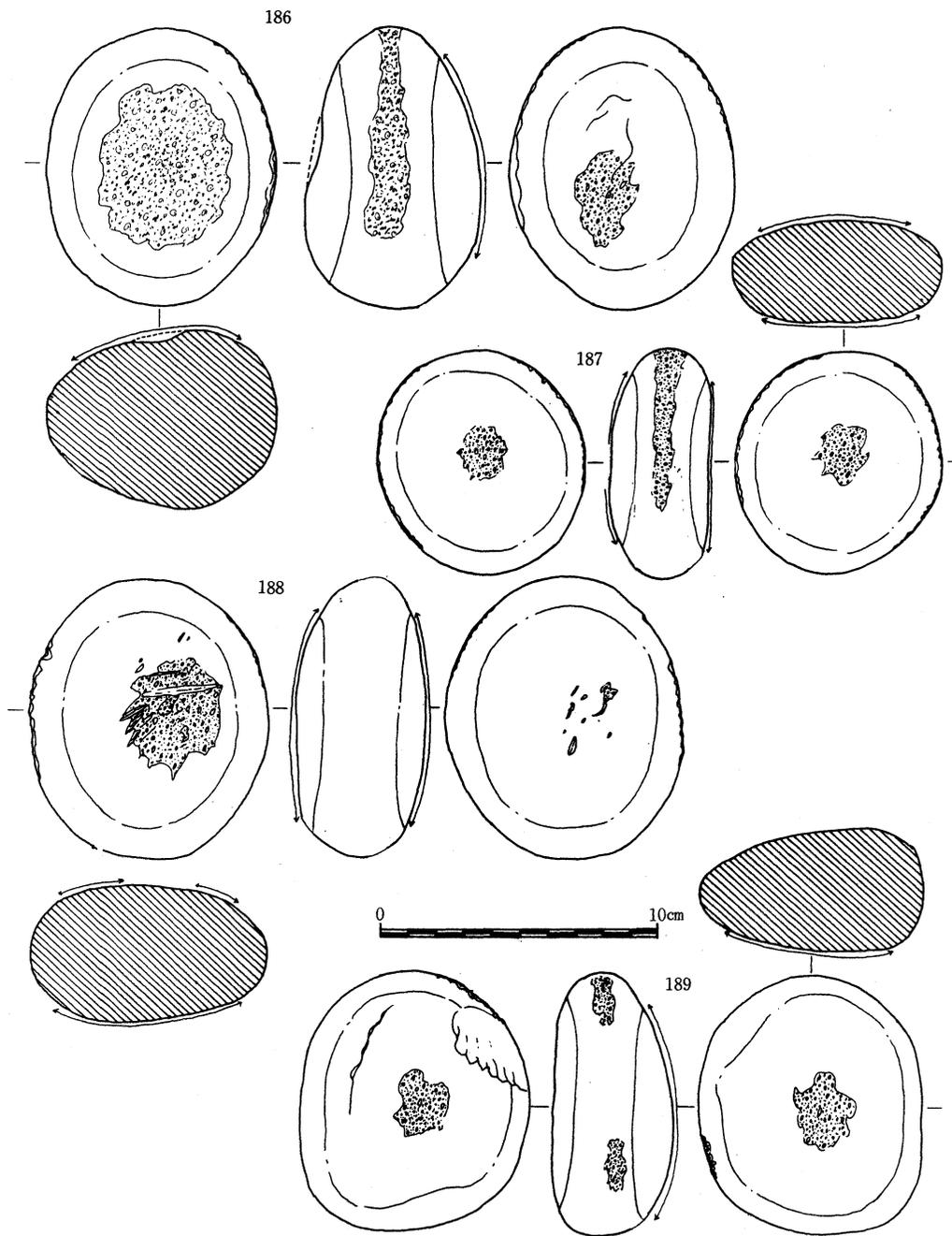
第45図 第三層出土の石器類



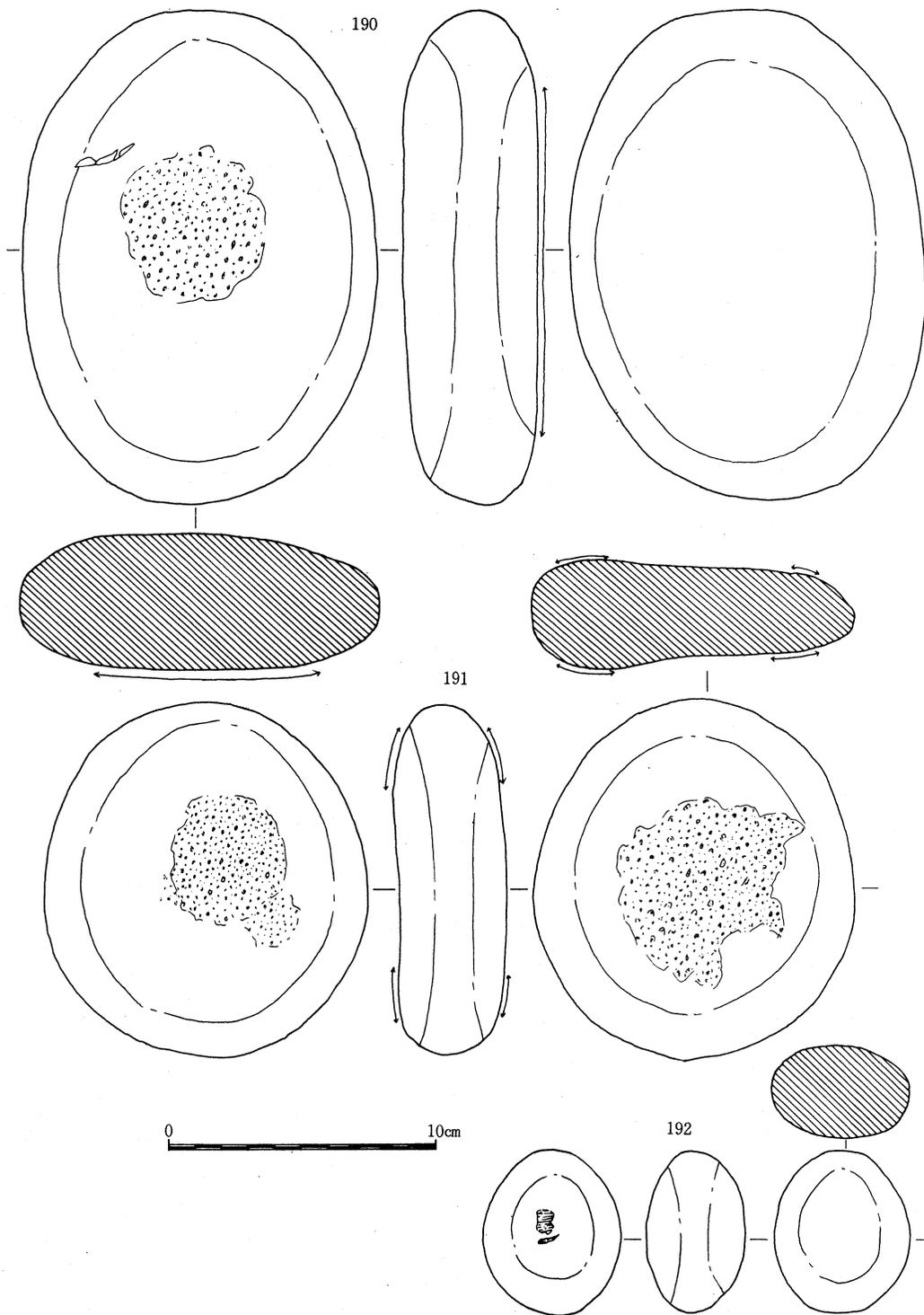
第46図 第三層出土の石器類



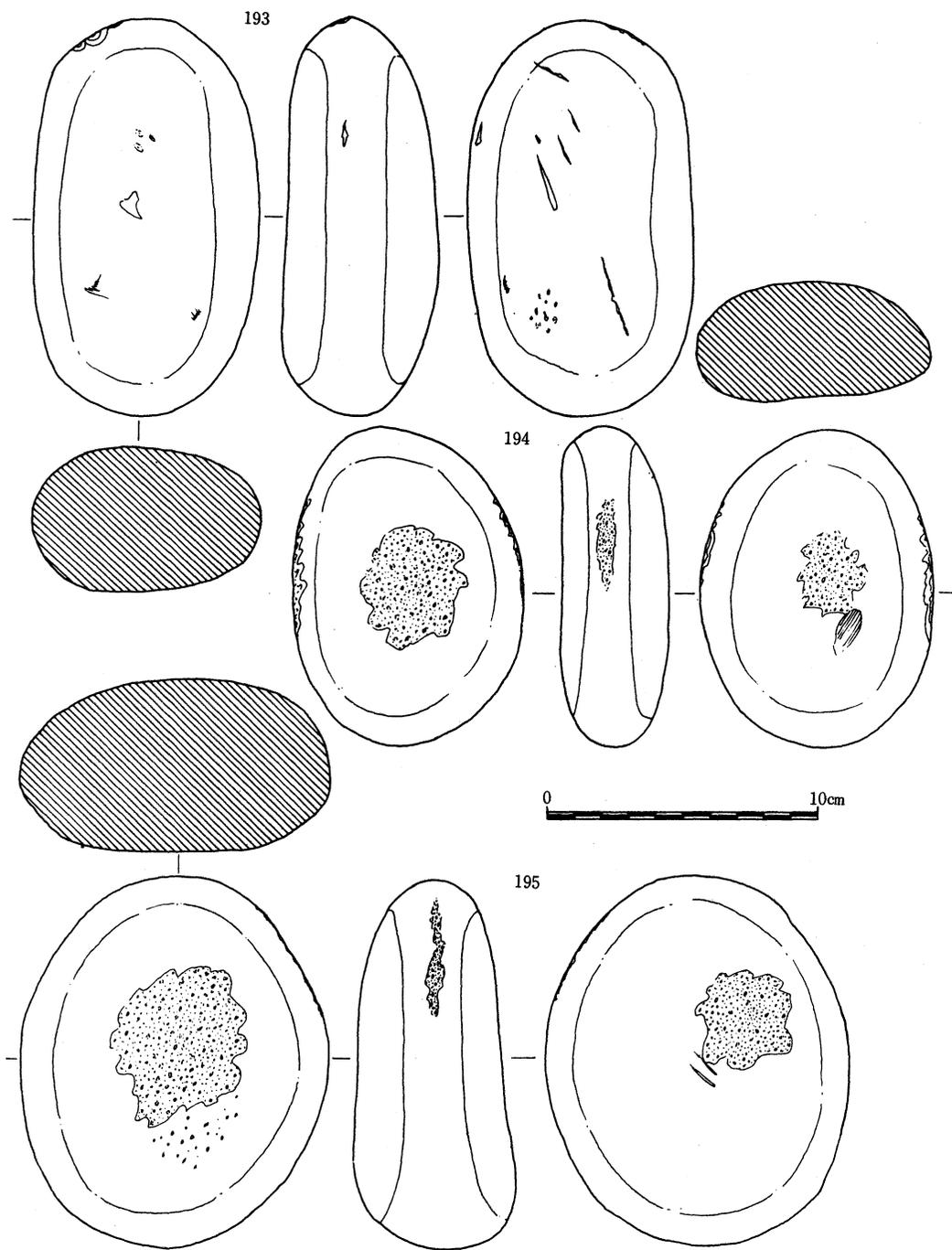
第47図 第三層出土の石器類



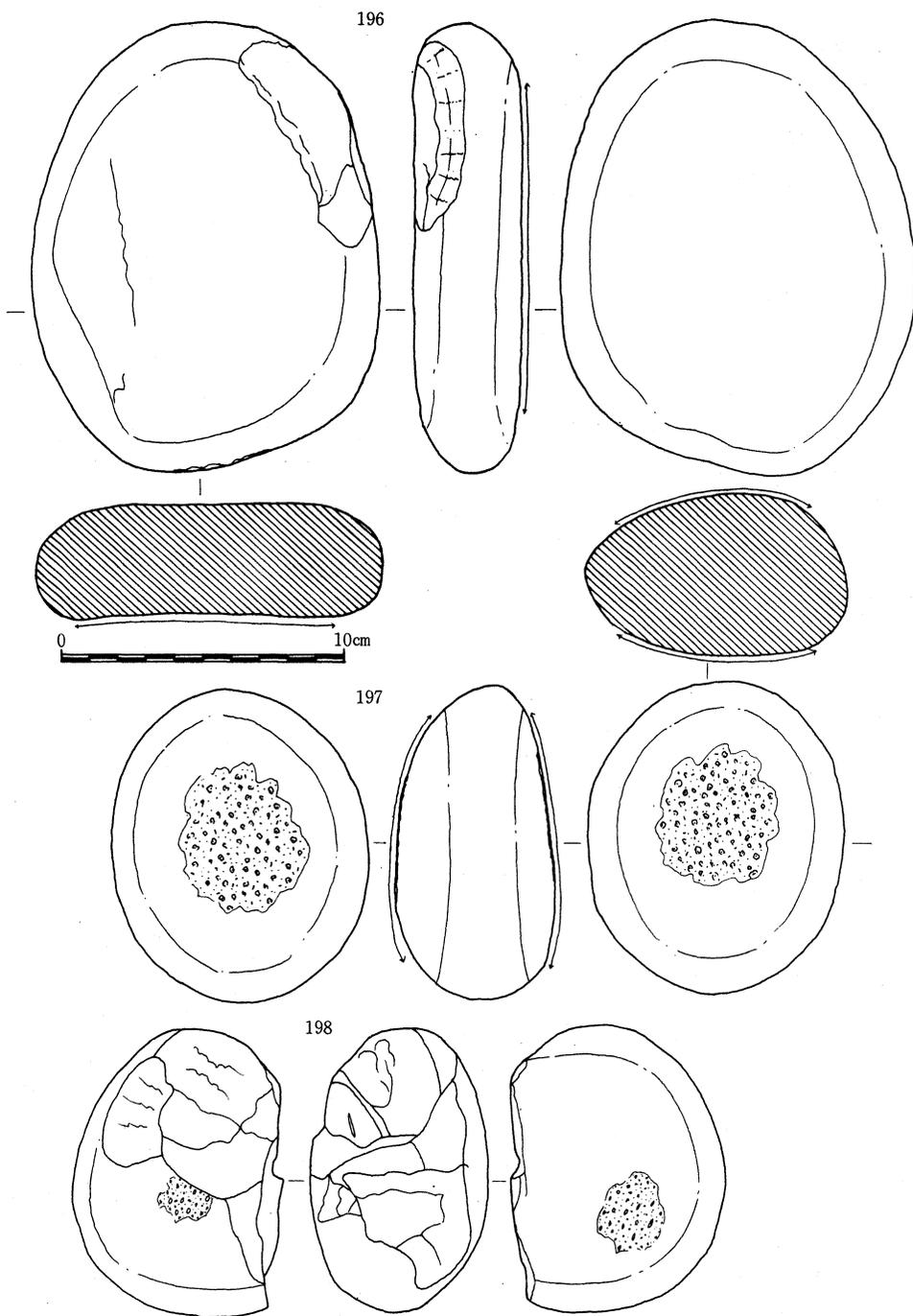
第48図 第Ⅲ層出土の石器類



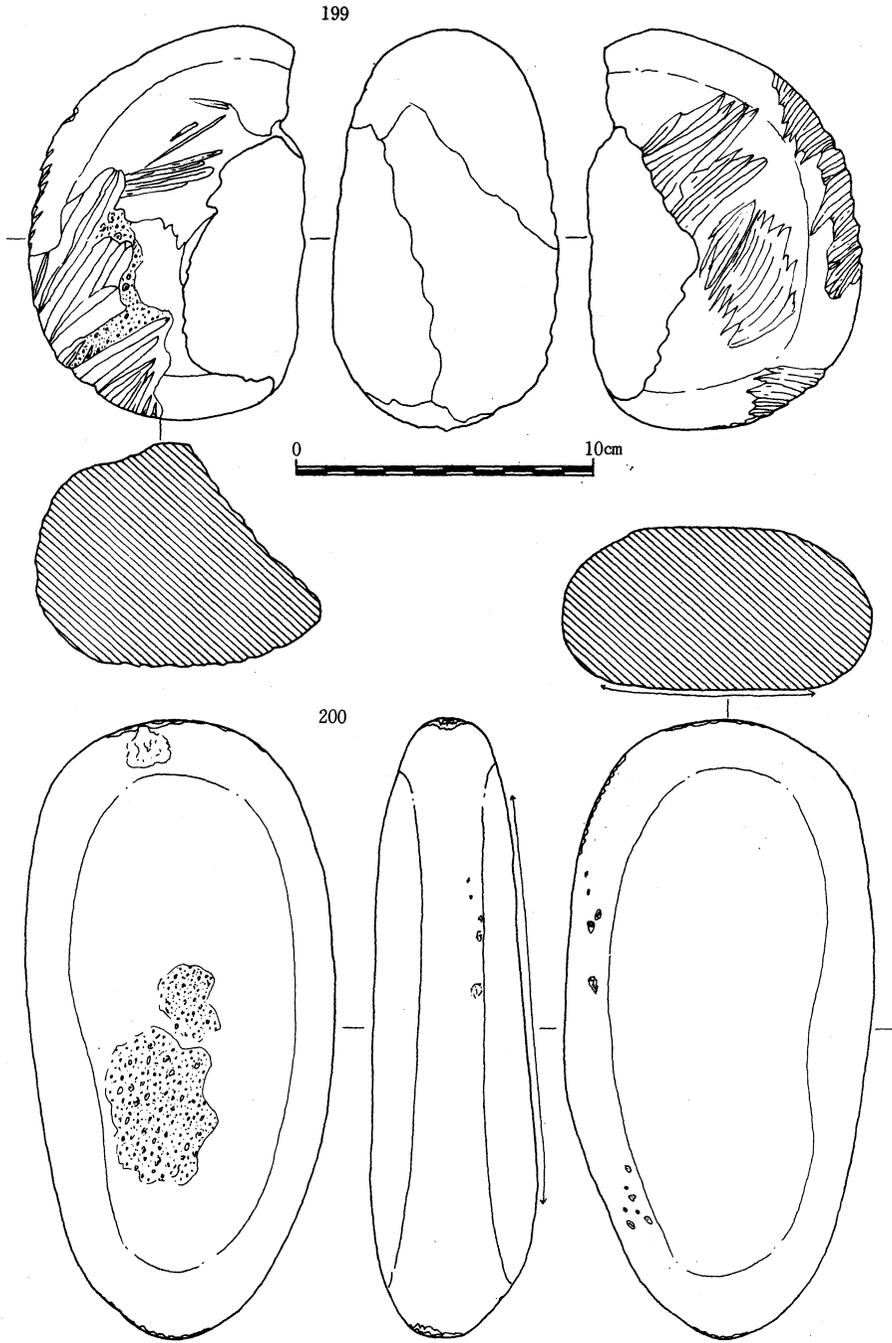
第49図 第Ⅲ層出土の石器類



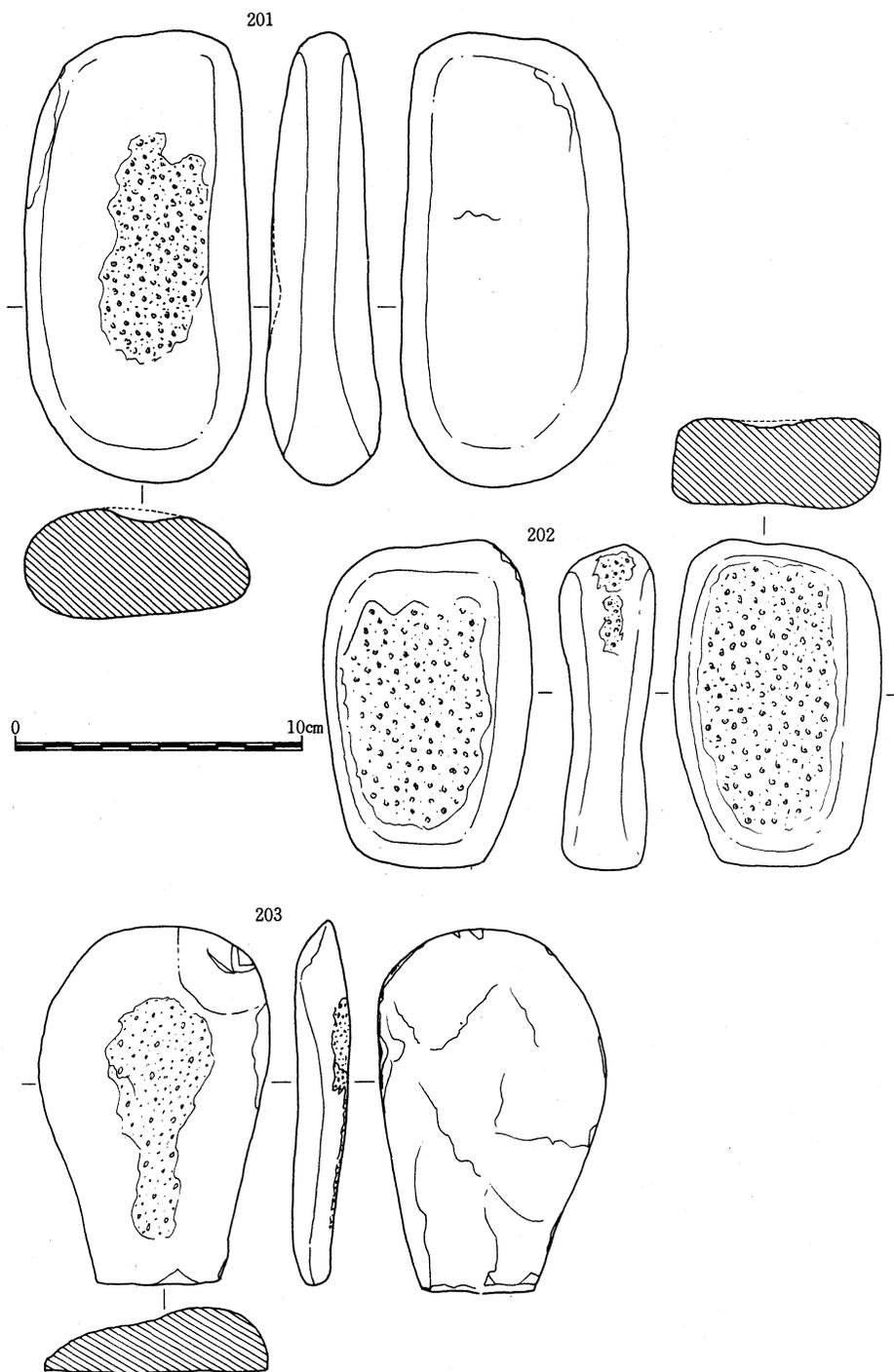
第50図 第Ⅲ層出土の石器類



第51図 第三層出土の石器類

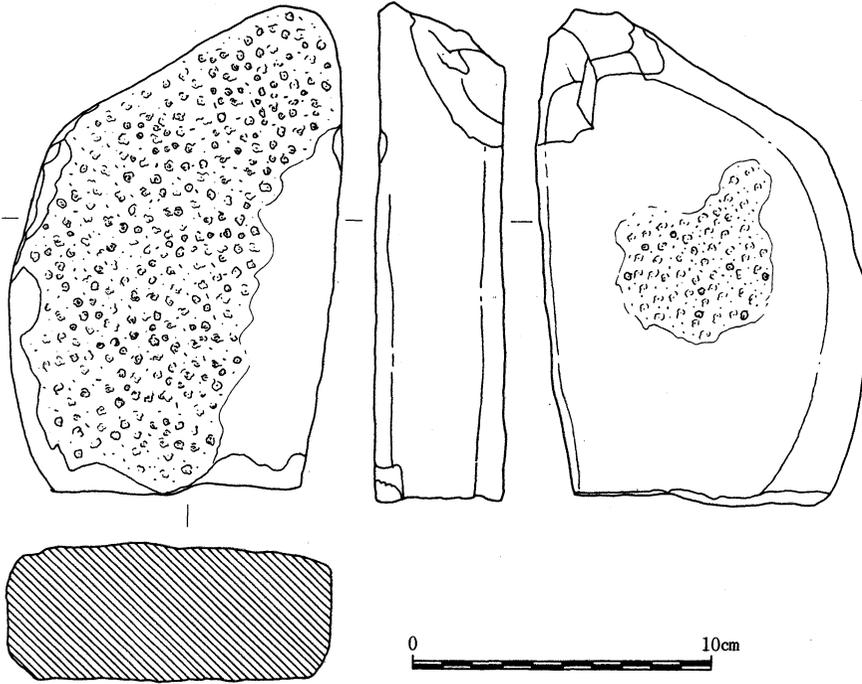


第52図 第三層出土の石器類

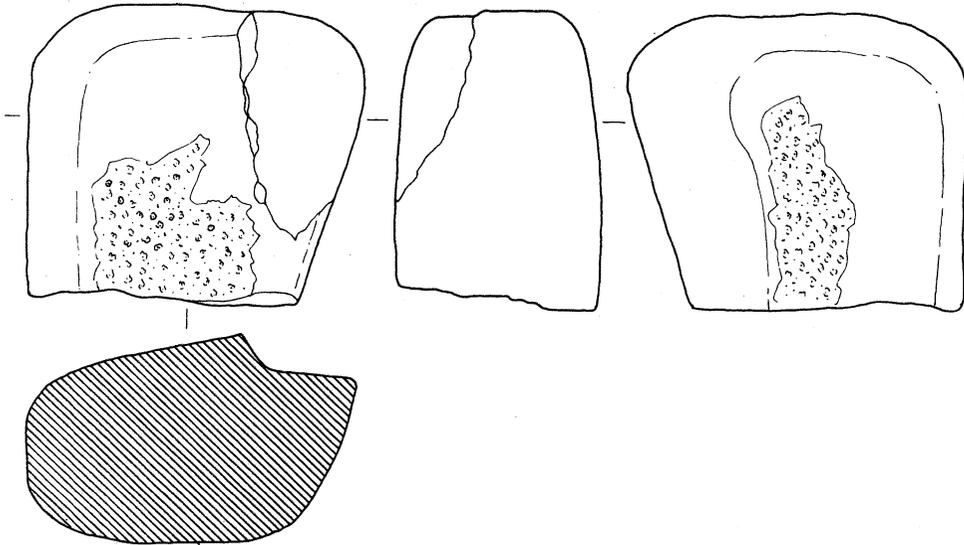


第53図 第Ⅲ層出土の石器類

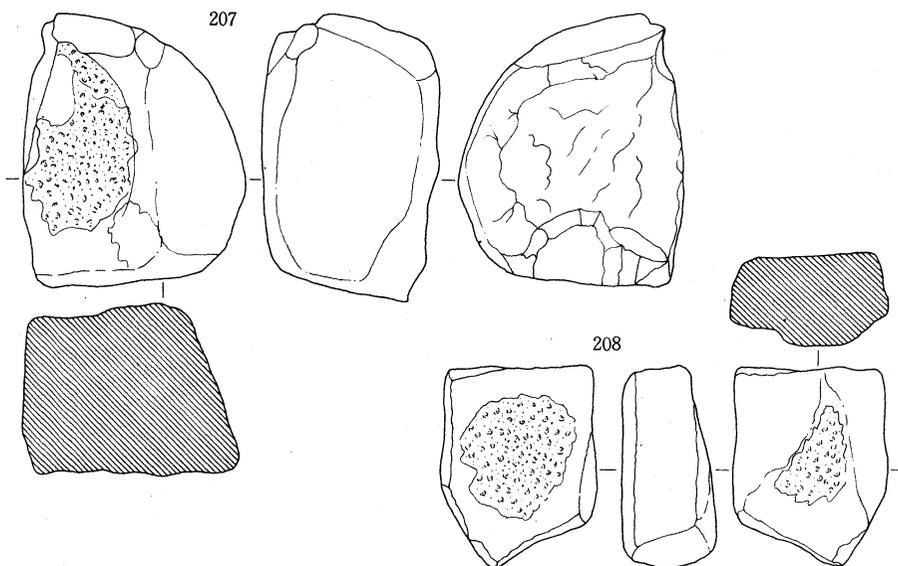
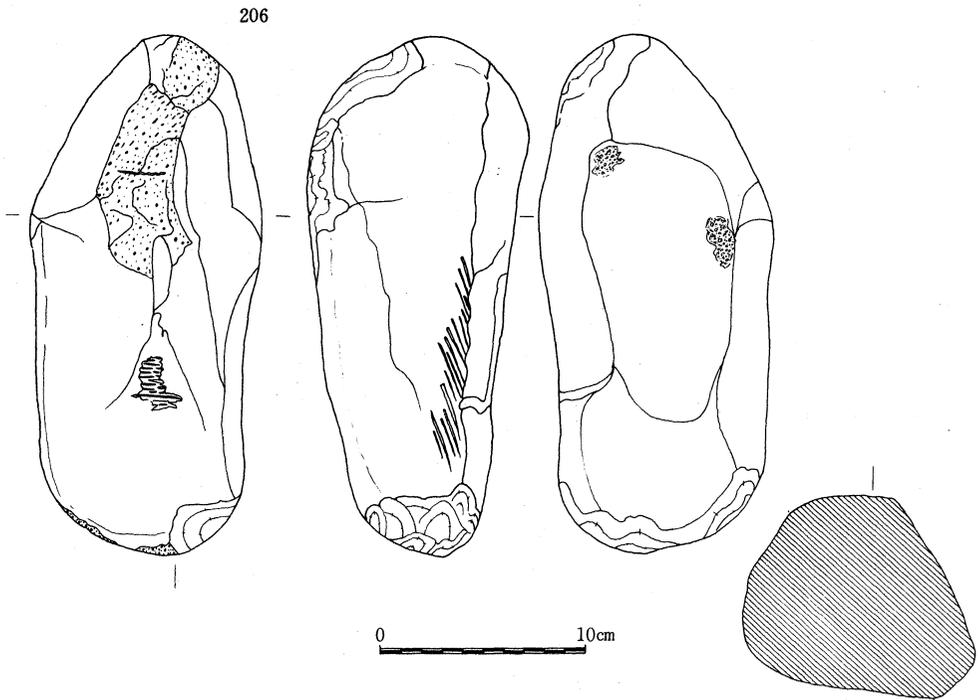
204



205

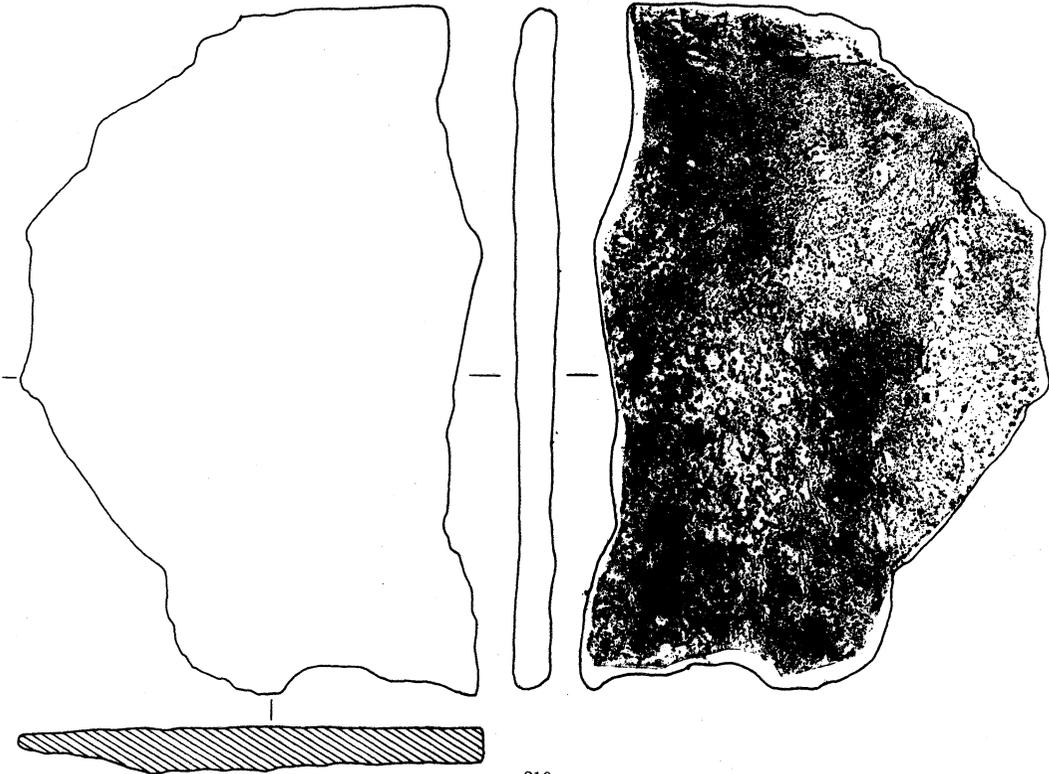


第54図 第Ⅲ層出土の石器類

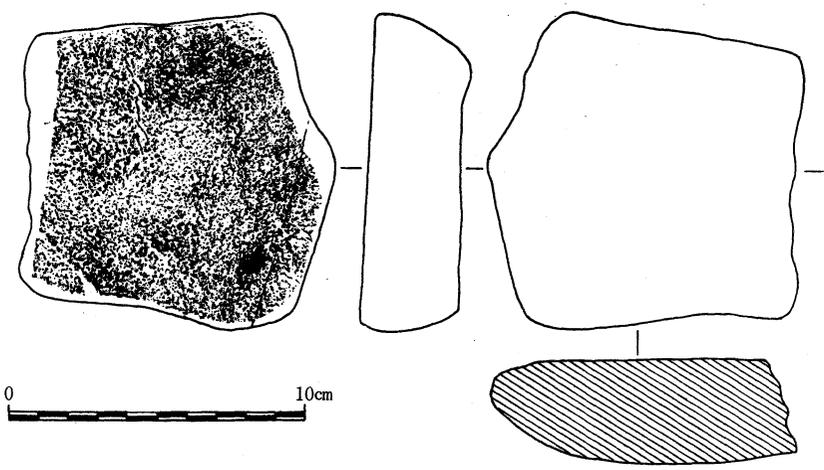


第55図 第Ⅲ層出土の石器類

209



210



第56図 第Ⅲ層出土の石器類

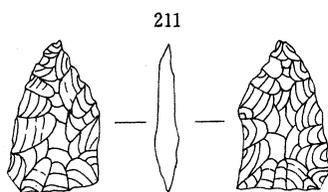
機能よりは、むしろ台石に使用したものであろう。両石共に扁平面には無数の痕跡が広い範囲に残されている。206は、特に大形である。最大長25.1cm, 最大巾11.4cm, 最大厚 9.9cm, 重さは3.3kgある。断面, 平面観共に略靴形状といえよう。上面の先端には無数の敲打痕があり, 線刻状も一部分に刻ざまれている。なお, 側面の部分にもひつかき状の線刻が多く残されている。石材は砂岩である。207は, 部厚い砂岩の自然礫で, D-5区に出土した。断面は略台形状で, 上面部だけに敲打痕が広く残っている。これも重量は1.62kgと重い。208は, 両扁平面に打痕がある小型のものである。

21 板石状敲台 (第56図-209・210)

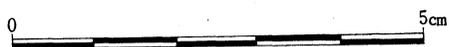
209は, 厚さが1cm前後を測る典型的な板石である。石材は砂岩でD-5区に出土した。拓影で見られるように, 一方面には無数の敲打痕が全面にあり, 片方面にはない。長期にわたる使用がうかがえられる。210の一方面にも強打ではない小槌ち状の敲打痕がある。これもD-5区に出土している。

22 石鏃 (第57図-211)

第Ⅲ層の調査ではただ1点だけの出土品である。最大長は1.7cm, 最大径1.0cm, 最大厚0.3cm, 重さは1.8gと小形である。素材はチャートと考えられるが, 濁りがあって石質としては良いとはいえない。成形もやや粗雑な出来あがりで, 柄部的一方部と先端部分を僅かに破損している。



第57図 第Ⅲ層出土の石器類



第7表 第三層出土の石器類観察表

| 番号 | 挿図 | 類別 | 区番号 | 法 量 | | | | 石質 | レベル | 備考 |
|-----|------|----------|---------|--------------------|-------------------|-------------------|------------------|------|--------|--------|
| | | | | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重さ(g) | | | |
| 128 | 第39図 | 挟入片刃磨製石斧 | E-1-35 | 12.9 ^{cm} | 3.5 ^{cm} | 2.6 ^{cm} | 270 ^g | 頁岩 | 50.994 | |
| 129 | " | 磨製石斧 | E-5-33 | 8.2 | 7.2 | 2.8 | 310 | 硬質砂石 | 49.635 | |
| 130 | " | 打製石斧 | E-1-42 | 6.8 | 4.2 | 1.3 | 60 | 粘板岩 | 50.119 | 半欠 |
| 131 | " | " | D-5-34 | 9.0 | 5.6 | 1.5 | 85 | " | 49.640 | 半欠 |
| 132 | " | " | E-4-7 | 11.8 | 7.6 | 1.5 | 150 | " | 49.962 | |
| 133 | " | " | E-6-4 | 13.5 | 7.0 | 1.5 | 230 | " | 49.652 | |
| 134 | " | ノミ形状石斧 | D-5-52 | 8.1 | 3.5 | 1.0 | 35 | 砂岩 | 49.880 | |
| 135 | 第40図 | 小形棒状槌石 | D-5-193 | 9.0 | 2.8 | 1.5 | 70 | " | 49.494 | |
| 136 | " | " | D-5-124 | 6.9 | 3.5 | 2.0 | 75 | " | 49.691 | |
| 137 | " | " | D-5-197 | 6.8 | 2.4 | 1.5 | 40 | " | 49.492 | |
| 138 | " | " | D-5-194 | 6.5 | 2.3 | 2.5 | 55 | " | 49.567 | |
| 139 | " | " | D-5-188 | 5.4 | 2.4 | 2.0 | 40 | " | 49.243 | |
| 140 | " | " | C-5-12 | 5.7 | 2.0 | 1.9 | 30 | " | 49.095 | |
| 141 | " | リーマー | F-1-48 | 6.1 | 2.3 | 1.9 | 40 | " | 51.233 | |
| 142 | " | " | E-1-43 | 7.9 | 2.3 | 2.0 | 60 | " | 50.276 | |
| 143 | " | 小形楕円状槌石 | D-6-8 | 5.5 | 4.3 | 1.7 | 60 | " | 47.048 | |
| 144 | " | " | C-5-4 | 8.0 | 3.5 | 2.2 | 80 | " | 48.274 | |
| 145 | " | " | E-2-28 | 9.7 | 7.6 | 4.3 | 480 | " | 50.793 | |
| 146 | " | 軽石加工品 | E-2-27 | 10.8 | 5.5 | 3.6 | 80 | 軽石 | 49.370 | |
| 147 | 第41図 | 小形棒状槌石 | D-3-4 | 11.5 | 4.0 | 3.0 | 190 | 砂岩 | 50.758 | |
| 148 | " | " | F-1-54 | 10.5 | 2.6 | 2.0 | 100 | " | 50.978 | |
| 149 | " | " | D-5-1 | 10.4 | 3.7 | 2.6 | 170 | " | 49.927 | |
| 150 | " | " | C-5-13 | 8.5 | 2.9 | 1.9 | 90 | " | 48.170 | |
| 151 | " | " | F-1-77 | 11.3 | 4.0 | 2.5 | 160 | " | 49.120 | |
| 152 | " | " | D-5-39 | 9.0 | 3.9 | 2.5 | 120 | " | 49.632 | |
| 153 | " | 小形楕円状槌石 | D-4-4 | 11.0 | 6.5 | 2.7 | 270 | " | 50.139 | |
| 154 | 第42図 | 角柱状槌石 | D-5-表 | 21.7 | 3.7 | 2.5 | 330 | " | | |
| 155 | " | " | D-6-9 | 17.6 | 3.6 | 3.2 | 370 | " | 49.023 | |
| 156 | " | " | E-2-19 | 13.5 | 2.8 | 2.5 | 170 | " | 50.311 | |
| 157 | " | " | D-2-1 | 15.5 | 5.1 | 3.7 | 400 | " | 50.998 | |
| 158 | " | " | D-5-25 | 13.4 | 4.9 | 2.5 | 330 | " | 49.996 | |
| 159 | 第43図 | " | D-3-2 | 12.2 | 6.8 | 4.5 | 660 | " | 50.877 | |
| 160 | " | " | D-4-1 | 15.2 | 4.4 | 3.2 | 320 | " | 50.075 | |
| 161 | " | 磨石 | E-6-5 | 10.0 | 4.7 | 4.8 | 270 | " | 49.627 | 打痕有、半欠 |

| 番号 | 挿図 | 類別 | 区番号 | 法 量 | | | | 石質 | レベル | 備考 |
|-----|------|---------|---------|-------------------|-------------------|-------------------|------------------|----|--------|---------|
| | | | | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重さ(g) | | | |
| 162 | 第43図 | 磨石 | D-6-7 | 9.0 ^{cm} | 5.3 ^{cm} | 1.7 ^{cm} | 140 ^g | 砂岩 | 48.958 | 半欠 |
| 163 | " | " | D-5-227 | 10.3 | 6.9 | 1.7 | 190 | " | 49.514 | 半欠 |
| 164 | 第44図 | 方形状大形石錘 | D-5-230 | 23.6 | 10.1 | 3.6 | 1540 | " | 49.483 | |
| 165 | " | 石錘 | D-5-203 | 8.3 | 6.1 | 2.7 | 220 | " | 49.689 | |
| 166 | 第45図 | 敲石 | D-5-9 | 12.6 | 14.3 | 4.3 | 670 | " | 49.925 | 磨痕有 |
| 167 | " | " | D-3-3 | 8.4 | 6.6 | 4.0 | 360 | " | 50.806 | " |
| 168 | " | " | D-5-189 | 11.5 | 9.0 | 4.0 | 620 | " | 49.505 | " |
| 169 | " | " | D-5-29 | 10.0 | 7.5 | 4.3 | 530 | " | 49.803 | " |
| 170 | " | " | D-5-12 | 10.5 | 8.5 | 5.0 | 650 | " | 49.721 | " |
| 171 | " | " | D-5-54 | 7.9 | 5.7 | 3.5 | 300 | " | 49.911 | " |
| 172 | " | " | D-5-96 | 10.3 | 9.1 | 5.3 | 680 | " | 49.747 | " |
| 173 | " | 小形敲石 | D-5-195 | 6.0 | 5.1 | 2.6 | 125 | " | 49.226 | " |
| 174 | " | " | D-5-44 | 6.3 | 5.1 | 3.2 | 160 | " | 49.779 | " |
| 175 | 第46図 | 磨石 | D-5-26 | 12.6 | 9.1 | 5.7 | 830 | " | 49.450 | 敲石併用、半欠 |
| 176 | " | " | D-5-72 | 10.3 | 8.0 | 4.0 | 270 | " | 49.875 | " " |
| 177 | " | " | D-5-256 | 11.8 | 9.9 | 4.8 | 770 | " | 49.759 | " |
| 178 | " | " | D-5-202 | 8.7 | 6.6 | 3.7 | 350 | " | 49.688 | " 半欠 |
| 179 | " | " | D-5-212 | 11.1 | 9.0 | 5.2 | 830 | " | 49.574 | " |
| 180 | " | " | D-5-68 | 9.5 | 5.2 | 5.3 | 470 | " | 49.679 | " 半欠 |
| 181 | " | " | D-5-175 | 13.3 | 9.5 | 8.3 | 1350 | " | 49.656 | " |
| 182 | 第47図 | " | D-5-229 | 14.8 | 12.0 | 5.5 | 1610 | " | 49.514 | " |
| 183 | " | " | D-3-1 | 14.2 | 12.0 | 5.2 | 1300 | " | 50.886 | " |
| 184 | " | " | D-4-3 | 14.6 | 10.7 | 4.9 | 1110 | " | 50.119 | " |
| 185 | " | " | D-5-263 | 16.2 | 12.7 | 6.0 | 1700 | " | 49.503 | " |
| 186 | 第48図 | " | D-4-表 | 10.0 | 8.2 | 6.4 | 760 | " | | " |
| 187 | " | " | D-5-201 | 7.9 | 8.5 | 3.6 | 300 | " | 49.718 | " |
| 188 | " | " | D-8-1 | 10.0 | 8.5 | 4.8 | 550 | " | 46.526 | " |
| 189 | " | " | D-6-表 | 9.2 | 8.2 | 4.3 | 550 | " | | " |
| 190 | 第49図 | " | D-2-11 | 18.5 | 13.3 | 5.0 | 1830 | " | 50.497 | " |
| 191 | " | " | D-3-13 | 13.2 | 12.1 | 4.1 | 970 | " | 50.840 | " |
| 192 | " | " | D-6-13 | 6.1 | 5.2 | 3.7 | 160 | " | 48.678 | " 小形 |
| 193 | 第50図 | " | D-6-表 | 14.5 | 8.4 | 5.3 | 1000 | " | | " |
| 194 | " | " | F-1-表 | 11.7 | 8.1 | 3.9 | 610 | " | | " |
| 195 | " | " | E-6-表 | 13.5 | 11.2 | 6.3 | 1320 | " | | " |
| 196 | 第51図 | " | D-5-74 | 15.5 | 12.3 | 3.8 | 1180 | " | 49.879 | " |

| 番号 | 挿図 | 類別 | 区番号 | 法 量 | | | | 石質 | レベル | 備考 |
|-----|------|---------|---------|--------------------|-------------------|-------------------|------------------|------|--------|------|
| | | | | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重さ(g) | | | |
| 197 | 第51図 | 磨石 | D-5-257 | 10.9 ^{cm} | 9.1 ^{cm} | 5.6 ^{cm} | 780 ^g | 砂岩 | 49.772 | 敲石併用 |
| 198 | " | " | D-5-250 | 9.9 | 7.4 | 6.3 | 560 | " | 49.582 | "、半欠 |
| 199 | 第52図 | " | D-5-192 | 13.3 | 9.2 | 7.4 | 1120 | " | 49.823 | "、半欠 |
| 200 | " | 大形楕円状磨石 | D-5-184 | 20.7 | 10.4 | 5.4 | 1640 | " | 49.809 | " |
| 201 | 第53図 | 方形状磨石 | D-5-164 | 15.4 | 7.7 | 3.7 | 720 | " | 49.561 | 敲石併用 |
| 202 | " | " | F-1-表 | 11.1 | 7.2 | 3.1 | 450 | " | | " |
| 203 | " | " | D-5-137 | 12.3 | 7.8 | 2.1 | 210 | " | 49.748 | " |
| 204 | 第54図 | 敲台 | D-5-71 | 16.6 | 11.0 | 4.6 | 1510 | " | 49.735 | |
| 205 | " | " | D-5-38 | 9.8 | 11.0 | 6.9 | 1250 | " | 49.512 | |
| 206 | 第55図 | " | D-5-2 | 25.1 | 11.4 | 9.9 | 3500 | " | 49.865 | 大形 |
| 207 | " | " | D-5-32 | 13.3 | 10.9 | 8.5 | 1620 | " | 49.755 | |
| 208 | " | " | E-1-28 | 9.7 | 7.6 | 4.3 | 480 | " | 50.793 | |
| 209 | 第56図 | 板石状敲台 | D-5-135 | 23.0 | 15.5 | 1.3 | 800 | " | 49.738 | |
| 210 | " | " | D-5-122 | 10.5 | 10.5 | 3.5 | 610 | " | 49.699 | |
| 211 | 第57図 | 石鏃 | E-1-38 | 1.7 | 1.0 | 0.3 | 1.8 | チャート | 50.687 | |

小結

第Ⅲ層の調査結果は、包含層のおおかたが消失していたという現状のなか、表面採集資料などを含め、石器類119点、土器類440点であった。この数字は予期以上の成果といってよい。なお、全体像を把握するまでには至らなかったが、溝状遺構の一部を検出し、更には、遺構内土壌を分析（プラント・オパール）する機会（宮崎大 藤原教授による）を得たことは、調査前には全く予想できなかった大収穫である。

土器類は小破片が多く、図示できたものは102点である。うち、第Ⅰ類～第Ⅲ類土器に分類した土器群は、福岡県夜臼遺跡出土の土器を標式とする夜臼式土器であろう。口縁部と頸部に刻目突帯をめぐらす特徴的な土器で、県内では金峰町下原に単純遺構が発見されるなどの前例はあるが、本町での発掘例では数少ない出土である。縄文時代晩期終末の土器とされ、弥生時代前期の土器を伴う場合が多いが、本遺跡の場合でも例外ではない。第Ⅳ類土器～第Ⅴ類土器が夜臼式土器に前後する土器群と推定される。

石器類の特徴としては、石斧類に比較し磨石、敲石、台石等いわゆる加工用の石器類の多いことである。こうした現象は、縄文文化から弥生文化への転換期という、生活環境の違いからきたものであろうか。いずれにして第Ⅲ層の調査は、特異な石器組成を示したといえよう。

第7章 第Ⅵ層の出土遺物

第Ⅵ層の調査は、第Ⅲ層の調査とは対比的に、正常な堆積状況のもとで行うことができた。つまり、第Ⅳ層までの上層部分の攪乱はめだってはいたが、その被害は第Ⅴ層としたアカホヤ層上位までであり、第Ⅵ層とした包含層は完全なパック状態にあったからである。しかしながら、出土遺物の数は決して大量とはいえない結果で終わった。

以下類別及び個々の内容は次のとおりである。

第1節 土器類

第Ⅵ層に出土した土器類は、その器形や文様等の特徴から次のように分類される。

- 第Ⅰa類土器 口縁部僅かに外反し、主文様は口縁部に貝殻腹縁状の刺突文を羽状あるいは斜位に施し、胴部には貝殻腹縁状の綾杉文。
- 第Ⅰb類土器 器形は第Ⅰa類に準ずるが口縁部の文様は、貝殻腹縁状の刺突文を横位に施したものの、波状口縁も見られる。
- 第Ⅱa類土器 口縁部僅かに外傾し、器面全体を貝殻腹縁状の綾杉文でかざるもの。
- 第Ⅱb類土器 波状口縁で僅かに外傾し、器面全体を横位の条痕文でかざるもの。
- 第Ⅲ類土器 器形は円筒形。器面全体に串状先端による無雑作な引っかき文様のあるもの。
- 第Ⅳ類土器 器形は円筒形。典型的な横位の押し引き文と横位の条痕文。
- 第Ⅴa類土器 器形は口縁部が波状をなす角筒形。口縁部に貝殻腹縁状の刻みや縦位の刺突文をめぐらし、胴部は斜位の条痕文を主文に、横位や斜位の貝殻腹縁状の刺突文を組み合わせたもの。
- 第Ⅴb類土器 器形は円筒形。口唇部に刻み目を施し、胴部は第Ⅴa類と同様の文様を施したものの。
- 第Ⅴc類土器 直口する円筒形。口唇部に刻み目をめぐらし、胴部は横位の条痕文でかざるもの。
- 第Ⅵa類土器 器形は口縁部が大きく外反する円筒形。口唇部に刻み目を施し、口縁部に横位と斜位の凹線と、刺突連点を併用したもの。
- 第Ⅵb類土器 口縁部が大きく外反する円筒形。口唇部に刻み目を施し、横位と縦位の凹線で区画をつくり、その中に部分的に縦位の撚糸文を施したもの。
- 第Ⅶ類土器 器面全体を楕円押型文でかざり、口縁部内面の上部部分にも楕円押型文を施したもの。

第58図 (212~219)

212は、第Ⅰa類土器である。外反する口縁部の器厚は厚手で、良く整っている。口唇に浅い刻みを施し、口縁部には斜位の貝殻腹縁状の刺突文がある。復元口径は30cm程度を測ることができる。213は、第Ⅰb類土器である。外反する口縁部は頸部辺りで急激に厚味を増している。

口唇部にかすかな刻みを施し、口縁部の文様は貝殻腹縁の刺突が、やや深めに横位でめぐっている。口径は21cm前後のものである。214は、第I a類土器である。特に厚手の口縁部で、口唇には刻みは無い。口縁部の文様は、貝殻腹縁状刺突文は斜位である。215は、第I b類土器である。口縁部の外反はやや強く、横位の貝殻腹縁状刺突は横位にめぐっている。波状口縁であろう。216は、第I b類土器である。やや薄手で復元口径は20cm前後を測る。217は、第I a類土器である。やや薄手である。斜位の刺突文が見られ器厚は整っている。218は、口唇部が特に厚く、突帯状張り出しとなっている。口縁部文様は第I b類に類する。219は、第I a類土器の典型的な文様帯を有している。頸部はやや薄手ではあるが、胴部への線は厚味を増している。復元口径は23cm程度。

第59図 (220~227)

220は、第I a類土器である。やや厚手で復元口径は28cm前後とやや大型に属する。口唇部には浅い刻みが2条並行している。221は、第I b類土器である。特に薄手のもので、復元口径も約17cmと小型に属する。222は、やや器面の状態は良くないが、第I b類土器であろう。頸部で厚味を増している。復元口径は17cm内外を測る。223は、頸部部分の破片である。第I b類の文様があうかがえられる。224は、頸部から胴部に移行する辺りの破片である。典型的綾杉文が見られる第I a類土器である。器厚は特に整っている。225は、特に肥厚する口縁部をもち、口唇部上面は平坦となって縦位の細く浅い沈線がめぐっている。口縁部外面には施文は無いが、内面部には3条の凹線がめぐっている。直口する口縁部と考えられるが小片のため類別は不明、227は、第I a類土器である。口縁部の外反は緩やかで、口唇部は突帯状の張り出しとなる。第I a類土器である。復元口径は16cmを測る。

第60図 (228~232)

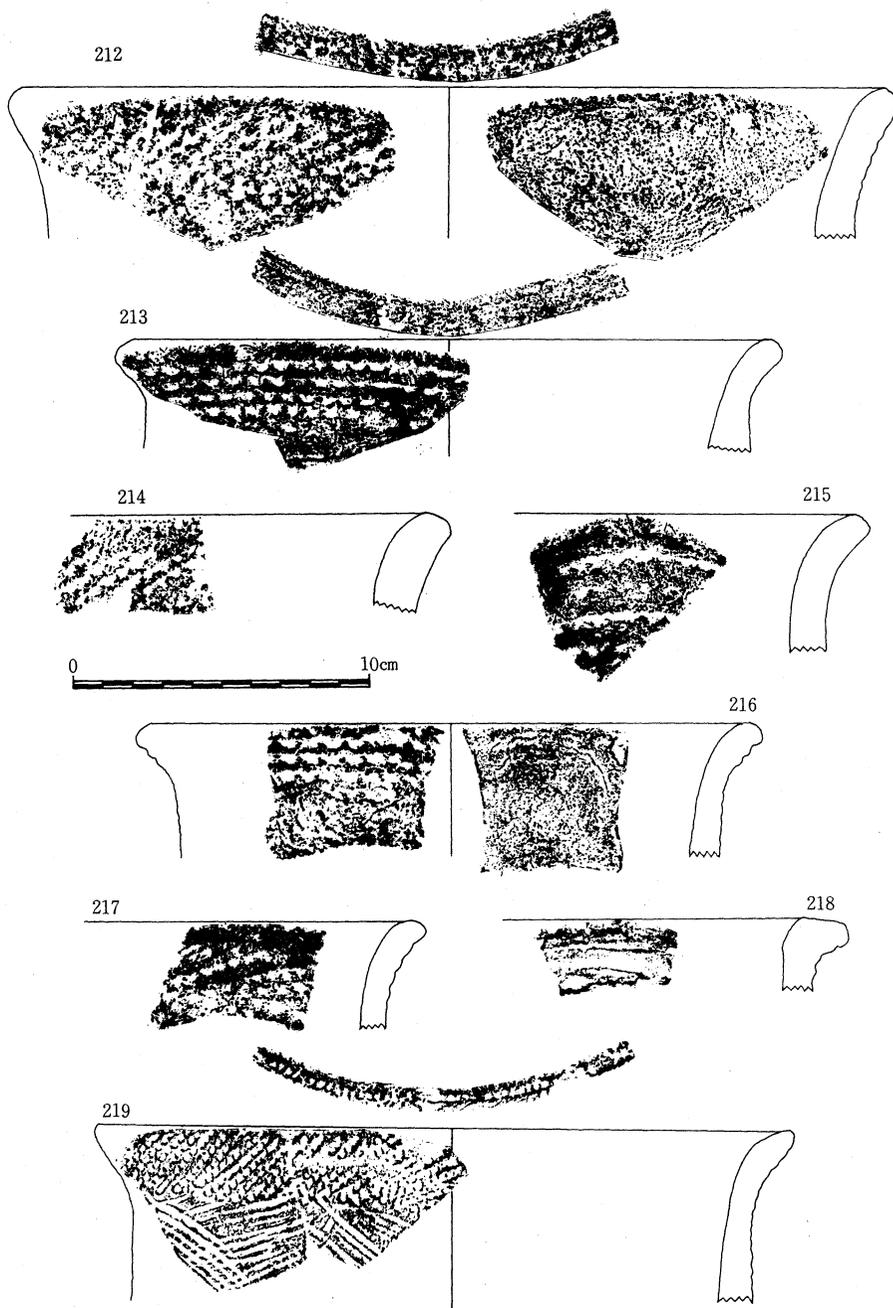
いずれも典型的な綾杉状の文様を有するもので、第I類土器の胴部破片である。228は、胴部から底部に移行する辺りのもので、復元できた上縁部分で約20cm、下縁で16.5cmを測る。器厚は良く整っている。229及び232は、共に底部からの立ち上り部分の破片。232は、特に厚手の大型土器のものであろう。

第61図 (233~244)

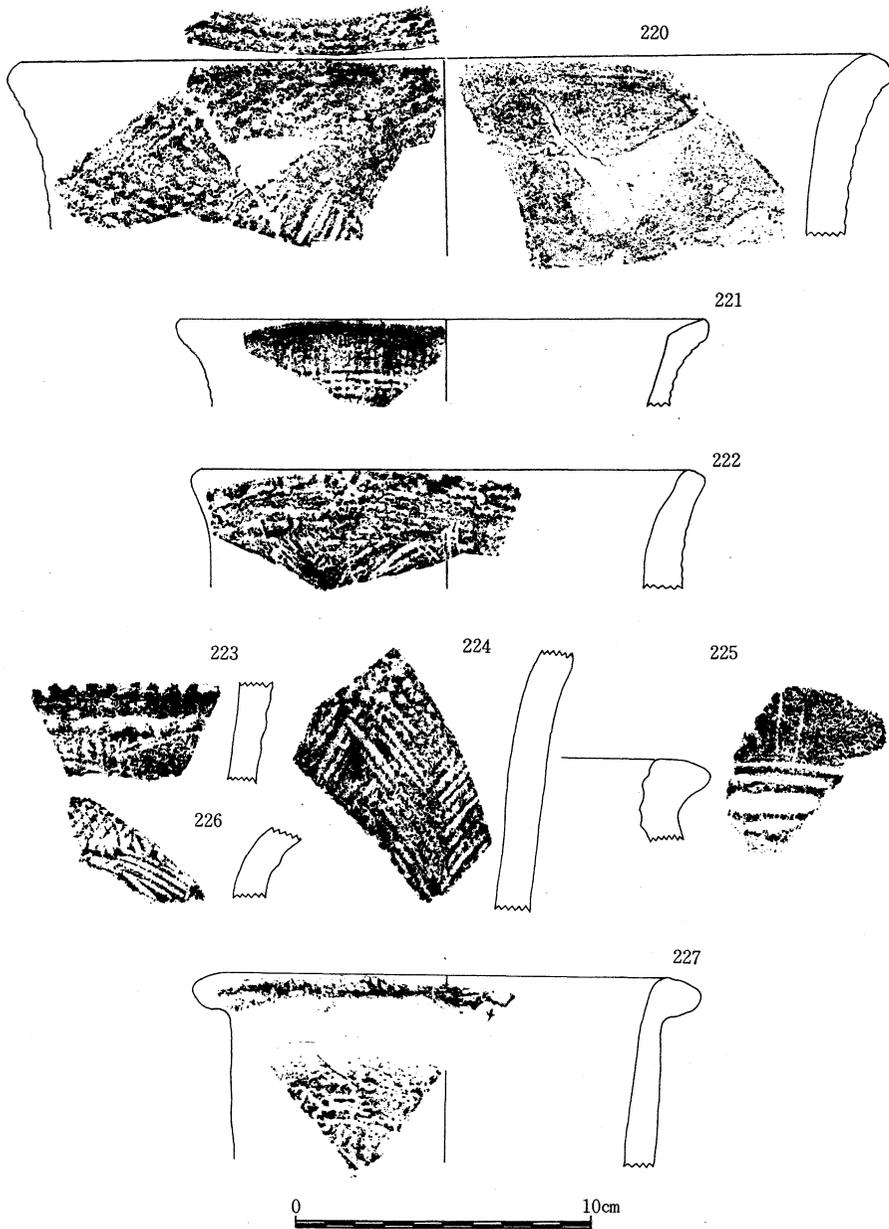
233~241までは共に綾杉状文様を有する第I類土器の胴部破片である。240を除き、他のものはすべて228と同器体と考えられたが接合しなかった。第I類土器であろう。242は、第II a類土器である。やや深めの綾杉文で全面をかざっており、復元口径は約15cmと小型のものである。240は同器体のものであるが接合しなかった。243及び244は、第II b類土器である。243は口唇部先端を僅かに欠損し、頸部から胴部に移行する器厚は急激に厚味を増している。横位のやや深い条痕だけで器面をかざっている。

第62図 (245~263)

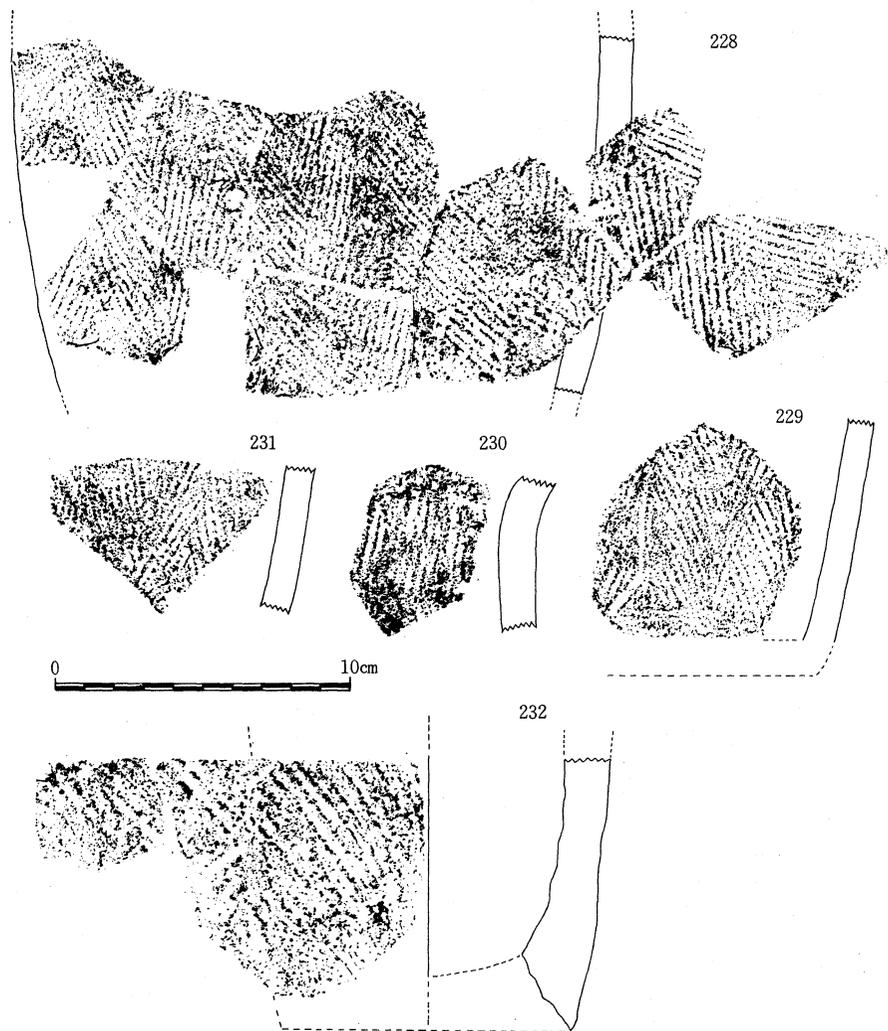
245は、厚手の胴部破片である。器面には指頭による押圧痕をそのまま残し、串状先端と考えられる無雑作なひっかけ文が施されている。復元した上縁で器巾は12cm、下縁で11.5cmを測る円筒形の小型土器である。第III類土器とした。246~249は、器面に押し引き文様と横位の条



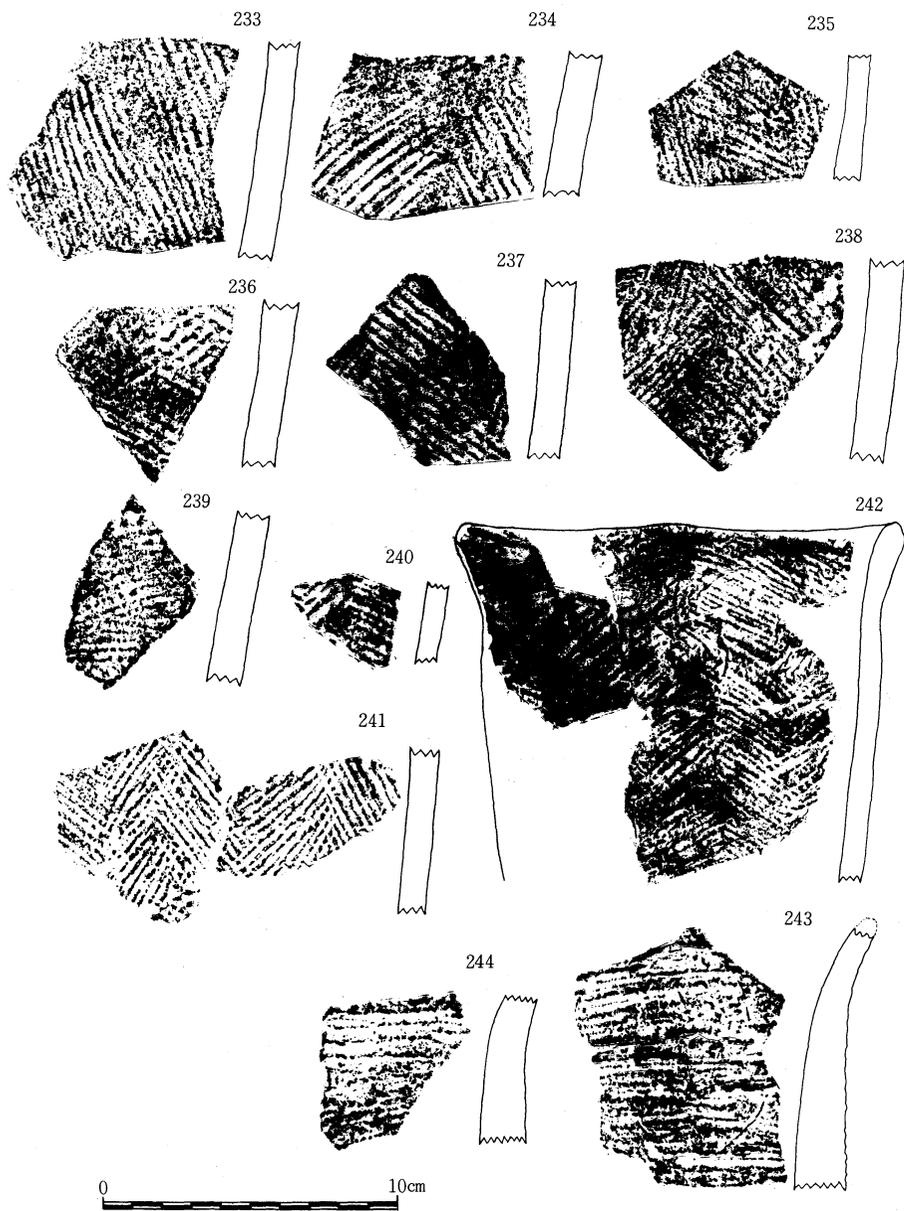
第58図 第VI層出土の土器類



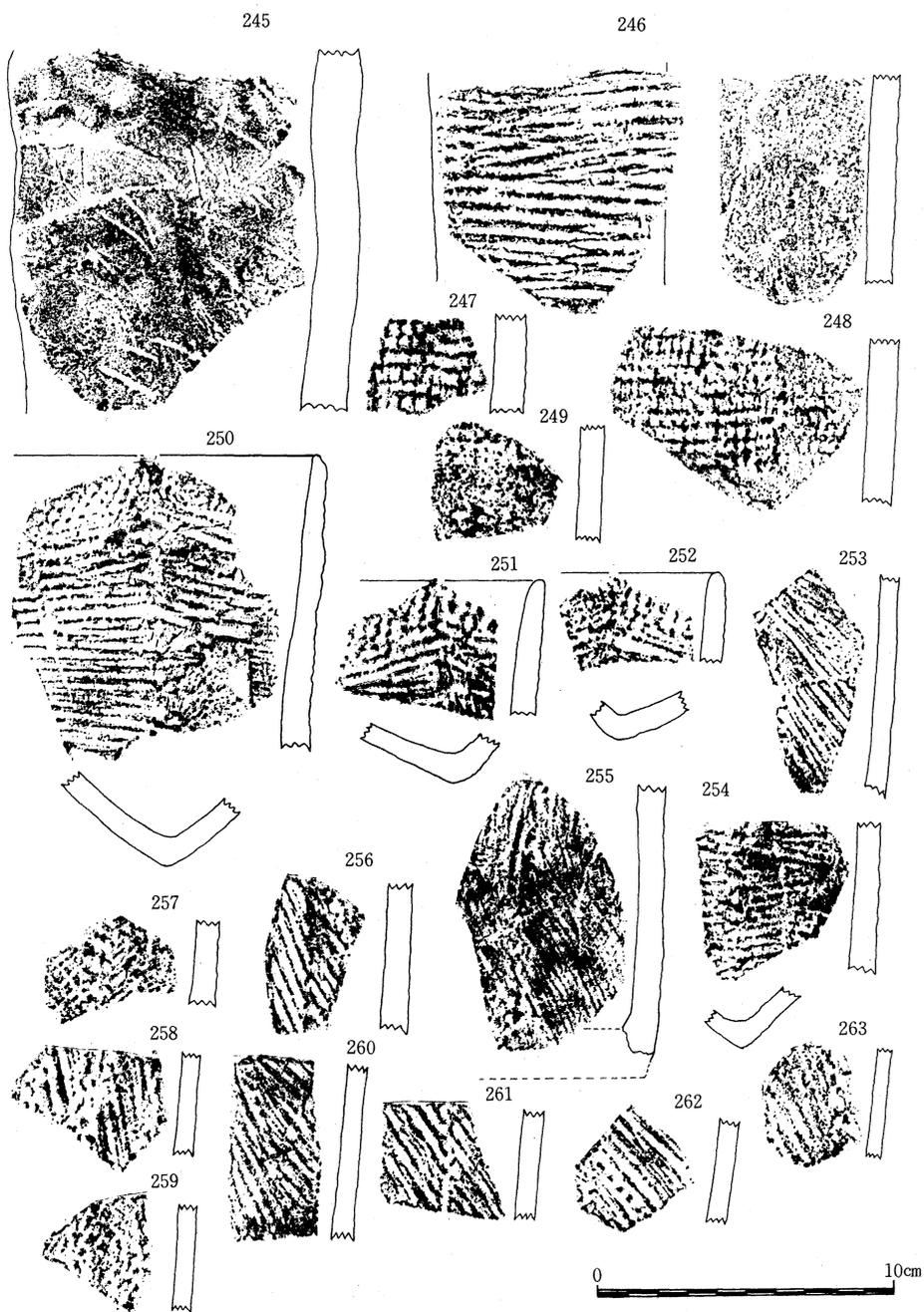
第59図 第Ⅵ層出土の土器類



第60図 第VI層出土の土器類



第61図 第Ⅵ層出土の土器類

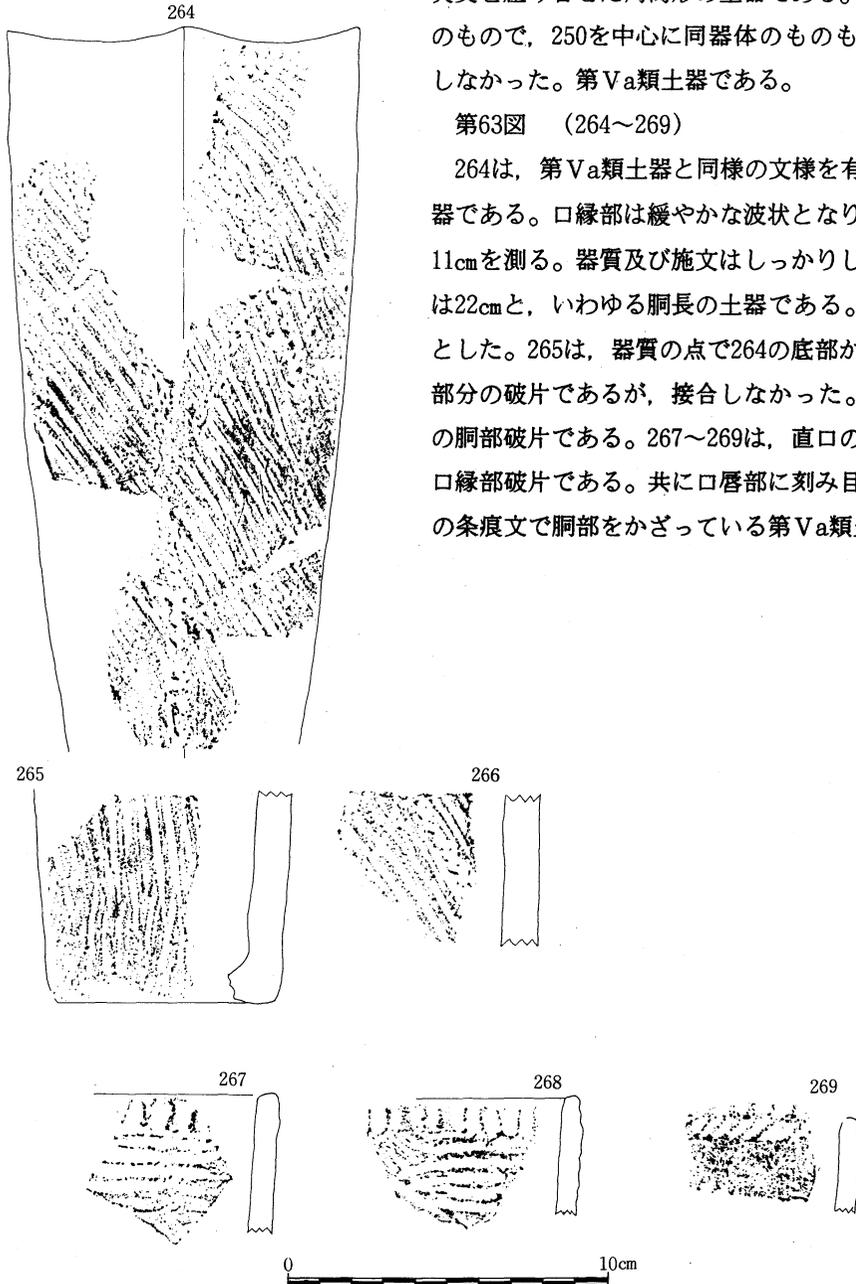


第62図 第Ⅵ層出土の土器類

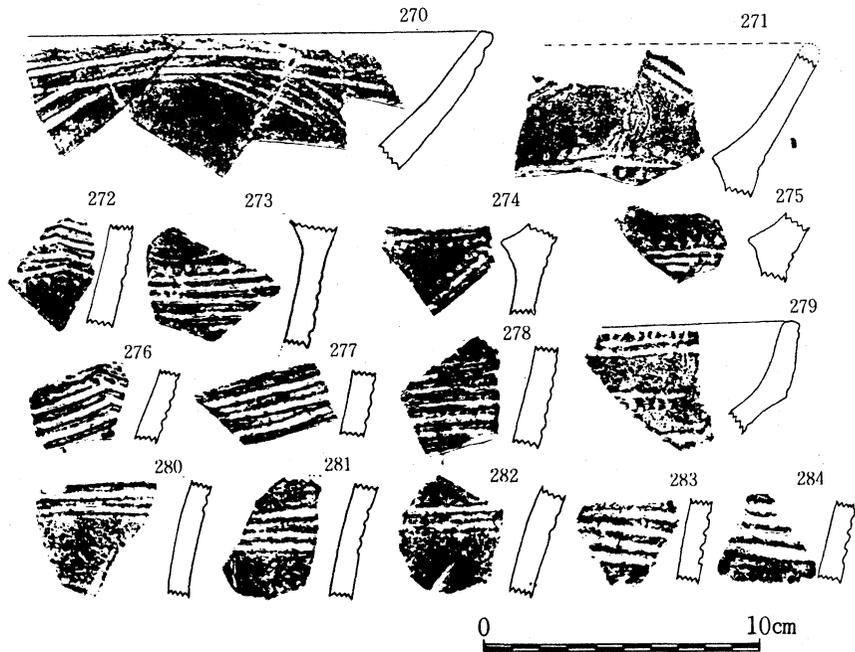
痕文を有する破片で、器形は直口する円筒形である。250～263は、口縁部に横位の貝殻腹縁状刺突文や刻みをめぐらし、胴部は横位、斜位の条痕文と、縦位の刺突文を組み合せた角筒形の土器である。いずれも薄手のもので、250を中心に同器体のものもあったが接合しなかった。第Va類土器である。

第63図 (264～269)

264は、第Va類土器と同様の文様を有する円筒形土器である。口縁部は緩やかな波状となり、復元口径は11cmを測る。器質及び施文はしっかりしており復元高は22cmと、いわゆる胴長の土器である。第Vb類土器とした。265は、器質の点で264の底部からの立ち上り部分の破片であるが、接合しなかった。266も同器体の胴部破片である。267～269は、直口の円筒形土器の口縁部破片である。共に口唇部に刻み目を施し、横位の条痕文で胴部をかざっている第Va類土器である。



第63図 第VI層出土の土器類



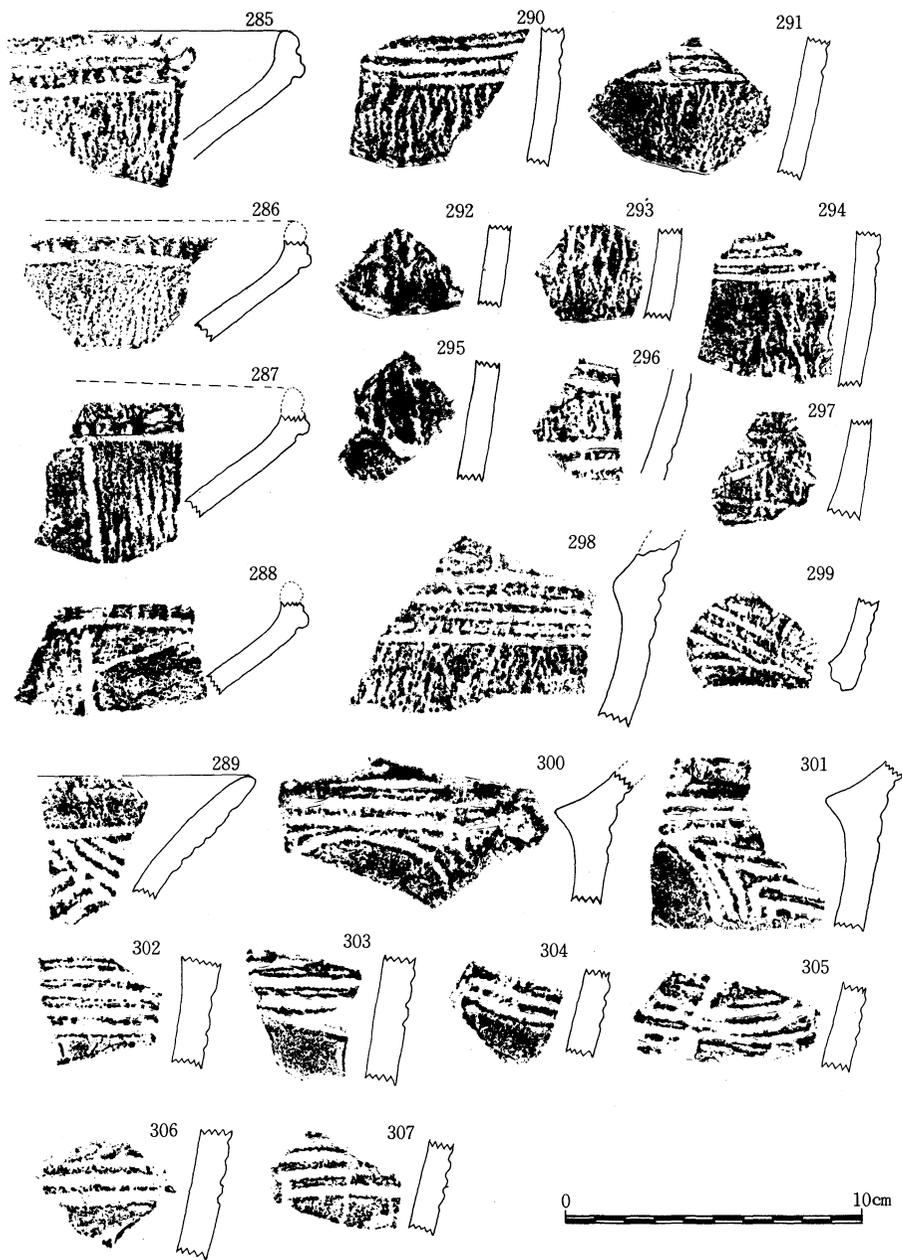
第64図 第Ⅵ層出土の土器類

第64図 (270~284)

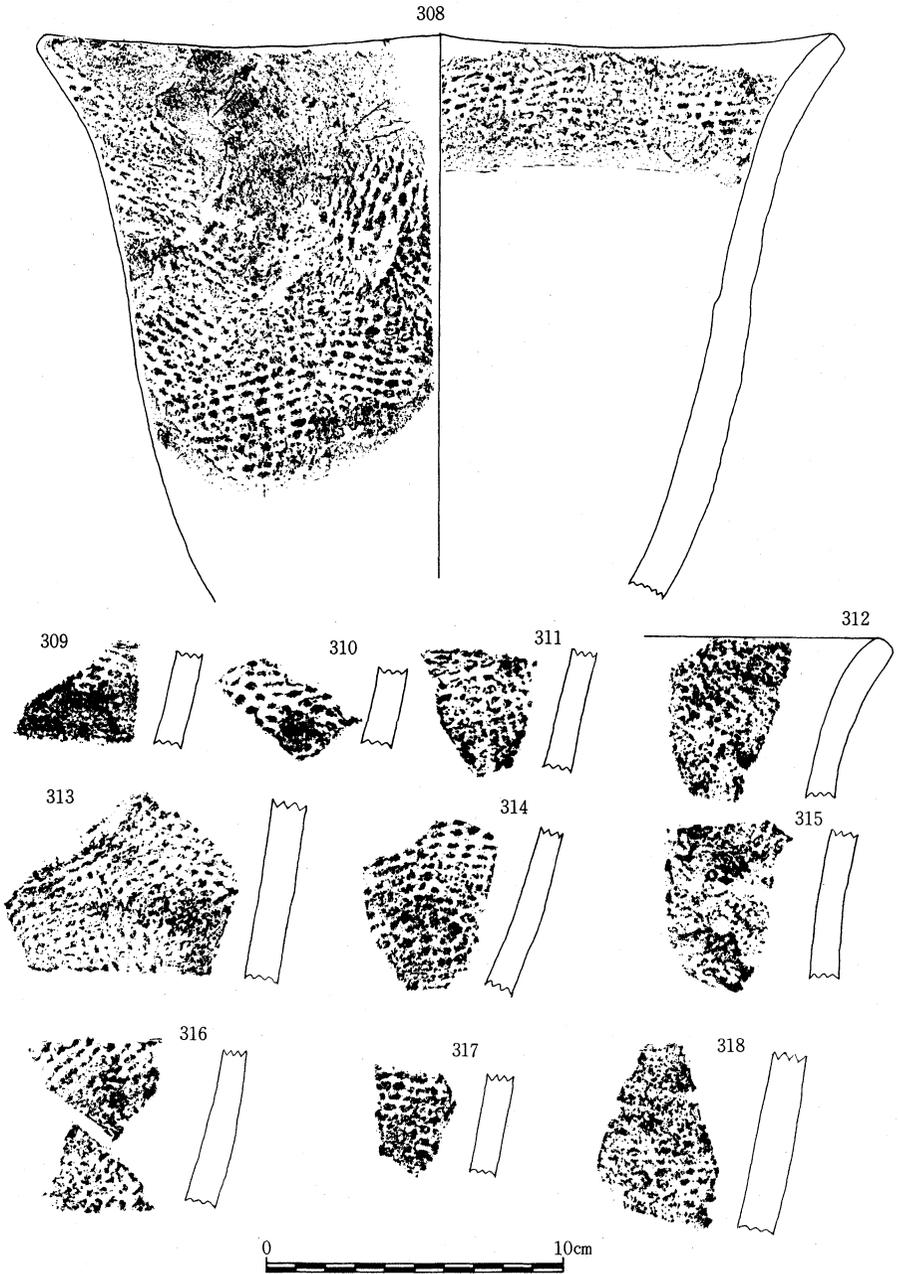
270は、大きく外反する口縁部の破片である。口唇部に細かい刻み目をめぐらし、横位に並行する2条沈線と斜位の組み合せ文様帯がある。器質器形共に良く整っている。271は、並行沈線を山形状に施し、その下位に刺突の連点を、頸部には横位の沈線と刺突連点が並行している口縁部破片である。272~278は、271と同器体のものであるが接合しなかった。279は大きく外反する口縁部が上部で内湾状に傾いて立ち上るものである。口唇には浅く細い刻みと、その下方には並行する沈線、折り曲り部分にも横位の沈線と刻みがめぐっている。280~284は器質の点で279と同器体のもと考えられたが接合しなかった。第Ⅵa土器である。

第65図 (285~307)

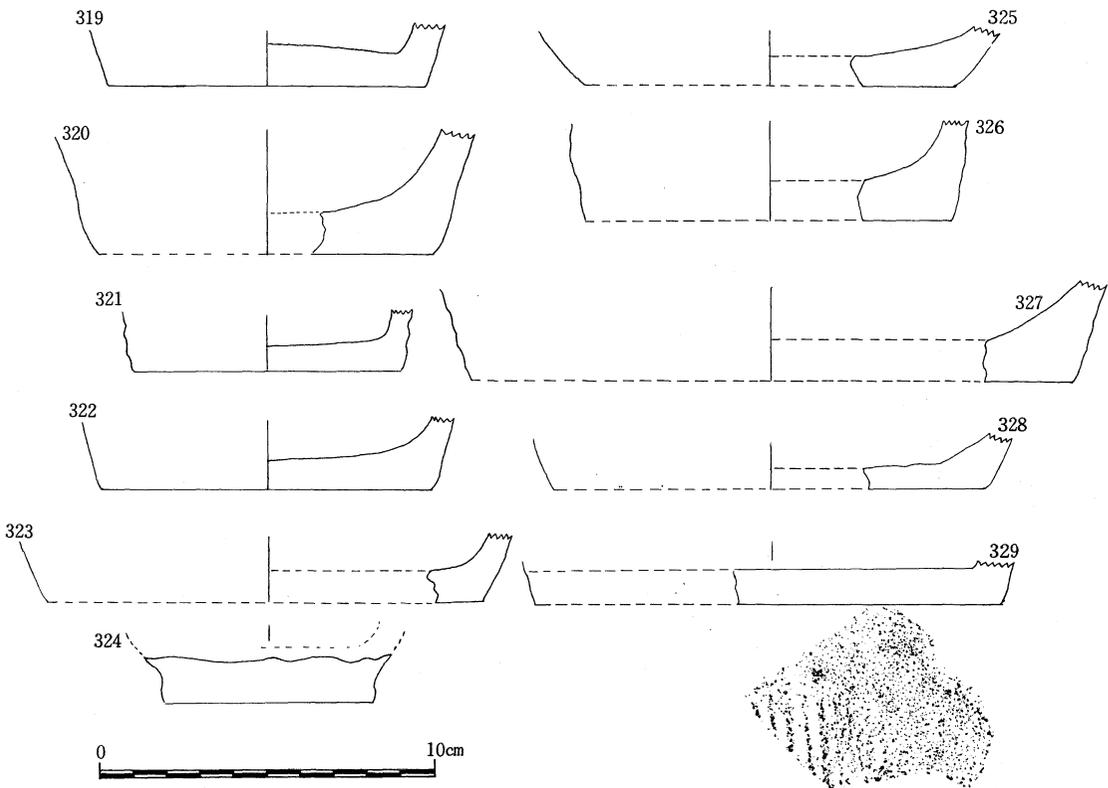
285~288は、同一器体のものであるが接合しなかった。大きく外反する口縁部で、口唇部分だけが垂直状の立ち上りとなっている。口唇には浅く細い刻みがめぐっており、その下方には横行する凹線が、突出状屈曲部の上下に各1条ずつある。以下縦位の凹線と、捺糸文が施文されている。298も大きく外反する頸部部分のものである。横行の4条凹線と胴部には縦位の捺糸文がある。299は、285を中心にしたものの底部破片。289及び301~307は、横行する凹線と曲線を組み合せた文様をもつものである。口縁部は大きく外反している。第Ⅵb類土器である。



第65図 第VI層出土の土器類



第66図 第VI層出土の土器類



第67図 第IV層出土の土器類

第66図 (308~318)

308は、第Ⅵ層出土土器のうち、ただ1点だけ復元できた第Ⅶ類土器であり、318までは接合できなかった同一器体の破片である。出土場所は、C-1とD-1区の境い辺りが中心で、まともは無く散発的な出土状況であった。底部の器形は不明であるが、立ち上りから口縁部までの線はいわゆるスマートな仕上がりで、器厚も下部にやや厚味をもたせ、安定した線は頸部辺りまで延び、外反する口縁部の形状も良い。波状をなす口縁部も緩やかな稜線を延ばし四稜をもっている。器面の施文は楕円押型文である。口縁部にそった部分には、間隔をもった逆三角形の空白部分（現3ヶ所、全周では4ヶ所であろう）が頸部まで延び、他の面はやや深めに施文されている。また、内面にも口縁部にそって約2.5cm巾の楕円押型文がめぐっている。復元した口径は26cmである。

第67図 (319~329)

すべて底部部分の破片である。327が最も大きく18cmを測り最小は324の6cmを復元できる。特徴的なものとしては、329に一部網代痕が見られることである。325の立ち上がりにやや疑問は残るものの、その胴部への立ち上がりの器形などから、円筒形のものと考えられる。

第8表 第Ⅵ層出土の土器類観察表

| 番号 | 挿図 | 区番号 | 層位 | 部位 | 焼成 | 色調 | レベル | 形態・文様の特徴 | 類別 |
|-----|------|--------|----|-----|----|-----|--------|-------------------|------------------|
| 212 | 第58図 | B-1-5 | Ⅵ | 口縁部 | 良 | 茶黄色 | 49.553 | 口縁部に波状、貝殻腹縁状刺突文 | I ^a 類 |
| 213 | " | D-1-17 | " | " | " | 茶褐色 | 50.728 | 口縁部に貝殻腹縁による横位の刺突文 | I ^a 類 |
| 214 | " | C-1-8 | " | " | " | 茶橙色 | 50.462 | 口縁部に波状、貝殻腹縁状刺突文 | I ^a 類 |
| 215 | " | E-7-15 | " | " | " | 茶褐色 | 48.017 | " " | " |
| 216 | " | C-4-4 | " | " | " | " | 48.156 | 口縁部に貝殻腹縁による横位の刺突文 | I ^a 類 |
| 217 | " | D-5-62 | " | " | " | " | 48.964 | 口縁部に波状、貝殻腹縁状刺突文 | I ^a 類 |
| 218 | " | D-0-6 | " | " | " | " | 50.721 | " " | " |
| 219 | " | D-5-52 | " | " | " | 淡茶色 | 48.239 | " " | " |
| 220 | 第59図 | C-1-9 | " | " | " | 茶橙色 | 50.609 | " " | " |
| 221 | " | E-1-1 | " | " | " | 茶褐色 | 50.339 | 口縁部に貝殻腹縁による横位の刺突文 | I ^a 類 |
| 222 | " | D-5-55 | " | " | " | " | 48.245 | " " | " |
| 223 | " | D-6-18 | " | 胴部 | " | " | 48.399 | " " | " |
| 224 | " | C-1-6 | " | " | " | 茶橙色 | 50.533 | 綾杉状 | I ^a 類 |
| 225 | " | G-7-3 | " | 口縁部 | " | " | 45.944 | 内面に凹線 | " |
| 226 | " | F-6-11 | " | 胴部 | " | 茶褐色 | 48.702 | | " |
| 227 | " | D-6-13 | " | 口縁部 | " | " | 48.152 | | " |
| 228 | 第60図 | C-0-2 | " | 胴部 | " | 茶橙色 | 50.528 | 外5点、綾杉文 | I ^a 類 |
| 229 | " | D-1-23 | " | " | " | 茶褐色 | 50.873 | 立ち上り部分 | " |
| 230 | " | B-1-1 | " | " | " | 茶橙色 | 49.621 | 綾杉文 | " |
| 231 | " | D-1-24 | " | " | " | 茶褐色 | 50.718 | " | " |
| 232 | " | E-7-11 | " | " | " | 茶橙色 | 48.217 | 外1点、立ち上り部分、綾杉文 | " |
| 233 | 第61図 | D-5-34 | " | " | " | " | 48.331 | 綾杉文 | " |
| 234 | " | D-5-59 | " | " | " | 茶褐色 | 48.705 | " | " |
| 235 | " | D-1-33 | " | " | " | 茶橙色 | 50.762 | " | " |
| 236 | " | D-6-25 | " | " | " | 茶褐色 | 48.438 | " | " |
| 237 | " | D-5-42 | " | " | " | 茶橙色 | 48.146 | " | " |
| 238 | " | C-2-29 | " | " | " | " | 50.121 | " | " |
| 239 | " | C-5-9 | " | " | " | 茶褐色 | 47.599 | " | " |
| 240 | " | F-8-1 | " | " | " | " | 46.574 | " | " |
| 241 | " | F-7-2 | " | " | " | " | 48.359 | 外1点、綾杉文 | " |
| 242 | " | E-7-12 | " | 口縁部 | " | " | 47.893 | 綾杉文 | I ^a 類 |
| 243 | " | C-3-4 | " | 頸部 | " | 灰褐色 | 48.438 | 横位条痕文 | I ^a 類 |
| 244 | " | C-3-11 | " | " | " | 茶褐色 | 48.720 | " | " |
| 245 | 第62図 | D-6-1 | " | 胴部 | " | 茶黄色 | 48.943 | ひっかき文 | Ⅲ類 |

| 番号 | 挿図 | 区番号 | 層位 | 部位 | 焼成 | 色調 | レベル | 形態・文様の特徴 | 類別 |
|-----|------|--------|----|-----|-----|------|--------|------------------|--------|
| 246 | 第62図 | F-6-10 | Ⅵ | 胴部 | 良 | 茶黄色 | 48.738 | 押引き文 | Ⅳ類 |
| 247 | " | E-6-16 | " | " | " | " | 49.012 | " | " |
| 248 | " | D-5-22 | " | " | " | 茶褐色 | 49.176 | " | " |
| 249 | " | C-3-14 | " | " | やや粗 | 淡茶褐色 | 48.554 | " | " |
| 250 | " | D-5-57 | " | " | 良 | 茶褐色 | 48.363 | 貝殻腹縁状による組合せ文、角筒形 | V類 |
| 251 | " | E-6-15 | " | 口縁部 | " | " | 49.287 | " | " |
| 252 | " | D-6-17 | " | " | " | " | 48.307 | " | " |
| 253 | " | E-6-14 | " | 胴部 | " | " | 49.022 | " | " |
| 254 | " | D-7-1 | " | " | " | " | 48.170 | " | " |
| 255 | " | E-7-2 | " | " | " | 茶褐色 | 48.869 | " | " |
| 256 | " | D-5-1 | " | " | " | " | 49.606 | " | " |
| 257 | " | D-3-3 | " | " | " | 灰茶色 | 49.591 | " | " |
| 258 | " | D-1-9 | " | " | " | 茶褐色 | 50.709 | " | " |
| 259 | " | D-3-7 | " | " | " | 灰茶色 | 50.027 | " | " |
| 260 | " | D-5-17 | " | " | " | 茶褐色 | 49.250 | " | " |
| 261 | " | D-5-27 | " | " | " | " | 49.200 | " | " |
| 262 | " | E-6-23 | " | " | " | " | 48.857 | " | " |
| 263 | " | D-1-16 | " | " | " | " | 50.701 | " | " |
| 264 | 第63図 | E-7-1 | " | " | " | 茶褐色 | 48.869 | " | 円筒形 V類 |
| 265 | " | E-7-3 | " | " | " | " | 48.849 | " | " |
| 266 | " | E-7 | 表 | " | " | 茶褐色 | | " | " |
| 267 | " | E-7-18 | Ⅵ | 口縁部 | " | " | 48.951 | 口縁部刻目、横位条痕文 | V類 |
| 268 | " | D-5-21 | " | " | " | " | 48.881 | " | " |
| 269 | " | D-1-43 | " | " | " | " | 50.767 | " | " |
| 270 | 第64図 | C-2-18 | " | " | " | 淡茶色 | 49.906 | 並行沈線を基本にした組合せ文 | V類 |
| 271 | " | C-2-13 | " | " | " | 茶褐色 | 48.981 | " | " |
| 272 | " | C-2-14 | " | 胴部 | " | " | 49.003 | " | " |
| 273 | " | C-3-7 | " | 頸部 | " | " | 49.358 | " | " |
| 274 | " | C-2-22 | " | 口縁部 | " | 黒褐色 | 49.503 | " | " |
| 275 | " | B-1-10 | " | " | " | " | 49.735 | " | " |
| 276 | " | D-5-37 | " | 胴部 | " | " | 48.505 | " | " |
| 277 | " | C-2-1 | " | " | " | 茶褐色 | 50.504 | " | " |
| 278 | " | B-2-1 | " | " | " | 茶褐色 | 49.710 | " | " |
| 279 | " | F-7-4 | " | " | " | 茶黄色 | 48.110 | " | " |
| 280 | " | D-5-40 | " | " | " | 茶褐色 | 48.724 | " | " |

| 番号 | 挿図 | 区番号 | 層位 | 部位 | 焼成 | 色調 | レベル | 形態・文様の特徴 | 類別 |
|-----|------|--------|----|-----|-----|------|--------|----------------|------------------|
| 281 | 第64図 | C-2-16 | V | 胴部 | 良 | 灰茶色 | 49.991 | 並行沈線を基本にした組合せ文 | V ^a 類 |
| 282 | " | C-2-16 | " | " | " | " | 49.991 | " | " |
| 283 | " | F-6-2 | " | " | " | 茶黄色 | 48.474 | " | " |
| 284 | " | F-7-12 | " | " | やや粗 | " | 47.925 | " | " |
| 285 | 第65図 | F-6-3 | " | 口縁部 | 良 | " | 48.377 | 並行沈線燃系文 | V ^b 類 |
| 286 | " | F-6-2 | " | " | " | " | 48.474 | " | " |
| 287 | " | F-6-2 | " | " | " | " | 48.474 | " | " |
| 288 | " | G-7-2 | " | " | やや粗 | " | 46.880 | " | " |
| 289 | " | D-2-10 | " | " | 良 | 淡黄茶色 | 50.501 | " | " |
| 290 | " | E-1-2 | " | 胴部 | " | 茶橙色 | 50.780 | " | " |
| 291 | " | C-2-15 | " | " | " | 灰茶色 | 49.291 | " | " |
| 292 | " | C-2-4 | " | " | " | 淡茶色 | 49.863 | " | " |
| 293 | " | C-2-23 | " | " | " | " | 49.311 | " | " |
| 294 | " | D-2-1 | " | " | " | " | 50.546 | " | " |
| 295 | " | C-2-28 | " | " | " | " | 49.906 | " | " |
| 296 | " | F-6-4 | " | " | " | 茶黄色 | 48.412 | " | " |
| 297 | " | C-2-6 | " | 口縁部 | " | " | 50.332 | " | " |
| 298 | " | C-2-20 | " | " | " | 淡茶色 | 49.981 | 外1点、" | " |
| 299 | " | C-2-7 | " | 底部 | " | 茶黄色 | 50.325 | " | " |
| 300 | " | D-5-26 | " | 胴部 | " | " | 49.431 | " | " |
| 301 | " | F-6-5 | " | 口縁部 | " | " | 48.421 | 外1点、" | " |
| 302 | " | E-6-11 | " | 胴部 | " | " | 49.487 | " | " |
| 303 | " | D-5-26 | " | " | " | " | 49.431 | " | " |
| 304 | " | D-5-25 | " | " | " | " | 49.277 | " | " |
| 305 | " | D-5-27 | " | " | " | " | 49.200 | 外1点、" | " |
| 306 | " | D-5-26 | " | " | " | " | 49.431 | " | " |
| 307 | " | F-6-2 | " | " | " | " | 48.474 | " | " |
| 308 | 第66図 | D-0-3 | " | 口縁部 | " | 茶褐色 | 50.548 | 外14点、精円押型文 | VII類 |
| 309 | " | C-2-8 | " | 胴部 | " | 茶橙色 | 49.104 | " | " |
| 310 | " | D-0-5 | " | " | " | 茶褐色 | 50.640 | " | " |
| 311 | " | D-1-5 | " | " | " | " | 50.694 | " | " |
| 312 | " | B-1-2 | " | 口縁部 | " | " | 49.660 | " | " |
| 313 | " | C-1-1 | " | 胴部 | " | 茶橙色 | 50.701 | " " | " |
| 314 | " | C-0-2 | " | " | " | " | 50.528 | " | " |
| 315 | " | D-0-2 | " | " | " | 茶褐色 | 50.542 | 外1点、" | " |

| 番号 | 挿図 | 区番号 | 層位 | 部位 | 焼成 | 色調 | レベル | 形態・文様の特徴 | 類別 |
|-----|------|--------|----|----|-----|-----|--------|-----------|------|
| 316 | 第66図 | D-0-13 | V | 胴部 | 良 | 茶褐色 | 50.742 | 外1点、楕円押型文 | VII類 |
| 317 | " | C-0-2 | " | " | " | " | 50.542 | " | " |
| 318 | " | C-0 | 表 | " | " | " | | " | " |
| 319 | 第67図 | C-2-5 | V | 底部 | " | 茶黄色 | 50.433 | 外1点、平底 | |
| 320 | " | D-6-19 | " | " | " | 茶褐色 | 48.595 | " | |
| 321 | " | E-7-7 | " | " | " | " | 48.841 | " | |
| 322 | " | D-5-33 | " | " | " | 茶橙色 | 48.144 | " | |
| 323 | " | C-3-12 | " | " | " | " | 49.365 | " | |
| 324 | " | E-6-10 | " | " | " | 茶褐色 | 49.438 | " | |
| 325 | " | B-1-14 | " | " | " | 茶橙色 | 49.229 | " | |
| 326 | " | F-6-11 | " | " | " | 茶褐色 | 48.702 | " | |
| 327 | " | C-3-13 | " | " | やや粗 | 茶橙色 | 49.353 | " | |
| 328 | " | C-4-1 | " | " | 良 | 茶灰色 | 49.083 | " | |
| 329 | " | E-2-4 | " | " | " | 茶橙色 | 50.539 | " | |

第2節 石器類

第Ⅵ層に出土した石器類の内容は、剥片石器、石鏃、局部磨製石斧、石錘、研石、槌石、敲石、磨石、台石、特殊な石器等、豊富であった。しかしながら、個々の量は多くはなかった。出土状況で特殊なものはなく、土器の分布状況と同様全域に散発的に出土した。以下個々の内容は次のとおりである。

1, 剥片石器 (第68図-330 第69-337)

330は、F-6区に出土した。最大長5.25cm, 最大巾3.75cm, 重さ18.5gで、石質はチャートと考えられる。二次的加工痕は全く無い。最厚部の先端に、かすかな原面が見られ、剥離された先端は鋭利な刃状を呈し、切る道具としての機能は十分に可能である。337は、C-5区に出土した。唯単に打ち欠いただけの石器で、加工痕など無い。鋭利な刃状をもっている。

2, 石鏃 (第68図-331~335)

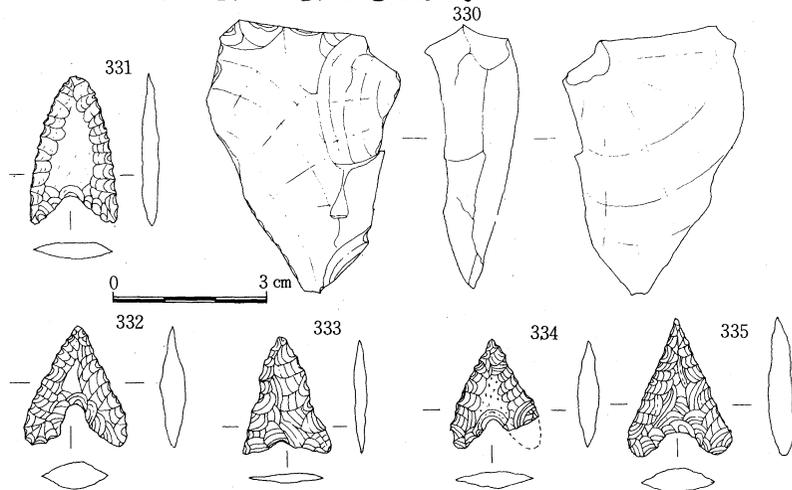
石鏃は合せて5点出土した。331は、E-9区に出土。交互剥離の成形技法は極めて良好である。332は、D-1区出土。やや厚味をもっているが成形は良い。特にえぐり部の仕上がりは良好である。333は、E-7区の出土、やや粗雑な成形が見られる。最も薄手のものである。334は、E-6区に出土した。入念な仕上がりで形も良く整っている。柄部の一方を僅かに欠損している。335は、E-6区に出土した。すばらしい仕上がりで、特に先端にいたる両縁の線は良好で、最先端は鋭利に尖っている。

3, 局部磨製石斧 (第69図-336)

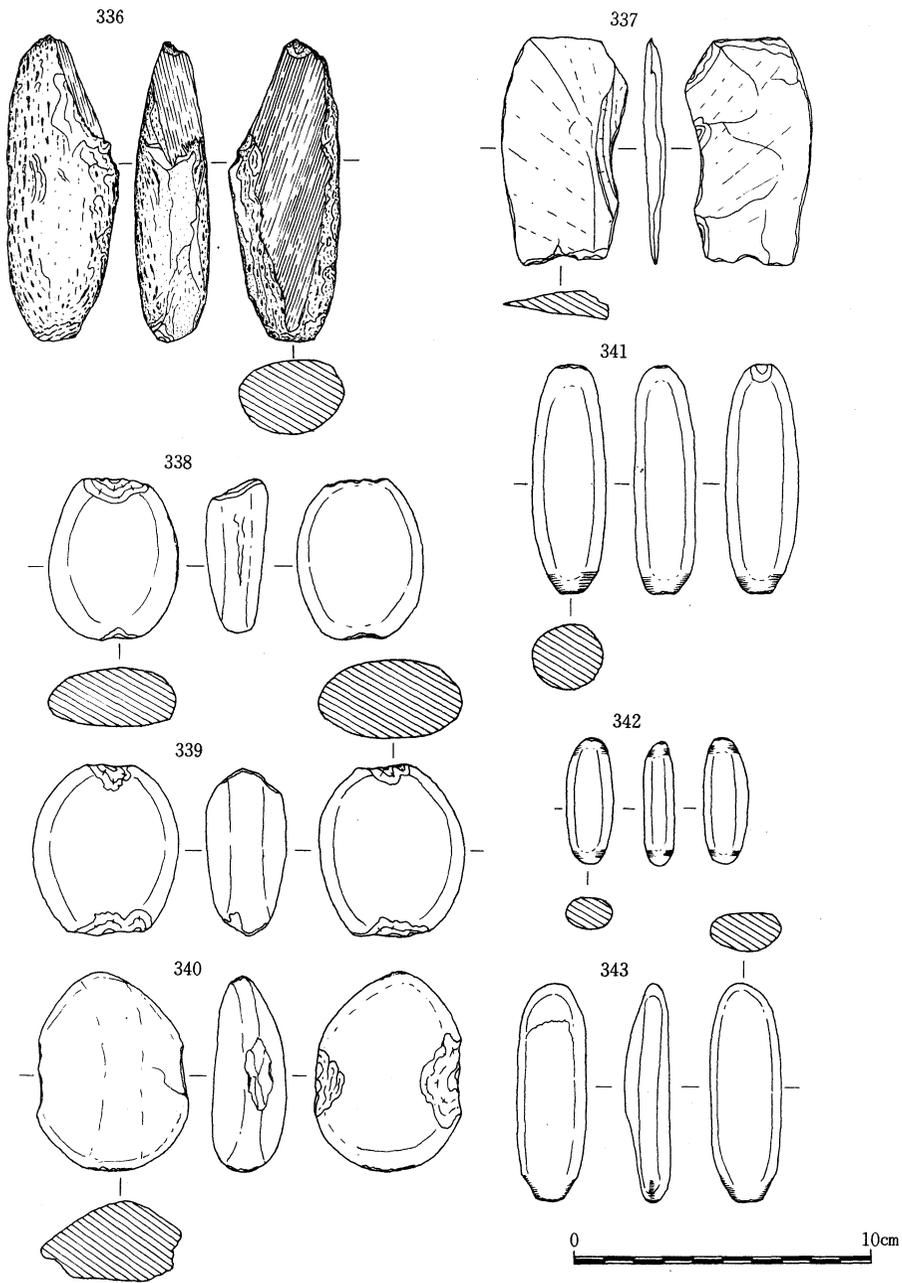
336は、B-0区に出土した唯一点の局部磨製石斧である最大長10.3cm, 最大巾3.7cm重さは130gあり、石質は頁岩であろう。刃部を欠損している。縁辺部などは小槌ちによって成形されており、先端の三面に研磨した痕を残す。

4, 石錘 (第69図-338~340)

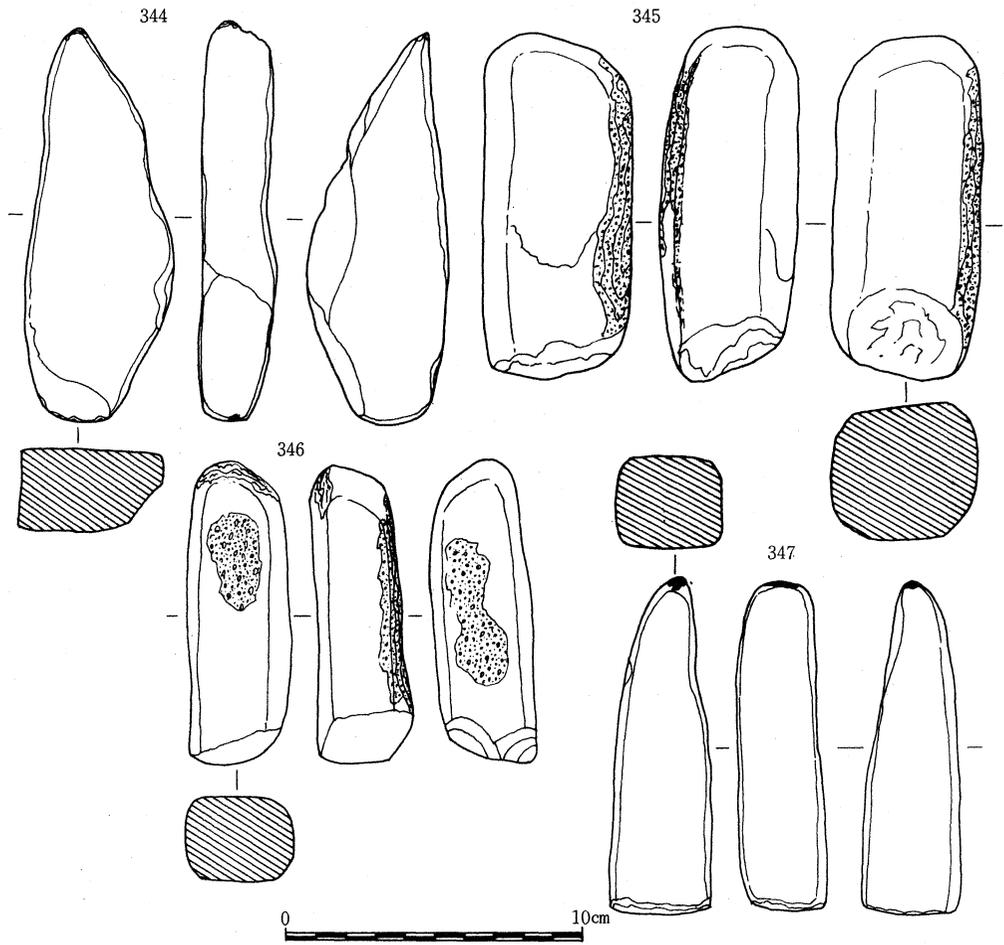
石錘は3点出土した。338は、C-3区出土、339はE-6区、340はD-2区に出土した。楕円状の自然礫である。両先端を交互剥離で打ち欠ぎ凹部を作り出している。340だけが横形石錘である。重さは順に、65g, 100g, 95gである。



第68図 第Ⅳ層出土の石器類



第69図 第VI層出土の石器類



第70図 第VI層出土の石器類

5, リーマー (第69図-341~343)

類例を知らないで、一応仮称で取り扱った特殊な石器である。3点共に指状に細長い砂岩の小自然礫である。341及び343は一方の先端部に、342は両先端部分に、回転作用によると考えられる横位の磨り痕が、かすかに残っている。その磨り痕の見られる部分は、正円状となっており、約1cm程度の所まで、あとの部分は自然面のままである。磨り痕のある最先端の突部は、小槌ちによるものか、あるいは、回転作用で生じた痕跡か断定は困難ではあるが、平坦面になるまで磨り減っている。出土場所は順に、B-0区、D-5区、E-6区である。

6, 角柱状槌石 (第70図-344~347)

344~347は共に角柱状をなした槌石である。共に先端部分に槌ち痕と考えられる痕跡を残し、345及び346などには側面の角部は勿論のこと、扁平面までも槌ち痕がある。出土場所はD-5区を北限に、B地区の東端辺りから検出された。

7、敲石（第71図348～355, 第72図—356～361）

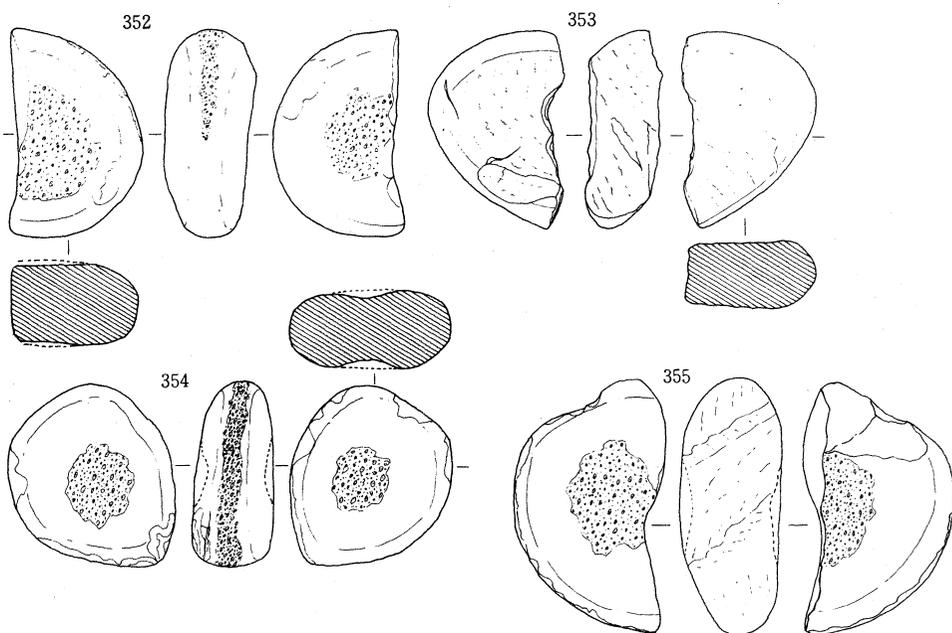
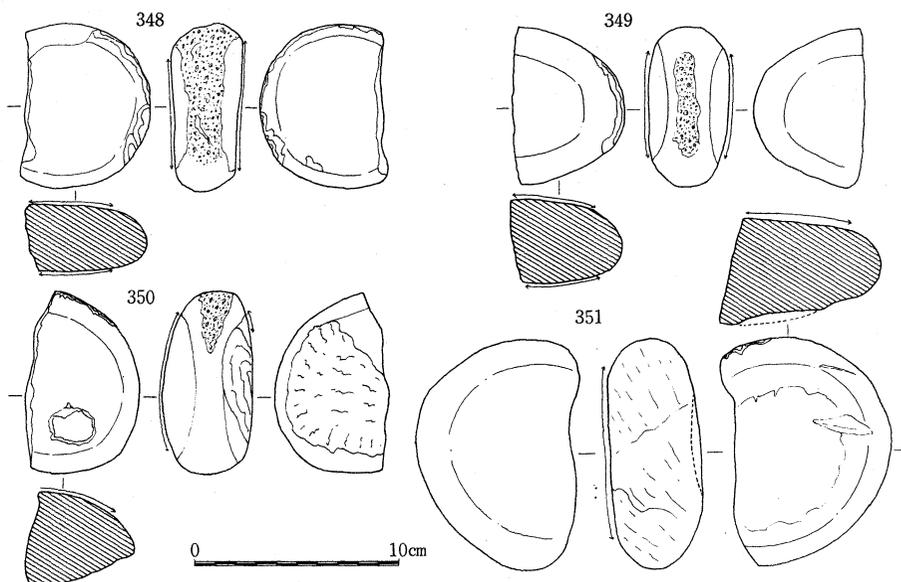
348～355は、半欠あるいは一部を欠損した敲石である。円周部に敲打痕のあるもの、扁平面にもあるものなど、多使用の痕跡があり、また、磨石に併用したようでもある。出土場所は全域に散発的に検出されている。361は、敲石とはいえないが一括した、扁平な正円状の小礫であり、一方面だけにやや深めの打ち痕を残す。また、361は、頁岩質のもので、破れた面をやや研いた痕跡を残し、他面は自然面である。敲石としては疑問が大きいが一括した。

8、磨石（第73図—362～365, 第74図—366～368）

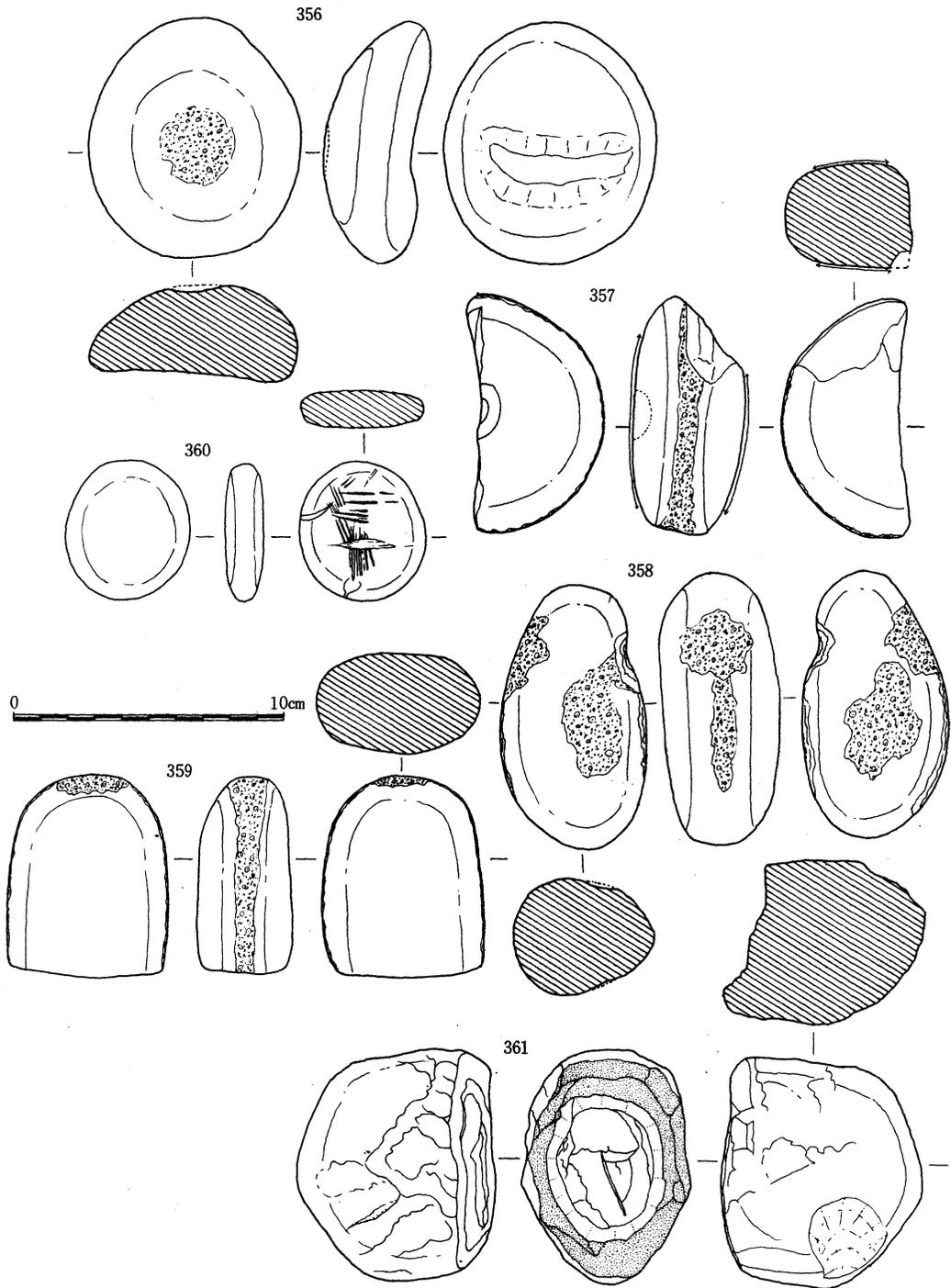
いずれにも多少の打痕は見られるが、磨りを重点にしたものである。362は両先端部分に欠損部はあるものの、両面に磨り痕がある。364は扁平をなしたものであるが、両面がよく摩耗し、365は一方面だけ使用している。366は扁平をなした磨石、扁平面の磨耗は良く、両側面は敲きに使用している。367及び368は扁平面の少ない円形状で、一部敲打痕は見られるものの磨りの方が強いようである。

9、研石（第75図—367, 370 第76図—371）

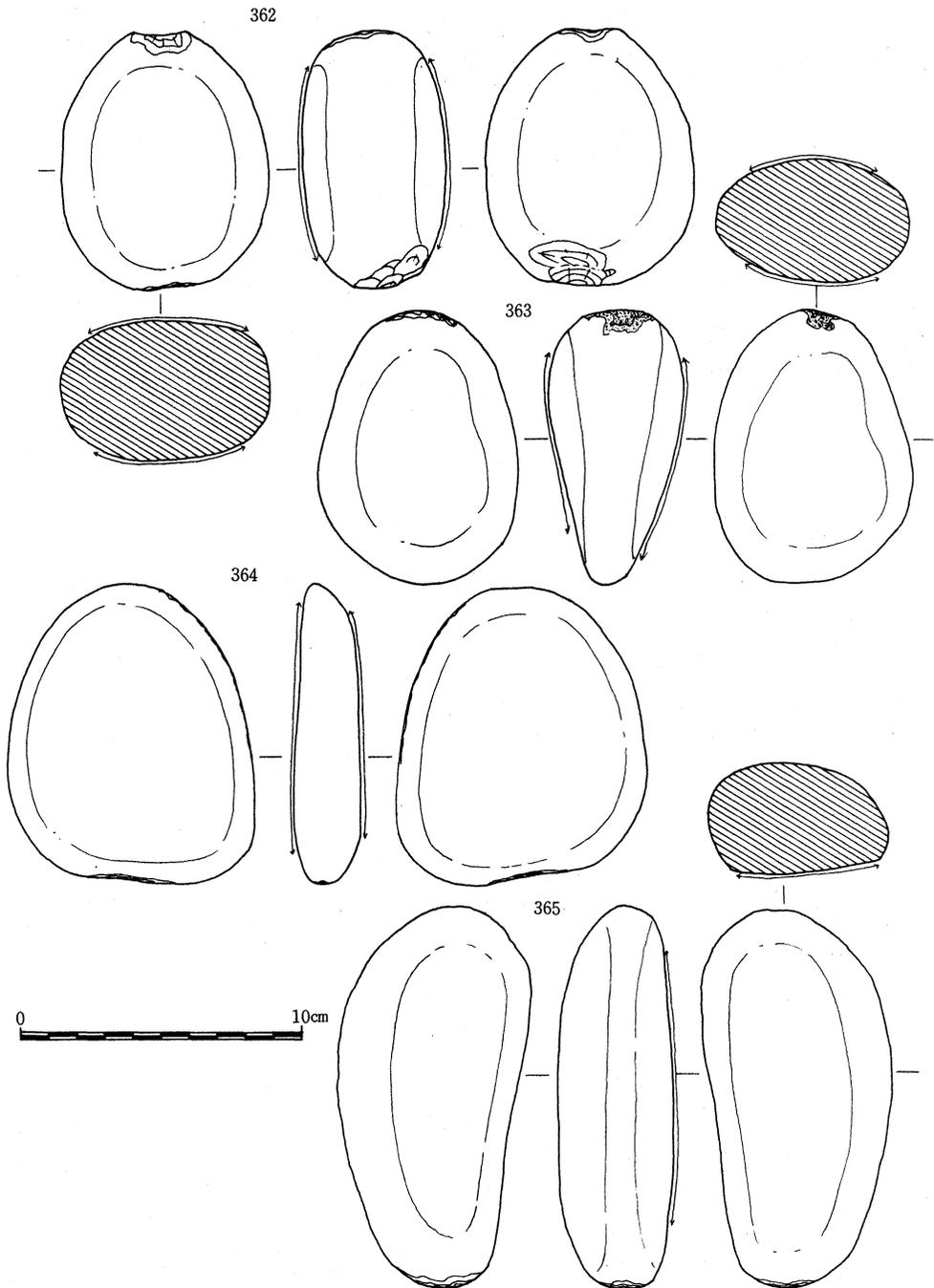
369は、一部を僅かに欠損する扁平石である。一方面の磨り痕は平坦となり、スベスベしている。370はやや薄手の板石であるが、一面部には研ぎ痕と考えられる凹部が縦に2条はしている。371は、2号配石遺構でとりあげた研石である。F-7区に出土している。最大長は30.8cm、最大巾は22cm、厚さ15.6cm、重さは1.15kgと大形の自然礫である。出土状況は前記したとおりである。窪み部を上向きに、ある程度の角度で置かれていた。窪み部の形状は、ゆるやかな曲線で石皿状を感じさせるが、かすかではあるが研ぎ痕が残っている。



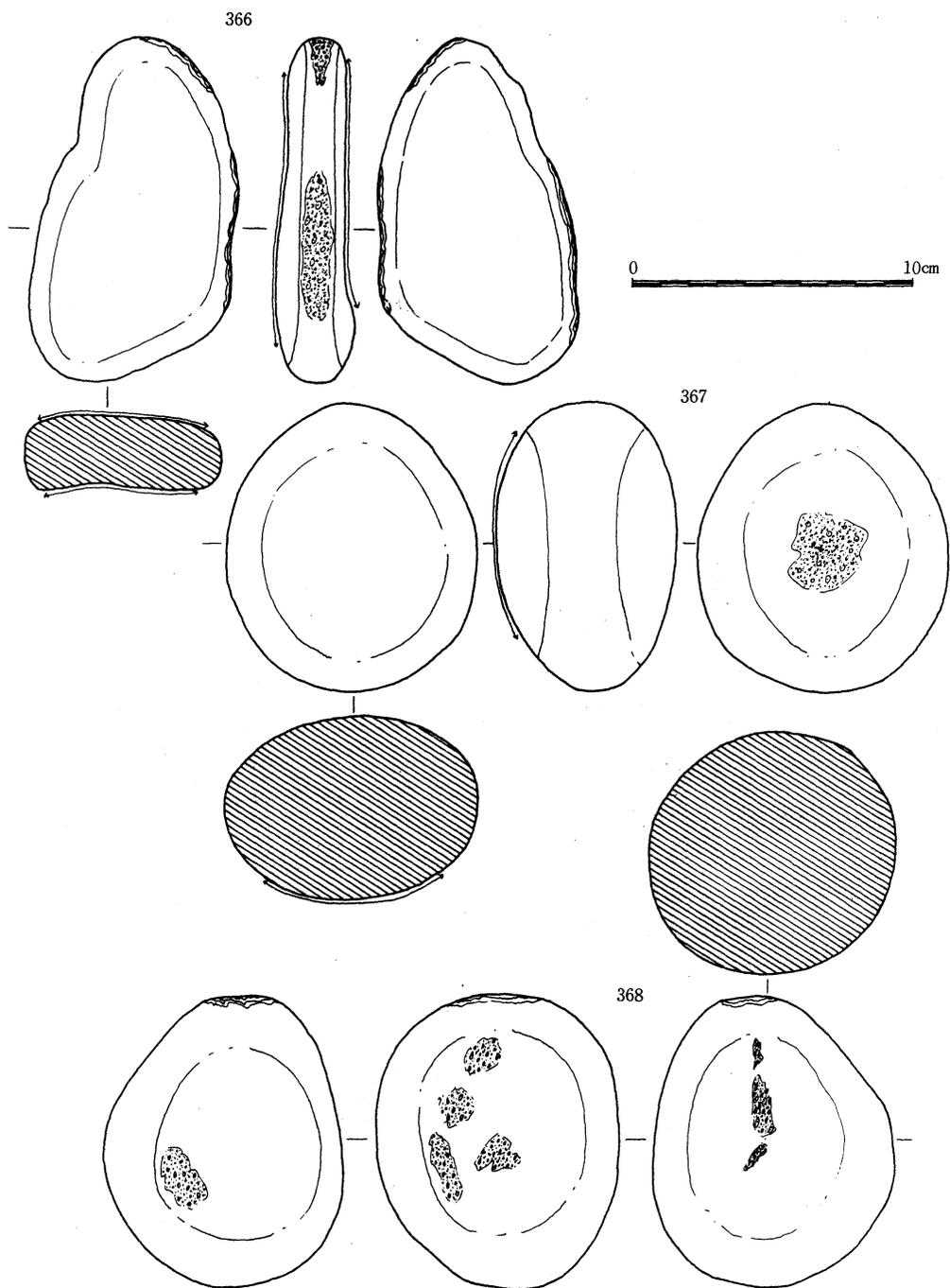
第71図 第Ⅵ層出土の石器類



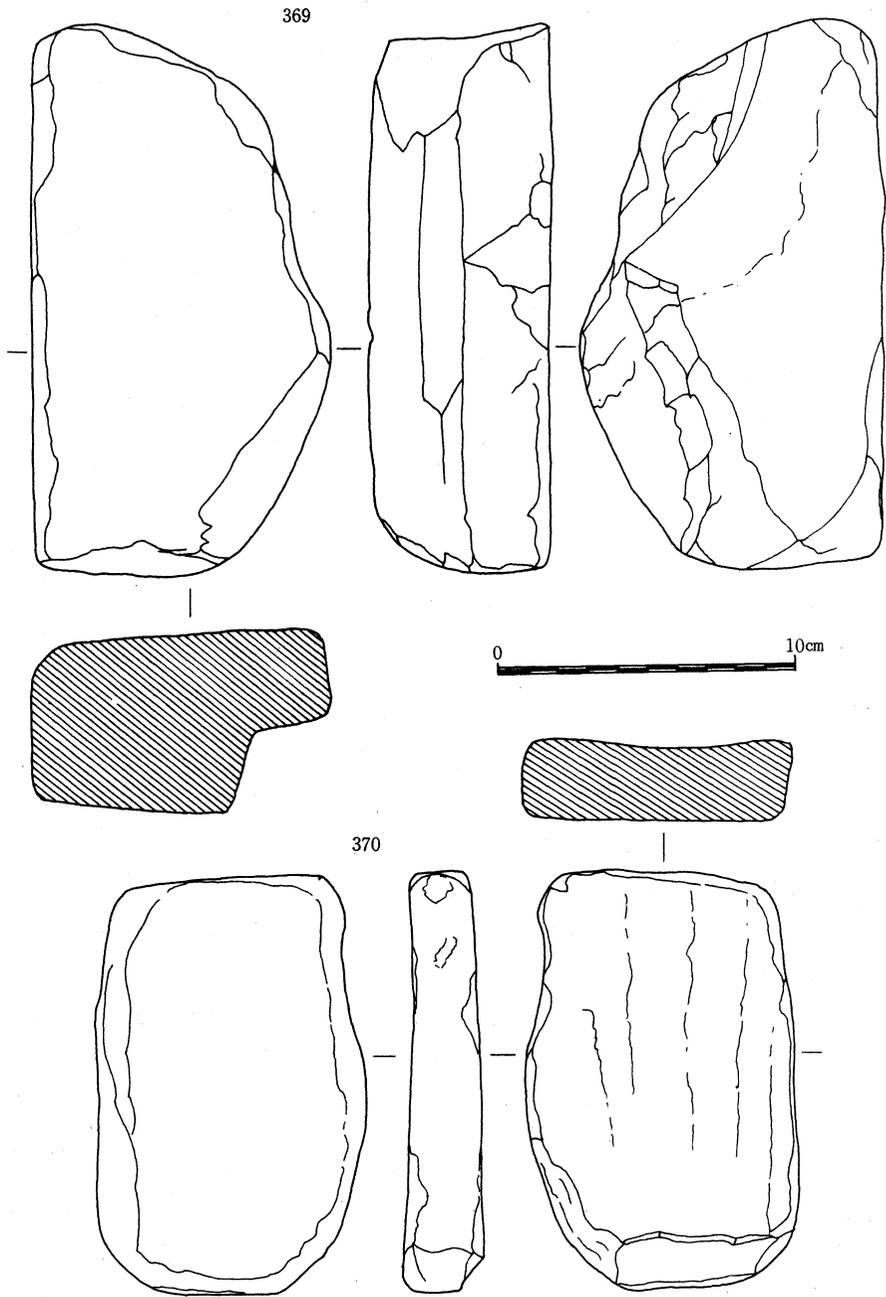
第72図 第IV層出土の石器類



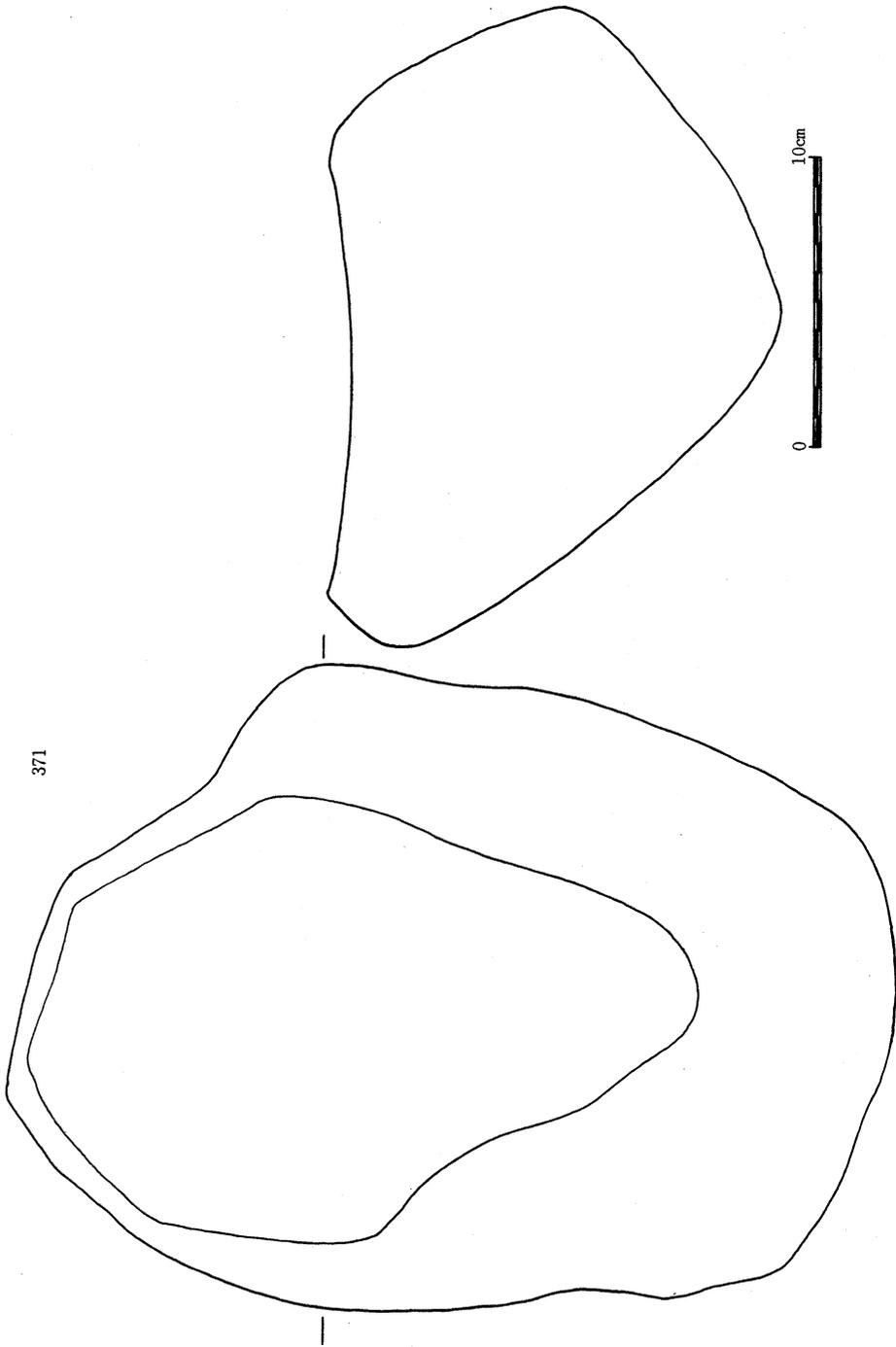
第73図 第Ⅵ層出土の石器類



第74図 第Ⅵ層出土の石器類



第75図 第Ⅵ層出土の石器類



371

第76図 第VI層出土の石器類

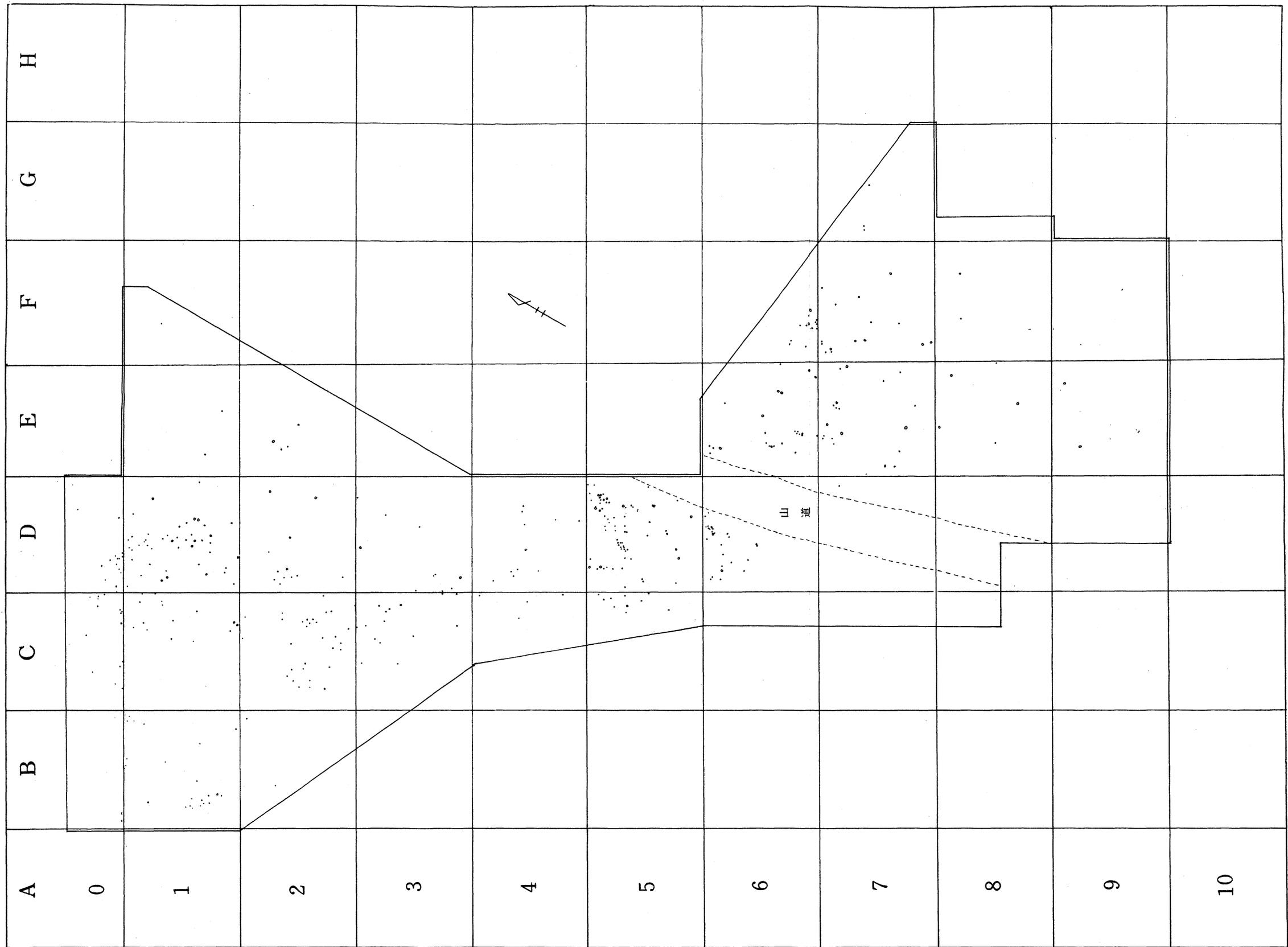
小結

第Ⅵ層を調査するに当たっては、第Ⅲ層を終わった時点で、かなりの期待がもてた。それは、以前に行われたと考えられる造成工事の被害が、第Ⅴ層としたアカホヤ層の上位どまりで、包含層は全域が完全な形で残存している、と判断されたからである。しかしながら、住居跡遺構や集石遺構などを除き、出土遺物に限っては期待外れといった観が強い。特に地勢的な点から最も期待がもてたB地点では、礫の散乱や集石遺構の検出状況などと比較し、遺物の数はごく限られていた。

結果的な遺物総数は石器類74点、土器類319点、うち、復元できたもの1点、全形をうかがい知ることができるものは1点どまりである。また、石器類については、敲石と磨りに併用したと考えられる玉石類と台石が多い以外、特別に注意をひくものは出土していない。

土器類の類別は、便宜的にⅦ類に分類した。第Ⅰ類としたものは、知覧町石坂上遺跡出土の土器を標式とする。石坂式の類内には入るものであろうが、いずれも小破片であるため細分することを避けた。Ⅱ類、Ⅲ類土器は、志布志町倉園B遺跡、鹿屋市打馬平原遺跡などにもその類例を見られるように、石坂式土器に共伴する機会が多い土器である。Ⅳ類土器も僅かに数点であり確実性にとぼしい。押し引き文や横位の条痕文を有する点、吉田町大原出土を標式とする吉田式土器の可能性が強い破片である。Ⅴ類土器は従来、鹿児島市吉野町前平遺跡出土の土器を指標とする前平式土器である。うち、Ⅴ^a類とした角筒土器は、本町の場合、極めて出土例の少ないものであり、これまでの通念を一步前進させた土器といてよい。Ⅵ類土器としたものは平持式土器及び塞之神式土器と考えられるが、これもまた小破片のため確実性にとぼしい。ただ塞之神A^a式と一般にいわれる数点が含まれていることだけは確かといてよい。

石器類で特に取り上げるとすれば、石斧類の出土が唯一点どまり、という特殊性が上げられる。それも完形するものは無く破損品だけ、という貧弱な出土状況である。いわゆる、日常生活に直接的にかかわる道具類、これがなかったのである。完全なパック状態、という包含層の状況からすると、特異としか言いようがない。反面、磨石類の数は多く、そのほとんどに敲痕を残していたという事実であり、それに半欠の割合が多いということもあげられる。もちろん磨石としての痕跡は多分に認められるが、それ以上に広い範囲や全面的に敲打痕があり、中にはかなり強く敲打を受けた石があるなど、磨りと敲きの併用、という度合いは極めて激しかったといえそうである。



第77図 第VI層の遺物出土状況図(●土器 ○石器)

第8章 表面採集資料

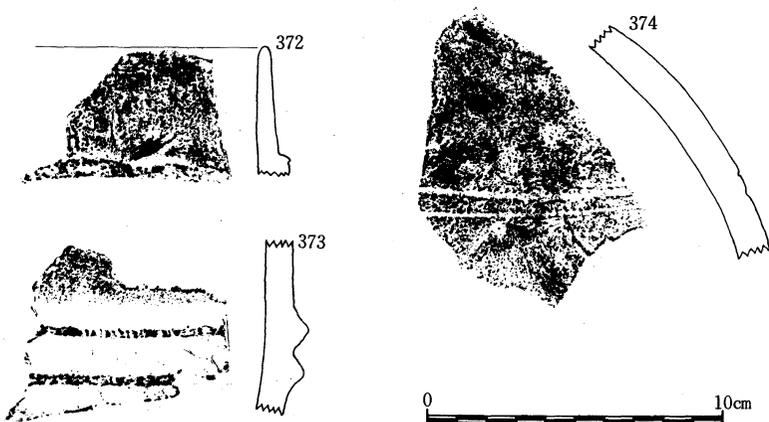
本遺跡の調査では、表面に採集した資料が極めて多かった。このことは調査前の諸準備中に20点程が採集されたことによって、十分に予測されたことである。土器片については小破片が多くて図示できるものは限られていたが、石器類の中には参考になるものが多かった。以前に造成が行われたのであろう。農道や土手に置かれたもの、伐採された根かぶ付近にあるもの、草ヤブとなった旧耕作面に露出するもの等、安易に採集することができた。以下土器片は小片で図示することができなかつたので、石器類を中心に記していきたい。

1. 土器類

第78図の372は、Ⅲ層の第Ⅱ^b類土器とした口縁部破片である。この場合口唇部に刻みは無いが頸部の突帯には刻みを付している。やや薄手の直口する口縁のものである。372は、刻みを施した三角状突帯を有する点、第Ⅰ類土器の類内にある。器質はしっかりした頸部部分の破片である。374は、壺形土器の肩部破片と考えられる。細めで浅い条痕が2条めぐっている。

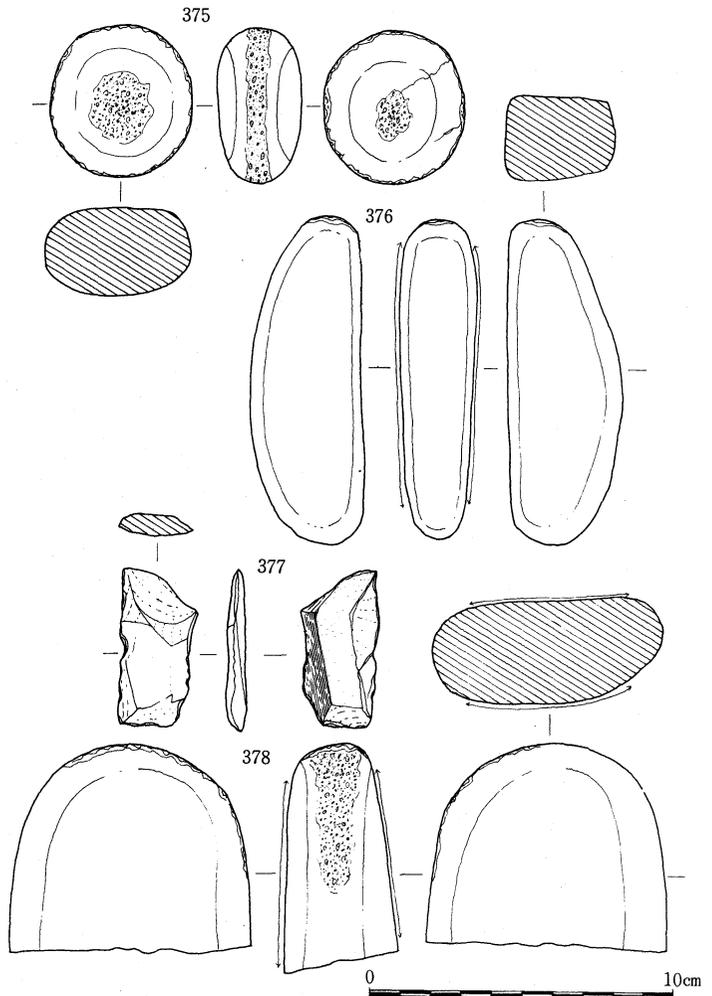
2 石器類

第79図の375は、正円形状で断面楕円形の小形敲石である。扁平面には磨り痕と、中心部分及び側縁全域に敲打痕を有している。376は、長楕円形状の磨石、扁平面は共にスベスベしている。377は、頁岩質の石斧の破片であろう。刃部部分を欠損したものである。378は、敲きと磨りに併用したものであろう。両面共によく磨り減っており、側縁の敲打痕の範囲は広い。



第78図 表面採集資料

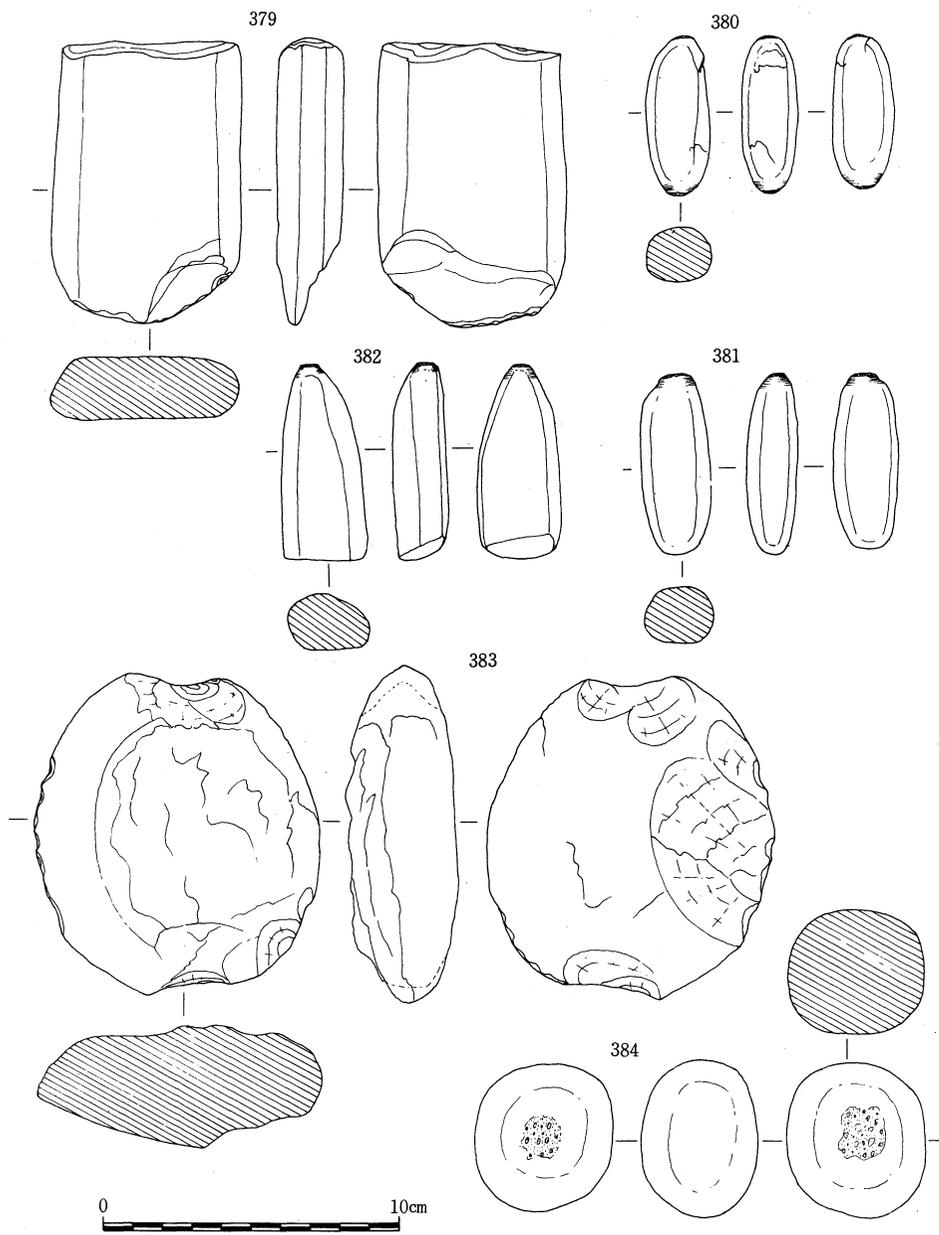
第80図の379は、研石であろう。扁平面は共に良く磨り減り、先端には僅かな敲打痕もうかがえられる。380～382の3点は共に、リーマーと仮称した特殊な石器である。第Ⅲ層及び第Ⅵ層の調査でも出土し、合せると8点となる。いずれも指状大の自然石である。一方部の先端部分に、回転作用と考えられる痕跡が、かすかに残っており、最先端の突部は磨り減って平坦となっている。他の面には全く痕跡は無い。383は、やや破損の激しい大型の石錘である。384は、正円形状の敲石である。扁平面には磨り痕があり、中心部分に浅い痕跡を残している。385は半欠の磨石、両面共に使用痕を良く残し、両扁平面及び側縁の一部には敲打痕がある。387は、磨りと敲きに併用している。特に扁平面の窪みは深く激



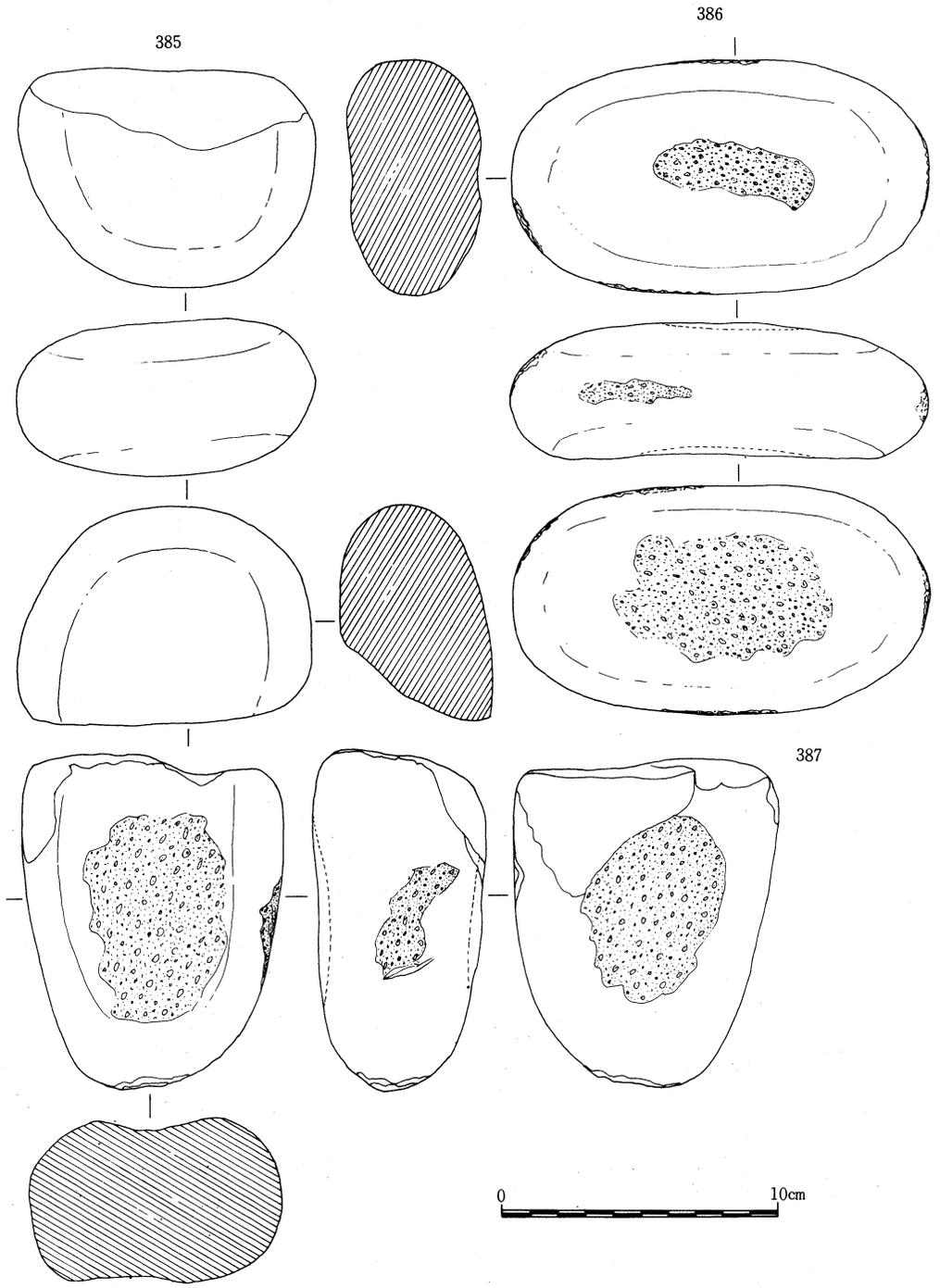
第79図 表面採集資料

しい。第82図の388～391は、すべて磨りと敲きに併用したものである。うち、388、391の窪みは深い。第83図の392は、長さ30.7cm、最大巾13cm、厚さ10.6cm、重さは6kgの大形の台石である。一方面の上部に広い範囲に激しい敲打痕と、かなり激しくひっかき状の条痕が加えられる。いわゆる座り良い一面があるので、台石として多用したものであろう。393も台石に利用したものであろう。長さ21.2cm、最大巾13.7cm、厚さ7cm、重さは2.7kgの板石状のものである。一方面の3分の2程度に敲打痕が残っている。

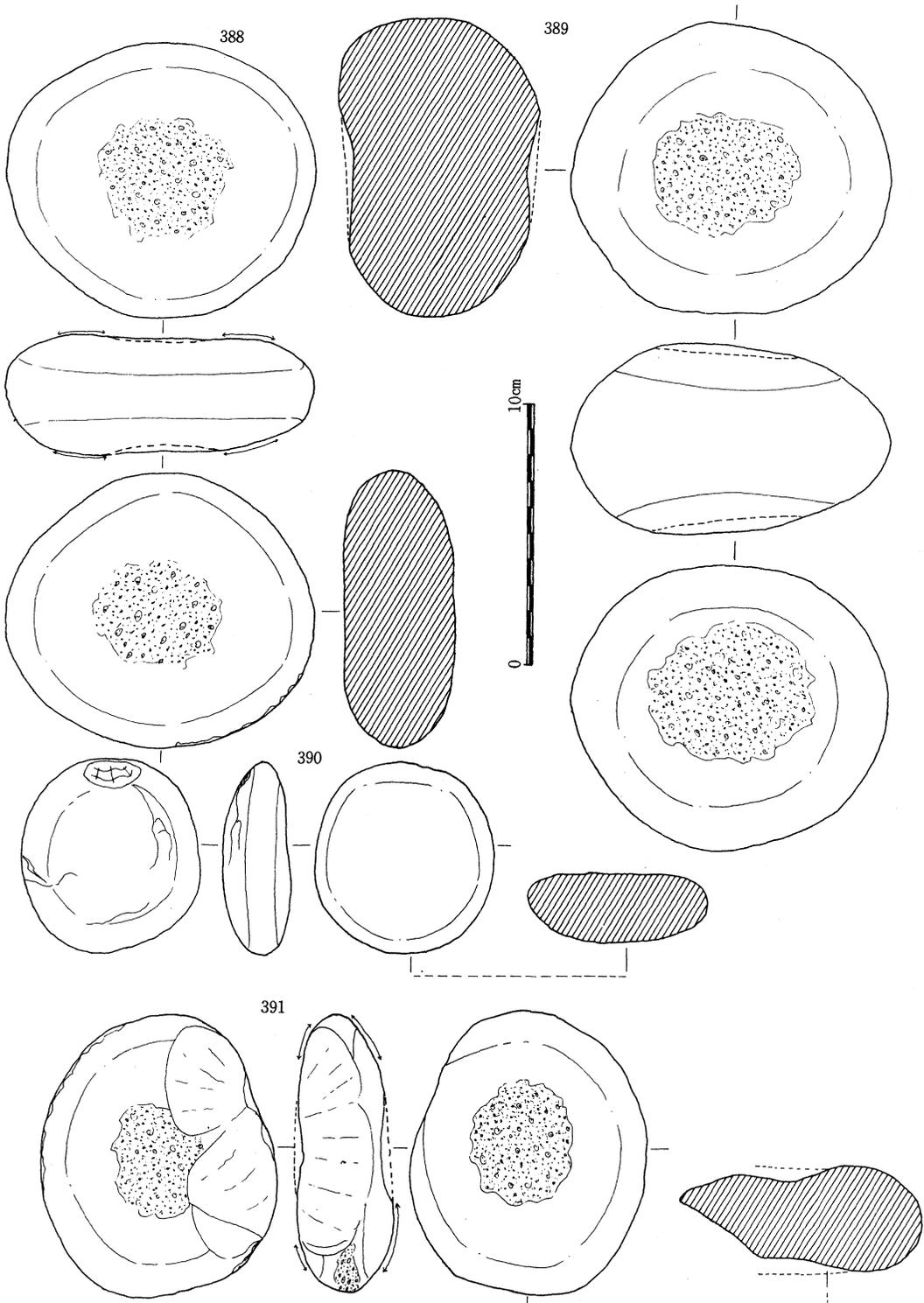
表面採集資料の石器類には、図示した外に、重さが数kgから最大では30kg以上の大型台石や板状石器が多かった。これらについては不本意ではあるが、図示しなかった。



第80图 表面採集資料

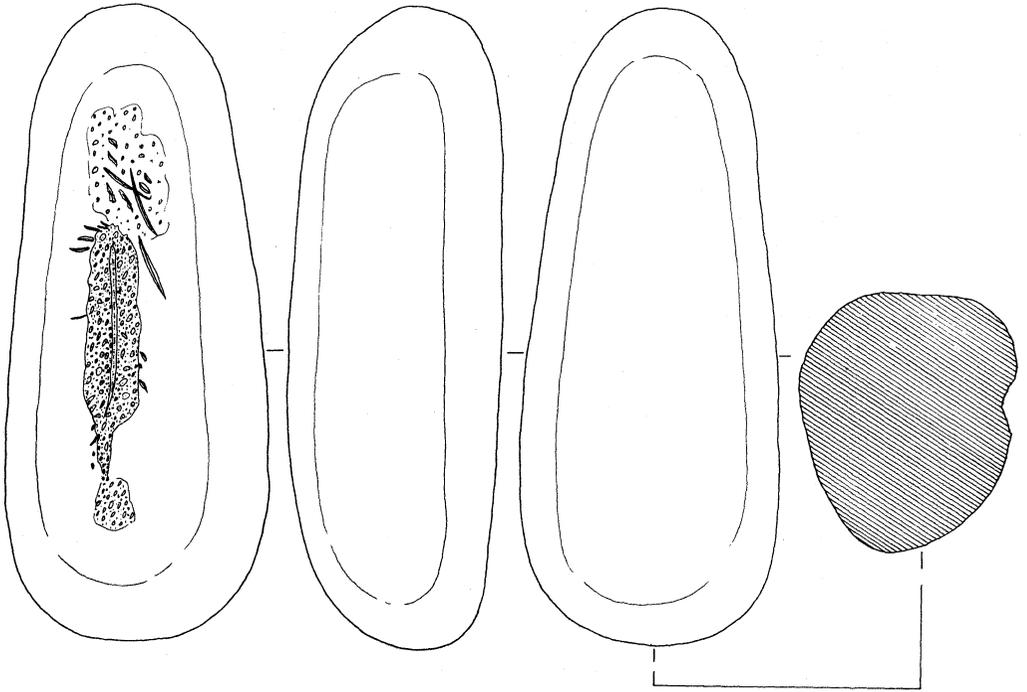


第81図 表面採集資料

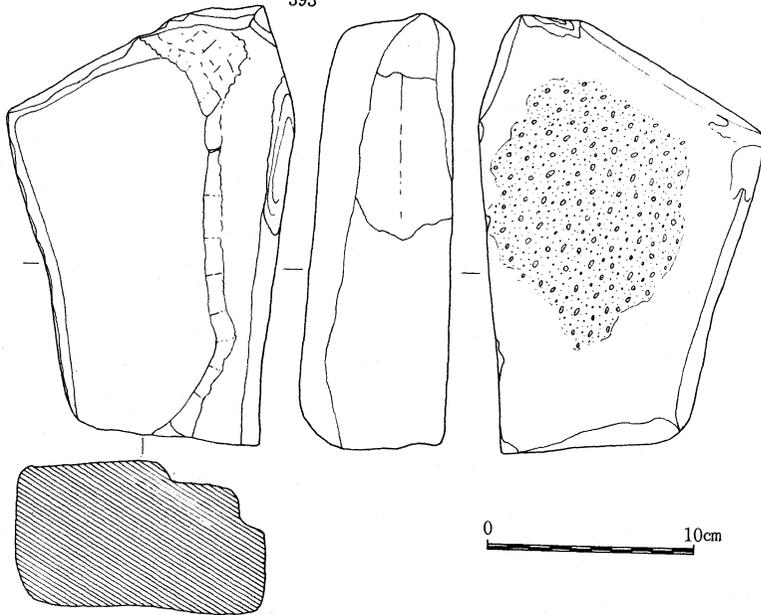


第82図 表面採集資料

392



393



第83図 表面採集資料

第9表 第Ⅵ層出土の石器類観察表

| 番号 | 挿図 | 類別 | 区番号 | 法 量 | | | | 石質 | レベル | 備考 |
|-----|------|--------|--------|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------|------|--------|--------|
| | | | | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重さ | | | |
| 330 | 第68図 | 剥片石器 | E-6-5 | 5.25 ^{cm} | 3.75 ^{cm} | 1.75 ^{cm} | 18.5 ^g | チャート | 49.100 | |
| 331 | " | 石鏃 | E-9-1 | 2.9 | 1.7 | 0.3 | 1.3 | 頁岩 | 45.740 | |
| 332 | " | " | D-1-39 | 2.4 | 2.0 | 0.5 | 1.15 | " | 50.744 | |
| 333 | " | " | E-7-6 | 2.3 | 1.7 | 0.25 | 0.6 | " | 48.797 | |
| 334 | " | " | E-6-1 | 2.15 | 1.65 | 0.4 | 1.0 | ? | 48.932 | |
| 335 | " | " | E-6-7 | 2.7 | 2.0 | 0.5 | 1.5 | チャート | 49.305 | |
| 336 | 第69図 | 局部磨製石斧 | B-0-1 | 10.3 | 3.7 | 2.5 | 130 | 頁岩 | 49.637 | 刃部を欠損 |
| 337 | " | 剥片石器 | C-0-5 | 7.5 | 4.0 | 0.8 | 25 | " | 50.490 | |
| 338 | " | 石鏃 | C-3-15 | 5.3 | 4.4 | 2.0 | 65 | 砂岩 | 49.361 | |
| 339 | " | " | E-6-17 | 5.6 | 4.8 | 2.5 | 100 | " | 48.964 | |
| 340 | " | " | D-2-9 | 6.6 | 5.2 | 2.6 | 95 | " | 50.286 | |
| 341 | " | リーマー | B-0-2 | 7.7 | 2.5 | 2.2 | 60 | " | 49.553 | |
| 342 | " | " | D-5-14 | 4.2 | 1.6 | 1.0 | 10 | " | 49.465 | |
| 343 | " | " | E-6-8 | 7.3 | 2.4 | 1.3 | 40 | " | 49.542 | |
| 344 | 第70図 | 角柱状槌石 | F-7-3 | 13.2 | 5.0 | 2.3 | 220 | " | 48.646 | |
| 345 | " | " | E-8-4 | 11.5 | 5.0 | 4.5 | 450 | " | 45.906 | |
| 346 | " | " | D-5-66 | 10.1 | 3.5 | 2.9 | 150 | " | 48.525 | |
| 347 | " | " | F-6-1 | 11.2 | 3.3 | 3.1 | 180 | " | 48.339 | |
| 348 | 第71図 | 敲石 | D-1-40 | 9.0 | 5.4 | 4.5 | 210 | " | 50.685 | 半欠 |
| 349 | " | " | D-6-11 | 7.6 | 5.3 | 4.0 | 220 | " | 48.713 | " |
| 350 | " | " | D-1-35 | 8.8 | 5.6 | 4.5 | 260 | " | 50.654 | " |
| 351 | " | " | D-5-32 | 11.0 | 8.0 | 5.1 | 550 | " | 48.401 | " |
| 352 | " | " | C-1-14 | 10.0 | 6.1 | 3.8 | 420 | " | 50.498 | " |
| 353 | " | " | E-6-4 | 9.5 | 6.5 | 3.2 | 260 | " | 49.231 | " |
| 354 | " | " | D-3-9 | 8.9 | 8.0 | 3.8 | 400 | " | 49.391 | |
| 355 | " | " | E-7-5 | 12.3 | 7.1 | 4.9 | 525 | " | 48.754 | 半欠 |
| 356 | 第72図 | " | D-5-31 | 8.8 | 7.8 | 3.3 | 340 | " | 48.596 | 磨痕有 |
| 357 | " | " | D-6-7 | 8.7 | 4.1 | 2.8 | 190 | " | 48.829 | 半欠、磨痕有 |
| 358 | " | " | D-0-1 | 9.9 | 5.3 | 4.2 | 315 | " | 50.523 | 磨痕有 |
| 359 | " | " | E-8-1 | 7.4 | 5.9 | 3.6 | 250 | " | 47.437 | " |
| 360 | " | " | D-1-20 | 4.1 | 4.6 | 1.9 | 65 | " | 50.754 | " |
| 361 | " | " | D-5-28 | 8.6 | 7.3 | 6.0 | 480 | 頁岩 | 49.026 | 半欠 |
| 362 | 第73図 | " | D-5-16 | 9.0 | 7.4 | 4.9 | 435 | 砂岩 | 49.411 | 磨痕有 |
| 363 | " | " | E-7-9 | 9.5 | 7.0 | 4.3 | 360 | " | 48.912 | " |

| 番号 | 挿図 | 類別 | 区番号 | 法 量 | | | | 石 質 | レベル | 備 考 |
|-----|------|----|--------|--------------------|-------------------|-------------------|------------------|-----|--------|------|
| | | | | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重 さ | | | |
| 364 | 第73図 | 敲石 | E-7-14 | 10.5 ^{cm} | 8.5 ^{cm} | 2.3 ^{cm} | 310 ^g | 砂 岩 | 47.884 | 磨痕有 |
| 365 | " | " | E-9-2 | 13.3 | 6.5 | 3.9 | 460 | " | 45.448 | " |
| 366 | 第74図 | 磨石 | D-3-1 | 12.3 | 7.2 | 2.4 | 360 | " | 50.541 | 敲石並用 |
| 367 | " | " | E-2-1 | 10.2 | 9.0 | 6.4 | 780 | " | 50.576 | " |
| 368 | " | " | D-2-7 | 10.4 | 8.5 | 8.6 | 1000 | " | 50.926 | " |
| 369 | 第75図 | 研石 | C-1-13 | 18.2 | 10.2 | 6.1 | 1750 | " | 50.498 | |
| 370 | " | " | E-6-2 | 14.0 | 9.0 | 2.5 | 600 | " | 48.857 | |
| 371 | 第76図 | " | F-7-8 | 30.8 | 22.0 | 15.6 | 11500 | " | 47.411 | |

第10表 表面採集資料観察表（土器）

| 番号 | 挿図 | 層位 | 部位 | 焼成 | 色調 | 形 態、文 様 の 特 徴 |
|-----|------|----|-----|----|-----|---------------|
| 372 | 第78図 | 表 | 口縁部 | 良 | 茶褐色 | 口縁部破片 |
| 373 | " | " | 胴部 | " | " | 刻み目突帯2条 |
| 374 | " | " | " | " | " | 細かく浅い沈線2条 |

第11表 表面採集資料観察表（石器）

| 番号 | 挿図 | 類別 | 法 量 | | | | 石 質 | 備 考 |
|-----|------|--------|-------------------|-------------------|-------------------|-----------------|-----|---------|
| | | | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重 さ | | |
| 375 | 第79図 | 磨石 | 5.0 ^{cm} | 4.6 ^{cm} | 7.9 ^{cm} | 95 ^g | 砂 岩 | 敲石並用 |
| 376 | " | " | 10.7 | 3.6 | 2.7 | 150 | " | 槌石並用 |
| 377 | " | 打製石斧 | 5.7 | 2.5 | 0.7 | 10 | 頁 岩 | 半欠 |
| 378 | " | 磨石 | 6.6 | 8.0 | 3.3 | 300 | 砂 岩 | 敲石並用、半欠 |
| 379 | 第80図 | 研石 | 9.5 | 6.4 | 2.2 | 220 | " | |
| 380 | " | リーマー | 5.3 | 2.1 | 1.8 | 30 | " | |
| 381 | " | " | 6.0 | 2.3 | 1.9 | 40 | " | |
| 382 | " | " | 6.6 | 2.7 | 1.8 | 50 | " | |
| 383 | " | 石錘 | 11.2 | 9.6 | 4.0 | 440 | " | 一部欠損 |
| 384 | " | 磨石 | 5.2 | 4.6 | 4.1 | 140 | " | 敲石並用 |
| 385 | 第81図 | " | 11.0 | 7.8 | 5.6 | 610 | " | |
| 386 | " | " | 15.0 | 8.5 | 4.7 | 980 | " | 敲石並用 |
| 387 | " | " | 11.8 | 9.6 | 6.2 | 930 | " | " |
| 388 | 第82図 | " | 12.0 | 10.5 | 4.2 | 900 | " | " |
| 389 | " | " | 12.3 | 10.9 | 7.6 | 1410 | " | " |
| 390 | " | " | 7.4 | 6.9 | 2.6 | 170 | " | " |
| 391 | " | " | 10.5 | 9.0 | 3.9 | 520 | " | " |
| 392 | 第83図 | 大形台石 | 30.7 | 13.0 | 10.6 | 6000 | " | "、一部欠損 |
| 393 | " | 板状大形台石 | 21.2 | 13.7 | 7.0 | 2700 | " | |

まとめにかえて

今回の夏井土光遺跡の調査では、弥生時代前期初頭から縄文時代終末期の文化と、縄文時代早前期の文化が重なり合う複合遺跡であることが判明した。内容等については、それぞれの項ですでに述べてきたが、ここでまた、若干不足分をおぎなってみよう。

まず、第Ⅲ層出土の土器類、特に夜臼式土器についてである。この型式土器の出土例は、表採資料を含め大隅地方東部での判例は断片的で、あるいは存在しないのでは、とも考えられていたが、今回の調査でその疑問点を覆えたことになった。しかしながら、包含層のおおかたが攪乱の被害を受け、出土遺物も小破片で器形などをうかがい知る資料も乏しく、不十分な調査結果といえそうである。この点今後の判例を待ちたい。

石器類についても特記すべきものは無いが、ただ、リーマーと仮称しておいた指状大の小形棒状石器に注目したい。一方部の先端部分に、回転作用と考えられる磨り痕が、僅かに識別できる石器である。その形状や石質（砂岩）のうえからは、直接的な穿孔具、とは考えにくく、おそらく、すでに穿孔されているものなどに差し込み、回転作用を行った穴ぐり具、と捉えてみた。最近の情報は知らないが、高橋貝塚遺跡にその前例がある。との御教示を河口会長より得た。これも課題を残した好適な資料といえよう。

挟入片刃磨製石斧と呼称した石器もまた、類例の極めて少ない好資料である。手もとに資料がなく南九州に類例を知らないが、横浜市大塚遺跡（弥生時代遺跡）に着柄の痕跡をとどめた石器、として報告されている。器形や器状、大きさなども同状であると考えられるが、本石器の場合、中央部よりやや上部部分に、整形のよい挟りがある点に相違が見受けられる。この二例共に、弥生時代前半期の所産であり、この点に注目したい。

溝状遺構はその全容を知ることができなかったが、遺構内の堆積土壌をプラント・オパール分析資料に採集できたことに意義があった。分析結果及び論証については、宮崎大学藤原教授による「プラント・オパール定量分析結果について」の項を参照されたい。

期待はずれに終わった第Ⅵ層の調査では、2種類の住居跡遺構を検出できたことである。竪穴をもたない平地式住居跡と、竪穴式住居跡である。いずれも層位的且つ遺物の出土状況などから、縄文時代早期の所産と考えられようが、平地式住居跡内には焼けた状態の集石が、遺構内中央部に、竪穴式住居跡は斜面地に構築されているなどの特殊性が見受けられた。住居跡の検出例は、本町の場合、倉園B遺跡に次いで2例目の発見となった。

以上 特殊なものだけを取り上げてみたが、いずれにしても、今回の調査は単純に資料の提供、という点だけに終わったようである。問題点などの解明は今後の調査や研究にゆだねなければならない。

文責 瀬戸口

付 篇

(プラント・オパール定量分析結果について)

宮崎大学農学部・藤原宏志教授に依頼したプラント・オパール分析結果は、下記の通りであった。(原文)

鹿児島：夏井土光遺跡における
プラント・オパール分析結果について

宮崎大学 藤原宏志

1991年6月20日、当該遺跡で採取した試料の分析結果ができましたので報告します。

*試料採取地点：Na1地点壁面……9点

Na2地点溝埋土…4点

計—13点

*報告資料

プラント・オパール定量分析結果

同上 生産量推定結果

同上 図

分析結果に関するコメント

- 1 Na1地点の1層および3層からイネ (*Oryza sativa*) のプラント・オパールが検出された。Na1地点の3層は弥生および夜臼式土器を包含する層である。土器包含層を直ちに、その土器時代の生活面と断定することは難しいものの、これらの土器時代にこの地でイネが生産された可能性がある。
- 2 Na2地点の3層および4層からイネのプラント・オパールが検出された。この地点は弥生および夜臼式土器の包含する溝遺構である。
4層はこの溝遺構の底部にあたる。この試料からイネが検出されたことは、この溝が使われていた時代にイネがあったことを示すものと思われる。
- 3 全体にタケ類のプラント・オパールが多く検出され、堆積環境が樹林帯であったことを示している。
- 4 弥生および夜臼式土器包含層から、イネが検出されたが、量的に少なく形状解析を行うに至らなかった。
- 5 両地点ともキビ族植物のプラント・オパールがイネとともに検出された。キビ族植物には野草とともにアワ、ヒエ、キビなどの雑穀類が含まれる。ここの地形を考えると、焼畑を含む畑作系譜の農耕が営まれた可能性が大きい。

以上

夏井土光遺跡における プラントメオパール定量分析結果

宮崎大学農学部 農作業管理学研究室

sampling block [No1]

sampling date (6/20'91) 植物体乾重 (t/10a. cm)

| 層名 | イネ (O. sati) | イネ粉 (rice g.) | キビ族 (Pani.) | キビ族種実 (Pani.seed) | ヨシ (Phrag.) | タケ亜科 (Bamb.) | ウシクサ族 (Andoro.) |
|-----|-----------------|------------------|----------------|----------------------|----------------|-----------------|--------------------|
| 1 | 1.831 | 0.641 | 35.457 | 16.101 | 0.000 | 3.886 | 5.148 |
| 3 | 0.336 | 0.118 | 29.237 | 13.277 | 0.000 | 1.808 | 2.689 |
| 4-1 | 0.000 | 0.000 | 21.362 | 9.700 | 0.000 | 1.081 | 1.706 |
| 4-2 | 0.000 | 0.000 | 27.680 | 12.570 | 0.000 | 0.363 | 2.411 |
| 5 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.089 | 0.115 |
| 6 | 0.000 | 0.000 | 29.094 | 13.212 | 0.870 | 0.602 | 2.957 |
| 7 | 0.000 | 0.000 | 4.609 | 2.093 | 0.000 | 0.272 | 4.567 |
| 8 | 0.000 | 0.000 | 19.044 | 8.648 | 0.000 | 1.226 | 1.936 |
| 9 | 0.000 | 0.000 | 12.789 | 5.807 | 0.000 | 0.823 | 1.418 |

sampling block [No2]

sampling date (6/20'91) 植物体乾重 (t/10a. cm)

| 層名 | イネ (O. sati) | イネ粉 (rice g.) | キビ族 (Pani.) | キビ族種実 (Pani.seed) | ヨシ (Phrag.) | タケ亜科 (Bamb.) | ウシクサ族 (Andoro.) |
|----|-----------------|------------------|----------------|----------------------|----------------|-----------------|--------------------|
| 1 | 0.000 | 0.000 | 2.129 | 0.967 | 0.000 | 3.769 | 4.760 |
| 2 | 0.000 | 0.000 | 25.672 | 11.658 | 0.000 | 2.637 | 2.319 |
| 3 | 0.589 | 0.206 | 17.109 | 7.789 | 0.000 | 5.289 | 5.465 |
| 4 | 1.412 | 0.495 | 35.168 | 15.970 | 0.000 | 4.266 | 8.638 |

ーブラント・オパール分析による生産量推定結果ー

夏井土光 [No.1] (6/20'91 sampling)

| 層名 | 深さ (cm) | 層厚 (cm) | GB数/g | 植物名 | PO/GB | PO数/g | 仮比重 | PO数/cc | 地上部乾重 (t/10a.cm) | 種実重 (t/10a.cm) | 種実生産総量 (t/10a) |
|---------|------------|------------|--------|-----|-------|-------|-------|--------|---------------------|-------------------|-------------------|
| [1] | 0 | 27 | 300000 | イネ | 3/127 | 7087 | 0.879 | 6228 | 1.831 | 0.641 | 17.319 |
| | | | | キビ族 | 14 | 33071 | | 29063 | 14.000 | 16.101 | 434.720 |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 39 | 92126 | | 80960 | 3.886 | | |
| | | | | ススキ | 20 | 47244 | | 41518 | 5.148 | | |
| [3] | 27 | 17 | 300000 | イネ | 1/127 | 2362 | 0.483 | 1141 | 0.336 | 0.118 | 1.998 |
| | | | | キビ族 | 21 | 49606 | | 23965 | 21.000 | 13.277 | 225.701 |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 33 | 77953 | | 37659 | 1.808 | | |
| | | | | ススキ | 19 | 44882 | | 21682 | 2.689 | | |
| [4-1] | 44 | 21 | 300000 | イネ | 0/132 | 0 | 0.550 | 0 | 0.000 | 0.000 | 0.000 |
| | | | | キビ族 | 14 | 31818 | | 17510 | 14.000 | 9.700 | 203.706 |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 18 | 40909 | | 22512 | 1.081 | | |
| | | | | ススキ | 11 | 25000 | | 13758 | 1.706 | | |
| [4-2] | 65 | 21 | 300000 | イネ | 0/145 | 0 | 0.522 | 0 | 0.000 | 0.000 | 0.000 |
| | | | | キビ族 | 21 | 43448 | | 22689 | 21.000 | 12.570 | 263.960 |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 7 | 14483 | | 7563 | 0.363 | | |
| | | | | ススキ | 8 | 37241 | | 19447 | 2.411 | | |
| [5] | 86 | 34 | 300000 | イネ | 0/138 | 0 | 0.425 | 0 | 0.000 | 0.000 | 0.000 |
| | | | | キビ族 | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | 0.000 | 0.000 |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 2 | 4348 | | 1847 | 0.089 | | |
| | | | | ススキ | 1 | 2174 | | 924 | 0.115 | | |
| [6] | 120 | 33 | 301263 | イネ | 0/160 | 0 | 0.667 | 0 | 0.000 | 0.000 | 0.000 |
| | | | | キビ族 | 19 | 35775 | | 23848 | 19.000 | 13.212 | 435.982 |
| | | | | ヨシ | 1 | 1883 | | 1255 | 0.670 | | |
| | | | | タケ | 10 | 18829 | | 12551 | 0.602 | | |
| | | | | ススキ | 19 | 35775 | | 23848 | 2.957 | | |
| [7] | 153 | 21 | 307759 | イネ | 0/212 | 0 | 0.651 | 0 | 0.000 | 0.000 | 0.000 |
| | | | | キビ族 | 4 | 5807 | | 3778 | 4.000 | 2.093 | 43.952 |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 6 | 8710 | | 5667 | 0.272 | | |
| | | | | ススキ | 39 | 56616 | | 36834 | 4.567 | | |

[No.1] の続き

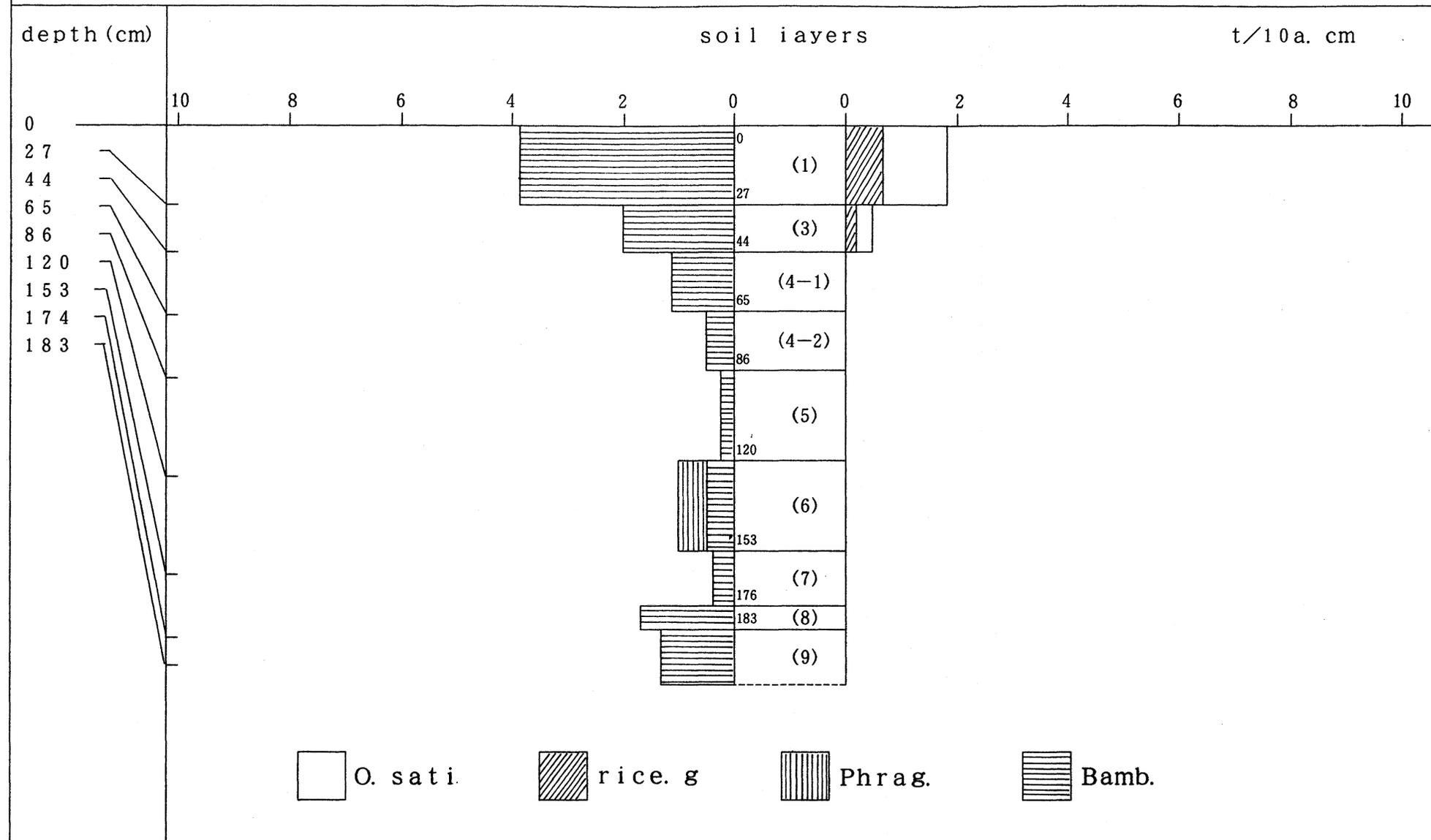
| | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-------|--------|-----|-------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|
| [8] | 174 | 9 | 302556 | イネ | 0/133 | 0 | 0.624 | 0 | 0.000 | 0.000 | 0.000 |
| | | | | キビ族 | 11 | 25023 | | 15610 | 11.000 | 8.648 | 77.830 |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 18 | 40947 | | 25543 | 1.226 | | |
| | | | | ススキ | 11 | 25023 | | 15610 | 1.936 | | |
| [9] | 183 | | 334880 | イネ | 0/219 | 0 | 0.623 | 0 | 0.000 | 0.000 | |
| | | | | キビ族 | 11 | 16821 | | 10483 | 11.000 | 5.807 | |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 16 | 27524 | | 17153 | 0.823 | | |
| | | | | ススキ | 12 | 18350 | | 11436 | 1.418 | | |

—ブランチ・オパール分析による生産量推定結果—

夏井土光 [No.2] (6/20'91 sampling)

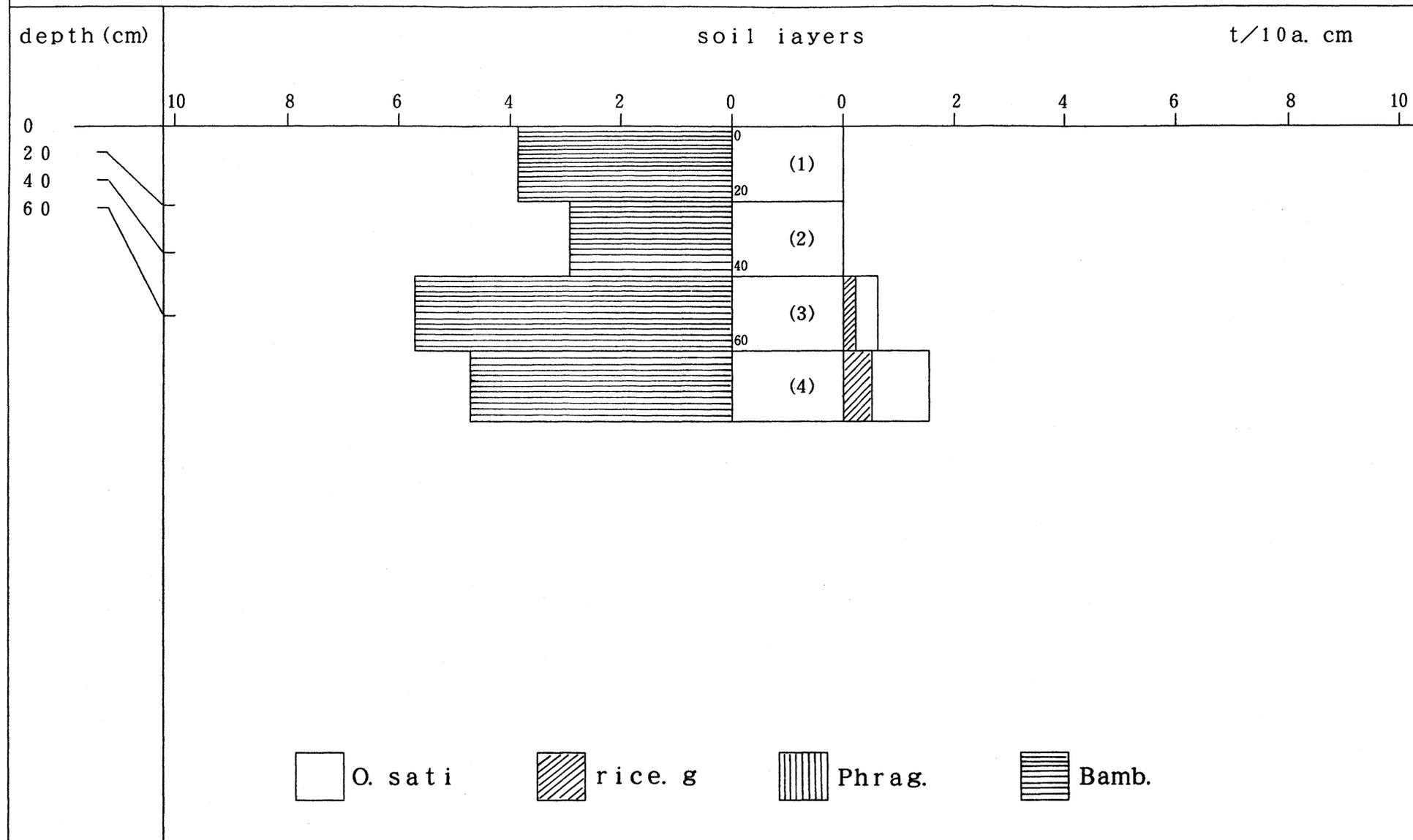
| 層位 | 深さ (cm) | 層厚 (cm) | GB数/g | 植物名 | PO/GB | PO数/g | 仮比重 | PO数/cc | 地上部乾重 (t/10a. cm) | 種実重 (t/10a. cm) | 種実生産総量 (t/10a) |
|-------|------------|------------|--------|-----|-------|--------|-------|--------|----------------------|--------------------|-------------------|
| [1] | 0 | 20 | 301233 | イネ | 0/93 | 0 | 0.539 | 0 | 0.000 | 0.000 | 0.000 |
| | | | | キビ族 | 1 | 3239 | | 1745 | 1.000 | 0.967 | 19.333 |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 45 | 145758 | | 78520 | 3.769 | | |
| | | | | ススキ | 22 | 71259 | | 38388 | 4.760 | | |
| [3] | 20 | 20 | 303879 | イネ | 0/138 | 0 | 0.531 | 0 | 0.000 | 0.000 | 0.000 |
| | | | | キビ族 | 18 | 39636 | | 21043 | 18.000 | 11.658 | 233.156 |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 47 | 103495 | | 54946 | 2.637 | | |
| | | | | ススキ | 16 | 35232 | | 18705 | 2.319 | | |
| [3] | 40 | 20 | 301233 | イネ | 1/89 | 3385 | 0.592 | 2003 | 0.589 | 0.206 | 4.127 |
| | | | | キビ族 | 7 | 23693 | | 14024 | 7.000 | 7.769 | 155.381 |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 55 | 186155 | | 110185 | 5.289 | | |
| | | | | ススキ | 22 | 74462 | | 44074 | 5.465 | | |
| [4] | 60 | | 301293 | イネ | 2/92 | 6550 | 0.734 | 4804 | 1.142 | 0.495 | |
| | | | | キビ族 | 12 | 39299 | | 28826 | 12.000 | 15.970 | |
| | | | | ヨシ | 0 | 0 | | 0 | 0.000 | | |
| | | | | タケ | 37 | 121172 | | 88880 | 4.266 | | |
| | | | | ススキ | 29 | 94973 | | 69663 | 8.638 | | |

-Estimation of plant products with plant opal analysais-



| | | | | |
|----------------|-------------------------------|---------------|---------|----------------------------|
| site | NATSUIDOKOU (KAGOSHIMA pref.) | | | |
| sampling block | No1 | sampling date | 6/20'91 | analyzed at MIYAZAKI univ. |

-Estimation of plant products with plant opal analysis-



| | | | | |
|----------------|-------------------------------|---------------|---------|----------------------------|
| site | NATSUIDOKOU (KAGOSHIMA pref.) | | | |
| sampling block | No2 | sampling date | 6/20'91 | analyzed at MIYAZAKI univ. |

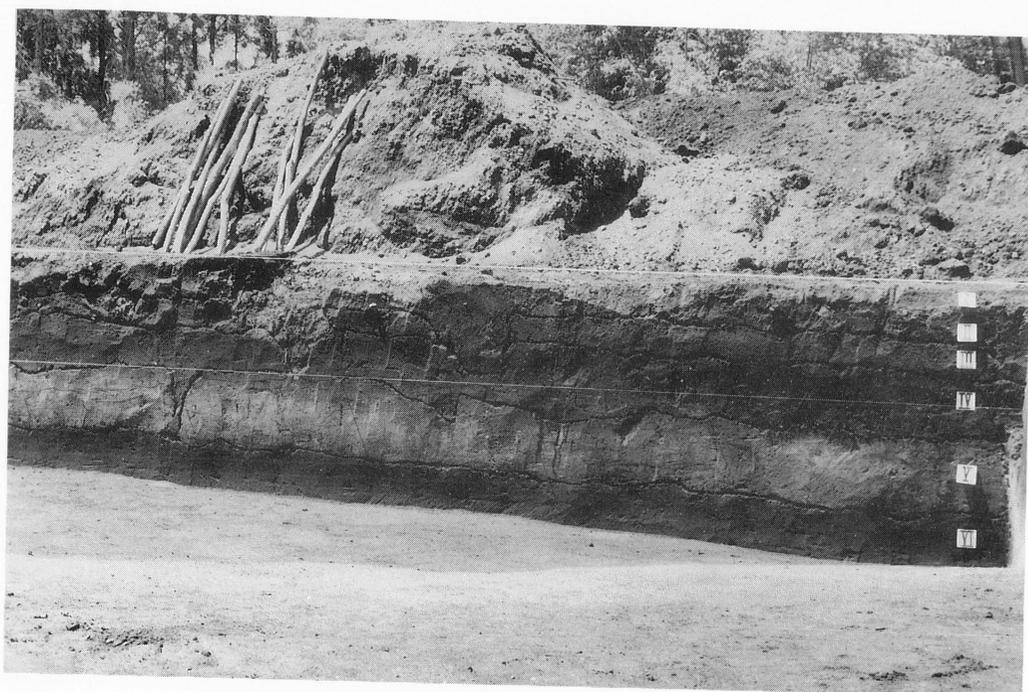
写真図版



夏井土光遺跡遠景



復元土器 (308)
図版 1. 遺跡の遠景及び復元土器



図版2 土層 上 E-1区
下同 拡大



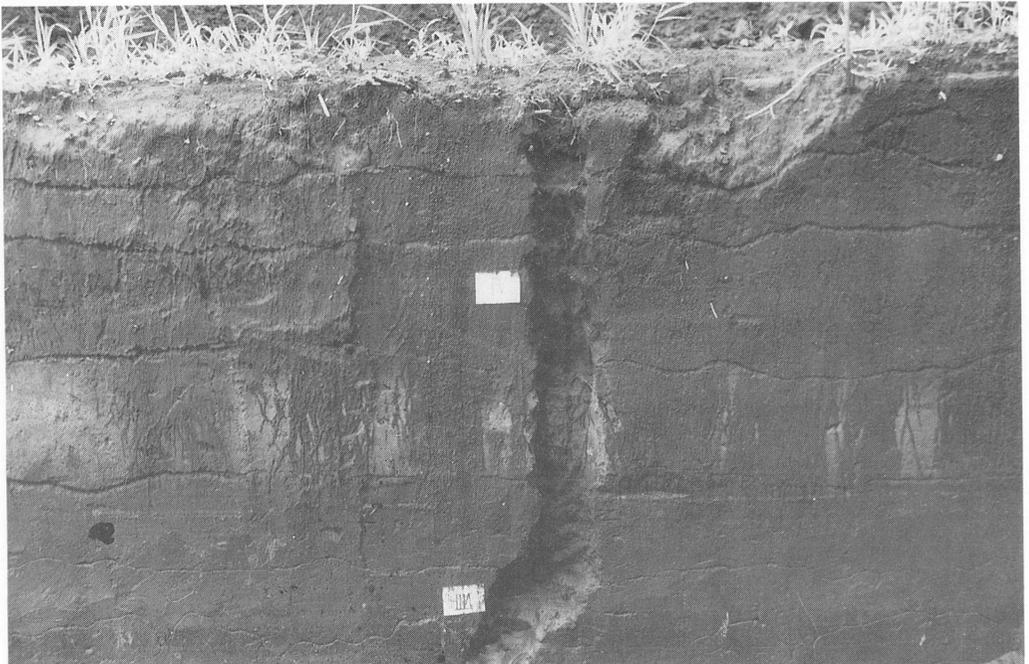
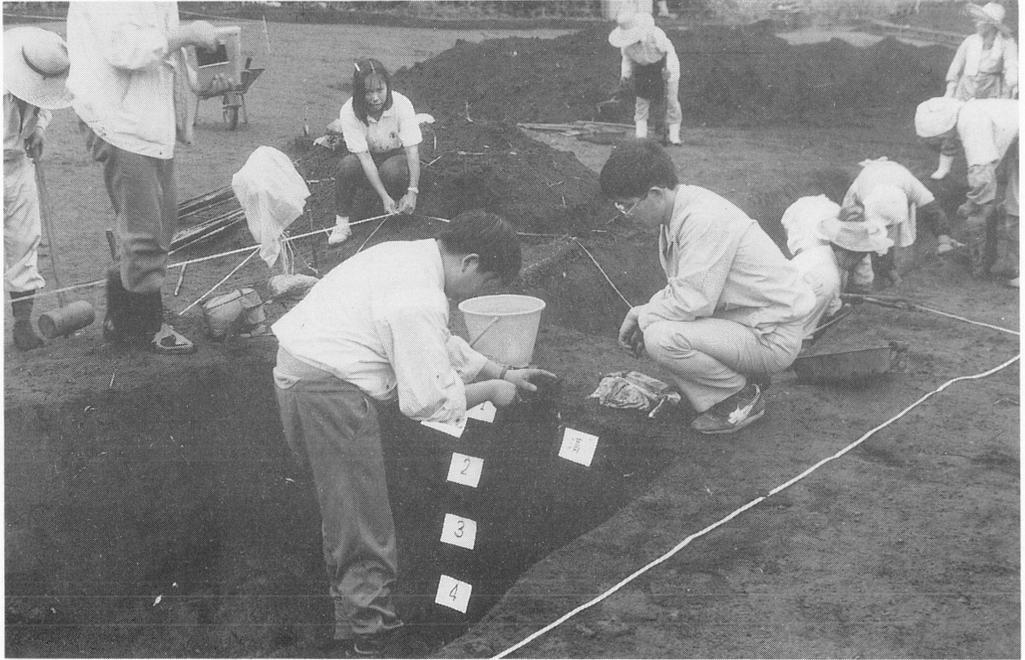
図版3 土層 上 E-7区
下 E-7区



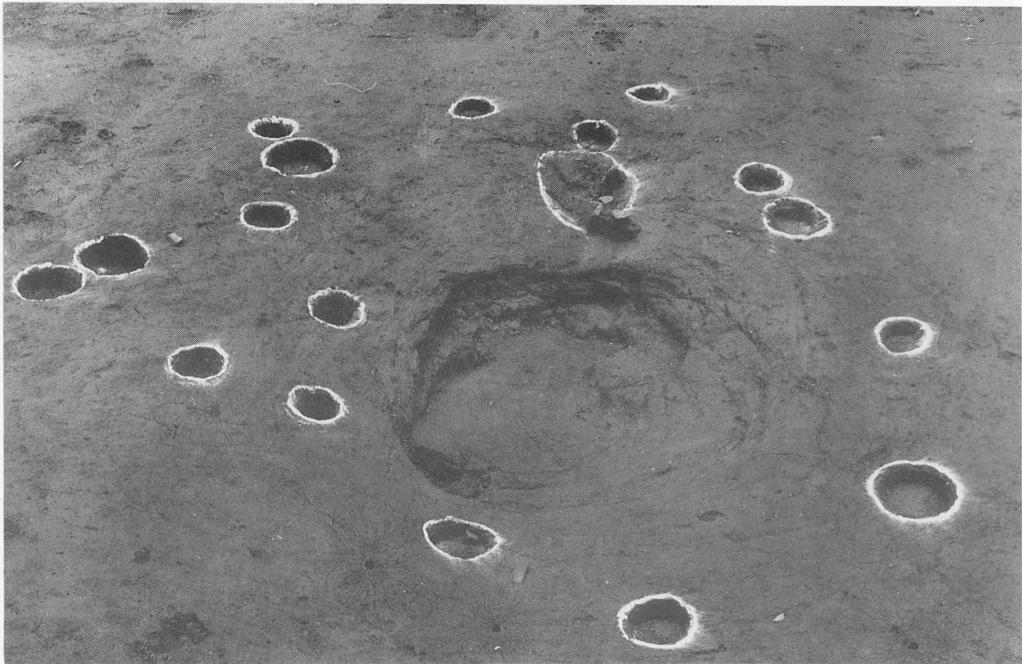
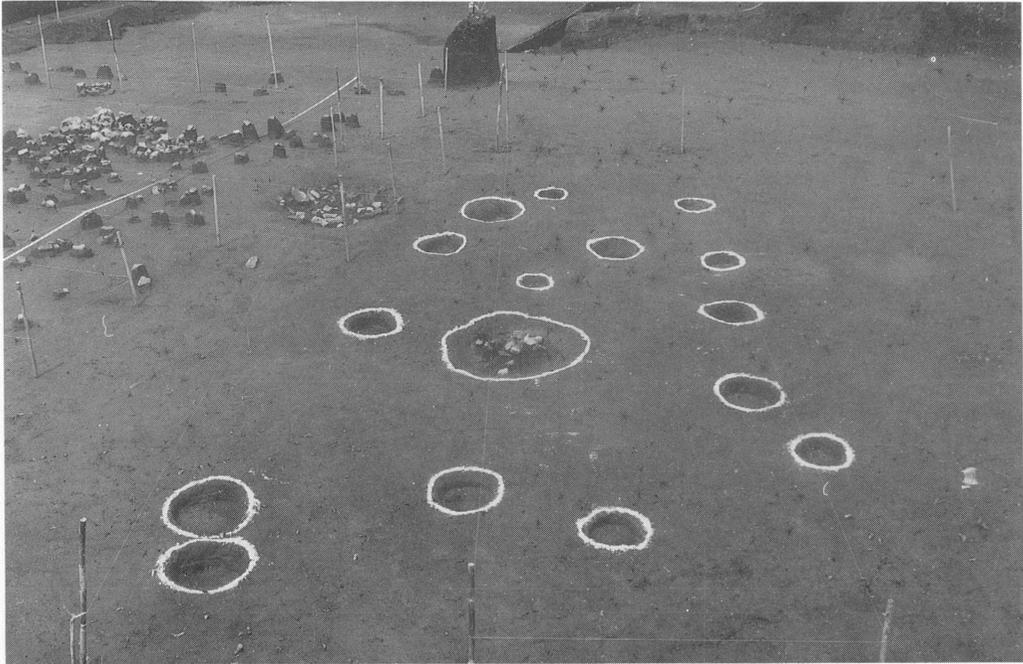
図版4 土層 上 B-1 C-1区
下 E-2区



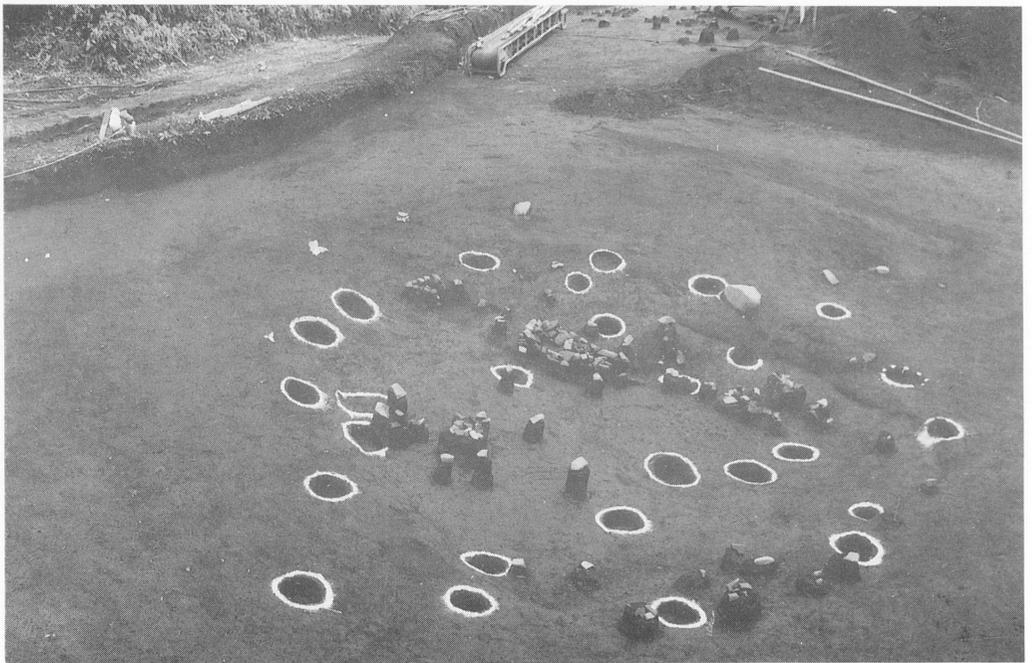
図版5 土層 上 E-7区
下 D-4区



図版 6 上 宮崎大学による土壌の採集風景
下 同採集跡



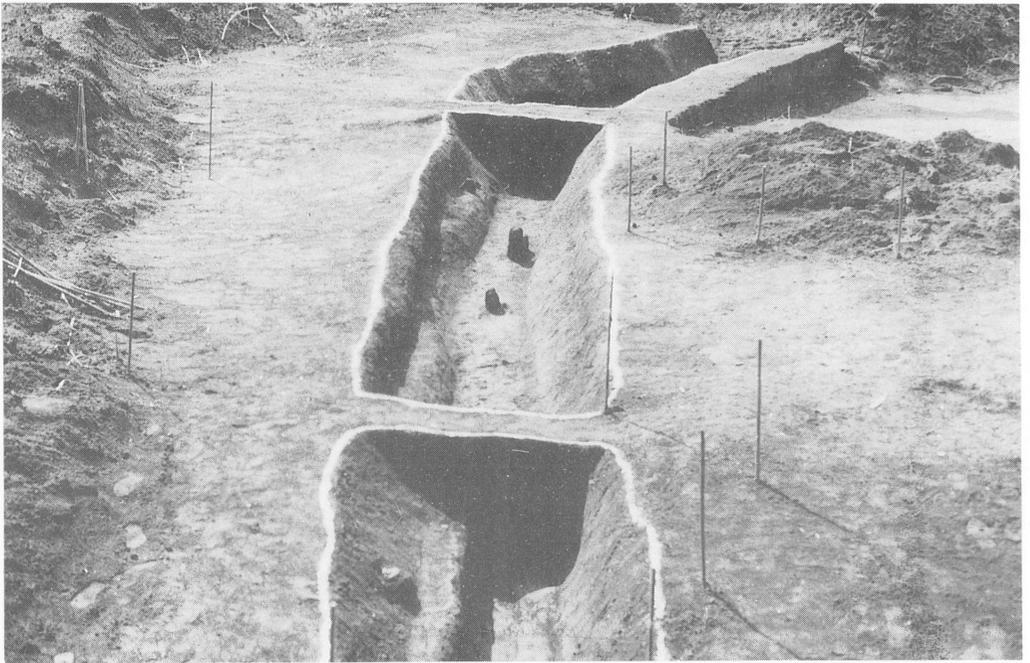
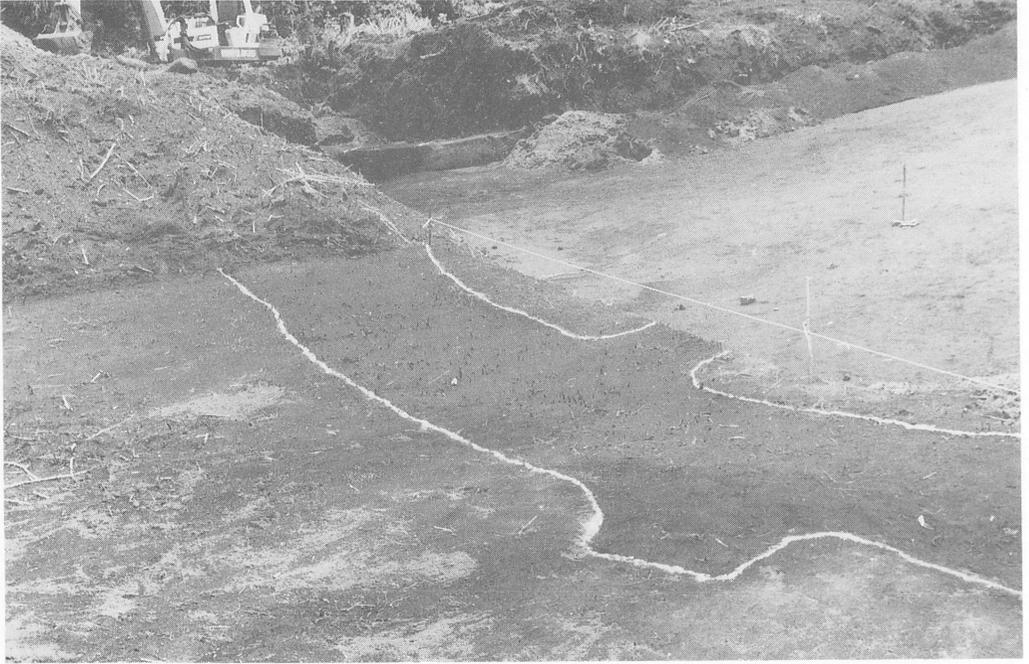
図版7 住居跡遺構 上 1号
下 2号



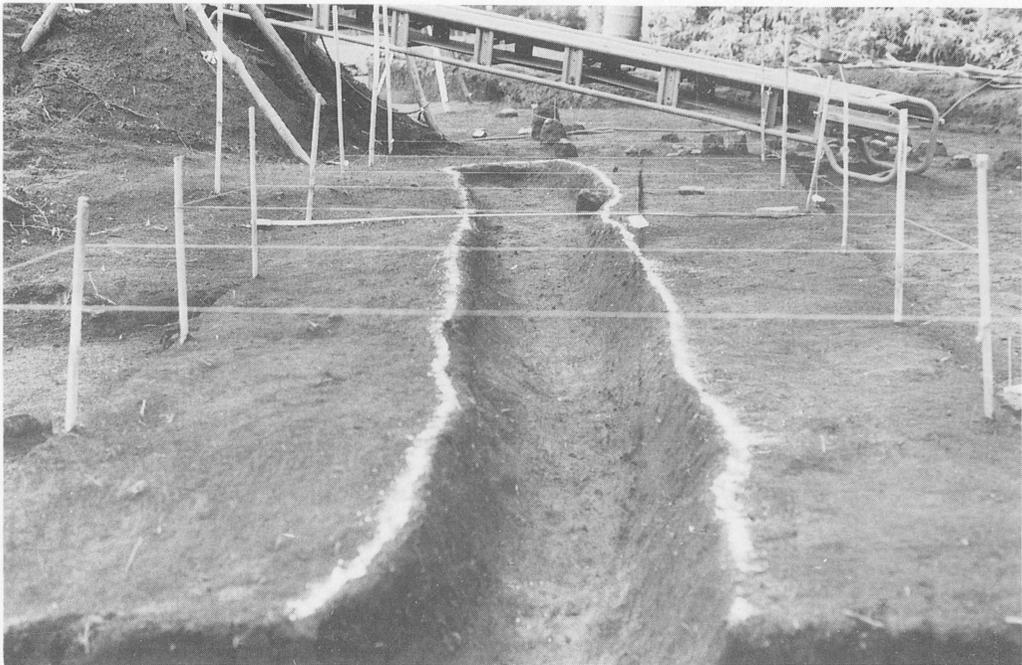
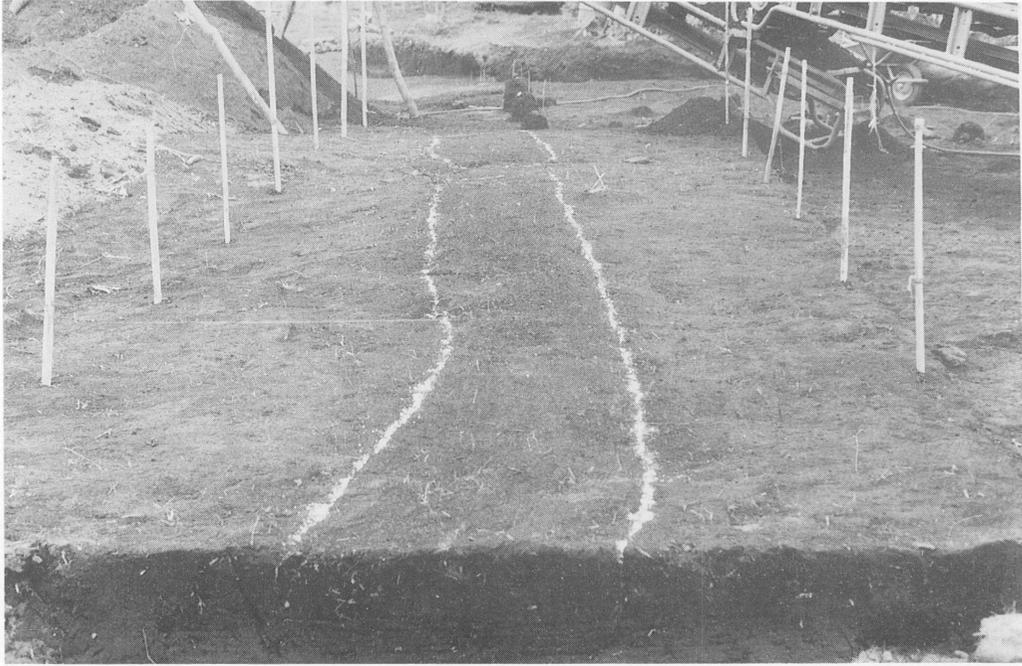
図版8 住居跡遺構 上 2号及び3号
下 3号



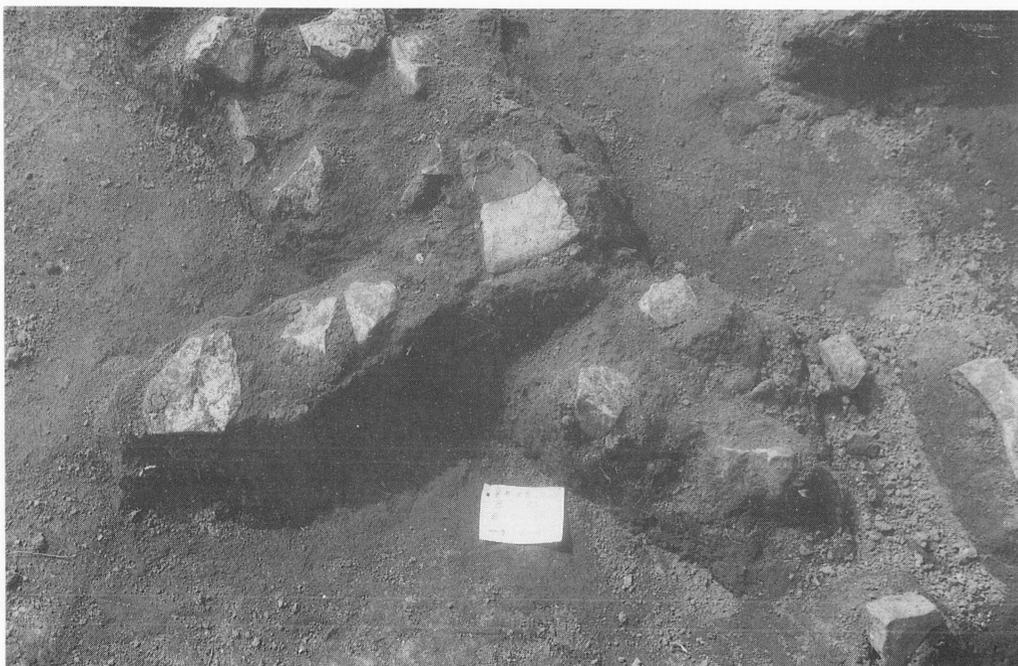
図版9 3号住居跡遺構内の遺物の出土状況



図版10 溝状遺構 (1)



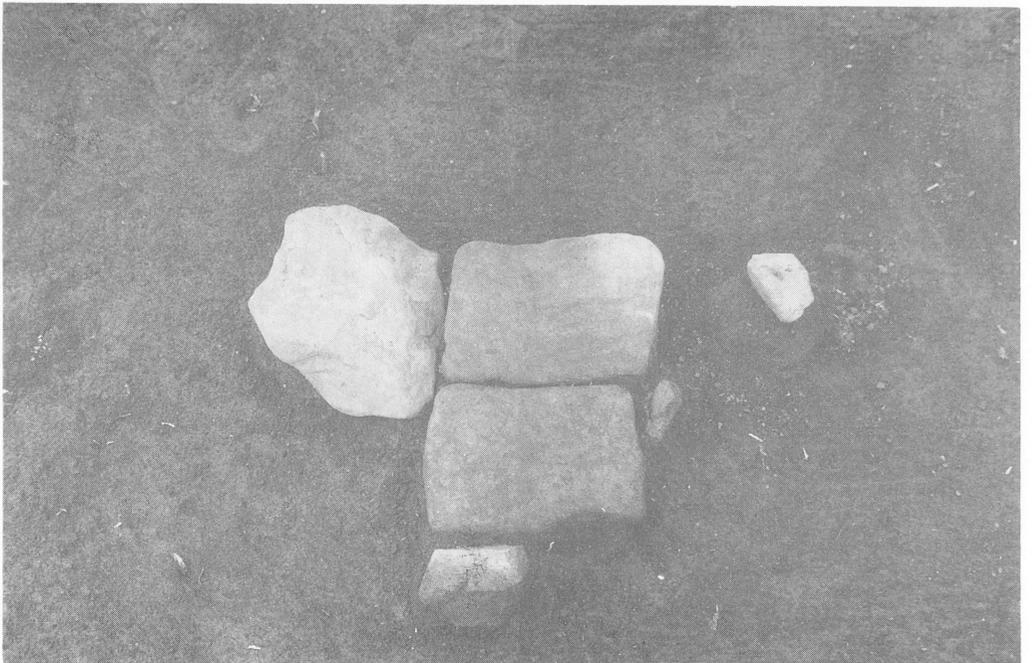
図版11 溝状遺構 (2)



図版12 土器の出土状況



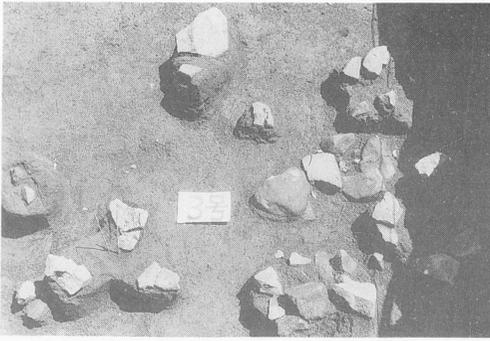
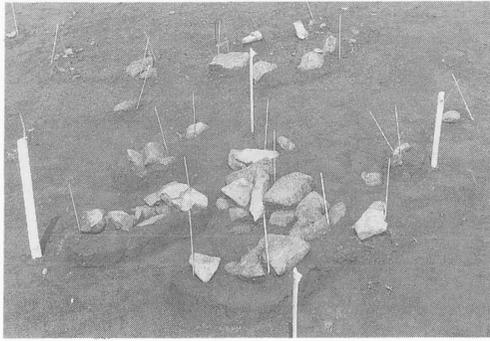
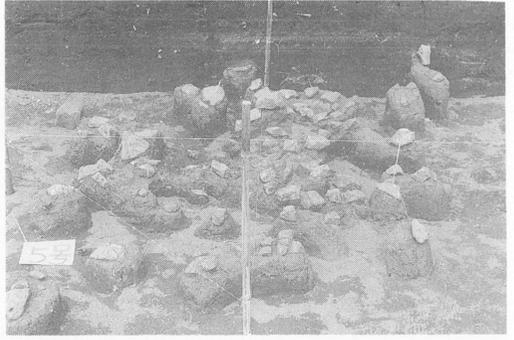
図版13 土器及び磨石の出土状況



図版14 配石遺構 $\frac{\text{上}}{\text{下}}$ $\frac{\text{2号}}{\text{1号}}$



図版15 遺物出土状況 上 D-5区
下 E-7区



図版16 集石遺構 1号～8号



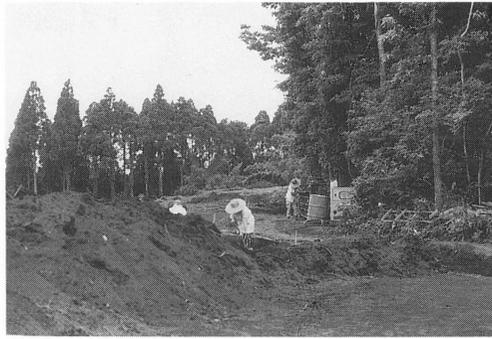
図版17 集石遺構 9号~13号



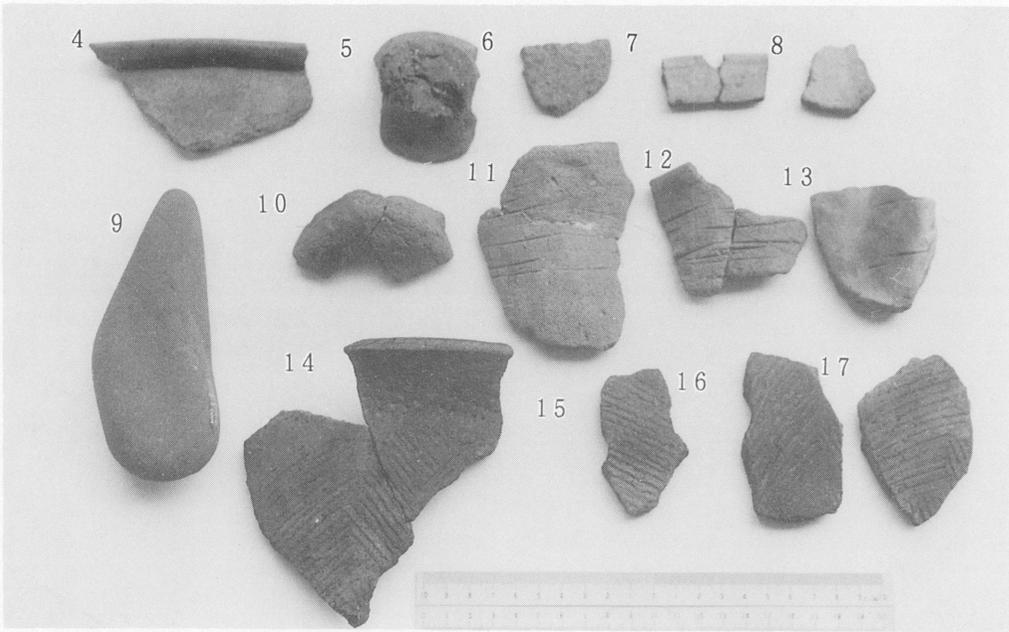
図版18 集石遺構 14号~22号



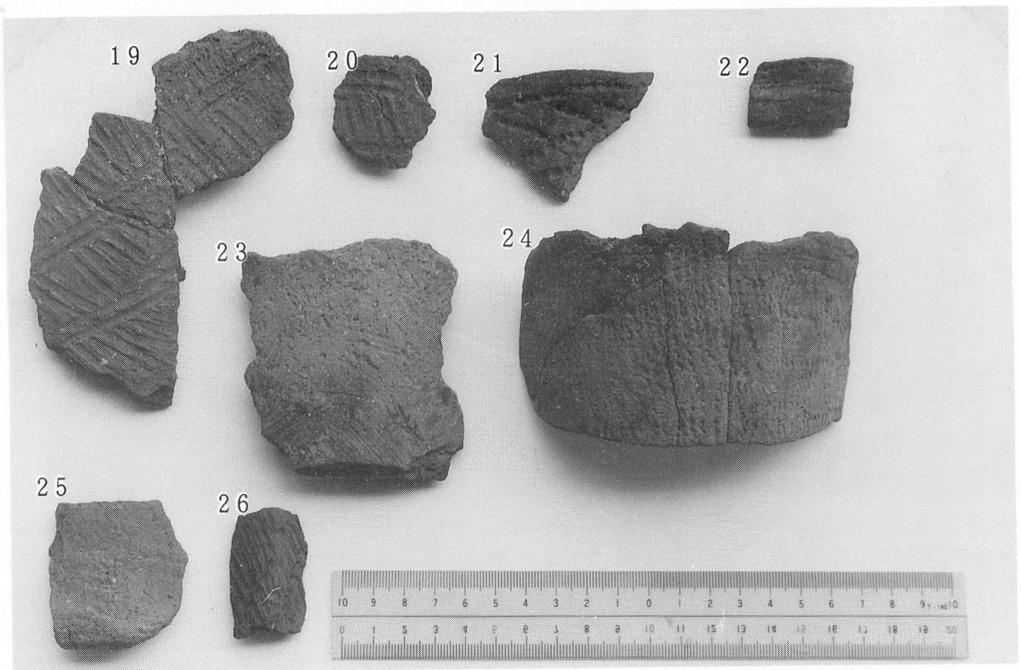
図版19 集石遺構 23号～28号 (右下2枚は3号住居跡内集石)



図版20 発掘作業風景



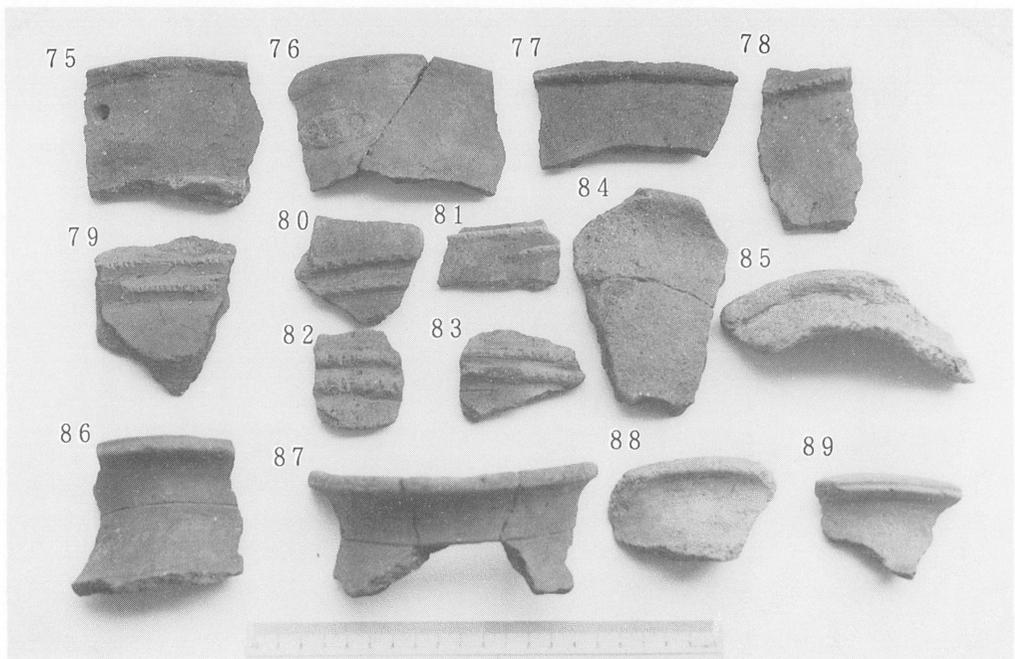
図版21 出土遺物（1～17）



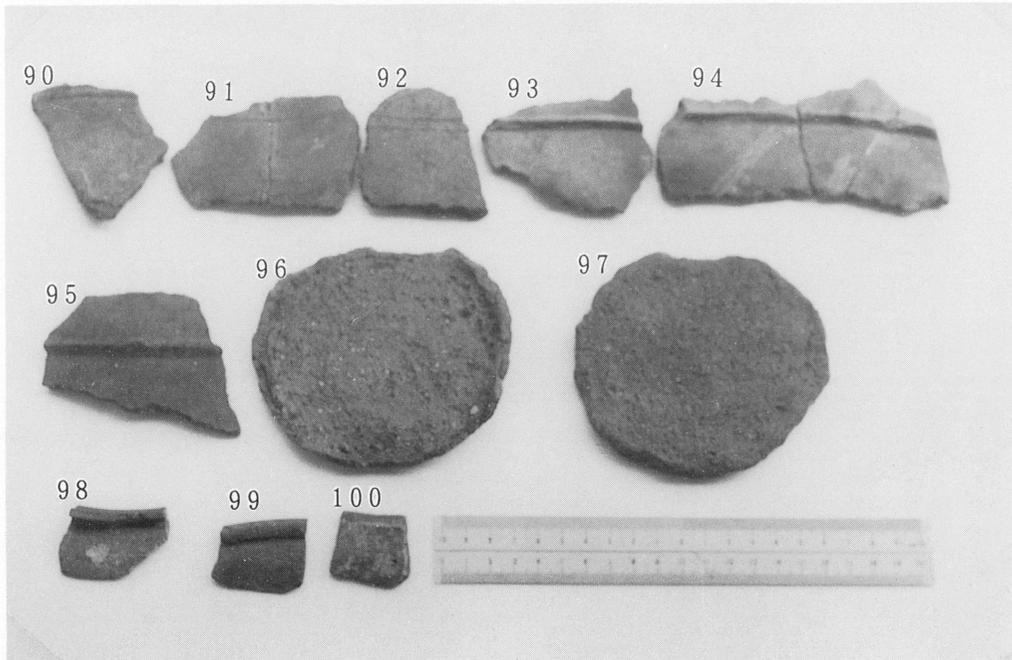
図版22 出土遺物 (18~26)



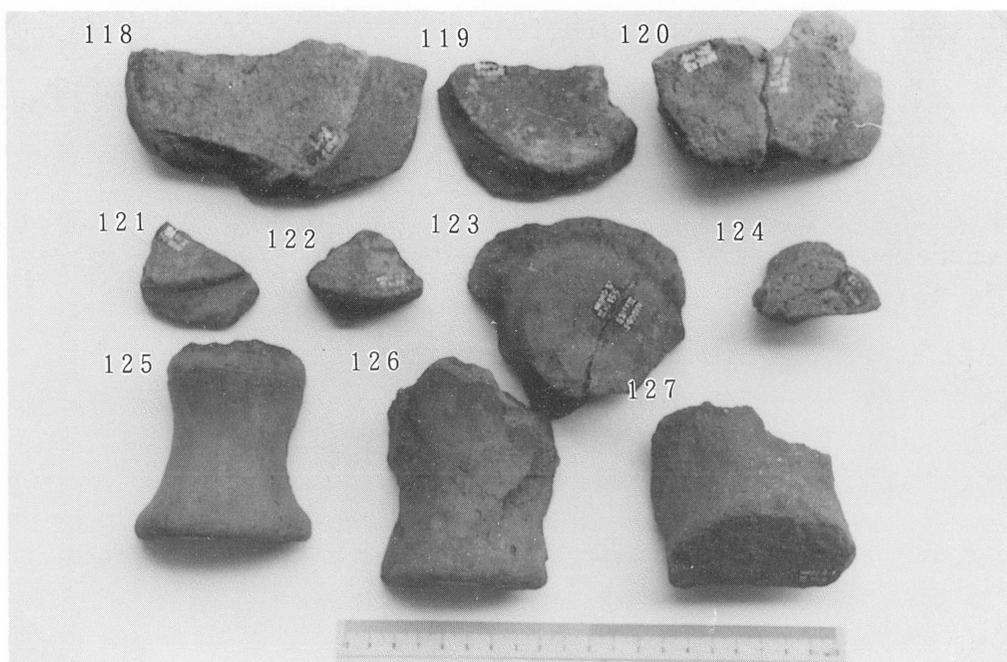
図版23 出土遺物 (27~55)



図版24 出土遺物 (56~89)



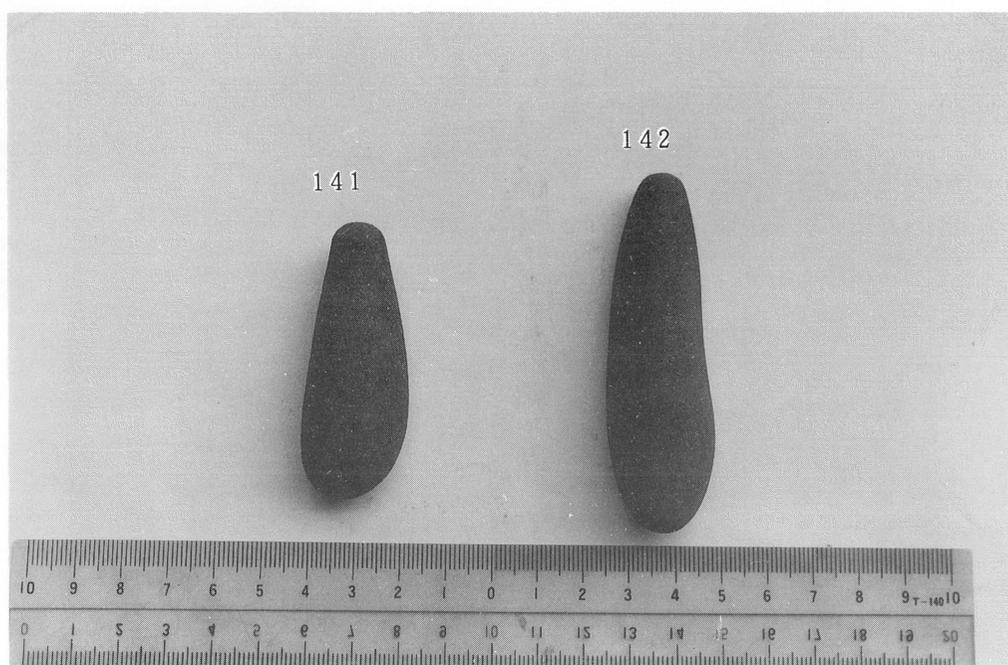
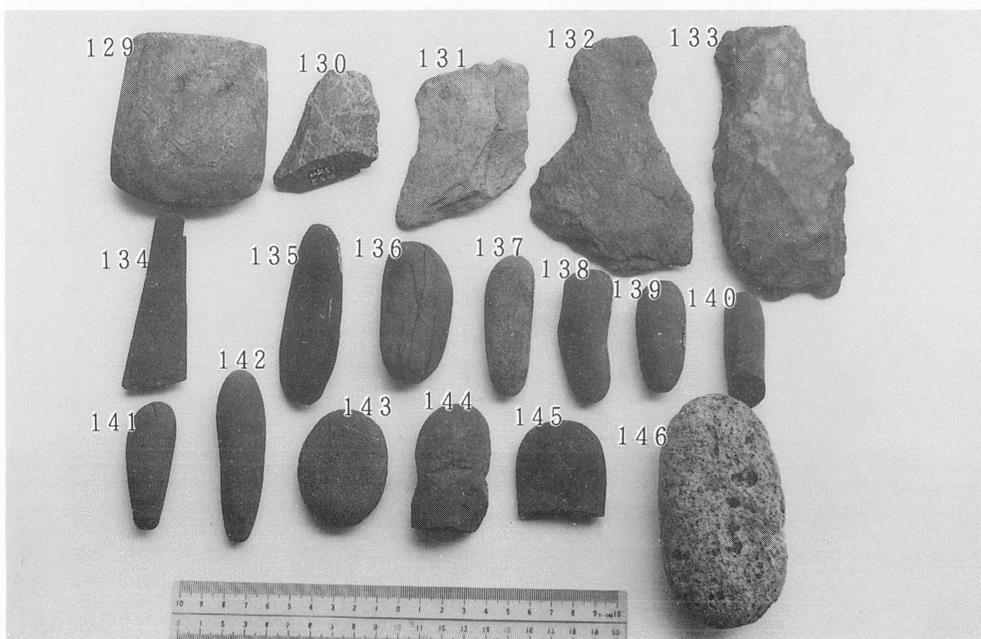
図版25 出土遺物 (90~100, 102~103)



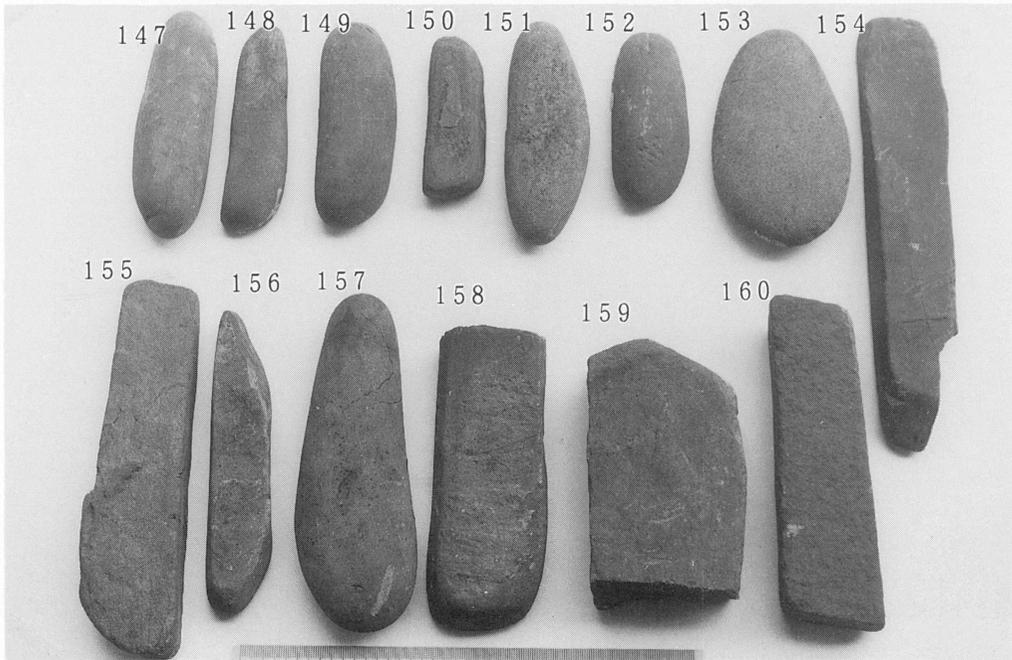
図版26 出土遺物 (104~127)



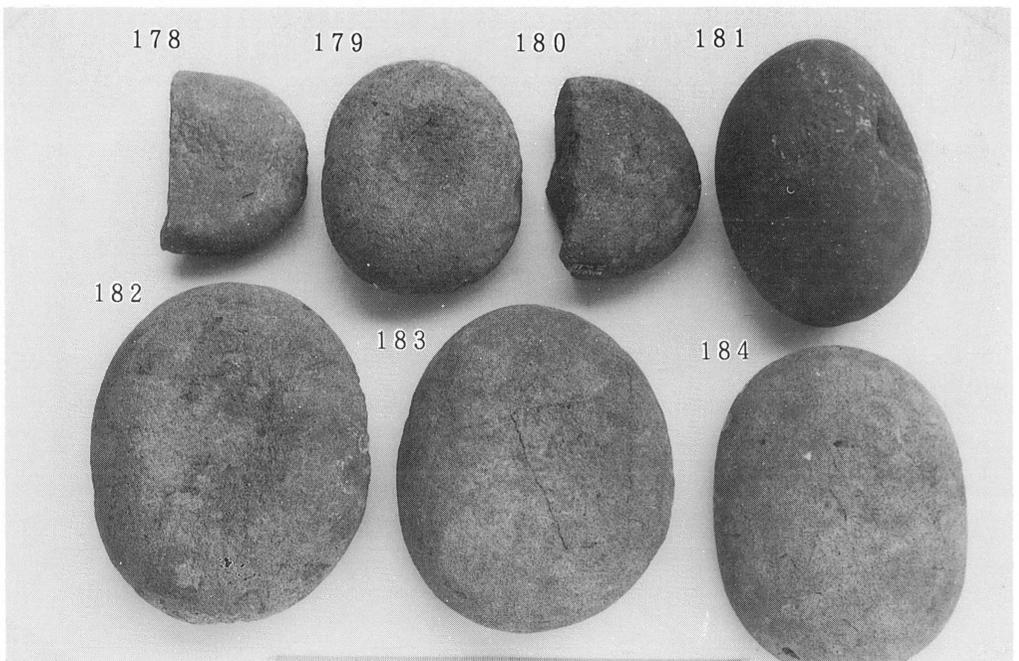
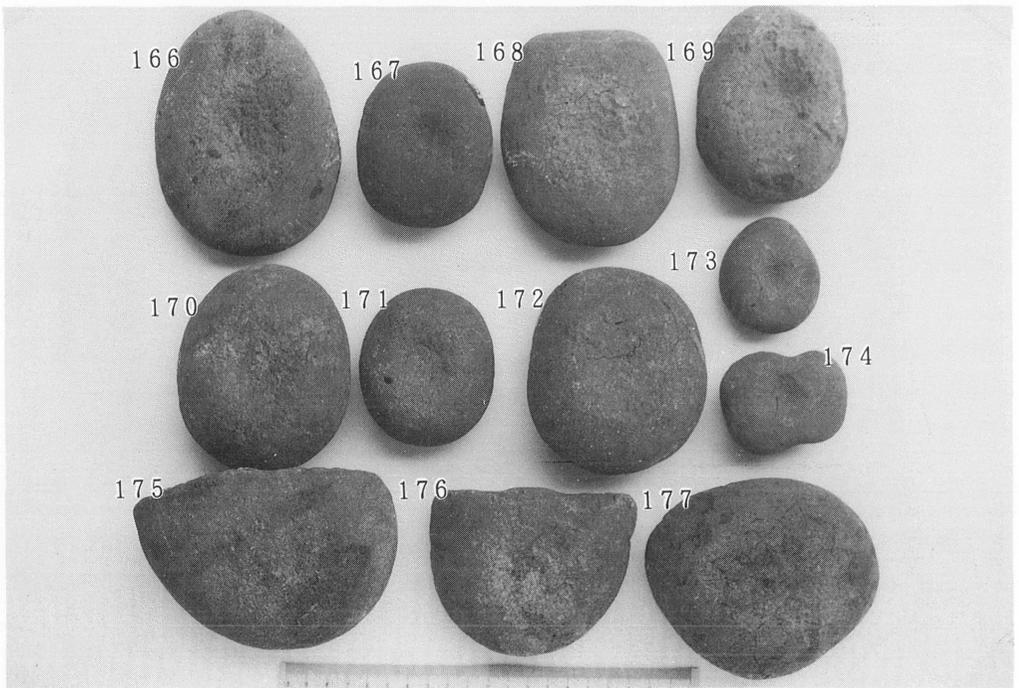
图版27 出土遺物（挟入片刃磨製石斧）



図版28 出土遺物 (129~146)



図版29 出土遺物 (147~165)



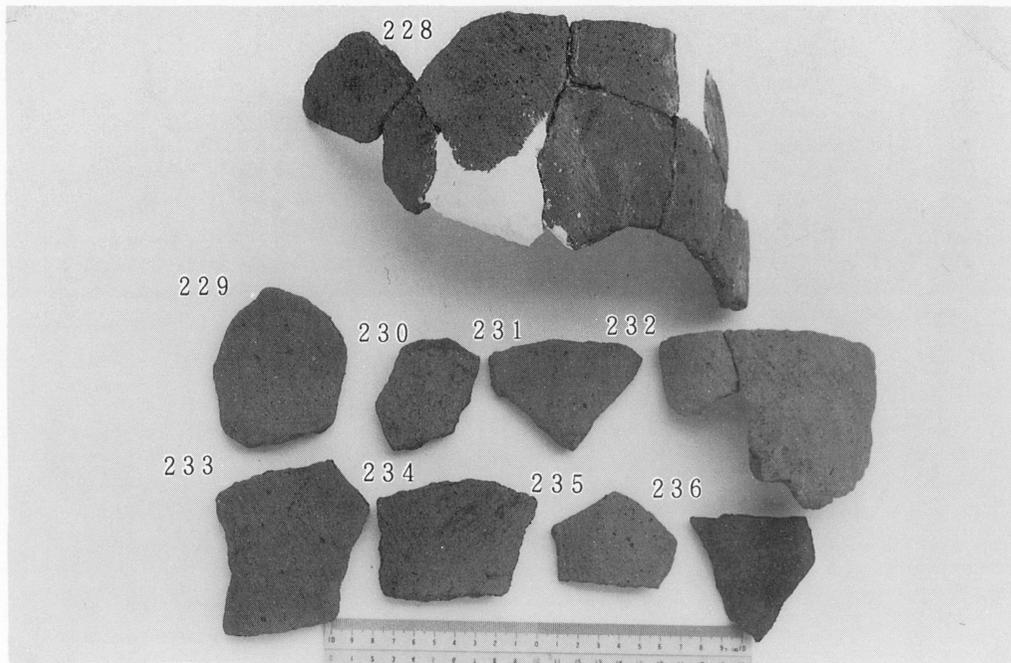
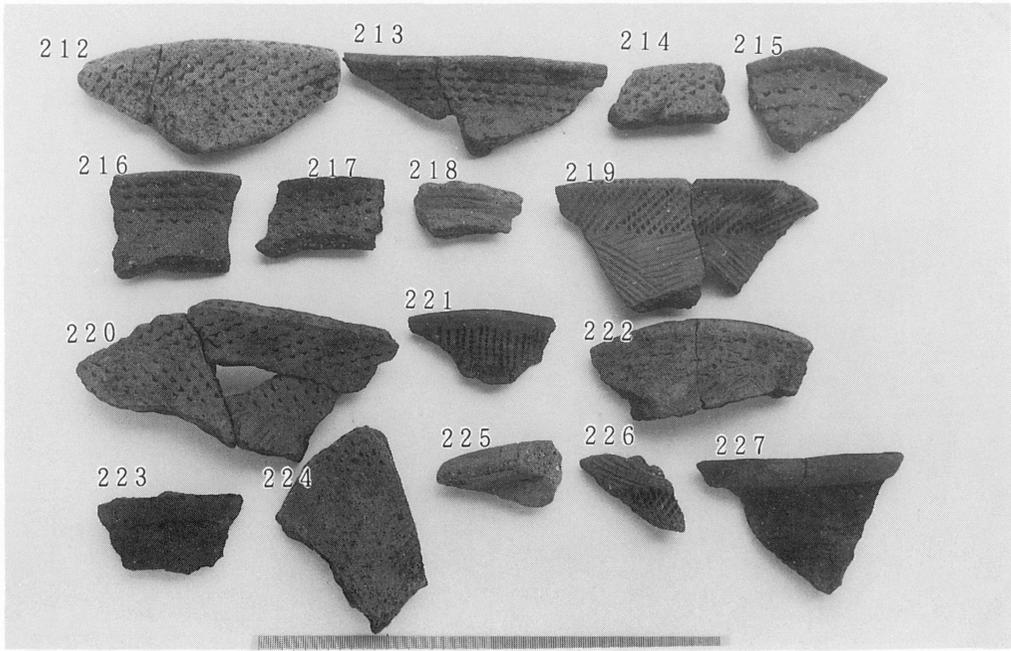
図版30 出土遺物 (166~184)



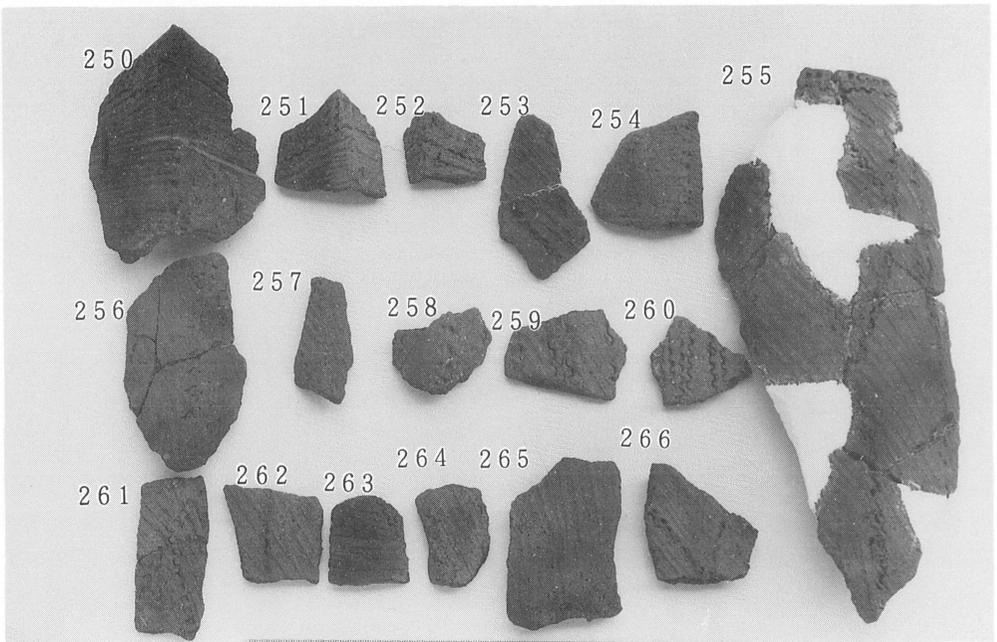
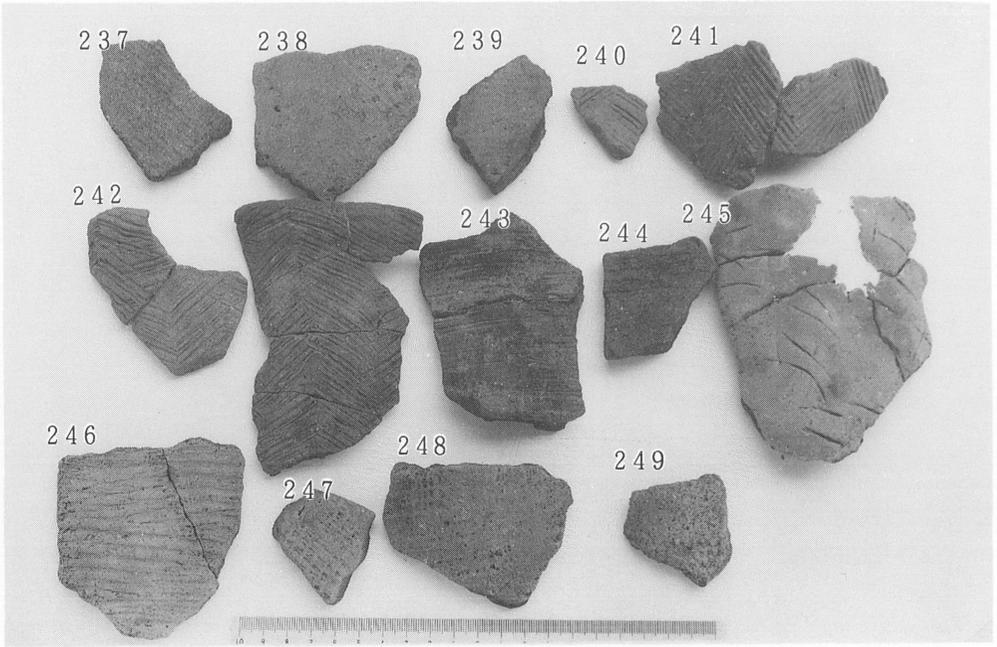
图版31 出土遺物 (185~199)



图版32 出土遺物 (200~210)



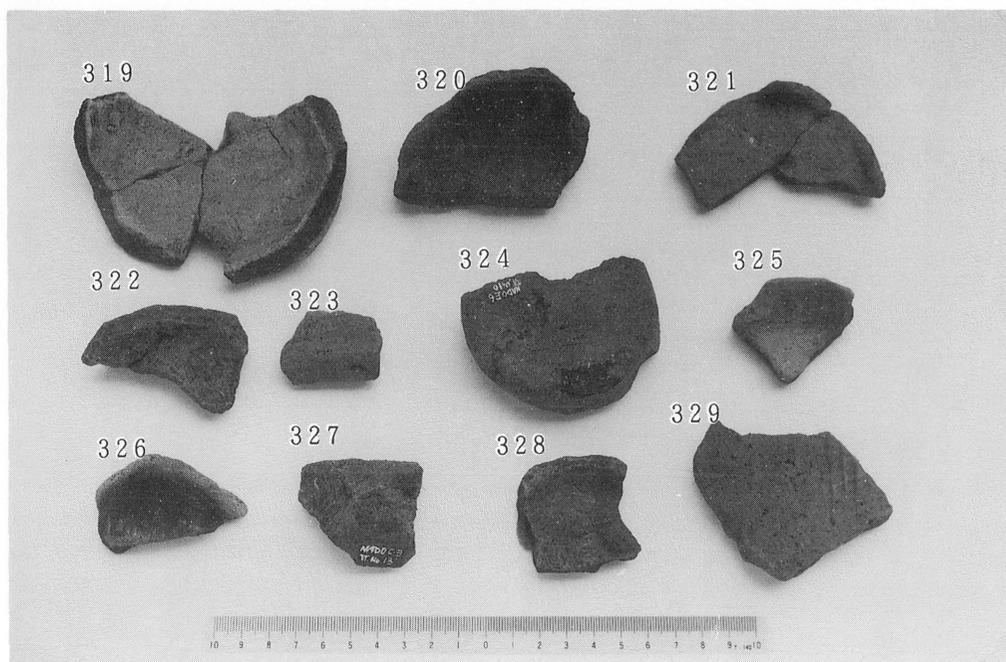
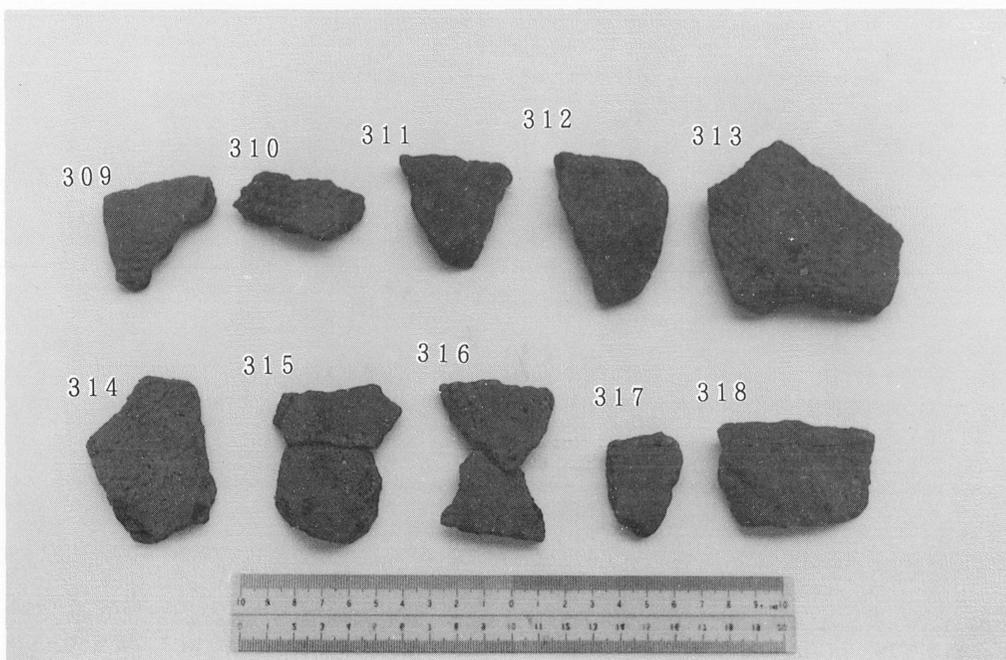
図版33 出土遺物 (212~236)



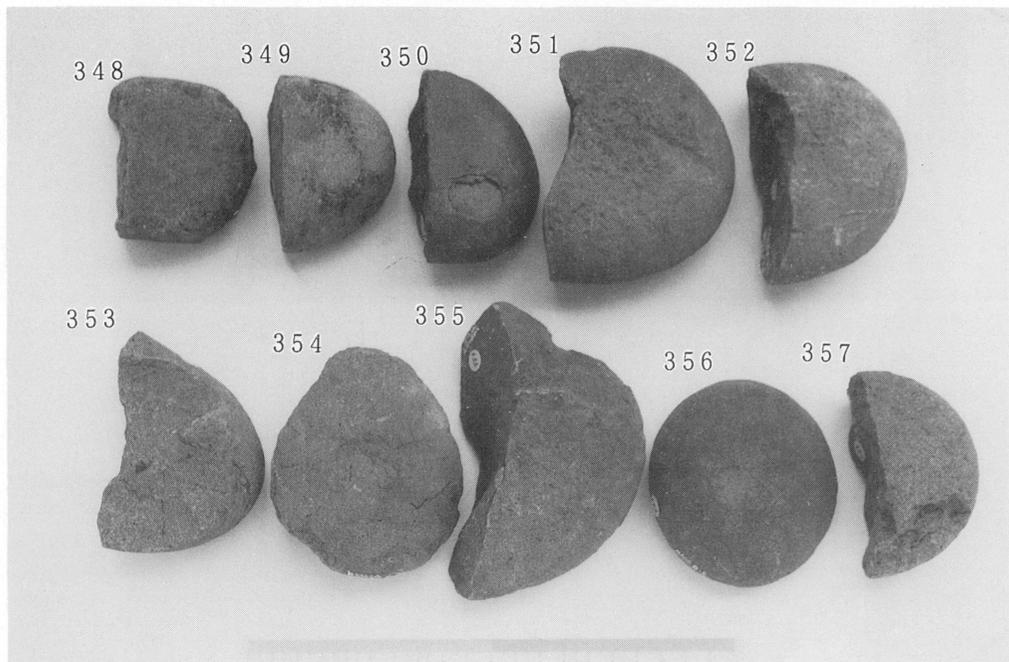
图版34 出土遺物 (237~266)



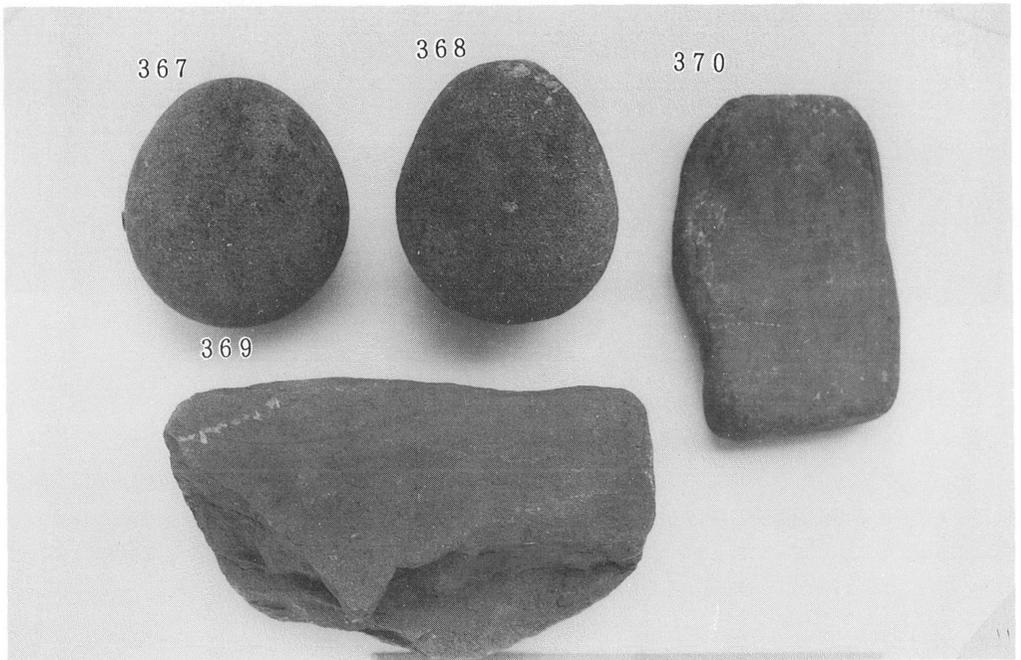
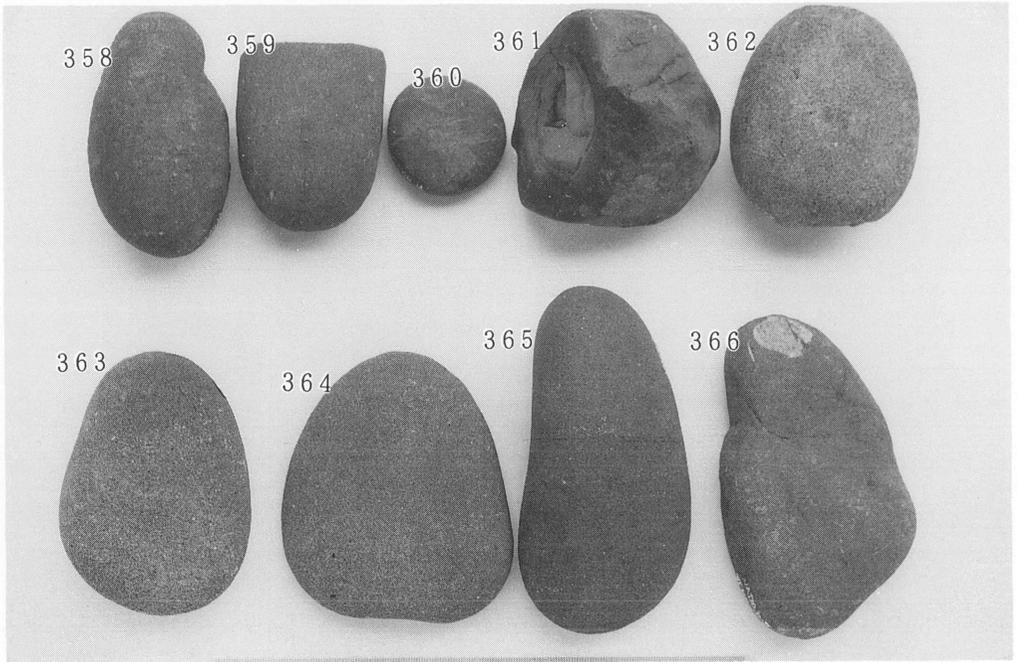
図版35 出土遺物 (267~307)



図版36 出土遺物 (309~329)



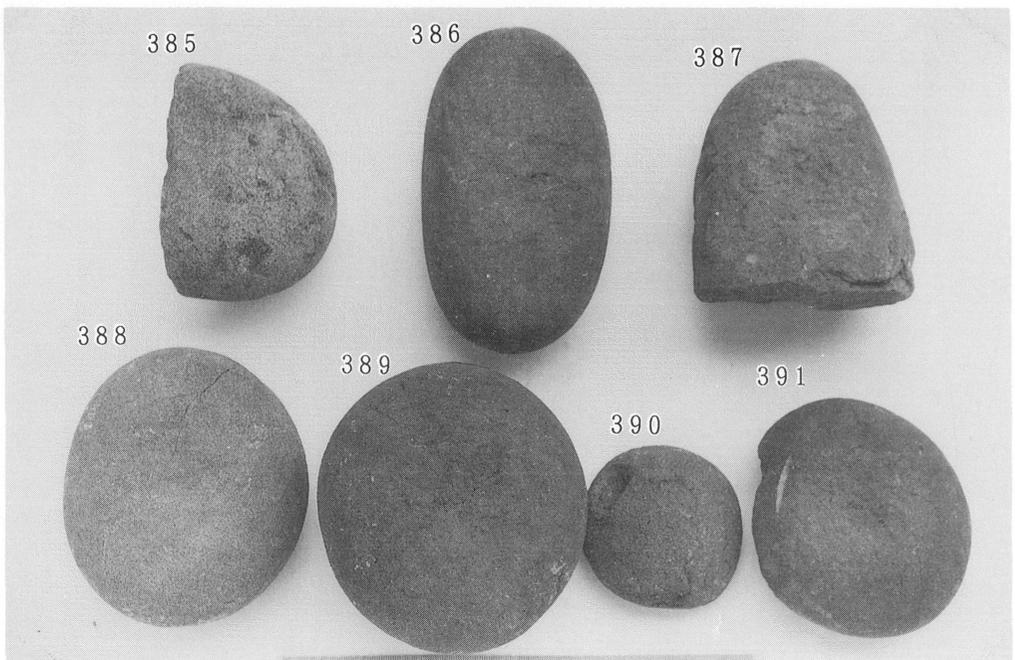
図版37 出土遺物 (336~357)



图版38 出土遺物 (358~370)



図版39 出土遺物 (371~374)



図版40 出土遺物 (375~391)



图版41 出土遺物 (392~393,330~335)



图版42 出土遺物

あ と が き

夏井は私にとって特別に思い出の深い土地である。恩師嶋戸先生に伴って飯盛山古墳を調査したのは53年前のこと、いまだにその時の印象が強く残っている。それに親しい友人がいて、夏ともなるとよく出かけたものだ。打出ヶ浜や夏井海岸での貝取り、小ダコや青ノリ取り、舟遊びもまた忘れられない少年期のひとこまである。以来、知人、友人が最も多くできた土地とあってよい。

4月下旬いよいよ発掘調査の開始である。案の定、地元の見知った人等ばかり集まった。中には45年ぶりのなつかしい御夫婦の顔もあり、作業は和気あいあいのうちに進んだ。休憩時間ともなると、勝手知った山野に分け入りツワブキや竹の子取りなど山の幸を求め、珍種のエビネランを捜し当てた人がいたなど、終日喜びの会話と笑いの日を過ごすことができた。そのせいであろうか、作業中に一人のケガ人もなく無事調査を終えることができたのである。

楽しい雰囲気にも更に花をそなえてくれたのは、珍鳥アカショウビンが土手に巣作りを始めたことである。それは6月17日の雨の日の出来事であった。色鮮やかな鳥が夢中で巣穴をロバシで掘り、一個が二個、最終的には三個を生んで温め始めた。会話もこのことで一段とはずんだが、7月上旬、無事な巣立ちを念じながら調査を終え、遺跡を後にした。今頃は三羽共元気な若鳥となり、何処かの空を飛び交っていることであろう。

アカショウビンと別れて約60日、やっとの思いで、報告書作成が終わった。鳥に負けまいと努力はしたものの何分にも力不足、積み残しも多く必ずしも満足できるまでには至らなかった。機会をみて修正や補足ができたらと思っている。

最後になったが、全体的な協力を賜った奈良不動産株式会社には全幅の謝意を申し上げ、会社派遣の磯部勉氏の御苦労には厚く御礼を申し上げる次第である。なお、汗を流し泥んこになって御協力をいただいた作業員の皆さん、整理作業を手助け下さった方々、最終の編集までつき合い、力を借して下さった山下サエ子さん、本当に御苦労さん、ありがとう。

瀬戸口

作業に携わって下さった方々は次の通りである。

加治木敬蔵、上迫兼利、大園徳三、又木義孝、松下平文、藤崎安雄、山下重盛、山村又男、又木ノシミ、溝口ミドリ、南崎クミ、西 美代子、村上ミエ、大園ミサ子、加藤ユキ、豊饒ハルミ、中野フミエ、北河コトネ、上迫モミ、日高シズエ、永吉ノリ、吉井ミヤ子、小倉チエ子、切手ミエ子、切手エミ子、松尾幸子、小浜和一。

現地事務及び整理作業

伊知地重子、堤 悦子、松田晃子